

ロンギング・フロン
ティア～居残り組、新
大陸に挑まんとす～

Z—LAEGA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いい加減新大陸に行きたいと、そう思い始めてどれだけ経っただろう？ 大手クランには入り損ね、抽選枠にも外れるし、当たっても謎の小競り合いでチケットが消えている。そろそろ密航してみようかなんて思っても、基本的にいつの間にかつまみ出されている。果たしてこの足掻きに終わりはあるのか、そもそも本当に始まっているのか—— 猜疑心は留まるところを知らず、とにかく戦い続けるしかない。新大陸への憧憬を胸に。

目次

波濤に一人立ち撃ちて

抽選に当たろう！	1
密航をしよう！	9
フィロジオをしよう！	18
乱数を祈ろう！	27
海を漂おう！	35
トンネルを掘ろう！	46
敵を打破しよう！	56
ポイントを振ろう！	66
ベヒーモスに行こう！	78
アスレチックをしよう！	86
階層を進もう！	93

階層を進もう！	2	101
ティーアスタンを着せ替えよう！		
懸賞金を見繕おう！	109	120
今度こそ密航をしよう！		129
買い物に行こう！		139
銃を買おう！		149
爆弾を作ろう！		157
波濤に飛鳥絶ち討ちて		其の一
波濤に飛鳥絶ち討ちて	168	
波濤に飛鳥絶ち討ちて		其の二
波濤に飛鳥絶ち討ちて	176	
波濤に飛鳥絶ち討ちて		其の三

さらに買い物しよう！ | | | | | 329

【盟友救助】で遊ぼう！ | | | | | 337

無念の塔の頂上で 其の一 | | | | | 345

無念の塔の頂上で 其の二 | | | | | 353

無念の塔の頂上で 其の三 | | | | | 361

無念の塔の頂上で 其の四 | | | | | 369

無念の塔の頂上で 其の五 | | | | | 375

無念の塔の頂上で 其の六 | | | | | 383

エピソード 離れた腕を掴み取る | | | | | 392

銃よ、竜よ！ われらが描けるは線条の

道

プロローグ 戦火は豪雨のように

398

遺失物を横領しよう！ | | | | | 405

震えよう！ | | | | | 415

忍びの道を再び歩もう！ | | | | | 423

道なき道へと導こう！ | | | | | 434

奪い合おう！ | | | | | 444

言い争おう！ | | | | | 451

毒を盛ろう！ | | | | | 459

見据える先を決めよう！ | | | | | 470

ガンズミスになろう！ | | | | | 479

啓示を得よう！ | | | | | 488

槍を作ろう！ | | | | | 497

蒼穹に沈もう！ | | | | | 506

船を作ろう！ | 516

獣よ、龍よ！ | 其の一 | 524

獣よ、龍よ！ | 其の二 | 534

獣よ、龍よ！ | 其の三 | 541

銃よ、竜よ！ | われらが駆けるは戦場の | 道

銃よ、蝶よ！ | 其の四 | 549

銃よ、蝶よ！ | 其の五 | 556

銃よ、剣よ！ | 其の六 | 562

銃よ、剣よ！ | 其の七 | 569

銃よ、竜よ！ | 其の八 | 577

銃よ、竜よ！ | 其の九 | 582

銃よ、竜よ！ | 其の十 | 590

銃夜、竜夜！ | 其の十一 | 598

銃夜、竜夜！ | 其の十二 | 604

エピソード | われらが懸けるは線上の | 未知

未知 | 612

番外編

1. | 人権を得よう！ | 620

波濤に一人立ち撃ちて

抽選に当たろう！

よし、殺そう。

私は決意した。

「つしやあああああ!!」

第七次新大陸開拓船の搭乗者における『抽選枠』に選ばれた筋肉質の男が叫ぶ。その声は体格キヤラメイクに似合わず嫌に弱々しくて、その癖して無駄に大きくもある。そして大きさに反比例するように、周囲の負け組たちの意思はどんどん小さくなっていく。

ある者は膝をつき、ある者は涙を流し、ある者はこいつがチケツトを受け取ったタイミングでぶつ殺してやろうと凶悪な形状の円月刀チャクラムを覗かせる。そしてまたある者は、こいつがぶつ殺すのに成功したら隙をついてさらにぶつ殺し、ぶつ殺すのに失敗したら隙をついて筋肉質の男をぶつ殺してやろうと、今か今かとその時を待つ。

私のことだ。

「さあ、チケツトを渡してくれよ!」

「承知いたしました!」

管理役のNPCが、男の要請に応じて紙切れを取り出す。それにしても日差しが痛い、ゲームなんだからもうちよっと抑えてくれてもいいんじゃないかな——そう思う。周囲のプレイヤーたちもそう思っているはずだ、彼らにとつて日差しは絶望の増幅者であり、また興奮が引き上げた体温を戻してくれない喚起者でもある。

その証拠に。

「よし、ハレ……」

「うおおおおおおッ!!」

奇襲、奇襲だ。先ほどのチャクラムの男が獲物を振り上げ、筋肉質の男がチケツトを受け取ると同時に突っ走る。それに伴って揺れる頭上のプレイヤーネームは……『ペンペン』、レッドネームじゃない、つまり今の今まで人畜無害を装ってきたってことだ。私はそれを頑なに見守りつつ、こっそりインベントリアから錬成爆薬を取り出ししておく。さあ、どっちが勝つか……!?

ペンペンの決死の一撃を、筋肉質はひらりと躲した。もしかしてAGIに振ってる? その体格はカモフラージュなわけね。ペンペンは怯まず、更なる猛攻を加える、止めどなく動き回るチャクラムの銀刃が陽光をぎらぎらと反射して、輝きを辺りに散らかす。しかし輝きの中にあつて、筋肉質の負傷は指先や頬の掠り傷に留まる。相当な手練れ、きつとスキルも使ってるはずだ。

「おいおい、そんなもんか？」

筋肉質が煽りを入れながら攻勢に入る。攻撃手段は当然殴打……じゃない！一点に豪雨が集まったような音が聞こえる、ショットガンだ。見かけと実態の乖離が凄まじい。流石にペンペンも予想できなかつたようで、反射的に防御系のバフを展開する以外はできなかつたようだ……見たところ、かなり負傷してる。これは筋肉質の勝ちかな？私は錬成爆薬を握ったまま、徐々に手を組み始める。どちらかが倒れるのを、待つて……。

「……!?!」

あれ、なんか筋肉質がうろたえてる。何があつた？……え、ペンペンがチケツトを持つてる!?!慌てて筋肉質の方を見ると、どうやら先ほど掠り傷を作られた部分に……紫色のポリゴンが、食い込むように生まれている。壊毒のエフェクトだ。指の付け根へのかすり傷から破壊属性で指ごと斬り落としたんだ。ペンペンが機嫌良さそうにチケツトをピラつかせる。まずい、インベントリに突っ込まれても逃げられても終わりだ。今しかない！

「刃隠心得【追^{ツイ}鼠^ソ火^ヒ花^{バナ}】 ツー！」

スタンバっていた印を完成させる。ぎよつとする周囲のプレイヤーの顔をエフェクトが隠す。同時に、手元の錬成爆薬をばらまく！

どかん。

「死ぬ〜〜〜!」

【追鼠火花】と錬成爆薬が組み合わさって起きた目の前の大爆発を、新たに組んだ【空蟬】の印で突っ切る。混乱したペンペンからチケットを奪い取り、すぐさま逃げ……

「ふざけんなッ!」

「つとお?」

烈火の先から銃声が聞こえ、次の瞬間には散弾たちが迅速に到来する。【空蟬】をもう一回撃つて回避する、少し被弾した。回避先は特に考えていなかったがペンペンの真横になって、彼とふと目が合う。私たちは通じ合った、とりあえずこの筋肉質をぶつ殺してから話を進めよう。そんな合意が瞬時に形成されたのだ。

爆炎が晴れて秘密の時間が去り、代わりに強烈な日光と、固唾をのんで私たちを見守る負け組たち……そして、血眼の筋肉質があらわれる。多分横のペンペンをぶつ殺すより筋肉質をぶつ殺した方が勝算が高い。彼には私にそう思わせるだけの気迫があった。仮想世界であるにもかかわらず、だよ?つまり、ヤバいってことになる。

「おりゃッ!」

ペンペンが合図もなしに閃光弾をブン投げた。何も見えない。協調性なさすぎない!?!私はあるが、よく考えてみると協調性があるんだついたらとつくに大手クランに入つて

枠を譲ってもらえている。旧大陸居残り組というのは要するに面倒くさいプレイヤーの集まりなのだ。だからむしろ当然の話だ。何も見えないが操作自体は可能、私はとりあえず適当に錬成毒入りの瓶を投げ上げておく。蓋はしていない、空中でぶちまけられることになるはずだ。ペンペンに確認はしていないが、特に問題はないと思う。私は協調性があるから、ペンペンに確認しないでも問題ないことがわかるのだ。

視界が晴れると同時に【空蟬】、天から舞い降りる毒のカーテンの上に転移する。

「ちよ!?!」

ペンペンがめちやくちやビビっているのが聞こえるが、大したことではない。下から銃声、直後に真横のカーテンから散弾たちが飛び出してくる。どうやら筋肉質が当てずっぽうで発砲したっぽい。でも……

「ハズレだよ」

錬成毒と一口に言っても色々あるけど、この場合は触れるとヤバイタイプだ。とはいえとも触れるとヤバイタイプというのは傷口に塗られるとヤバイタイプとか飲むとヤバイタイプに比べて適用範囲が広すぎるから、そこまで大きなダメージは期待できない。つまり、筋肉質は落ちてきた私をショットガンで撃ってくる可能性が高い——でも。

「刃隠心得奥義、【水滑り】」

印を組む。「水滑り」……水の上を歩く忍術の対象は水だけではない、そもそも水と一口に言っても、海水と湖水では内容物質が随分違う。つまり、その対象はある程度柔軟に決定できて……言い換えれば、毒の上も歩けるということだ。

毒の雨が地面に落ちて、筋肉質がショットガンを明後日の方向に外す。

「死ね」

眩きと共に急降下、錬雷合金のダガーを取り出し、紫電のエフェクトを白昼に曝す。筋肉質は真上を見上げるが……あいにく弾切れ。盗賊時代に取得したいくつかのスキルを発動し、私は直下の敵を討つ為の必殺性をとにかく高め、一撃を――

「えい」

「あ」

ペンペンに掠め取られた。

ヤバい、地面に衝突する。真下には深紅のポリゴンに包まれながら円月刀を抜き、ひらひらと落ちるチケットを掴み取ろうとするペンペンがいる。こいつをクツシヨンに？いや。彼の頭上のプレイヤーネームは既に赤く染まっている。もうこいつには私を殺さない理由がないということだ、激突と同時にサクツとやられるのがオチなはず。だつたら。

「颯衣！」

ゆっくり落ちるだけ！

ペンペンがこちらを見上げ、チケツトをつかむ。インベントリに収納するつもりだろう。間に合うかな？ 場合によっては手裏剣で妨害するべきかも。私ははためく布を掴む右手で、それとなくインベントリを操作して……。

「――」

金色の風が吹いた。

「な」

深紅を塗り替えるように更なる深紅が散る。いつの間にか死体になっていたペンペンの周囲に装備が散らばる。まさか。

「賞金狩人……!?!」

私は布から手を放し、「空蟬」で落下位置を強引に修正した。どしん、という僅かな衝撃がアバターに走るが、それよりずっと大事なことがある。つまり、颯爽と現れたティーアスが露出度の高い装備を揺らし、日光に金髪を輝かせながら……ペンペンの遺品を物色している、ってことだ。

ヤバイ。

ヤバイけどどうすることもできない。祈るしかない。

私は祈ることにした。青空を見上げ、何かしらに対し祈りを捧げる。どうかチケツト

だけは取らせないでくださいどうかチケットだけは取らせないでくださいどうかチケットだけは取らせないでください……。

「……」

ティーアスはチケットだけ取ると、その場から文字通り颯爽と去っていった。
なるほどね。

「ちよ、ど、どうなった!?!」

死に戻りしたらしいペンペンが駆けてくる。第七次新大陸開拓船の搭乗者における『抽選枠』は、既に一人の幼女の手によつて消滅してしまつたんだよ……と。そう生真面目に答えるより、きつとこうしたほうがずっと早いんだろう。私は思った。

思いながら、彼に無言でフレンド申請を送つた。

日光が照り付ける、旧大陸のことだった。

密航をしよう！

「……よしクグリ、行こう」

「了解」

暗闇。

夜風漂うフィフティシア、港湾区域。囁き合ったペンペンと私は、ゲームゆえに現実より少し性能の良くなった夜目を駆使し、足音を潜め駆け出した。

あの後何だかんだで意気投合したペンペンに聞いたところ、彼のサブジョブは隠密……私のサブジョブの上忍と同じく、隠れて行動するには持つて来いのジョブだ。

戦巧者／隠密でレベル107、ベヒーモスも攻略済みとなれば、最上位職こそ持たずとも新大陸行きには十分なラインを達成している……は？ はずなんだけど、実際のところ彼は居残り組である。錬金術師／上忍でレベル99の私は、どうしてこうなってしまうのかとため息をつきながら、仮想世界の夜景を駆ける。

はつきり言う、密航しようとしている。

いやだって、普通に考えてそれ以外なくない？ って感じあるよね。私は自分を正当化した。どうせクランには所属できないから枠は回ってこないし、抽選は当たらないし当

たった奴も最終的に行けなくなった。もはや希望はない。希望がないなら絶望ルートで行くまでだ、例えこれまでに密航に五回挑戦して五回失敗していたとしても、六度目の正直という言葉もある……かもしれない。

壁際でペンペンが立ち止まる。何か引つ掛かったのかな？私も一緒に立ち止まる。

この間の閃光弾のように、ペンペンはベヒーモスの攻略過程で得た神代製装備をいくつか蓄えている。チェストリアは流石に買えなかったようで、運べる量は隠密というジョブに見合った量になるが、それにしても結構だ。避けて通った街燈を反射して鈍く光る、彼の目元の赤いゴーグル……熱源視認板もその一つだ。

「……護衛1。あそこ」

「了解。スキル？」

「いや、温存」

「了解」

短い言葉を交わすと、私はインベントリから錬成品射用迫撃砲アルケミック・モーターを取り出しこつそり設置、フックを繋げた錬雷合金のインゴットを入れる。錬雷合金は私が錬成した合金で、常時紫の電流をバチバチさせているうえ、特定の物質に対し魔力伝導性を貫通してそのバチバチを伝染させる、というはた迷惑な性質を持っている。武器にも使えるが、こうして何かを目立たせる上では……。

「発射」

この上なく、便利だ。

どん、という発射音が響き渡る前に、インベントリに錬成品射出迫撃砲を仕舞い込む。そして後には、括りつけられたフックともども尋常じゃなく派手に発光しながら夜空を切り裂いていく、怪しげな帯電物質だけが残る。

「……どう？」

「成功、確認に向かった」

「了解」

位置関係から言って、護衛氏はインゴットがこの壁際から発射されたことに気づけない。気づいたとして、発射源より先に発射された謎の存在を確認しに行く方が先決というものだろう。護衛の視界の外にあることを確認すると、私たちはまた忍び足を再開し、開拓船への到達を急ぐ。等間隔に置かれた照明たちが、視界の隅を流れていく。地面に落とされた灯光たちが、私たちをじっと見守っている。

そんな風に駆けていって、私たちは最終目標地点……すなわち、貨物の積み下ろし場に到達した。

「……」

壁越しに熱を視認しながら、ペンペンが指を折って私に人数を伝える。20、21、2

2……とにかく、静寂のわりに随分いることは間違いない。積み下ろし場といっても現実のコンテナが積み上げられているような豪快なものではないけど、護衛の人数に関してはそう違わないらしい。ここまできると、謎の帯電物質作戦も使えなさそうだったら。

ペンペンがこちらに頷いてきて、彼の頭上のまだ赤いままの名前が上下する。私も頷く。事前に決めていたわけではないが、それが一つの合図になった。ペンペンが使い捨て魔術媒体を取り出す。私が静かに印を結ぶ。

「……【逆る雷律】」

「……刃隠心得、【朧隠】」

朧な照明にすらかき消されてしまうような、恐ろしく弱い雷線が空を裂く。そして私が、その細々とした黄色に同化して、沈黙を保ったまま貨物の積み下ろし口へと駆ける——いや、ここは逆ると言うべきだろうか。到達と同時に使い捨て魔術媒体を二枚取り出す。

【瞬間転移】。

私は、視線だけ通していた入り口に入り、

【引寄転移】。

更にペンペンを取り寄せた。

「……」
歓声を上げたくなるところだけど我慢だ、私たちは外と同じように、声を殺し、足を忍ばせて船倉を歩く。月明かりもなければ街燈もない、本物の暗闇がそこにはある。

「……………」
進む。進む。並び立つ貨物たちを潜り抜け、船倉の最奥へと向かう。

「……………」
そして、たどり着いたそこで出航を待つ。

出航前の時点では、新大陸開拓船……今回の場合リーバイオスヌ号はマップの一部として判定される。つまり出航前にログアウトしてから出航後にログインしても、アバターが出現するのはリーバイオスヌ号の内部じゃない。かつてリーバイオスヌ号があつた海の上に出現して、そのまま下に落ちこちやうことになる（一敗）。

それを避けるためには……結局、出航を待つしかない。出航後のリーバイオスヌ号は単独のオブジェクト扱いだから、中でログアウトしてからログインすれば、船内の同じ場所に出現できる。予定時刻自体はわかっているから、別に出航までログアウトしてもいい。しかし用心は常に重要、出航を予定より1時間早めますなんて言われたらその時点でアウトだ（一敗）。結局、その場にとどまるのが最も安全なのである。

「……………」

「.....」
そういうわけで、私たちは待つ。

待つ。

「.....」
待つ。

「.....」
待つ。

「.....」
待——。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおん。

「来たア!!」

汽笛信号の音が聞こえた。

ペンペンと顔を見合わせる。彼の表情は歓喜に濡れていて、それはきつと私の鏡映しでもあった。

船が加速していくのを感じる。船倉は依然闇に包まれているが、もはやそんなことはどうでもよかった。そもそもそのゲーム的な補正があるし、二人ともサブ職業の補正で多少眼がいい。さらに、長時間にわたる待機によって夜目も効きに効いていた。

「イエーイ！」

二人で跳び上がり、ハイタッチをする。快音が闇を拓くように広がり、着地によつて床板が少し軋む。それらは広がる静寂の中に、ある種の賑やかさを提供してくれて……結果、私たちのテンションはすこぶる上がった。

「ヒヤッホー！」

手と手をつなぎステップを踏んで、よくわからないダンスを踊る。よくわからないといつても、喜びというのは時によくわからないものだから問題ない。私たちの喜びは留まるところを知らず、肅々と進んでいく船の底で、二人の祝宴は一段と……。

「……ああ、そこにいたんだ」

誰だ!?

慌てて手と手を放し、声のした方に首を向ける。そこには、人型のシルエツトがぼんやりと浮かんでいる。頭上の『Pastor』のプレイヤーネームだけが場違いに鮮明だ。アバターについてはわからないが、とりあえず声は女性のものに聞こえる。

「……な」

んで分かったの、そう言おうとした。でも途中で止めた。だって答えは明白だった。彼女ないし彼が顔を触るのを……まるでゴーストの位置を整えるみたいな素振りをするのを、見てしまったから。

……ホットスボット・グラス
熱源視認板。

思えば考えるべきだったんだ。神代製装備は便利で、しかも誰でも購入できる。だったらそれを自分だけの手札みたいに思うべきじゃなかった。でも、それじゃあなんで船倉に入るまでは成功したのか——そうか、船には熱源なんてごまんとある。熱源を人間と特定するためには……動き回っている必要がある。つまりこいつは私たちの密航を知って、そのうえで泳がせていたんだ。

なんてこった……なんてこった。

ペンペンと顔を見合わせる。こりやダメだ、何も考えてない。となると私が……何とか、ここから密航を成功させる方法を考えないといけない。交渉すれば案外イケたりしないだろうか? いや、失敗時のリスクが高すぎる。そもそも密航者を禁ずる理由ってあるのみたいな? しかし相手はプレイヤーのくせにわざわざNPCみたいに密航者を取り締まってるようなヤツだ、何かの反論は考えてるはず。それじゃあ、それじゃあ……。そうだ。

「……」

私は黙ったまま、堂々と足音を立ててパストラットに近づいた。至近距離で見れば簡単で、彼女のアバターはどう見ても彼女だった。背格好はだいたい同じ、結果として視線は同じ高さとなり、完全に見合った状態になる。

私は口を開いた。

「30万マーニでどうです？」

海に捨てられることになった。

フィロジオをしよう!

船が行ってしまつた。

まあ行つてしまつたものは仕方ないよね。

私は気を取り直して、ボルクネスのところに遊びに来ている。

「よし今だ! 《クアッドビートル》を召喚してターンエンドだぜ!」

ステイミュレーター

ボルクネスがやけに仰々しいポーズを決め、紙切れを取り出してS T マスにぺんつと設置。へえ、そう来るか……面白い。私はにやりと笑うと、紙切れの束から一枚を引き、手元の紙切れを扇開きにして自分のできることを確認する。そうだね……よし、これにしよう。

「スペル・フェノメノン……《物理的天災》」

「……ほう」

私が満を持して発動した紙切れに、ボルクネスのアバターの目の色が変わる。《物理的天災》、要するに隕石の発生を示すSP紙切れの下部には、手書きでこう記されている。オリジン

オリジン

エクステインクション

「O マスに存在する全 E X レアカードを破壊し、代わりに手札から、「そのE Xと一致しない種族を持つ」「進化ツリー最下部に位置する」「任意の」Oを同数誕生さ

せる。

要するに、ちやぶ台返しのスperlだ。

〇マスから三枚のEX……《アルペト・カメレオン》、《ポーリップス・カメレオン》、《ジュリンクギーヴ・キヤムライオン》の紙切れ^{カード}を捨てる。当然、いずれも種族としては『カメレオン』だ。私と一番関係の深いモンスターということでwikiを見て選んだが、正直私のユア・エクスperiエンスが実際にこれを排出してくれるのかはちよつとわからない。まあ、たぶん何とかなるだろう。

さて、空いた三つのマスに紙切れ^{カード}を置く。《エグザイル・ドラゴン》、《磔^{ラフルウエア}纏い》、《バラサイトスプリンター》。バラバラの種族を持つ三枚の紙切れ^{カード}は、ちやぶ台返しとしてこの上ないものだ。

「さて……ターンエンドだよ」

にやりと笑いながらボルクネスを見る。こいつが使うのは《クアッドビートル》を主体とした虫共鎖寄生アグロ紙切れ^{デッキ}の束^キ……相手の種族に統一性が無くなると、一気に勝ち筋への手数が増える。さあどう出る!?

「トランプスperl発動、《共倒れ》。裁定により君の負けだ」

は？

私は負けた。

◆ 「……やっぱおかしくない?」

卓上の紙切れたちをかさかさとし集めながら、私は三戦ほど前から思いつつあったことを口に出した。

ボルクネスの手が止まる。

「……おかしい、って?」

「いやだつてこう……こんな適当にバラバラにカード出せるのも、それに対し確殺手段があるのも……なんか、バランスが取れてないというか」

「……」

「やっぱり、本物のルールを再現しきれてない部分があるんじゃないの?」

ボルクネスは答えずに、じつと手中の紙切れたちを見つめた。印字士のボルクネスがスキル補正を受けつつ手書きした、カード名、各種パラメータ、効果、フリーバーテキスト……そのほか諸々が、きつと本物とは比較にならないようなそっけなさで載っている。

ぼたぼたと落ちた涙の粒が、それらを濡らして染み渡っていく。

「……クソ、クソ……!」

ボルクネスはかなり陰気だ。印字士として十分な腕前を持ちながら、ライブラリから

の勧誘を「他人が怖いから」という理由で断つちやつたくらいだから相当のものだ。そんな彼が唯一普通にコミュニケーションを取れるのが、カードゲームを遊んでいる時だ——でも、フィロジオを遊ぶためには新大陸に辿り着く必要がある。しかし、新大陸に辿り着くためには陰気を直す必要がある……二律背反。どうしようもない。

仕方がないので自分でフィロジオを作る試みもしたし、今日もそのテストプレイだったはずなのだが……この複雑怪奇なカードゲームは、機械的な支援なしにはプレイすら難しい。それがたつた今、二人の手によって証明されてしまった。

要するに、彼は詰んでいるんだ。

涙に透かされた紙切れの上で、黒いインクたちがそれを体現するように滲んでいた。

「ね、ねえボルクネス」

元氣だしなよ、とかそういう適当な慰めの言葉をかけようと思つて、話しかけた。しかしそれと同時に、ボルクネスはがばと首を上げた。うわっ!? 涙もすでに乾いている。この短時間で!?

「お、おい……アンタ」

ボルクネスが言う。彼は基本的にカードゲームを遊んでいない間はずつと陰気で、ちよつとおいアンタするだけでも中々の手数を必要とする。デッキに入れたくはないタイプだね。

「何?」

「い、い、うし、よう」

ボルクネスが何やらメニューを操作し始める。何だろう?見た感じ、インベントリから何かを取り出そうとしているのかな。

しばらく待つと、仄かなエフェクトを纏いつつ、彼の片手にオブジェクトが出現した。
札束デツキだった。

「オンライン対戦だ」

ボルクネスは言った。



ボルクネスはこう見えて結構金を持つている。彼はコミュニケーション能力を抜きにすれば優秀な印字士だし、むしろ「コミュニケーション能力を求めないジョブを選んだら印字士になっちゃった」という側面もあるはずだ。印字士は依頼人とあまり話さないまま、極論を言うと言面だけで仕事を成立させられるジョブで、生産職の中でもトップクラスに人見知り向きだ。

さて……彼には金がある。金があつて使い道がないからには、ある程度適当な振舞い方をして許されるはずだ。

例えば、最高級の伝書鳥メールバードを分単位で送りまくる、とか。

「……始めるぞ」

ペンペンが言う。彼はこちら側の対戦相手係だ。手製のプレイマットが乗った机を挟み、反対側に座るボルクネスも頷く。

よし——始めよう。私はメニューを開いてべらぼうな額になった所持金を確認すると、伝書鳥の第一通を送るためウインドウを開く。

……ボルクネスは言った。あんたも居残り組で長いなら、一人二人新大陸に知り合いもいるだろうて。

実際のところ、いるのだ。

本文を打ち終えると、フレンド一覧から送り先を選ぶ……プレイヤーネーム『Pass to Rat』。そう、私たちが海に捨てた彼女だ。まあ、自分を海に捨てた相手と友達になるなんてよくあることだからね。

「ピョピョ」

「よし……行けっ！」

「プレイヤー……ッ！」

半透明に光る『送信』ボタンを押せば、凜々しい瞳の隼ハヤブサは黄色の鉤爪を宙に浮かせ……メッセージを携え、ものすごいスピードで新大陸へと飛んでいく。その羽ばたきを演出するように、そよ風が地面をなげた。……私たちは何か月も旧大陸で燻ってるのに、あ

の鳥は10秒もかからず大海原を越えてしまうんだ。ものすごいな、としか思いようがない。

「さて……」

ペンペンが眩く。

この後の手はずはこうだ。まずパストラットが伝書鳥によって「準備完了」の合図を受け取り、向こう側で募ったフィロジオガチ勢のプレイヤーと勝負を開始する。ガチ勢がカードを動かしたり、あるいは審判A1によって何かの判断が下されるたび、パストラットはハヤブサをこちらに送り、こちらでペンペンがそれを再現する。ボルクネスのターンが来たらその逆だ、こちらで行った操作を逐一パストラットに送り、再現してもらう。向こうで審判が何か言ってきたら、それをこちらに知らせてもらう。

「……来たっ!」

「ピヨッ!」

第一通だ。

往復して戻ってきたハヤブサからハトの羽根を受け取り、薬の要領で錬成した餌をあげる。内容は……

『相手、《シニファイア記号表現領域：ゴレム機魔》をAエリアに配置』だって!」

「了解!」

ペンペンが相手を再現すべく行動を開始する。これはなかなか面白くなりそうだが……私は、微笑んだ。

◆ 数十分後。

「ピコーッ！」

「……『相手、《アルクトウス・レガレクス》スフレッドシート 駕粒展静》をE.Vに召喚』だって……」

「了、解……」

まだターン目だ。

相手が展開し始めたソリティアは留まるところを知らない。それはどこかでうねるように複雑で、しかしまた別のどこかでは驚くほどあっさりしていて……どこか、芸術的なディテイルを秘めている。いやカードゲームに芸術性は求めてないんだけど!? ターンを回せよターンを!

「……終わった」

「わかった……」

ペンペンの合図にしたがって、もう何度目かもわからない「操作完了」の合図を送る。もう指が操作完了を覚えてしまった。先ほどからの酷使をもともせず、隼がまた飛び立つ。

「……」

沈黙の時間が広がる。早く来て……祈ったら本当に早くハヤブサが返ってきた。ラッキー! 私は送られてきたメールを開いた。

『相手、「あつプレミしたわ対あり」と口走り降参』

……。

私は何も言わず、ボルクネスの方へと歩み寄った。彼も何となく何が起きたのかを悟っているようだ。その証拠に、直後に発せられた言葉は、TCGをプレイ中のものではない、いつも通り陰気な調子だった。

「つ、次からは……ソリティアは、禁止、にしよう」

まだ諦めてないのか……。

机の上に散らばったおびただしい数の紙切れたちが、炎のような夕陽に影を落としていた。

乱数を祈ろう！

転移魔法を覚えようと思う。

理由はいろいろある。もともと転移系の使い捨て魔法媒体を結構な頻度で使っている。出費がかさんでいたのもあるし、この間の密航未遂の時に改めて便利さを実感したのもある。実際のところ錬金術師も上忍も魔法職なわけで、転移魔法を覚えられないわけでも、覚えるのが特殊なわけでもないのだ。

でも、それらよりもっと大きなワケがある。

「えつと……」

メニューを開き、空渡の大師ヴェルガントのもとに着く前に最終チェックをする。

インベントリ内には頑張って買い集めた3つのテント、更に装備はある程度の耐寒・耐熱・耐毒性を加え、残りはすべて幸運を上げるためのアクセサリ類が占める。実際のところ、LUCを上げたところで望みの場所に行けるわけでもないんだけど……まあ、一種の願掛けだ。

その他、錬金術関連の色々、忍術関連の色々、愛用の錬雷合金のダガー……まあ、持ち物としてはこんなものだろう。

「……………」

確認完了。

私は満を持して、ヴェルガント氏のもとへと歩みを進め始める。そして、改めて考える。

……【乱数転移】で旧大陸に飛ぶか新大陸に飛ぶかの乱数は、だいたい2分の1で当たる。

それは、今まで7回参加してきて全部外れた抽選枠に比べれば……いや、比べ物にならないほどに、大きな確率なのではないか。

「……………」

笑う。この乱数転移という選択肢は、存在を知ったうえで封じていた側面がある。手持ちの手札の中で最も強力な半面、一度しか使えないし、生半可な準備では空振りに終わりがねないからだ。しかし私は、それを使おうとしている。今、まさに。

右足を前に出す。ニーネスヒルの固い石畳を、私は力強く踏みしめた。

◆ 旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ……！

お祈りをしている。

目をつぶっているから当然前は見えないが、開いたところで同じことだ。私の肉体は

現在進行形で魔力光に包まれつつある。要するに、「乱数転移」の発動過程にあるのだ。そのため瞼を開いても、眼が眩しさに焼かれるだけだ。

だから、代わりに祈る。

旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ旧大陸はやめろ……！

瞼を通り越して入ってくる光が、それ自身が一層強まりつつあることを教えてくる。私を取り巻く魔法発射の効果音も同様だ。どんどん大きく、どんどん高くなり——そして。

ひゅん。

そんな音がした。

「……っー」

急いで瞼を開く！さあここはどこかな、どこだろうと十五分以内に近くの地面に TENT を張らないと！基本的に張ったことに後悔する方が、張らなかつたことに後悔するよりましだからね！

しかしそもそも地面がなかった。

「……」

いや、落ちてますよね？という話。ゴオーツみたいな。風、吹いてるし。下から上に。私の纏ってるローブ、はためいてるし。辺り、一面の青空だし。綺麗だね、流石シャン

フロ。綺麗だね、ではないんだよな。ふざけてんの?何?この見下げた先に広がる雲の海。確かに旧大陸はやめろって言ったけどそもそも大陸じゃないのは望んでないんだよね。しかも……

B i l l i l i i i i i i i i i i i i i i i i

なんかいるんだよなあ……。

絶賛落下中につき視認が難しいけど、とにかくなんかいるのは間違いない。しかもデカい。黒い。バチバチしてる。雲の裏側ってこんなヤツがいるものなの!?とにかく目を合わせないようにしないと……。私はどうにかして逃亡を考えた。いや逃亡とか言ってる場合じゃない。シャンフロ世界の重力加速度は地球とほぼ同じ、落下は当然どんどん速くなる!どうするどうする……。!?下から上への風はいつそう轟音を強め、眼下に広がる純白の雲はどんどん近くへ寄ってくる。まずいまずい……。!

「……そうだ」

雲って……基本的に、水の粒と水滴の塊だよな——だったら。

「刃隠心得奥義、【水滑り】っ!」

歩けるはずだ。

飛び込んだ雲は足の裏をやわらかく跳ね返し、落下ダメージを吸収したうえで上を歩ける状態となる。【水滑り】はそういう魔法だ。よっしゃこれで一安心!私は思った。

「…………あれ？」

よくよく考えてみると全く一安心ではなくない？

よくよく考えてみると全く一安心ではなかった。

私は再び落ちた。

「くそーっーっー！」

ど…………どうしよう!?【むさびのしんせ颯衣】、はダメだ!【水滑り】でMPを使い切っちゃった!じゃ

あ…………ええ!?

地面がどんどん近づいてくる…………そう、地面だ。海の上でもない。さらに言えば、その一角には何やら城のようなものがあった…………もしかしてあれが噂のスカルアツチ!? え、じゃああのドデカいのはリヴァイアサン!? 賭けに勝ったってこと!?! いや勝っても意味ないじゃん落下死するんだったらっ、おい! どうにか…………

「どうにかしてええええ!」

誰に向けてかも分からないような願いを叫びながら、私は。

「ぎゃぐ」

ぼてんとというような鈍い音と共に港の片隅に勢いよく激突して、

「…………あれ?」

死ななかつた。

え、どういうこと？ VITには大して振ってない、ギリ耐えたってわけでもない。じゃあ……いや、わかった。残りHPが1、つまり食いしぼりが働いてる。どうやら願掛けでLUCを上げたのが功を奏したようだ……何とも、虫のいい話だ。

しかし、その虫のよさを吟味している時間はない！ 残り時間が少ないとはいえ、結果的に私は新大陸への上陸に成功したんだ。急いで錬成回復薬とテントを取り出し、自分の体を染める紅の傷^{ホリゴン}たちにも構わず、服用と設置を進める。既に体が透明になり始めている、時間がない！ 一秒でも迅速にAGIを走らせ、精巧にTECを鳴らす！ 間に合え間に合え間に合え……！

「よしっ！」

テントは設置完了、半分浴びているようなものだが錬成回復薬も飲み終えた！ 残り時間は本当に僅かだ、とにかくすぐにテントでセーブを……。

「……んっ？」

ひゅん、と。そんな音がする。

音の出どころは上空だ。私は焦燥感を抱きつつ、何かあったら嫌だと思つて上空を見上げた。そこでようやく、天を黒雲が包み込み、既に雨が降り始めていることに気づいた。

……まあ、なんだか不穏な雰囲気だけどそれだけだ。別に気にせず作業に戻って、間

題な——。

何かが落ちてくる。

「痛つ」

額にぶつかったそれが、固い港の地面に当たり、かたかたと音を出しながら転がる。やめろ、拾うな。自分の体にそう指示するが好奇心が言う事を聞かない。ちよつとくらないならいいじゃないか、とかいう思考が勝つてしまふ。

仕方がない、拾い上げたらすぐにセーブだ……まあ、この文なら間に合うだろう。私はどんどん薄くなりつつあるアバターに危機を覚えつつ、右手を伸ばすのを止めないことを決める。

そして、いよいよその……欠片に、私の手は触れ

どんがらがっしょん。

「っ!？」

て。

まずい、客観的にはただ近くに雷が落ちただけだ。それなのに、一瞬の動揺がどんどん拡大してミスを誘い始める。まず拾い上げたはずの欠片を再び取り落とした。それに反射的に手を伸ばし、インベントリに収納するまでをやってしまった。到来した稲光が、テントの開けっ放しの窓を映し出した。閉めなきや。いやそれより前にセーブだ。

えっと、えっと。アバターはどんどん薄くなる。私はほとんど焦りを覚え、焦りが更なる焦りを呼ぶ。もはや考えるのは無駄だ、走るのみ。私はそう考えて考えを捨て、ずぶ濡れになった体を動かし、とにかくテントへ走って——。

「な」

転んだ。

もうダメだ、きいんみたいなきゆうんみたいなの、聞き覚えのない効果音が鳴る。それはきつと、私の転移の時間切れを意味している。クソ、間に合え。思い付きで【空蟬】を撃つ、置き去りにされた丸太が水溜まりの中に横たわるのを背後に、私はテントの中に入る。よしよしよしよし……まだいける、まだいける！テントのメニューを開く。一瞬であるはずのローディングの長さに苛立つ。そうして表示されたセーブボタンに、自分の人差し指を向けて——。



「さてお嬢さん、転移魔法の体験はどうだったね？」

目の前に現れたヴェルガント氏が、なんだか不純なものを感じなくもない眼差しでこちらを見据えて聞く。

「最悪ですね」

ぐしよ濡れになった私は、紛れもない本心でそう答えた。

海を漂おう！

・レビンカムイの雷纏黒卵

黒き雷が産み出した後に黒雲を通過したが、孵ることのなかった卵。

その身を解き放つことこそなかれど、素材として十分すぎるほどの魔力を有する。

思念無き無念。

「……」

降ってきて私のセーブを妨害した、例の欠片の説明文だ。

納得いかない。私は納得いかなかった。wikiを見た感じかなりのレアアイテムなのは間違いないけど、でもこのレアアイテムと新大陸行きならどっちがいい？と問われたら新大陸と答える。あわよくば聞いてきた相手をぶっ殺して両方、というのでもいいかもしれないが、私には誰が『相手』なのかいまいちわかっていない。

実際……どうする？どうにか錬金術に活用できないかな。

「んー……そうだね」

そんな風に考えながら、木目を晒した木製のテーブルで雷纏黒卵とやらを弄んでいると、反対側に座ったジユゲツキが何やら言いたげだ。

ジユゲツキは^{トップ}ブラリに所属しているプレイヤーで、新大陸にも既に到達済みだ。そんな彼女がなぜ私とつるんでいるのかといえば、彼女にも居残り組だった時代があったから、と言う事になる。

「何〜?」

「クグリーンちゃんの見たつていう『レピンカムイ』だけど、やつぱりベヒーモスの文献に載つてるみたい」

まあ……そうだろうね。wikiには載つてなかったけど。

情報の公開を謳つて重いwikiまで運営している割に、ライブラリは案外隠していることの多い組織だ。先の竜災大戦でも、その隠している情報が戦局に大きく影響したとか聞いたけど……まあ、詳しくは知らない。なぜ詳しくは知らないのかというと、私は旧大陸にいて参加できなかったからだ。マジでふざけんよ。

……この場合は隠していたというより、情報が多すぎて未整理状態だっただけ、つてのが近いかもだけど。

「そうだなー……まあ、この量なら直接加工するよりは触媒にする方がいいだろうね。電気属性を賢者の石に転写するとかがいんじゃないかな」

「賢者の石かあ……めんどくさいんだよねあれ」

「まあ、錬金術師に就職した時点で避けられない運命ではあるよね」

ジユゲツキは苦笑して、スカツシユのグラスに刺さったストローをずずずと吸った。ガラス越しに見える半透明の黄色が減退していき、ついには消えて無くなった。

それと同時に、ジユゲツキは澆瀨に言った。

「ごちそうさまでしたー！クグリンちゃんはこの後ヒマ？」

「ん、ヒマだけど？」

何か用事でもあるのかな。

ジユゲツキは親しみやすい笑顔と共に、紫色の長い髪を少し振ってこう言った。

「ちよつと、検証に付き合つてほしくて！」



そういうわけで、私は棺桶に詰め込まれつつある。

「棺桶じゃないよっ！」

いや明らかに棺桶でしょ！

「だから違うって！いい？これはね……漂流型の海上家だよ！この前分かつたんだけど、大工の作れる家は案外自由度が高いの！この家の場合、中にプレイヤーが入って、海流の導くままに大海を漂うの！ね、運が良ければ新大陸にたどり着くかもだよ！」

いやでも……。

「じゃあ……なんで窓がないの？」

「強度の問題だね!」

「なんでドアが存在しなくて開けるときは斧でぶっ壊す方式なの?」

「強度の問題だね!」

「なんで灰色なの?」

「たまたま」

「いや棺桶じゃん!」

「棺桶じゃないよ!」

まずい、これじゃ水掛け論だ。そしてトップ克蘭に入れることからわかるように、言い争いは基本的にジユゲツキの方が強い。つまりこのまま水を掛け合っている、と、いつの間にかこのカンオ家に詰め込まれて仮想世界の海の旅に誘われてしまう可能性が高い。というか、殆ど確実だ。何か、何か打破のきっかけは……そうだ!

「そ……そもそも、別に人間が入る必要ってなくない!?窓もなくてドアもないんだっから人間がいてもいなくても大して変わらないじゃん!神代製の発信機が何か取り付けたほうがいいって!」

「……それはね」

な、何?嫌な予感がする。ジユゲツキの口元が何やら……そう、ニヤついた、というか。相手をまんまと罠にはめてやった、みたいな、そういう笑みを浮かべているような

気がする。よしダメだ、逃げよう！【空蟬】っ！

しかし発動しなかった。

なんで？

咄嗟に見たジュゲツキの手元で、黄緑色の……聖杯が光っている。なんてこった。私は打ちひしがれた。

「……それはね、」

私が【空蟬】を放とうとしたことにも、それを自身がクターニツドの報酬で制止したことにも触れさせせず、ジュゲツキは笑顔を保ち、改めて口を開く。

「確かに……発信機だけで無人の家も用意してあるの。でもそれはそれとして、人間を入れることによる影響とか人間の危機管理能力を踏まえた評価とか、そういう軸でも考えないといけないんだ」

ヤバイ。

物理的には全くそんなことはないのに、ジュゲツキに対し迫り来るといふ形容が、いとも簡単に浮かんできて。

「さて……クグリンちゃん。人間が入る必要にツツコむつてことは、逆に言えば」

ひ、ひええ……！

ぶっ殺すか？いやダメ、というか無理。ジュゲツキを何度か奇襲したことがあるが、

毎回レッドネームが付かない程度に返り討ちにされている。彼女はトッププレイヤーだ。

ジューゲツキの普遍たる笑顔に、青空が逆光で薄影を落としたり。

「それ以外は問題ない、つてことだよね?」

そういうわけで、私は棺桶に詰め込まれた。



まあ長い目で見れば、この検証に参加することで新大陸行き手段の確立に繋がることもあるかもね。

私は自分に言い訳をした。

ざばんざばんと四方八方から嵐のような波音が襲い掛かり、棺桶もとい棺桶型の家はぐらぐら揺れる。VRシステムの感覚保護がなければ、とつくに酔っていること間違いなしだ。というか感覚保護があるにもかかわらず酔いかけている。ヤバイ。

「ど、どうしよう……」

狭い棺桶に木霊した眩きすら、波たちはその轟音によって攫い取って掻き消してしまふ。このまま待つかがログアウトするかがいいんだらうけど、この家にはベッドがないし船という扱いでもない……三回目に試みた密航のように、ログイン地点が海の「かつて家のあった場所」の上になってしまふのではないかという疑惑が拭えない。

つまり、待つしかない。

「いや、こう……ええ？」

ダメだろ。私は思った。どう考えても生きて旧大陸に戻ることはできなさそうに思う。窓がないのはまあ良い、錬成した錬雷合金とか焰紅石で照らせばいい話だし、実際今もそうしている。ドアが無いのも、色々と出る方法は思いつく。食料も……使い切れるとは思えないけど、三週間分くらいは用意されているらしい。

でも。

「これ……削れてる、よね？」

私のサブジョブ……上忍は忍者の上位職だ。そして、忍者そのものは盗賊の隠し派生職業。つまり私は、盗賊系統のスキルを簡単には使える。周囲の薄闇を細々と照らす、眼球に宿った黄色のスキルエフェクトからも分かるように……私は今、対象物質の「価値」を視るスキルを発動しているのだ。

で、その「価値」は徐々に下がっていつている。

価値判定スキルは、基本的にある種主観的だ。スキルレベルが上がるにつれその精度は上がっていくけど、初期状態では簡単な偽物を「極めて貴重」と判定することもありうる。しかし……この場合、制度は重要じゃない。「価値」がそもそも下がってるっていうのは、つまり対象から『何か』が失われつつあることを示す。では、この場合の『何

か』って何だろう?」

……きつと、耐久値だ。

この「価値」がゼロになったとき、一体この家はどうなるんだろう? そのへんの石ころにすら「価値」を見出そうと思えば見出させる。「価値」が真に皆無なものは……ただ一つ、存在しないものしかない。つまり、この家……いやハッキリ言って棺桶は、遠からず崩壊する。多分、ライブラリの連中もわかつたうえで私を生贄にしたんだろう。

なるほどね……。

「……どうする?」

このまま終われない、私は強く思った。

しかし特にできることはなかった。

私はこのまま終わることにした。



数時間後。

いよいよ家の崩壊が近いみたいだ。

波音は、最初のころよりは少し弱まって感じられる。まあ、天気がなんか良い感じになるか悪い感じになるかしたんだと思う。しかして内部の薄闇は依然として薄闇で、ただ数個の錬成光源たちだけがそれを照らしているのも、やはりいつも通りだ。

そして——その光源たちが、小さく淡いエフェクトと共に、私のインベントリに仕舞われる。

行動開始だ。

「刃隠心得、【空蟬】！」

このまま終わることにしたとは言え、足掻くくらいはしてみたい。

【空蟬】は要するに短距離ワープ魔法だ。転移魔法を習いに行つて改めて分かつたのだが、どうも【瞬間転移^{アポト}】などの魔法は基本的に『視線を通す』ことが発動の前提となるらしい。つまり、窓の一つもないこの棺桶で使つても、棺桶の隅から棺桶の隅へ移動するだけになると言う事だ。しかし【空蟬】は違う、この忍法はそもそも、例えば視線の向いていない背後に緊急回避するとか、そういう用途も想定してデザインされているのだ。つまり……。

「よし……と」

壁を抜けられる。

棺桶の天井の上に転移した私は、とりあえず適当な出っ張りにしがみついて周囲を見渡す。辺りは闇に染まっていて、天の星々が唯一の光源だ。波たちの揺らめきがその天光を反射し、光輝の荒野を作り出す。

……よし、大体目星はついた。

私はインベントリを操作すると、瓶に収まった黒い液体を取り出す。私も棺桶の中で数時間何もしなかったわけじゃない。それならとつくに飽きてログアウトしてるはずだ。それでは、何をしていたか。

「あそこだっ！」

錬成していた。

ジグゲツキから聞いた話から大体わかっていた、レビンカムイは黒雷を身に纏い、その挙動を増幅することで高速移動する種族だ。もつと上級の素材でアクセサリーを作れば、雷の力を人間に適用することもできるらしい……とも、彼女は言っていた。

でも、私はこう思う。

この素材はあくまで「黒雷を纏わせる」属性のものだ。だったら、その対象は……なにも生物に限らなくても、伝導性と流動性を有していれば、何だって構わないんじゃないか。

「えいやあっ！」

液体を海に流し込む。

錬金術師は魔力の形質変化を利用して戦うジョブ。だから、こういう芸当には慣れている——私が送り込む魔力によって、黒を上塗りされた海の一部が……隆起する。それは生物のようにならねり、星の光をなめらかに受け止め、何より。

雷を纏っていた。

「行けるところまで行くぞおっつ！」

波の塊の上に「水滑り」で飛び乗る。私はどの道魔力切れで死ぬけど、どうせなら少しでも、この星光たちの中で進んでみたかった。思考入力によつて足元の波が蠢き始める。ざばざばと、昼間聞いたような波音が戻ってくる。

二分足らずで死んだ。

トンネルを掘ろう!

トンネルを掘ることになった。

「ようクグリ、トンネル掘り日和だな」

くすんだ色の作業着に身を包み、肩に背負った神代製の掘削ドリルの先端をきらりと光らせ、ご丁寧に『安全第一』と印字された黄色い頭装備ヘルメットまで被ったペンペンが言う。そのネタアイテムどこで買ったの、みたいなことを聞きたくなかったが、なんとなく聞いていいのかわからない霧囲気を感じたのでやめておいた。いややっぱ聞きたい。聞かか。

「そのネタアイテムどこで買ったの?」

「……ネタ……?」

あゝほらやつぱダメだった。完全に全くネタだと思わずに大真面目に買ったよコレ。こういうのをつい聞いてちやうの治さないとはいけないよなあ……。私は自省した。実際、これがなければとつくに新大陸に行けているような気がする。

「えつと、ごめんなんでもない!イカしたドリルだね」

とりあえずごまかしておく。いけるかな?ペンペンは少し固まった後、

「ん?……ああ。ロマンあるだろ?掲示板とかでは神代製ドリルならY型一択!とか

言ってるエアプカス野郎ばっかだけど、実際に触ったヤツなら入型一択なんだよなあ……」

こいつも大概だな……。

まるで無頓着なペンペンがドリルのスイッチを入れ、銀色の螺旋をドリドリさせ始める。彼のメインジョブは戦巧者だから、こういう変わり種の武器にも対応しやすい面があるはずだ。……というか今気づいたけど、いつの間にか頭上のプレイヤーネームが赤から戻っている。カルマ値下げクエストをこなしたのかな？……まあ、何でもいいや。私はインベントリから錬成爆薬を取り出すと、大きく息を吸って高らかに宣言した。

「トンネルを掘るぞーっっ！」

「おーっっ！」

参姿翠冥さんしすいめいの地下迷宮、その地下部分の出口付近に屹立する巨崖が、私たちの掛け声を

木霊させた。



そもそも、どうしてトンネルを掘ることになったのか？

新大陸に行きたいからだ。

「よし穴空いたぞー！」

ペンペンが楽しげに言った。

彼の手元でぎゅるぎゅると猛回転していたドリルが一時的に停止し、その先端が崖に作り上げた小さな窪みが、周囲のひび割れを伴って暴かれる。

「ナイスウー！」

私は手元の錬成爆薬瓶を窪みにはめ込み、空いた両手でそのまま印を組む。

……新大陸に行きたいからトンネルを掘る、では余りに論理的接続を欠いているかもしれない。でも、実際のところそれ以上の理由はないのだ。海から行くことも空から行くこともできないなら、地底から行ってみる。流石に船で7日かかる長さに全てトンネルを通そうとは思わないが、それにしてもショートカット地点を作るくらいはできるはずだ。……そんな適当にもほどがある思考こそ、ペンペンがドリルを携え、私が錬成爆薬をしこたま用意した理由なのだから。

「刃隠心得」
はがくしころえ

組み上げた印の手前で、橙色の紅炎を燃やしながら、灼熱の火球がどんどん拡大する。魔法使いの経験がある以上、素直に「ファイアボール」を撃つてもいいんだけど……使い慣れているこちらの方がやっぱり好きだ。ところで火球が放っている熱波が普通に術者にも届いている。両手が熱い顎が熱い、早く撃たないと……！

「【不知火蕾】っ！」
シラヌイツボミ

後ずさってきたペンペンの横で、完成した火球が一直線に放たれる。それは周囲の空

気を揺らめかせながら、吸い込まれるように先ほど設置した爆薬に向かっている。結果は決まっている。

初めに業火が勢いよく爆ぜて、遅れてどかんと爆音が聞こえた。滝のように発生するエフェクトが、極めて簡単な一つの事実……崖で大爆発が起きた、ということを知らしめてくれる。

「どうだ!？」

晴れつつある爆風を前にペンペンが言う。

「えっと……」

灰色の煙が去った後には、無数に散らばる岩の欠片と、痛々しく抉れた崖の姿があった。

「……大成功だよこれ!」

「マジ!？」

「うん!当初の予定より深く掘れてる!」

イエーイー!ペンペンとハイタッチをする。

「よっしゃこの調子でやっていこうぜ!」

「あ、あの……」

おや?何やらプレイヤーが話しかけてきた。

プレイヤーネームは『火鼠丸』、レッドネームじゃない。腰に帯刀……ジョブは武者かな。装備のグレードから言って、別に金策のため周回してるわけでもない攻略中のプレイヤーみたいだ。多分エリアボスをどうにか倒してウキウキで最終エリアに向かっていたら、急に轟音が聞こえてびっくりして駆け付けたんだらう。……驚かせちゃったか。

私は罪悪感を込めていった。

「ごめんごめん！ちよつと最終地点付近の崖にトンネルを掘っているだけだから、気にしないでね！」

「最終地点付近の崖にトンネルを掘っているだけだから気にしないでね?!?!」

あれ？

「ん、お前も手伝うか？」

ペンペンが何やら看板を取り出しながら火鼠丸に聞いた。いや何それ？

「お前も手伝うか?!?!」

火鼠丸が叫ぶ横で、地面にでんと置かれた看板を覗き込んでみる。

『ご迷惑をお掛けしております』

そう主張する太字の横に、お辞儀をするマッドフロッグのイラストが添えられている。

なるほどね。

火鼠丸はいよいよ混乱した様子で、

「えつと……あの、失礼します！」

走り去った。多分全力疾走だ、武者は戦士系統のジョブだけど、ステータスとしてはむしろAGI偏重になることが多い。

……随分までもで、真面目なプレイヤーだった。きつと、新大陸調査船の定員の大部分はああいう人に埋められているんだろう。……私は、心のどこかが物悲しさを覚えるのを感じた。

彼が残した微風が、何だか儂く思えてならない。



まあそれはそれとしてトンネルは掘らないとね！

作業は順調に進んでいる。

私は地面にしゃがみ、錬成アルケミック・モーター品射出用迫撃砲の点検をしている。とりあえず問題はなさそうかな……よし。そろそろ定期実行オートタイムがトリガーを引く時間だ。三、二、一……。

「発射！」

どかん。

迫撃砲が魔力の火を噴き、発射された錬成爆薬の瓶が弾道を描いて壁にぶち当たる。

そして……勢いよく爆発。瓦礫がばらばらと落下し、窪みが一層窪む。

「向こう一時間は五分間隔で発射するよ！ やっかいな地形とかを整備して！」

「了解！」

ペンペンに指示を出す。

ある程度まで作業が進んだところで導入した錬成品射出迫撃砲のおかげで、効率は随分良くなった。わざわざ爆薬をセットしなくても割とアウトに当ててくれるし、ペンペンの出番も迫撃砲で掘れなかった部分の調整に留まり……何より、メンテナンスを除けば全自動なのが良い。賢者の石の準備は面倒だけど、その面倒を乗り越えれば爆薬の自動生産くらい訳ないのだ。

だんだんそれらしくなってきたトンネルの中に、ドリルがギャギャと石を削り取る音が反響する。人の言葉は今は無。基本的には発射音、爆音、指示の声、ドリルの音、発射音……その繰り返しが続いている形だ。

さっきのように外部からプレイヤーが来ることもない。何せマッドフロッグがお辞儀しているからね、マッドフロッグのお辞儀を前に何かしようとする奴なんてそうはいない。だから基本的にプレイヤーたちは大人しく順路を通っていくし、やるとしてもせいぜいお辞儀マッドフロッグのスクショを撮るくらいだ。私も撮った。三枚。

特に不安定要素もなく、作業は粛々と円滑に進んでいく……私が調子に乗り始めた、

その時だった。

「……………ん？なんかあるぞ」

ドリルを一時停止すると、ペンペンは足元を覗き込んで言った。

「ん？……………化石か何か？」

「かも知れない、ちよつと掘ってみる」

「あと三分で爆破だから急いでね」

掘削音が再開される。化石かあ……………化石つて錬金術に使えるのかな？うまいこと魔力触媒に加工できないのかなあ……………。

心のどこかでわくわくしながら、私はペンペンが化石を掘り終えるのを待った。

でも、掘り終えなかった。

「が……………」

その一言を最後に、ペンペンは紅のポリゴンを散らし、完成しつつあるトンネルの暗闇の中にはたりと倒れた。

「……………ん？ペンペン？」

ペンペンは答えない。……………答えないどころじゃない、彼のアバターは翡翠色のポリゴンに分解され、そのまま破裂し消えてしまった。真つ二つになった黄色いヘルメットが、『安全』と『第一』の二つに分かれ、地面に落ちてからんと鳴った。

「…………え」

それきりだった。

「死んだ？」

な……何？酸欠？酸欠的なアレで死んだ？いやそんなはずは。ヘルメットは真つ二つになつてる。かまいたち？さすがにそれ実装してたらライン越えだよ。

じゃあ……敵？

とにかく、これだけはわかる、何かがヤバい。

急いで盾になりそうなるものを探す。えつと……仕方ない。マッドフロッグの看板を担ぎ、自分のアバターが隠れるように置く。一体何が……？恐る恐る看板の端から目を覗かせて。

『（迷惑をお）』

看板の上部が切り落とされて、その綺麗な切り口を晒しながら宙を舞っているのが見えた。

高速で接近した何かが起こした、大きな音が耳に纏わりつく。

咄嗟に振り向いたその先に、私は流れるアナウンスを見た。

『モンスター不世出の発見！』

『討伐対象：FM，スクリサリス』ウォールフェン 戦災孤児』

『エクゾーディナリーモンスターとの戦闘が開始されます』
……マジで？

目の前に浮かぶ甲虫が、ひどく邪悪に笑った気がした。

敵を打破しよう！



F M' sクリサリス” 戦災孤児^{ウオールフエン}は遍在する。

それは他のエクゾーデイナー・モンスターにはなかなか無い特徴だ。皇金世代^{ゴールデンエイジ}が水晶崖以外の場所にスポーンするはずもなく、死闘^{スカイデッド}の傷が汚染個体同士の交配以外を理由として誕生することもあるはずがない。この芸当は、F M' sクリサリスという二つの大陸の両方に分布するモンスターがベースとなり、更に出現理由もある程度普遍的である……その二条件が合わさることによって可能となるものだ。

” 戦災孤児” は適合した土地……すなわち潤沢な魔力を備え、すぐ上では激戦が繰り広げられているような座標……に遍在する。それはシグモニアのような場所でもあり、あるいは。

文字通り毎日のようにその様相をがらりと変え、多様な怪物^{モンスター}たちが跋扈して、時に開拓者をも交えて争いを繰り広げる……地下迷宮のような場所であつたりする。

◆ 孤児は、孤りではない。

いや死ぬでしょ。

私は感想を述べた。

とりあえずまあ、見えているのはカブトムシ。しかし明らかに普通のカブトムシじゃない。体長が5メートル近いのはシャンフロだから良いとして、各種器官はめちゃくちゃ凶悪な感じに発達しているし、空気を切り裂き聞こえてくる羽音はジェット機の噴射音を思わせる。

で、こつちを向いて突進しつつある。

いや死ぬでしょ。

私は感想を述べた。

世界が何だか遅れて見えて、ゆっくり突進するカブトムシ……”ウォールフェン 戦災孤児”だっけ？
に合わせ、走馬灯が流れていく。「黒狼」の面接に出向いたつもりがいつの間にか面接官を埋めていた記憶、他人の飛行機型戦術機にこっそり掴まって密航しようとしたけど即死んだ記憶、第三者が手に入れた抽選棒チケットをめぐりペンペンと勝手に争った記憶。

いや、ろくな思い出がなさすぎるだろ……。

硬くそそり立った角が、死を象徴してこちらに迫る。ちくしょう……リスボーン後来世はもうちよつといい人生を歩めるかな。そもそもセーブポイントってどこに置いてたっけ？

私はそう考える程度には諦めていた。実際、もうどんな魔法も忍法も錬成物もこの距離じゃ間に合わない。クソ、今回もやっぱり……。

「え」

どかん。

爆音が響く、戦災孤児の攻撃じゃない。私にダメージが行っていないからだ。じゃあいつたい誰が——いや、そうか。錬成品射出用迫撃砲のタイマーはペンペンが死ぬ直前時点で残り三分だった。

……時間ができたみたいだ。

立ち込める煙の向こう側にうつすらとシルエットを描く敵について、明るく塗りつぶされた視界を前に考える。とりあえず見るからにカブトムシ、つまり虫共鎖において……おっと、ボルクネスと対戦した時の記憶が出てきちゃった。違う違う、カブトムシモンスターといえば基本的に硬い、硬くないカブトムシなんて幼虫以外は見たことないくらいだ。

速度については……遅くあってほしいけど、そうもいかなさそうだ。あの羽音は何？って話なんだよね、普通の飛び方をしていないのは明らかだ。攻撃力は言わずもがな。ペンペンと看板は斬撃でやられたけど、カブトムシである以上角がある。刺突もできると考えるべきだ。打撃もタックルすればできそう、遠隔攻撃は……流石に無理かな

? いや訂正。爆炎のカーテンを突っ切ってレーザーが飛んできた。咄嗟に避ける。背後から爆発音。オツケー、ヤバいね。

結論としては……VITが高く、AGIが高く、STRが高く、遠距離攻撃ができる敵と戦うことになる。

いや死ぬでしょ。

私は感想を述べた。

橙色が晴れていく。空の色が青へと戻っていく。轟音がそこに吸い込まれていって、代わりに……羽音が聞こえる。

「空せ」

咄嗟に叫んでいた。

「みっ!」

よし、トンネルの反対側の壁に転移し、私のいた場所に猛スピードで突進し、勢い余って壁に角を刺した戦災孤児を確認。その重い色の装甲は……えっと、無傷みたいですね。

戦災孤児が角を引き抜き、土くれがそこから落ちてくる。崩れていくトンネルを気にもせず、重厚たる甲虫は重くこちらに振り返った。

角が光つてると思ったら、次の瞬間にはビームが出ていた。

「ダメでしょそれはあああつー!」

刹那、私の真横を熱線が貫く。見てから回避したけどやっぱり遅かった、ビームが掠った右手の甲が、赤色の欠片を吐き出していく。ど……どうしよう。はつきり言つて無理だ。爆薬は私の手持ちの中で最強の物理的ダメージソースだ、それすら装甲に塞がれるなら……少なくとも、殴つていては倒せない。

じゃあ、毒を盛るとか? いいね、よし盛ろう。

私は即決した。

今にも飛び立とうと翅を変形させつつある戦災孤児に、インベントリから取り出した適当な毒瓶を投げつける。内部で泡立つかにも毒っぽい緑色の液体が、地面と激突して割れた瓶から飛び出す。さあどうだ、これで効いてくれれば希望はある……! !

戦災孤児が着弾から逃れるように飛んだ。そのままこちらに向かつてくる。ちよ

……

「【空蟬】!」

本日二度目の【空蟬】を撃ち、転移の成功と切り刻まれる丸太が入り混じった効果音を聞く。これと【瞬間転移】の連打で何とかできないかとも思うけど、MPや消費アイテムがそのうち尽きるはずだ。それまでに……対抗策を見つけないと。

またしても私の真横の壁に突き刺さった戦災孤児を、睨む。向こうもちょうどこちら

を睨んでいて、偶然にも目が合う形になる。その眼は巨体に似合わず随分と小さく、あまり性能が高いようにも見えなくて、私は同時に閃いた。

【追^{ツイ}嵐^{リン}火^ヒ花^カ】

やられる前にやる。出現した火球が燃光を散らしながら、分裂して戦災孤児の眼に向かう。効果は期待してない、でも目潰しにはなるだろう。そもそもカブトムシは視力がいいとは言えない、レーザーによる狙撃ができる以上、戦災孤児は現実のそれとは比するべくもない認識能力を持つはずだが……でも、さつき爆炎の向こうから撃ったレーザーは外れた。あれは私を認識できず、当てずっぽで撃つたことになる。

だつたら。

【瞬^ア間^ホ転^ト移^ト】

暴れ回る戦災孤児の背後に回る。戦災孤児はさつき、私が投げた毒から逃れた。それは逆に言えば毒自体は通用するってことだ。そして、今なら関節が晒されている、毒を盛ることもできるけど……いやダメだ、錬成毒でこいつを殺し切れるとは思えない。それより、もつと確実な方法がある。

【鎖^さ縛^{ばく}帷^{かた}子^{びら}】

無機質な鎖が有機的に踊り出て、戦災孤児の甲殻に這う。

ごめんね、もう少し身悶えていて欲しい。

私は爆薬と……もう一つ、黒い液体の入った瓶を取り出す。

……装甲の例外は関節だけではない。もう一つ、もつと脆くて無防備な部位がある。体内だ。何を言っているんだという話だけど、実際のところ体内は無防備で、例えば体の中に爆弾を転移させられれば勝てる。もちろん実際にはそんなことは無理で、このカブトムシが有する体内に通じそうな穴はすべて、閉じられるか装甲に塞がれるかしている。でも。

一つだけ、例外がある。

「……そのビームってさ」

黒い液体を爆薬の瓶に流し込む。両者の境界線でぴりぴりと黒雷が走る。やがて両者は混ざり合い、境界線は消失し、全体的にぴりぴりしている液体が生まれる。

ある程度の伝導性を有する流体状のオブジェクトに混ぜこむことで、外部からの魔力操作を受け付けるようになる。〈黒潮〉と、そう名付けた。

「穴がないと出せないはずだよね」

【鎖縛帷子】の残り時間が近いが、ここでは冷静であるべきだ。爆薬入りの〈黒潮〉を、戦災孤児の太く長い角に押し込む。異物感を感じたらしい戦災孤児が暴れ回るが、〈黒潮〉は暗闇に溶け込んで、どうやら彼には認識できないらしい。ある程度まで注入が終わったところで、私は魔力を再び込める。

倒した! エクゾーディナリーモンスターを倒したよ! 散らばったドロップアイテムを拾い集めながら喜ぶ。正直、最近はずっとこう……どうせ最終的に死ぬんでしょ? みたいなの、そういう感じ出てたけど。今回は違う! 今回は違うんだーっ! やったーっ!

「……あれ?」

トンネルの出口側に何やら光が見える。

何だろう……もしかして新手の敵? 流石に勘弁してほしいんだけど。いやでも今の私なら行けるかもね〜! うん! 行けるわ! よーしかかってこい! 私は調子に乗って光のもとを注視した。

……なーんだ、私が置いた錬成^{アルケミック}品射^{モーター}出用迫撃砲じゃん。

五分経過したから次の爆薬を発射しようとしてるだけか〜! 心配して損したよ!

……ヤバくね?」

「待」

【空蟬】を咄嗟に起動、とりあえず安全地帯に逃れたほうが良さそうだ。

しかし起動しなかった。なんで?

『アイテム「変わり身丸太」の所持数が要求値に達していません』

なるほどね。

魔力光が本格的に強まって、発射音がして、迫ってくる爆薬が見えた。
トンネルが崩落して生き埋めになった。

ポイントを振ろう!

「……うーん」

悩んでいる。

最終的に生き埋めになったものの、あのカブトムシは一応倒した。実は生きていたパターンもこのゲームならありうる……気がするけど、流石にないと思いたい。アナウンス流れてたしね。仮にアナウンスが嘘だったとして、報酬?らしきスキルも素材も手に入っている。実質的には同じなのだ。

今悩んでいるのは、それとはまた別……というほどでもない、少しばかり関連した事柄についてだ。

私の目の前に展開したウィンドウが、カルマ高めでも入れてくれる店蛇の林橋に差し込む陽光を透かしている。

PN : クグリン

LV : 99 Extend (20……EXB : 20)

JOB : 錬金術師

SUB : 上忍

332, 189マーニ

HP (体力) : 60

MP (魔力) : 146

STM (スタミナ) : 35

STR (筋力) : 40

DEX (器用) : 90 (90)

AGI (敏捷) : 105

TEC (技量) : 90 (45)

VIT (耐久力) : 25 (600)

LUC (幸運) : 80

スキル

ラビダンロック

・敏速解錠Lv. MAX

ファストロウエージ

・迅速開錠Lv. MAX

・リフレクス・フオクシヨンLv. 8

・アサシンピアスLv. 5

・剣踊【ヒ襲】ヒツキウツキセンエイビコウ

・潜翳尾行

・アンブラ・ブラックネス

・ベルトベスト・ビツクル

——【不世出の奥義】——
エクゾーディナリースキル

・戦砕琥示
ウオールフエン

魔法

・ファイアボールLv. 6

・サンダーボルトLv. 4

・エンチャント：サブライズアップ

・【瞬間転移】
アポート

・【急速錬成Lv. MAX】
ブリッツアルク

・【魔練幻撃Lv. MAX】
トリックビート

・【律刃魔装Lv. 6】
トリックブート

・【融合錬成Lv. MAX】
フュージヤルク

・【分解錬成Lv. 7】
ディフュージャルク

・【創造錬成Lv. 9】
プロデュースルク

・【ミラクルマイニング】

——【刃隠心得】——

【刃隠心得】

・【空蟬】

むねはらなはばり

・【朧隠】

むねさびのころも

・【颯衣】

あらしおあし

・【荒嵐潮足】

さばくかたびら

・【鎖縛帷子】

シラヌイツボミ

・【不知火蕾】

ツイソノヒバナ

・【追鼠火花】

【刃隠心得奥義】

・【水滑り】

装備

右：無し

左：無し

頭：無し

胴：多技デの白衣クセツト腰：多技デの白衣クセツト脚：多技デの白衣クセツト

(DEX 2倍、TECO. 5倍、VIT+600)

アクセサリー：刃隠六具（サンシャクテヌグイ）【三尺手拭】

アクセサリー：刃隠六具（エクラブロード・リンク）【印籠】

アクセサリー：爆蟹の腕輪（トクシゲート・グローブ）（爆発物接触耐性：中）

アクセサリー：毒鱈魚の手袋（ステルステップ）（毒物接触耐性：中）

アクセサリー：不立荒の足音（ステルステップ）（足音軽減：小）

私は平静をどうにか保ち、忍者用の巻物に錬成インクでメモを書き始める。地味だけど、私の就いている双方の職業が交わる瞬間だ。太めのペン先が紙上を踊り、黒の太字を滲ませる。

一つ、レベル。

随分長い間レベル99だった私だが、今回でレベル99……：E·x·t·e·n·d·に変わっている。前にwikiで見たけど、確かExtendはレベル100以上のモンスターの討伐が条件のはず……：戦災孤児はエクゾーデナリー、それくらいの強さはあったと言っ事だろう。

正直、嬉しい。かなり嬉しい。小躍りしたい気分だ。何ならする。私はおもむろに席から立ち上がると、静寂の中に白衣をはためかせてよくわからない舞いを踊った。多技の白衣は私が持っている中で一番いい装備で、確か何度目かに実験台にされたとき

にジューゲツキから貰ったものだ。表裏切替可能な装備で、裏返すと逆の効果を持つ一義の黒衣になる。裏地の黒が見え隠れして、私の舞いに独特な雰囲気を与える。

しかし舞っている場合ではない。

しかし舞っている場合ではなかった。私は椅子に座りなおすと、少し乾いてしまったペンのインクを補充しなおし、巻物への箇条書きを再開する。

二つ、ステータスポイント。

「……20かあ……」

EXB、と名乗る謎の20ポイントが、レベルの横にくつついている。多分エクゾーデイナー……ブレイク？ポーナス？、またはエクストラポーナスの略だろう。

これが、相当な悩みどころであり、舞いが中断された原因でもある。

「……20かあ……」

私は同じことを二回言った。

なんとなく拝んだ天井には、気品を纏った、それでいて飾りすぎもしない、例えるなら花びらのような形のシャンデリアが、蠟燭の光をさらさらと振りまいている。ずっとその様を見ていたくもあつたが、きつとそれでは永久に解決に至らないのだろう。惜しみつつ、私はステータスウインドウに視線を戻す。

……20、そう20だ。ものすごく微妙なラインと言っている。これが1なら何も考

えずMPか何かに突っ込むだろうし、100ならSTRとSTMを補強したうえで余りをTECとDEXに突っ込むだろう。でも、実際に私の舞いを妨げているのは20……何かを成すには少なすぎる、しかし端数と切り捨てるには多すぎる数だ。

「……20かあ……」

二度あることは三度ある。

そしてこの調子だと、きっと四度目もあるのだろう。

「……よう」

これじゃダメだ、机に突っ伏すのをやめて、もう少し真面目にステータスについて考えてみよう。私は巻物をしゆるしゆると引き伸ばすと、ペンのインクを改めて補充した。零れ落ちた数滴の黒が、薄く明るい巻物に模様を描いた。

◇

・HP

正直そんなにいらないうか、これが必要になる時点で終わってる感あるよね。ジョブ構成的に、私の戦闘はだいたい「忍術で危機回避しながら錬金術の搦め手で倒す」って感じになるわけけど……危機回避できるならHPいらなくない？っていう。まあ、DOT使いとかを対策する分には良いのかもだけど……実際、DOT使い対策できたところで新大陸行けなくない？つまりそういう事なんだよね。

・MP

かなりいるよ、かなりいる。最近ちよくちよく「水滑り」を使って思うんだけど、やっぱりこの忍術ってゴミなんだよね。燃費悪いし。応用性は多少あるし、実際ポーシオンを足場にジャンプ！とかやってはいるけどさあ。ポーシオンを足場にジャンプしてるのを横目に放たれる「竜威吹」に勝てるか？って言うよ。勝負にすらなっていない。地味さについてはもう仕方ないとして、せめて燃費の悪さは解決したいよね。そうすると、MPに振るのはアリなんじゃないかな。

・STM

正直、AGIや忍者職の平均と比べてもちよつと低すぎる気はしてる。ただ、低すぎる気がするだけで実際のところ何とかなってる現状もあるんだよね……。そもそも私、走り回るよりは転移魔法で詰める方が好きだし。じゃあなんでAGIに振ったの？って言うつまあ正直事故に近いんだけど。忍者になったぞイエイ！じゃん？ついでにレベルアップ！ポイントめっちゃ入った〜！じゃん？忍者ってどのポイントがいいんだろう……。うーん、なんとなく走ってる感あるしAGIかな！じゃん？舐めてんのかっていう。自分がポイントを振ってる相手はその辺の忍者じゃなくて自分自身が操作するアバターなんだ、っていうのを失念してるよね。走るのってダルいな……。みたいなの。思わなかったのかな？思わなかったんだよねあ……。

・STR

あんまりいらぬ。同じ忍者でもビルドはいろいろあつて、特に手裏剣とか投げまくってクナイとか刺しまくるタイプでは結構必要になるんだけど……まあ、たまにしか投げないし刺さないよね。いちおうメイン武器のダガーですら、攻撃より誰もいない空間に投げ込んで注意を引く使い方のほうが多いし。……この前ドリルを使つたみたい

・DEXとTEC

この二つについては、私の場合セットで考える必要がある。DEXは主に生産に要求される、要するに錬金術師の仕事で必要になるステータスだ。それに対しTECは……手先の動作が素早くなる。それはつまり印を組む速度が上がるつてことだ。上忍の仕事で必要になる。私はDEX二倍・TEC半減の多技の白衣とTEC二倍・DEX半減の一義の黒衣を使い分けてるけど、それにしても錬金術師と上忍には同じくらいのリソースを入れたい。この二つの片方に振るときはもう片方にも同じくらい振るべきだろう。つまり、20ポイントあるなら10ポイントずつ振ることになる。10ずつかあ……。

・AGI

書くのめんどいからSTM参照

・VIT

書めんHP参

・LUC

これが一番の問題だ。もともとドロップ率増加のため80まで上げてあったけど、この間【乱数転移】に挑戦した時に助けられたこともあって、もつと上げようかななんて思ってる。そして……20ポイント全てつき込めば100、確定食いしばりラインに届くのだ。それに加え、基本的に私の運が悪いというのも重要だ。抽選枠には毎回外れるし、【乱数転移】したらなぜか空にいるし、トンネルを掘るとエクゾーデイナーが出てくるし、ボルクネスにはおみくじで負ける。正直、こういうのがなければとくに新大陸で活発で頼れる仲間たちと冒険の毎日を送れていると思う。実際のところは旧大陸で陰湿で近寄りがたい仲間たち（裏切りあり）とトンネルとか掘ってるだけだ。このゲームのLUCが実際のな運に影響するとは聞いたことが無いが、この運営のことだしなにかがあるような気がする。

◇

「……20かあ……」

四度目はあった。

窓の外の太陽が少し傾いているのが、日光の感じからなんとなくわかった。少し橙を

強めた太陽は、いつまでも旧大陸でこんなことをしている私への当てつけみたいに、眩しいにも程がある光で双眸を突き刺してくる。

やってらんねえ……。

私は太陽の残像が焼き付いた瞼を擦りながら、綺麗に掃除された窓ガラスと、そこに映りこんだ自分を見た。随分、弱々しく見えた。……今日はもうログアウトしようかな。そう、考え始めた時だった。

がちやり。

入口の方からノブを回す音が聞こえる。何となく視線を飛ばしてみれば、一人のプレイヤーが茶色のドアを引いている。ドアが閉まるばたんという音に背を向けて、プレイヤーはどこかぎくしゃくとした様子で歩みを進め、私の隣……の更に隣の席に座り、言った。

「マ、マス、マスタァ……カフェ、カフェオレを、一杯」

ボルクネスだった。

「……ねえボルクネス」

とりあえず声をかけてみる。

「あ、……あ?」

今更気づいたららしいボルクネスは、空席を一つ挟んでおろおろしている。彼はカード

ゲームを遊んでいない間は極端に陰気なのだ。

私は紙切れの束を取り出し、彼に言葉をかける。

「……ジエネレーション」

ボルクネスの顔つきが変わった。

「……先攻は君のものみたいだな、クグリン。奇遇じゃないか、何の用だ？」

「実は……」

私は事情を話した。

オリジンマスのアンデッドモンスターを任意の数ステイミューレーターマスの

《喪失骸将》の下に重ねることで特殊行動のトリガーを引き、運ばれてきたカフェオレ

を飲みながら、ボルクネスは私の話を聞いた。

そして聞き終わると、真っ先にこう言った。

「レベルキャップ解放してもっとポイント増やせばいいだけでは？」

そういうことになった。

ベヒーモスに行こう！

そういうわけで、ベヒーモスに来ている。

「よ、よしクグリン……いい、行こう」

ボルクネスも一緒だ。

私がレベルキヤップを開放していなかったのには理由がある。当初は新大陸の施設でしか解放できなかったことと、レベルが長い間ただの99……エクステンドを伴わないものだったからだ。しかし前者はベヒーモスの出現によつて覆されたし、後者も戦災孤児を討伐したことで解決した。

「あんたら……普段は見ない顔だな」

第一階層で試練に立ち向かうべく歩いていると、知らない人がニヤニヤしながら冷やかしを入れてきた。

なんだこいつ……。

私は戦慄した。ここが第一階層だからだ。ベヒーモスの第一階層なんてのは、wikiを読んでわかる通りアスレチックしかないような場所だ。このプレイヤーは、アスレチックしかないような場所に、「普段」なんてものが生じるくらい長く居座っているこ

とになる。

頭上に目をやってプレイヤーネームを見たいけど、その一方で目を合わせたくないという気持ちもある。二つの相反する気持ちがタイル張りのつるつるした床の上で対立をはじめ、ただ時間だけが無為に流れていく。

「俺の名前はK・オトシス」

頼んでもいないのにプレイヤーが自己紹介を始めた。怖い。しかし好都合、これを目を合わせなくてもプレイヤーネームが分かる。

私が伝書鳥メールバードブラックリストを操作している間も、オトシスは自己紹介を続ける。

「ジョブは狙撃銃手スナイパー、サブジョブは呪術師だ」

知らない人間を呼び止めて粘着するだけあって、ビルドまで粘着特化らしい。

私ほどのタイミングでこの場を去るか見極めている間も、時折聞こえる近未来的な効果音を浴びながら、オトシスは淡々と続けている。

……狙撃銃手はベヒーモススナイパーをある程度まで進めないと手に入らないジョブのはずだ。つまりオトシスは別に攻略が進まないとかでもなく、攻略を終えたうえで自発的に第一階層でとぐろを巻いているということになる。何が理由なんだろう……？

正直、私はワクワクしつつあった。横で俯いているボルクネスには申し訳ないが、このオトシスという男……謎を抱えている。謎解きは大抵楽しいものだ、オトシスの何の

必要があるのかわからない自己紹介も、謎解きの手掛かりと思えば面白い。

「趣味は……」

趣味は？

「新規プレイヤーが第一階層でアスレチックしてるのを妨害することだな」

これ以上嫌な解答編つてある？

オトシスはカス野郎だった。

流石にもうダメだ、顔を合わせないよう見つめていた埃一つない床から視線を外し、オトシスのほうを見る……場合によってはぶつ殺す必要が出てくるからね。

オトシスのアバターはモヒカンで、両肩に謎のドクロを装備しており、頭上のプレイヤーネームは当然のように赤く染まっていた。私が自分の少し上を見ていることに気づいたオトシスは、ニカツと笑ってこう言った。私が自分の少し上を見ていることに気

「普段はギリギリ死なないよう調整してるんだけど、この前間違えてヘッショしちゃつてね」

逃げよう。

私はボルクネスを引き摺って逃げた。

◆

しかし逃げられなかった。

オトシスのAGIは妙に高かった。近接銃手ならともかく、狙撃銃手も呪術師もAGIが必要な職業ではないはず……つまり、必要ではないステータスにも振れるだけポイントに余剰があると言う事になる。こいつ……強い。ひよつとすると新大陸戻り組の可能性もある。

「へへ……なアに、ナイフを向けてるわけでも無えんだ、そんなに俺を避けるなよ」

強引に隣に立つてきたオトシスが言う。

むしろお前にナイフを向けてやろうか？ 私は思ったが、言わなかった。どうせすぐ近くにリスポーン地点がある。

「よよし……やってやるぞおおおっ!!」

「がんばれ〜っ!」

「いけーっ!」

そうこうしている間にも列は進み、先頭にいた赤髪のプレイヤーが歩み出て、新たにアスレチックに挑戦する。装備の質から言って……レベル50になって即ベヒーモスに来た、つて感じかな？ まあベヒーモスの攻略はそこまでレベルを要求しないって聞いてるし、こういうプレイヤーもある程度いるものなのだろう。

赤髪が走り出す。同時に、オトシスの眼光がきらりと光る。な、何をする気なんだ……？ 私はビビった。しかしビビることしかできなかつた。

「うおおおおお!!」

そうとも知らず、赤髪はゴールに聳える巨大な扉に、そして巨大な扉の向こう側にある未来に向けて突進する。突進突進……ここでジャンプ、謎のオーラあり、たぶんスキルエフェクトだ。動く足場を跳んで跳んで跳んで跳んで突破。よく走り続けられるなあ……スタミナに結構振ってそうだ。

「よしっ!」

次、トゲトンネル。インベントリからちやぶ台を出して床に置き、その上を走って難なくクリア。インベントリからちやぶ台を出すって何? いや、家具職人ならありうるのか。私が考える間にも、置き去りにされたちやぶ台は四方八方からの刺突を受ける。あつ壊れた、耐久力は高くなさそうだ。初期職業をサブジョブに置いたときの性能……つまり、本命は他にあるってことだ。

「おりやつ!」

次、レーザー。私の見立てではここが一番の難関だけど……ん、立ち止まって? うん。ウィンドウを開いて? うん。伝書鳥メールバードを自分自身に送信して? うん。送信時の無敵時間で盾にして突っ切る。なるほど。

「ていつ!」

いやていつではくない? やってることはただの動物虐待じゃん……まあいいや。

いく。近づくと、近づくと、近づくと——ああ、もう目と鼻のずどん。

「え」

赤髪が姿勢を崩した。

オトシスに狙撃されたのだ。

姿勢が崩れても、慣性は止まらない。赤髪の体はコントロールを失ってゴールへと一直線に飛び……そして、本来は避けられたはずのギロチンをもろに食らって、ポリゴンに分解され消えていった。

周囲を見渡す。やられる前にやらなければという気持ちがあった。オトシスをみんなで処刑しようとして、そう言うつもりだった。でも。

「あ……残念だったな」

「惜しかったねー」

「最後の最後でバランスを崩しちゃったな」

……気づいてない？

いや、そんなはずは……あんなに大きな銃声だったのに。でも実際のところ、列に並びプレイヤーたちは一人としてオトシスを責めない。それどころか彼のことを見すらしらない。

「あ、あんたは……一体……！」

私はクソ野郎の顔を睨み、呟いた。

「……ククククク……！」

オトシスは笑った。めちやくちや悪そうに笑った。多分裏でこの笑い方の練習をしている、そう確信できる程度に悪そうだった。ひとしきり笑うとスナイパーライフルのリロードを始め、こう言った。

「ステルスアサルト……それが、俺のスキル名さ」

私は巻物を取り出してメモった。

よくわかんないけど攻撃が相手から認識できなくなるスキルでしょ？めっちゃ便利そうじゃん。

是非とも……欲しいところだね。

私とオトシスの眼光が、ちようど同時にぎらりと光った。

アスレチックをしよう！

私の番だ。

列は肅々と進み、プレイヤーたちは死んだり死ななかつたりした。どちらにせよ確実なのは、オトシスがいなければもつとたくさん死ななかつただろうということだ。響き渡ってたからね、銃声が。

そして……銃声が響き渡ったという事は、私が彼の「ステルスアサルト」を見て盗むフェーズが、十分に進んだという事でもある。

欲しいスキルを習得する手っ取り早い方法は、やはり他のプレイヤーがそのスキルを使っている様子を目に刻み込み、そのうえでスキル内容に合致した行動を取ることで。その成果が新規習得スキルに出るか、あるいは既存スキルの進化として現れるかはわからないけど……どちらにせよ、やらないのと比べれば習得率は格段に跳ね上がる。『スキル内容に合致した行動』というと、この場合は不意打ちでことになるのかな？ 覚えておこう。

「チッ……」

オトシスは苛立っている。ボルクネスを妨害しきることができなかつたからだ。彼

のジョブは印字士プレスマン／神秘アルカナム「陰者」ハイミット。戦闘職は持っていないけど、「陰者」ハイミットによって習得した数々の意味わからんスキル、そして魔法が彼にはある。今回も、謎の紙切れを取り出してなんか書き込んだ後10秒くらい回転し、その後バク転したらゴール付近に転移していた。意味が分からなすぎる……。

「……まあ、イイか」

しかし気を取り直したようで、彼はこちらを見てニヤリと笑った。目え付けられるう……。私は通報を検討したが、ただPKをしているだけでは通報できない。そもそも厳密にはキルではなく、あくまでアスレチック器具による事故死を装っているから猶更タチが悪い。とりあえず、後で「象牙」にチクっておこう。

先に第二階層へと進んでいったボルクネスを見送ると、いよいよ私が出発する瞬間がやってくる。

「……よし」

アスレチックの全景を見る。改めて、結構長い設備だ。確かだいたい50メートル。動く床が、回転するローラーが、進むレーザーが……若干の動きを伴っても、視界全体は大きく変わらず、ちょうどブルーするgif画像のようだ。

手始めに、私は錬成アルケミック品射出迫撃砲モーターを取り出した。

列をなすプレイヤーたちがざわつく。迫撃砲の図体はデカいし、アスレチックには

少々場違いな外見をしている。でも関係ない。私は迫撃砲のウィンドウを開いて、インベントリからある錬成物を移し、さらにタイマーをセットする。

砲口が、仄かな紫光を帯び始める。チャージが始まったのだ。同時に上げられる甲高い音に向かい合うようにして、私はスタート地点に立って、グローブに包まれた両手にTECを込める——印を組んでいるのだ。

三。

迫撃砲の充填音はどこか緊張を覚えさせるものを持っていて、最初はざわついていたプレイヤーたちもいつの間にか黙っている。私も同じだ。そうして生まれた静寂を、徐々に高くなっていく充填音が端から切り裂く。

二。

白尽くめから一義テックの黒衣スドに裏返す。ついさっきまで錬成していたいろいろも、既にインベントリの最上部に設置済みだ。抜かりはない。

一。

目を見開く。ここで……宙返りだ。

「【水滑り】っ!」

どん。背後で発せられた発火炎が、正反対を向いていてもわかった。迫撃砲から発射されたある錬成物……あるいは、錬成水が、宙返りをした私の脚部にちょうどぶつかると。

すり抜けはしない、【水滑り】を発動中だからだ。

「は？」

顔を見なくても、眩きを聞くだけでオトシスが啞然としているのは分かった。体勢を整え動く足場突破。今がチャンスだ。そう考える間にも、足元を濡らして持ち上げる水の塊はぐんぐん進み、【水滑り】の効果に基づき、私のアバターもぐんぐん進む。

次、トゲトンネル。ギリギリすり抜ける。場合により【瞬間転移^{アポト}】で補正しようと思つてたけど、どうやらその必要はなさそうだ。視界の端から端までを埋め尽くす、殺意を隠もしないトゲたちの間をすり抜ける。

次、レーザー。ここは単に突っ切るだけじゃ無理がある。工夫がいる……だから私は錬成物を取り出した。

「お」

賢者の石だ。

賢者の石はなかなか自由度の高いアイテムだ。一定間隔でこれを生産しろとか、これとこれを交互に生産しろとか、これが付近に存在する場合これとこれをこれしたうえでこれをとか、そういう詳細な命令が通るようになっていて、その詳細さの代償に時間が要求される。しかし……今回は、違う。

私がレーザーめがけて投げ込んだのは、何も生産しない賢者の石だ。

賢者の石は、空気中からの吸収あるいは直接的接触によつて取得した魔力をアイテムに変換して出力する存在だ。であれば、何も生産しない賢者の石とは……つまり、取得した魔力をそのまま吐き出す存在という事になる。それでは意味がない、というわけではない。なぜつて、賢者の石は――。

「……よしっ」

私の真横を、死貫の熱線が通り過ぎる。

賢者の石は――魔力を変換せずとも、魔力の向きを変えることはする。何も生産しない賢者の石とは、言うなればプリズムのようなものだ。

「がっ」

背後からオトシスの断末魔を確認、どうやら流れレーザーに当たつて死んだらしい。これは彼が今まで殺してきたプレイヤーと同じような事故死扱いになるから、当然キルペナが付くこともない。……不意打ちの成功。「ステルスアサルト」が楽しみだ。

レーザーを潜り抜け、すれ違いざまに賢者の石を回収。次、シャッター。素通りしてもいいけど、安全を取つて「瞬間転移」でスキップ。

さあ最後、振り子。刃たちはどのプレイヤーにも平等に、目と鼻の先での往復運動という形で殺意を向けてくれる。しかしそれに付き合う気はない。

「空蟬！」

私が有していたベクトルに基づき、身代わりとなった後も前進を続けた丸太が、切り刻まれて木つ端みじんになる。しかし関係ない、私は……上に転移したから。

振り子は上に行くにつれ動きを小さくする。つまり、固定点付近では……普通に横に抜かれる、ということだ。

【颯衣】

あとは飛ぶだけだ。ばしゅん、という効果音と共に、取り出した手拭いが照明の下に広がる。落とした影を徐々に太らせながら、横軸のベクトルを維持してゆつたりと降りていく。

狙撃が入る心配もない。やられる前にやったからだ。ギロチンに首を落とされる心配もない。どちらかというと浮いている。このままゴールに到達し、その調子で銃が売っている第六階層まで一気に行って、そこでレベルキヤップを開放して帰ろう。帰れるに決まってる、第一階層がこんなにヌルいんだから！私は調子に乗った。

たん、と最終地点に足を付き、忍術を解除して手拭いを畳む。いやー完璧に終わったね！粘着カスプレイヤーもぶつ殺せたし！

……おや？列に並んでいるプレイヤーが何やら掲げている。カンペか？50メートルくらいなら頑張れば視力補正で読める。えーつと、何々……。

『この迫撃砲どうするんですか』

……。
二度手間になった。

階層を進もう！

第二階層。

あそこでレーザーが都合よくオトシスに当たったのは幸運だった。正直オトシスじゃなくても不意打ちで殺せれば誰でもよかつたんだけど、それにしてもクソ粘着妨害マンが相手のほうが何となく正当性がある雰囲気が出る。第二階層まで追つてこないとも限らないしね。実際、筆記テストであるこの層で第一階層みたいな妨害ができるとは思えないんだけど……まあ、このゲームには「手を切り落とすとウィンドウが操作できなくなる」をはじめとした数々の謎仕様がある。何が起こるか分かつたもんじやない。

「第二階層へようこそ、新たななる探究者たちよ」

ぱちぱちぱちぱち。

無機質なデザインに相反し、どこか熱気を感じる会場に、豪雨のような拍手が鳴り響く。

私も、隣のボルクネス、そして周囲のプレイヤーたちの例に漏れず、パイプ椅子の背もたれに寄りかかりながら拍手を送る。

壇上でマイクを手に行っている眼鏡のプレイヤーが、手のひらを上げて言う。

「ありがとう、もう十分だ」

拍手が止んだ。

書物に取り囲まれた会場が、落ち着いた雰囲気を取り戻す。

……いや、何？

眼鏡は何やら手元の棒状の物を振っている。なんだ？油性ペンかあ。ゴロゴロと運ばれてきたホワイトボードの表面にそれを踊らせ、みるみる文字が描かれていく。

……ゴロゴロって何？車輪なの？そのホワイトボード、車輪がついてる感じの奴なの？

私の疑問に答える者は無く、ただ油性ペンが白を黒に塗り替える、キュツキュツという音だけが会場に木霊する。騒めきすらそこにはなく、誰もが真剣に壇上を見守っている。

……このパイプ椅子世界観壊しすぎでしょ。家具職人？それとも神代技術使ってるのかな？

増殖していく疑問は行き場を失い、眼鏡がただ文字を書き終える。

『【ネタバレ注意】ベヒーモス第二階層問題解答対応スレッド【ライブラリ】』

……………。

眼鏡が次の言葉を発するより先に、私は無言でゲーム内掲示板を開き、他のほとんどの聴衆と同じように、言われたスレを検索した。

あつた。開いてみよう。

＝
＝

【ネタバレ注意】ベヒーモス第二階層問題解答対応スレッド【ライブラリ】

301 クローバー（主）

〈Q300〉【惑星ユートピアの大気を十分な大きさの空間に密閉したうえで、内部に入った人間がデバイスを通じて「重力の増幅」を空間中のマナ粒子に命じ続けた場合、最終的に何が起こるか。】

〈A300〉【空間の底部でマナ粒子が液体化する。】

〈C300〉【空間内におけるマナ粒子の濃度が現象改変の出力に影響を及ぼすというのは、ジョルティー・ビーゼンテール著『ヘッドラック・デバイス悪運機装III』などの記述から読み取り可能であり、また二号人類の経験的知識からも明白であろう。さて、マナ粒子は「重力の増幅」を可能とするが、マナ粒子そのものが「重力」の影響を受ける。つまりマナ粒子は徐々に「潰れる」形となり、そして潰れれば潰れるほど濃度が上がって、更に潰す力が強まるようになる。この二つが相互作用を続けた結果、最終的にマナ粒子は圧縮の上限、すなわち始源の血液と同じ『液体状態』を取るようになるはずだ。】

302 システムメッセージ

このスレッドはスレッド主により閉鎖されました。

|| || ||

.....

「ネタバレには十分注意してほしい。基本的に我々は、問題を自力で解くことを——」
私はページ内検索ボタンに手を伸ばした。

◆

ライブラリに入れてください新大陸行きたいです、という何度目かもわからない懇願をし、何度目かもわからない拒絶を受けて第三階層。いや、「クグリーンさんだね、君ライブラリのブラックリスト入ってるから」は酷すぎるでしょ……。ジューゲツキだな、大体ジューゲツキが悪い。私は責任転嫁した。

さて……事前にwikiでも読んでけど、第三階層は闊歩してる環境生物を一体倒せばいいんだよね。どれどれ……。

目の前に広がる開放的な草原を切り開くように、緑と灰色の境界線に視線を巡らせる。なになに、ヤバそうなトラ、ヤバそうなゴリラ、ヤバそうなワニ、ヤバそうなタカ、ヤバそうなクマ、ヤバそうな花、ヤバそうなカマドウマ、ヤバヤバヤバヤバヤバヤバヤバ……。

「……ボルクネス……」

やっぱり帰らない、と言おうとした。

「……あの花の効果は何になるのかな。見たところ食虫植物をベースにダチヨウか何かの足をくつつけたように見える。そもそもユア・エクスペリエンスで排出されるのか？ いやでも色竜とかも出るっぽいしある程度無理が……」

ダメだ、既に目の前のモンスターでどんなコンボを決めるかしか考えていない。

……仕方ない、やるか。

……。

とりあえず流れるに緑を踏みしめて歩くが、具体的にどうするか特に決まらない。私にはつきり言って雑魚だ。雑魚じゃなかったらとつくに新大陸に行けている。錬金術と忍術で搦め手するのは得意だけど、搦め手でヤバそうな色々を倒せるかといわれると倒せない。最大火力がただの爆薬という時点でお察し、戦災孤児を倒せたのもまぐれみたいなものだ。

「……ボルクネス、どうする？」

せめて作戦会議くらいはしておこう。私は念のために紙切れの束を取り出しながら、横を向いて言った。

しかし彼はいなかった。代わりに、視界の端に触手が見えた。

「ボルクネスーっ！」

頭上から聞こえた何かが握りつぶされる音と共に、彼が取り落とした短剣が草原に落下して、その鏡面のような刀身に、頭上の凄惨な……触手生物に一人のプレイヤーが握りつぶされる、そんな光景を映し出した。

とりあえず短剣を拾っておく。これいくらで売れるかな？

しかし明らかに皮算用をしている場合ではなかった。

次の触手が来る。【空蟬】で咄嗟に回避、そのまま脱兎のごとく逃げ出す。

いや……無理でしょ！

「無理でしょ！」

私は思ったままのことを口にした。

とにかく、これはヤバイ。ボルクネスはそのうちリスポーンしてくるだろうけど、割とそれ以前の問題感がある。火力は足りず、防御力も足りない。どこかでズルをしなきゃ、この第三階層を突破することはできない……！

でもどうしよう？

STMを消費しながら駆け抜ける草原はものすごく生命力に満ちていて、それが何だか逆に不気味だった。石ころ一つ、枯草一つそこにはなく、ただ瑞々しく育った……まるでコピペしたみたいに画一的な草たちが、見渡す限りを埋め尽くして、まるで同じよ

うにそよ風に傾いていた。

……そうだ、モンスターとモンスターで相打ちさせればよくない？

よし、ターゲットを決めよう。ん〜……この中だと花が分かりやすそうだね。典型的な自衛型、多分現実世界の食虫植物みたいに、花びらに生物を誘い込んで溶かすとかそういう感じだろう。もちろん能動的に攻撃もするだろうけど……しかし、あの形状で花びらに生物を誘い込んで溶かすとかそういう感じじゃなければウソだ。あそこに適当な奴をダンクシュートすれば勝てる。

いや……無理でしょ！

「無理でしょ！」

私は思ったままのことを口にした。

ダンクシュートって言っても……無理では？ ゴール、高すぎるし。ボール、デカすぎるし。私のSTR、ゴミだし。無理がある無理がある……一生涯クリアできないよ。

……いや待てよ？

推進力……低いSTR……そうだ、戦砕誇示ウオールフエンは……攻撃力が低いほど推進力が出るスキルだ。

「これだあつー！」

反転、再び走り出す。これだ、これしかない。ちょうど花の近くにいてしかも図体も

小さめのトラのほうへ駆けていく。緑の海が加速し、私に気づいたトラがこちらを向く。なんか全身に怪しげな穴があつて結構キモいぞ……でも所詮はトラ、結局引つ掻くとか嘯むくらいしか攻撃手段は持つてない！

私と花の間にトラが挟まるようにして突っ込む。戦^{ウオールフエン}砕誇示の起動準備を済ませておく。トラは私が近づいたら何かの近接攻撃をするだろう……でも、一撃なら防げる手段はいくらでもある！近づくと同時に「瞬間転移^{アホト}」、それで終わりだアーーーッ！

しかしトラは気怠そうに口を開いてビームを発射した。

は？

絶熱の光線が私の動体を貫き、無数の紅をまき散らし、私はそれと呼応するように死んだ。

遠距離攻撃できるんだあ……。

階層を進もう！2

第四階層。

花……正式にはチューリング10-4って名前らしいけど、とにかくあいつは何とかして倒した。ヒントは漁夫の利、そして自爆特攻。爆弾を持った状態で乗り込むことはできないが、乗り込んだ後に爆弾を取り出すことはできる。創り出すことも。溶解液に魔法阻害効果があったせいで「空蟬」で脱出できず諸共に爆死したのは悲しい事件だったけど、まあ誤差だ。むしろ触手につぶされて死んだボルクネスと釣り合いが取れたという見方もあるだろう。

不気味なほど静かに開いたドアの先、インベントリを埋める素材たちを数える私の中には、またしても人工的な森が広がっている。

上部三分の一くらいを読み込んだまま止まったライブラリのwikiの上で行ったり来たりを繰り返すプログレスバーに耐えた私は、ここに存在するモンスターをだいたいい把握している。ベヒーモス、ペーパーテストもだけどネタバレされると一気に簡単になる系が多いんだよなあ……。まあ、私には好都合だけど。

がさり。

少し離れた先にある腐葉土が僅かに、風とは別の何かによって動いたのを確認。確か
 にいる。爆泳魚^{スワイマイン}……あの私が晒しスレに乗る原因の一つとなったにつつき泥掘り^{マッドテイグ}の改
 造体で、取り敢えずみたいな感じで爆発する。誘爆もする。あからさまに危険な行動を
 取ると、ベヒーモス特有の謎アルゴリズムでターゲットイングしてくる……なるほどね、
 なるほどなるほど。

「おりゃ〜っ!」

というわけで、私は爆薬入りの瓶を全方位にブン投げた。

一泊置いて、地面に落下した瓶たちが爆炎を生み……そしてその爆炎に当てられた爆
 泳魚たちによって、更なる規模の爆炎が生まれる。後は繰り返しだ。視界は爆発の赤一
 色に埋め尽くされ、火が燃え移った森の木々も例外とはならず、もうもうと煙を上げな
 がら酸素を消費し始める。ベヒーモスの薄灰色の天井に、黒煙がその手を伸ばす。それ
 は、垂らされた糸に手を伸ばす、地獄の亡者のようにも見えた。

森がどんどん燃えていき、緑を紅が食い散らかしていく。ターゲットであるドミネイ
 ト・グリズリーが潜む竹林の位置は定期的にリセットされるらしいが、燃えてしまえば
 関係ない。焼け死んでくれれば最高だし、焼け死ななくても視界が開ければ狙撃がで
 きるようになる。

「いけーっ!」

炎に向かって声援をかけ、ちょうど同時に爆発が起きた。爆泳魚たちは大混乱状態、シンブルに周囲が爆発にまみれているのに加え、私に「あからさまに危険な行動」判定が下ったことによりこちらをターゲットイングし、しかしターゲットイングしたせいで挙動が変わってさらに誘爆している。

「はははははーもつと燃えろーはははははー」

ハイになった私の高笑い、炎に埋め尽くされた森に響き渡った……。

◆ 第五階層。

あのあとキレたドミネイト・グリズリーが竹をブースターみたいにして追いかけてきたけど、どうにか倒してここまで来た。

この層のクリア条件は一体のモンスター……黒死トウル・クワイエットの天霊の討伐。正直言って消化試合だ。回復ポーションを投げ続けるというネタは完全に割れているし、私は賢者の石を持つているからそれが無限にできる……結果、殆ど祈るだけの作業になる。

入るなり現れた死が、纏った漆黒を振りまきながら、大鎌を携えゆらりと動く。そこに無言で回復ポーションを投げ続けるボルクネスの横で、私も片手で回復ポーションを投げながら、膝について祈り始めた。

……黒死の怨涙は……やめて……！

絶死のエフェクトと蘇生のエフェクトがせめぎ合い、黒死の天霊が襲い掛かる行動阻害の波に打ちひしがれる。そう長くはかからなさそうだ……だったら、もつと気合いを入れて祈らないと!

……黒死の怨涙は……やめて……!

私の祈りを吸い込むように、分厚く無機質な天井が、じつとこちらを見下ろしていた……。



しかし黒死の怨涙だった、クソゲー。

いやあ……マジ? みたいだな。ビビっちゃったよね正直。黒天……何だっけ? とにかく例の鎌はさ、いいじゃん。かつこいいし。デバフで攻撃つてなると誰かのチケツトを奪うのにも使えそうだしね。黒きなんとかもいいじゃん。正直今の私のビルドにはそこまでハマってないけど、むしろビルド側を変える方向で動ける程度には協力じゃん。で、それを踏まえたうえで……黒死の怨涙なわけ?

一応テキストを読んでみる。えーつと……アクセサリーの製作に使える、どうせいつもの(※ただし優秀な細工師は別売りです)のパターンでしょ? ふざけんなっていう。素材に使える、仮にも鎌や喪服と並ぶドロップアイテムを錬金術に使うってどうよ? 服用すると即死できる(何度でも服用可能)、死に戻りくらいにしか使えなさそうだよね。

「はあ……」

「あ、あのクグリン」

私が呟くと、ボルクネスが何やら話しかけてきた。さつきからちらちらと私を見ている。何か言いたいのかな？

「ん？どうしたの」

しかし彼はかぶりを振ると、

「……なん、でもない。ところで、もう……第六、階層だな」

怖気づいたか？まあいいや。適当に返答する。

「そう、だね」

……そう、第六階層。神代製装備が大量に売られている場所だ。ボルクネスが私についてきた理由はよくわからないけど、たぶんこれらのうち何かしらを買うことが目的なのではないかと思う。私もここで適当なアイテムを買って、そのうえでレベルキヤップを開放し、後は寝るなりすればいいだろう。いや、先にレベルキヤップを開放したほうが良いかな？……そうするか。

「ボルクネス、私は先にキヤップ外してくる」

「わか、った」

実際のところ第一階層でも同じことはできるんだけど、どうせベヒーモスに来たんだ

し、一気に進めてからやることにしたのは正解だったと思う。

近未来バリバリの開き方を見せる自動ドアを潜り抜け、私はいかにもSFって感じの設備に到達する。

天井の隅に言う。

「レベルキャップを外したいんだけど」

◆ どこかで絶対に聞いているはずの「象牙」に向けて、私は呼びかけを反響させた。

◆ 気分がいい。

レベルキャップ解放がうまいこと行ったからだ。現在の私のレベルは102、レベルにExtendが付いたのはつい最近だが、ベヒーモスの攻略過程でまあまあ経験値が溜まっていたみたいだ。

スキップしながら近未来ドアから出ると、ちょうどボルクネスと鉢合わせになった。買い物は既に済ませたみたいだ。

紙切れの束デッを取り出し、言う。

「ジェネレーション、何買ったの?」

「ああ、無線機を買った」

無線機?

意外だ。ボルクネスに無線を使うイメージがない。だって無線機はコミュニケーションのための装置だけど、彼はカードゲーム中以外はコミュニケーションできないわけで、しかもカードゲーム中に無線を使って外部と相談くなんてやれば普通は反則になる。基本的に、ボルクネスと縁がないアイテムじゃないかと思う。

「なんで買ったの？」

「これなら伝書鳥メールバードよりコンパクトにオンライン対戦ができるからな」

まだ諦めてなかったのか……。

ボルクネスの澄んだ瞳には……普段はあまり見ることでできない、確かな熱意が燃えていた。

彼は話を続ける。

「掲示板が使えれば画像も貼れて一番いいんだけど、流石にフィロジオルーム内での使用はレギュレーションで禁止されているんだよ」

逆に無線はアリなの？

フィロジオを取り囲むルールは結構ザルだった。

ボルクネスはそのあとも、少しばかり早口気味でオンライン対戦のあれこれについて説明した。メガホンについて、メール転送サービスについて、観戦システムについて……。ここまでの労力がなんとなくソリティアを使いたくなったプレイヤー一人に

よって打ち砕かれるの、酷い話だなあ。

……そうだ、今のボルクネスなら答えてくれるかもしれない。先ほどの疑問を口に出す。

「ボルクネス、さっき私に言おうとしてたのって何?」

まあ、どうせ大したことではないはずだ。ボルクネスは他者と関わるのが苦手だが、ある程度以上に重要なことを「何でもない」で片付けることはしない。どうせ首筋に虫が止まっているとか、そういう他愛の無いことだろう。そうは思いつつやっぱり気になるので、一応聞くだけ聞いておく。

「ん? ああ」

ボルクネスはいかにも他愛無さそうに返事をして、他愛無さそうに少し考えた後、極めて他愛無さそうに答えた。

「君がレッドネームになつてることとを指摘しようとしただけさ」

私は黒死の怨涙を取り出して死に戻りした。

テイーアスたんを着せ替えよう！

殺すぞーっ！

私は決意した。

リスポーン、周囲を見渡す……ファスティアの宿のベッドの上ね、了解。急いでドアを開けて部屋から飛び出る。チエックアウトだく！

「ひ、ひっ……！」

おや？ チェックイン時点ではカウンターから和やかな態度で接してくれたはずのNPCが、私の顔を見ておびえている。……いやそうか、『レッドネームお断り』の宿というものもある。普通ならレッドネームのプレイヤーが来たのを排除するだけで済むけど、今回はレッドネームじゃないから排除せずに泊めさせたプレイヤーがいつの間にかレッドネームになってチェックアウトしてきた状態、あからさまなイレギュラーだ。

……そうか。

恐怖の色をしたNPCの瞳をじつと見る。それはつい数時間前までは、元気に満ちて私を出迎えてくれた瞳だった。目を凝らすうち、瞳が映し出す私自身すら見える。その顔は、まあなんていうか……悪そうだった。

これが、レッドネームか。

「……………ごめんね、これお代」

ちやりんと貨幣をトレイに置いて、逃げるようにして宿を出た。ちやりんと小さなドアベルが鳴って、私を追うようにして響いた。

ドアの先には雑踏がある。ファスティアは初心者^の街だが、PKの人数はむしろ多い。初手でPKをする人種というものがあるからだ。それもあって、群衆の波の中にはいくつかレッドネームも見られる。私の罪過^{カタルマ}はそこに埋もれて、きつと他のプレイヤーからは初手浮かれPKマンと区別がつかないことだろう。

……正直、レッドネームを食らうのは完全な想定外だった。

この判定の原因はオトシス……じゃない、第四階層での絨毯爆撃だろう。なんかその場のノリで森に火を放ったけど、よくよく考えてみると私たちの他にも攻略プレイヤーはいるわけで、そこに爆発を起こせば死ぬ奴も出てくる。余りにも当然で逆に見落としていた。

まあ、何というか……悔やんでもしょうがない。一度赤くなつたものを戻すのは難しい、返り血のついた服を洗濯するのが難しいのと同じことだ。だったら……むしろ、開き直るのが正解なんじゃない？

私はしめしめと笑う。

……名前が赤い、それは裏返せばこれ以上赤くなりようがないということだ。つまり、賞金首にならない範囲であれば、何人殺そうとこれ以上自体が悪化する心配がない。だったら……カルマ値を必死こいて下げるより、むしろ日頃殺さない分を殺しておく方が……お得なんじゃない?!

言うなればそう……早押しクイズで持ち点が0だからヤケクソになって回答ボタンを連打する感覚に近い。

「……ふふふふ……!」

笑みに企みを乗せながら、私は足を踏み出した。



というわけで、ゴスロリを着ている。

なんで?

「お、サイズ的には……ちよつと小さい?」

「まあもともとは幼女向けだからな、許容範囲だろ」

「それもそうか」

私の身を包む黒のドレスは、一義テックケスドの黒衣とはまた別の……何というか、癖の垣間見えるような細かいデイトールを持っている。シワの一つから既にデザインの範疇、という感じだ。しかも日傘つき。日傘つて。

私の服装を見ておおくとか言ってるプレイヤーたち……ティーアスたんを着せ替え隊の面々のうち一人が話しかけてくる。当然のようにレッドネームだ。

「いや、助かったぜ、ゴスロリが完成したまでは良いけどなんか使った素材の関係で女アバターじゃないと着られないって言われてさあ」

「女性向けじゃなくて女性専用なんだってよ」

「正直クソ仕様じゃね?」

プレイヤーたちが駄弁り始める。あ、アウエーだ……。私は何をすればいいか見失いつつあった。そもそも着せ替え隊の面々に囲まれてゴスロリファッションに包まれて日傘に覆われている時点で全部おかしい。殺すことを決めたはいいけど、具体的に誰を殺すか決めていなかったのが良くなかった。着せ替え隊はこう見えてもフアステイアフアステイアにおける最大派閥……何も考えずやっていけば、フラフラくつと吸い寄せられることになる。

何やら黒板を携え、プレイヤーがやってくる。当然のようにレッドネームだ。右手にはチョーク、目元には眼鏡、身体を包むのはスーツ……克蘭をライブラリと間違えているんじゃない?

「よし、それじゃあ……簡単な解説を始めよう。俺は『ルティアさんに教わり隊』のモンだ、今回あんと戦うことになる」

杞憂だった。

教師かと思ったら教師コスだった男が、黒板にチョークで書き殴る。字が汚い。

『賞金狩人―「判読不能」紹介』

なるほど、まずは面子を教えるつもりらしい。

チョークが黒板とぶつかり合う音が聞こえる。まずはティーアスを描いているようだ……え、上手くない？かなり凛々しい感じが出てる。字に対するギャップがすごすぎるでしょ……。速度もすごい、高いクオリティの似顔絵がパツと完成した。

「まず、これがティーアスなんだ」

『ティー「判読不能」スたん』と文字が添えられる。依然として汚い。

「賞金狩人の中でも最速と言われている幼女、着せ替え隊の公式観測では、最後の衣装はビキニアーマーってことになってるが……最近、どうも事情が変わったっぽくてな。着せ替え隊とは別に裏から衣装を変えてるプレイヤーがいる」

ふーん。新大陸でなんかやってるのかな。

……ティーアスには未練がある。ペンペンが奪われた新大陸行きの手ケット……あれの行き先を突き止められれば、私はいよいよ加減海を渡れるはずだ。

「名前の由来は『TAS』って説が有力だ。出現率は低い……まあ、せいぜい祈ることだな」

是非ともそうしたいところだ。

「次に、これがルティアさんだ」

再びの似顔絵、やはり上手い。破綻がなく、それでいてどこか躍動感を感じられる。チヨークで描かれたマフラーが隠す口元の向こう側には、笑みがあるのか怒りがあるのか。……それを明確に描写していない。

「ティーアスたんほどではないがやはり速い、なんか隠し武器っぽいものを使ってくる。背が高いのもあつて最初は男じゃないかとも言われていたが、調査の結果女だと判明した。名前の由来は『RTA』って説が有力だ」

なるほどね……見分けるのは簡単そうだな。

「次に、これがトウールだ」

チヨークが走り始めたかと思つたらもう下ろされている……ついに似顔絵まで雑になった。というか似顔絵ではない。棒人間の領域に到達している……この両手に持つてるのは盾？こんな明確に情熱の違いが感じられることであるかなあ。

「なんか盾二枚持つてる、名前の由来は『Too』らしい、でこれがグリッチで弓矢使いで名前の由来は『Glitch』」

途中でめんどくさくなるなつて！

乱雑に『グ略』と書き終えると、男は黒板から手を放してこちらを見た。刹那、眼鏡

が光を反射する。

「あとはエースとかいうのもいるらしいが……俺は顔を見たことがないからな、男らしいけど……似顔絵が描けない。名前の由来は『ACE』だろう」

終盤に詰め込みすぎじゃない……？

「……えつと、以上？」

「以上だ」

じゃあ仕方ないや。

そういうわけで、戦うことになった。



「さあ……戦^やろうじゃないか」

教師コスが好戦的な笑みを浮かべ、片手の鞭を地面に叩きつける。え、教師コスで鞭……？やだなあ。私はやだった。

とりあえず日傘を構えておく。フレーバーテキストを読んだ場合、どうもこの日傘は相手に向けると盾代わりになるらしい。正直期待はしてないけど……とりあえず、相手の行動を誘導するには使えるはずだ。

「うおおおおー」

ビンゴ、こつちに走ってきてる。

新スキルその1、「ペントラポール潜行者の穿貫」。以前の私はバフスキルを多く持っていたが、今回はアクティブスキルもまあまあある。この場合、装備アイテムを回転させて地面を掘るスキルだ。多分ペンペンのドリルを使った影響だろう。

「よっ」

というわけで、もう片方のダガーを取り出してガガと地面に穴を空ける。錬雷合金は強く光るけど、日傘は光を遮断するための器具だ。相手に気づかれることはない。

……よし、こんなもんかな。

新スキルその2、「アストラルフエイズ星幽界妨害」。相手が次に放つ一撃について、最も効果的な防御が可能な「面」を示す。単純に防御時に使っても有効だけど……この場合、日傘を貫通して相手がどこから来るのかを知れるのが重要だ。

……なるほど。

「そこか」

足音を聞く。もう少した、もう少して相手が到達する——方向は既に割れている。あとは、実行するのみ。

「今だ」

新スキル……ではない、既存魔法、「空蟬」。ただし一つ違う点がある、私の習熟度が一定に達したことにより、印を結ぶ必要がなくなったのだ。

「つと」

相手の背後に移動して、

「えっ」

地面に落ちた丸太につまづき、さらに掘っておいた穴に片足をハメた相手に、

「えい」

毒を浴びせかけたら死んだ。GG。

観戦していた着せ替え隊の面々が湧く。それは多分勝負の決着そのものについてではなく……誰が来るかに期待するものだ。

んー……ここだっ！

ウオールフェン・戦災誇示を自分自身に発動。全力で無力にしたパンチを浴びせる。アバターに絶大

な推進力がかかり、身体が宙を浮く。これにより、とりあえず殺人の現場から少し遠くに移動することができるはずだ。

風切り音に囲まれながら、今のうちに新スキルその3、「ステルスアサルト」。これでやってくる賞金狩人は、一撃目まで私にヘイトを向けられない。

推進力が無くなり、地面に激突するギリギリのところまで【鎖縛帷子^{さばくかたびら}】を自分自身に使う。この忍術は相手の移動を阻害する……つまり、自分自身の慣性力を打ち消すこともできる。

さあ……準備は整った。

空間に静寂が走る。さつきまで私がいた場所にやってくる賞金狩人への期待と、さらにその賞金狩人が私を認知して攻撃できるかの疑問。その二つが主な原動力だ。

……。

！来た！

「うおおおおおー！」

女性だった。トゥールでもグリツチでもエースでもない。じゃあティーアスかと思っただ。でも髪の色は銀色だった。じゃあアルティア、それも違う。マフラーをしていなかった。

いや、誰？

「……え？」

スクシヨ音の嵐が吹き荒れる一方で、着せ替え隊の面々もファインダー・インターフェースを覗きながら困惑している。

いや、誰？

「……リングだ」

今の誰？今の誰が言った？

分からない、何もわからない。多分NPCの名前を知れるスキルを持つてるジョブの

奴が言ったんだろう。騒めきとスクシヨ音が生み出す混沌に囲まれながら、リング氏（推定）は何やら……というかリングの由来って何だろう。リング、RING……RN
乱数調整
 G。RINGingってこと？それはあの、なんていうか……。
ハンターズ・アナライズ
 「狩人の観察眼」

今なんて言

私は真つ二つにされて

って？

死んだ。

懸賞金を見繕おう!

指名手配された。

は？

は？という他に無いんだけど、実際指名手配されたものは仕方ない。多分ベヒーモスで殺した人数が思ったより多くて、しかもその状態で街中でもPKしたせいでカルマ値が行くところまで行ったんだろう。

正直……まずい。指名手配された状態で新大陸に行けるわけがないからだ。例えばこの状態で第八次抽選会に参加したとして、行けるのは船の上ではなく牢屋の中ということになるだろう。

この状況を打開するためには……やっぱり、懸賞金に足りるだけの額の金を用意し、その状態で知り合いに殺してもらおうのがいいだろう。でも……。

キャラクターウインドウを開く。ここから懸賞金を見られるのだ。

『あなたの懸賞金：10,000,000マーニ』

「高すぎイ！」

天へと叫ぶ。一千万はちょっとやりすぎじゃない!?一千万って!私の全財産三十万

だぞっていう！オイ！ふざけんよ！

しかし、仮想の天が何かを言うことはない。さつき天運管に懇願メールも送ったけど、1秒足らずでテンプレ自動返信が戻ってきた。「引き続き、『シヤングリラ・フロンティア』をよろしくお願いいたします」ではないって。クソ……まあまあ高い割合で自分のせいなのが腹立つなあ。

「……仕方ない」

私は空から目を離し、代わりに地べたへ視線を下げた。私がいつも這いつくばっている場所だ……きつと、今回もそうなる。

……仕方がない、仕方がないのだ。払うべき一千万はどうしたって目の前にある。私はほとんど何も持っていないくて、このままじゃ全財産を売り払っても足りない有様だ。

でも。

フレンドリストを開く。『ログイン中』を示す緑のマークたちが、間隔を開けて光を浮かべている。

私は、確かにほとんど何も持っていないし、持っているものもいつ崩れ去るか分かったものじゃない。ただし、人脈に関してはその限りではない。

「……やってやる」

呟く。あとは行動するだけだった。

◆ 「倉庫を一つちようだい。それを置く土地も」

「えく? 結構強情だねクグリンちゃん、なかなか値が張るんだよ?」

「いいから。この前の棺桶……使い捨てにできる程度には安く作れるんでしょ?」

「棺桶じゃないよつ」

「じゃあ棺桶つぽい家! あれにちよつと土地を付けるだけ! 今までさんざん私を実験台にしたでしょ! 白衣一枚で足りるとでも!」

「……うくん」

「竜災大戦について……詳しく調べただけど」

「……」

「なんでも、ライブラリは建築周りで随分隠し事をしてるみたいだね……? w i k i まで運営してるくせに。それって——」

「……仕方ないなく! 倉庫一つで良いんだよね? それくらいならあげるよ」

「ありがとう、ジユゲツキ」

「どういたしまして」

◆ 「廃棄物を処理するみたいな仕事はない?」

『その前に聞きたいんだけど、なんかあなたに似た特徴のプレイヤーが指名手配されてるって……』

「それね、皆に言われるけど他人の空似でさ」

『……わかった』

「それで……あなた、プレイヤーなのに密航者の取り締まりをしてたでしょ？ つてことは、NPCとのつながりも大きいはず……何か知らない？」

『ん〜……そうだ、旧大陸の「青」に汚染された土壌を処理する仕事があつたはず』
「それだ！」

『触るだけで死ぬとか評判で、誰もやりたがらないらしくてさ……取りつごうか？』
「お願い、パストラット」



「ドリルについて知りたいんだけど」

「別にいい……けど、最近ドリルより刺股サスマタがアツいぞ」

「いいから」

「……わかった。どんなドリルだ？」

「精密さとか自由度の高さとかは要らないから、なるべく深く速く掘れるやつが良いな」

「そうだな……クグリン、お前STRはどんなもんだ？」

「そんなに取り回すわけじゃないから、重量制限は無視していい」

「となると……えはかなりいいドリルだけど効率性では劣るしなあ。αもδもオールラウンダーすぎ……そうだな、とくてがおすすめだ」

「その二つはどう違うの?」

「どのほうがより広く薄い感じかな」

「ん〜……まあ爆弾で補助するしてでいいかな」

「わかったぜ、いいドリルライフを送れよクグリン」

「うん、ペンペン」



「小切手を作ってほしいんだけど、ドロロー」

「小切手……? NPCの銀行に行けばいいんじゃないのか」

「懸賞金一千万だって、《マッドフロッグ》をオリジンに二体召喚」

「完全に信用育成失敗してるじゃん……」

「だからプレイヤーに頼むんだよ、印字士プレスマンでしょ? 《既定条件領域・泥濘スラッジ》設置、ターン

エンド」

「まあ……いいよ、俺のターン、ドロロー! スペル発動、《空隙分岐》! テツキトツプから3枚めくって1枚捨てて残りは戻す! えーつと……なるほどな! 《蘇生誕生》で墓地か

ら《マジヨリテイハウンド》を擲い上げて召喚、さらに召喚時効果で——」

「よろしくね、ボルクネス」

◆
いよいよ決行だ。

サードレマ、外壁付近。かつてレイドモンスター・彷徨う大疫青が進撃を見せたその跡には、いかにも有害そうな色合いをした地面が広がっている。その地面のすぐ横に建てられた、いかにも最低限という見た目の掘立小屋に私はいる。

ガガガガガ。

そして、「ペントラボール潜行者の穿貫」を発動しつつ、ドリルで地面に穴を空けている。……そろそろかな。

「起爆！」

どかん、出力を絞った爆風が控えめに土を殴り飛ばし、衝撃波と共に穴がその深度を、そして底部に溜まる闇の濃度を増す。

……こんなものかな。

いくつかの起動スキルと忍術を交え、掘り下げた穴から脱出する。覗き込んでみれば、現実ではまず考えられないような深さの穴が、大口を開けてそこには完成していた。改めて見ると壮観だけど、そう長い間感動しているわけにもいかない。踵を返す。

「……やっ」

目の前に広がるいかにも有毒そうな色合いをした地面を前に、今からやることを再確認する。……とはいえ、そう難しくはない。全部処理するだけだ。そういう契約になっている。パストラットを経由することでレッドネームであることを隠して接触したNPCは、処理した土壌の量で報酬額を増やすと言っていた。じゃあ全部やる、それだけのことだ。

「……【黒潮】」

取り出した瓶の口から黒雷が現れる。それは私の操作に従ってうねり、土壌を少しずつ移動させ始める。

本来、NPCが言う『処理』というのは、浄化魔法か何かで土壌の毒を消すことを指しているんだろう。聖職者の掲げた杖から光がとか、そういう感じだ。しかし口から言われていない以上、単に別の場所に移すだけでも『処理』になるはずだ。別の場所とは言っても公共の場所ではダメだろうから、要するに私有地ということになる。

つまり、この穴だ。

「瞬間転移」

転移魔法を発動。触れた相手と一緒に転移させる効果は、【黒潮】を間に挟んでも有効だ。

……私有地の穴に入れると言っても、色々問題は付きまとう。汚染土壌を一纏めにしたスポットにはシステマ的な維持費がそうとうかかるし、場所が変わっただけで結局発生する魔力が変わらない以上、そのうち何かの問題を引き起こしてNPCに目を付けられることになる。非常に短期的な解決でしかない。

でも、それでいい。

どさり、どさり。名目上は『倉庫』となつている壁と屋根の集合体、その内部の穴へと毒土が落ちていく。しばらくこの『どさり、どさり』は続くことになる。MP回復ポーションを片手に、私はそれをただただ進める。

ボルクネスに書いてもらった小切手……処理作業の報酬から出された一千万マーニ。その価値をそのまま有するそれを、倉庫の壁に貼り付けておく。

◆ というわけで今から死にまーす！

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

彼らは何だかんだ約束は守るので、私の落とすアイテムを掠め取ったりはせず、ちゃんと返してくれるはずだ。指名手配犯である以上キルペナもつかないはずだし、特に向こうに不利益はない。

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

……指名手配されたプレイヤーが殺されると、そのプレイヤーの私財は差し押さえられる。所有権を持つている場合、当然倉庫も差し押さえの対象だ。

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

差し押さえられた物品の価値が懸賞金に届けば、特にそれ以上の支払い義務は生じず、レッドネームは解消される。ここで重要なのが……価値計算において、負債がカウントされないということだ。

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

つまり、私がこのまま殺されれば、あの倉庫の中にある二種類の存在、『汚染土壌』と『一千万マーニ』は両方NPCの物となり——

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

『汚染土壌』は無視されて、『一千万マーニ』だけが返済に充てられる。

着せ替え隊の人がこちらに迫ってくる。

つまり、そういうことになる。

着せ替え隊の人が私をぶっ刺した。

赤のポリゴンが視界を染めて、その様はまるで散りゆく花びらのようだ。

私は、勝利を確信した。

勝利を確信しながら、死んだ。

今度こそ密航をしよう！

張り詰めた緊張感が漂っている。

周囲に存在する要素を列挙してみよう——高度なグラフィックで描画された、澄み渡った空。砂利一粒一粒に至るまで緻密に描画された、広がっていく地面。流れていく雲。並ぶ街並み。沈黙して待ちわびるプレイヤーたち。ペンペン。筋肉質の男。NP C。——そして、『第八次新大陸開拓船抽選会』ののぼり。

このゲームに三隻（基本的に新大陸に停泊しているトルヴァンテ・デイスカバリエを含めれば四隻）存在する開拓船は、基本的に三隻合わせて運行される。大陸間移動に一周間、貨物の積み下ろしなどでそれぞれ二日ずつ所要するから、18日に一度のサイクルで帰ってくることになる。定員は図体の割には少なく一隻あたり400人ほど、つまり一回のサイクルで1200人が輸送されるから、一日で平均するとだいたい67人のプレイヤーが新大陸に行けていることになる。いや67人って。プレイヤー3000万人のゲームではないでしょ。実際は出戻り組とかいるからもつと少ないしさあ……。

……さて。1200人といっても、新大陸行きの正規手段……つまり遠路はるばるファイフティシアまで到達し、さらにギルドからお墨付きも得た十分な実力を有するプレ

イヤーは、そのうち1199人とどまる。その中にたまたま紛れ込んでしまった、ギルドからお墨付きを得られなかったり、得られてもクラン未所属のせいで優先順位が低いと判断されたり、お墨付きを得られなかったうえにクランにも未所属だったりする一人のプレイヤーマ……それを決めるのが、この『新大陸開拓船抽選会』である。

開催地はファイフティシアだ。

……なんかさ、なんかおかしくない？つていう。いや抽選会を開いてくれるのは良いし、定員が少ないのも最大限努力した結果だろうから良いよ。でも開催地がファイフティシアつて何？みたいな。だってファイフティシアに到達してる時点で開拓船に乗るだけの実力はあるわけじゃん。それでも敢えて抽選に来るつていうのは……つまり、正規の手段が使えないめんどくさい奴つてことじゃん！いや私もだけどさあ！なあ！実際抽選会で赤ポリゴンを見なかったことつてないし！もうちよつとこう……魔境つぼさを減らす努力をしたほうが良いんじゃない!?

……おっと、気が散った。

どうやら、緊張から思考が加速しているみたいだ。でも……緊張なんて、本質的には必要ない。ここまで外れに外れたんだ、流石に次は私が選ばれる………確実と言つていい。だって七回外れたし。だから必要ない。深呼吸すらしなくて良い。ただ平然と、起こるべきことが起こるのを眺めるだけなのだ。

手渡された整理券を弄びながら、私は新大陸で何をするか考え始めた。

◆ というわけで、密航することになった。

「……あれ、ボルクネスは来るって話じゃなかったか？」

ペンペンが囁く。今日の彼はヌンチャク装備、腰に提げられた鎖と鎖がぶつかり合つて、月光を照らし返ししながら、じやらじやらと小さな音を上げる。隠密のスキル補正で隠されているからいいものの、基本的に密航に向けた装備とは言えない気がする。

……まあいいや。ちらつと手元を確認したあと、答える。

「ボルクネスは来ないよ……フィロジオプレイ中の無線使用は禁止だったんだって」

しかも伝書鳥メールバードを送ってもリヴァイアサン内で受信できないようになったらしい。まあ冷静に考えると二秒で海を越えられるっておかしいし、たぶん下方修正が入ったんだろう。

ボルクネスのメンタルは、せっかく手に入れた無線が不発に終わって罅入り状態だ。

ペンペンが怪訝そうに聞いてくる。

「当たり前では……？」

当たり前だわ……。

まあ、それはさておき密航だ。

基本的に前回とやることはそう変わらない。迫撃砲と錬雷合金で適当に注意を惹き、忍術を交えてササつと侵入する。

……やっぱり、これだけ手際よく侵入できる私が新大陸に行けないのはおかしい気がする。上忍はともかく錬金術師は持つてるわけだから、薬剤士ギルドのほうに頼めば推薦状を書いてもらえる……はずなんだけど。まあ、ちよつとやらかした側面はあると言わざるを得ないかもしれない。ヒントは賢者の石、市場価格、禁忌。

「……はあ」

「どうした？ 潜入中のため息つくなよ」

「なんでもない」

まあ、そんなことを言っても始まらない。今度こそ密航を成功させて、さんさんと太陽が照り付ける新大陸の大地を踏みしめ、新たなる冒険を始めなければならぬのだ。

私は改めて深呼吸をすると、再び闇夜に溶け込んでいった。

◆ 船倉には先客がいた。

静寂が広がる中、私たちと彼らは顔を見合わせる。それは十数人のプレイヤーたちで、まさに密航に向けた長期的な支度をしている最中のようなだった。船倉に広がる沈黙

は異様だ。誰もが驚き、「ええく！」なんて叫びたくもなりながら、しかしそれをしてら終わりだと理解して、必死に驚愕を抑え込んでいる。

「あ、あんた、ら……」

「十数人……えつと、とりあえず……その、敵では、敵ではないから。ね？」

手のひらを突き出して宥めるポーズ、ついでにちらりと手元を見る。

相手も私たちがパストラット（形容詞）ではないと理解したようだ、暗闇の中でも安堵が伝わってくる。

「ああなるほど……えーつと、『クグリン』さんと『ペンペン』さん？どれどれ……」

こいつ絶対掲示板見てるな、私は思った。

「えーつと……あれ？テンプレ入りしてる」

しかも晒しスレかよ！

会話中に晒しスレを開いて相手を検索し始めるといふかなり不屈きなことを平然と行ったプレイヤーは、引き気味に言う。

「な、なかなか……有名害悪、みたいだね」

「あー……まあ、色々名前悪が知られる機会轟も多いですからね」

「既存マップにトンネルを掘ってたとか、書かれてるけど」

「まあ、良くあることですよ。最終的に生き埋めになりましたけどね……はは」

「は、はは」

「はははははは」

「はははははははははは」

狭く薄汚い船倉の中、不気味な笑い声が辺りを埋める。まずい、空間の正気度がどんどん下がっていく。一度場を和ませないと……私は手元をちらりと見ると、進言した。

「あー、何です……見たところ皆さんはこのまま出航まで待機するつもりみたいだし。お茶でも」

「い、頂こう……かな」

「じゃあ、創りますね……」

インベントリからいくつかの材料を取り出し、錬金術でパツと茶葉を生成。こういう時に雑に便利なのがいいところだよなあ……。あとは水とカップを出して――

――殺気。

【空】

背後だ、背後から何かの攻撃。バレたか？ 結ぶ必要のなくなった印を省略し、

【蟬】！

忍術を発動して回避する！ 振り返りはしない、答えはわかってる……！

「……悪いけどよ、クグリーンさん」

ついさつきまで不気味に笑っていたはずの男が、一転していかにも悪そうな声色を使い始めた。いいね、そっちの方がよっぽど似合ってるよ。

「あんたは……どうも、ことあるごとに悪巧みをして、ことあるごとに失敗してるみたいじゃねえか。トンネルでも生き埋めになったんだろ？」

第二撃、見つかつてはならないことを考えると、連中の武器は小型の刺突系……ナイフあたりか。つまり攻撃範囲はそう広くない、対策の打ちようはいくらでもある。

男が続ける。

「俺たちは——あんたらの道連れになって、溺れ死にたか無えんだよ」

……そっか。

それじゃあ。

第三撃がやってくる。私はそれを【瞬間^ア転移^{ポート}】で躲す。

——仕方ないな。

私は手元を見た。そこにはレベルアップによって増えたアクセサリースロットを使いい埋めて、小さな無線機が取り付けられている。

「パストラットおー……っ！」

私は友達の名前を呼んだ。

海に捨てられたくないなら、海に捨てる側に回ればいい。……それだけの話なのだ。

◆ 「助かったよクグリン、おかげで無法者を一掃できた」

パストラットが柔らかかに言う。彼女は意外に接しややすいタイプだ。

「礼はいらないよパストラット、それより……」

暗闇の中、響き渡る自分の声を感じる。数日後には新大陸で発せられている声だ。

「ねえ、約束してほしいんだ。協力したんだし、私を生身で海に捨てたりしないよね」

それは確認だった。パストラットはルールを重んじる、それは自治厨と言う事でもあり、約束を絶対に守ると言う事でもある。ここで指切りげんまんの一つもしておけば、絶対に破りっこない。

ここで拒否してきても、協力してやったのにそれでは虫が良すぎるだろうと切り返せるはずだ。抜かりはない……さあ、肯定するんだ。パストラット。

「うん、その点は心配しないで」

やったあああああああああ!

周囲に広がるのは暗がりにも他ならなかったが、私の心は明るいことこの上なかった。踊り出そうとする体を制止する。

パストラットが口を開く。今度はどんないい知らせかな?

「生身じゃなく、ちゃんとボートもつけるから」

海に捨てられることになった。

◆ クソがアーーーーッ!!!
私は吠えた。

「うるさいぞクグリン……」

狭いというほどでもないが広いというほどでもないボートの上、設置されたセーブテントを挟み、反対側に寝っ転がっているペンペンが苦言を呈する。

でもさあ！でもさあ……！！

「まあアレだ……物は考えようだろ」

というと？

「なんだかんだ言っつて、漁船に同乗して新大陸いけますみたいなクエストもあるにはあるらしいじゃん」

ふむ。

「出航から結構な時間を稼げたし、ここから餓死ループしてればワンチャン新大陸行けるんじゃないか？」

……確かに……！！

やはり私は間違っていないなかったみたいだ。確かに、眼前に広がっている雄大なる青の

海原は、一見して果てなど持たないように見える……でも、それにしたって終わりはある。深海のモンスターはヤバいらしいけど、逆に言えば浅瀬のモンスターはシヨボいつてことだ。何ならそいつらを狩って食料にするのもいい。

……イケる……!!

「……ありがとうペンペン、確かにその通りかも!もうちよつと頑張つて——」

アナウンスが走る。

『^{The Truth Dragon}真なる竜種 : No. VII』

『^{アドバnター}Advanced Age』

『参加人数 : 二人』

『竜狩りが開始されました』

「み……」

……。

クソがアーーーーッ!!!!

私は叫びながら、前方に脈絡もなく出現した謎のレイドモンスターを睨みつけた。風雨もないのにやけに強い海波たちが、私たちの将来を暗示しているようだった。

買い物に行こう！

「ペンペン！倍返しだ！こいつ、私たちの攻撃を倍返ししてくる！」

「マジ!?試してみるか……えい」

「ほら二倍の長さのヌンチャクで殴り掛かってきた！」

「危ねっ！」

「どうするこれ!?テントもさっきの爆発で壊されちゃったしさあ！」

「そうだな……よしクグリン、お前自爆しろ！」

「はあ!?!」

「倍返しってことは自分へのダメージも倍になるんだろ!?!つまりお前が手持ちの爆薬全部使って自爆すれば、こいつはその倍の爆発を起こす!1たす2で本来の3倍の威力を期待できるぞ！」

「なるほど!よっしゃ自爆だー！」



リスポーンした。

『称号【竜殺の夢想者】を獲得しました』

やったあ、なんか出たぞ。

……ただ会っただけで称号が手に入る。それは、あの『真なる竜種』とかいう謎のカテゴリが……相当に、強大かつ重要に設定されていることを意味している。でもあいつ、その割にはそこそこ倒せそうだったっていうか……自爆がクリーンヒットしたらワンチャンあるんじゃないの？

……まあ、ペンペンを待つてみよう。討伐に成功したなら、無線なり伝書鳥なりで連絡が入るはず。しかし目の前にリスポーンしてきたペンペンのアバターを見て私は考えを変えた。

「えっもう死んだの!？」

「うん……」

ペンペンは申し訳なさそうに項垂れた。

微妙な空気が流れる。

名前も知らない小鳥の囀りが風に乗って、宿屋の窓の外に広がるフィフティシアの街道を通り過ぎる。その高い音が、どうしてだか耳にこびりつく。

何かに助けを求めるように手元のヌンチャクを弄びながら、ペンペンは口を開く。

「倍は倍でも、さ……」

じゃらじゃらと、金属のぶつかり合う音が室内に響く。

目をそらすような素振りを見せながら、彼は二の句をついだ。

「……範囲が、倍だったんだよね……」

爆発に巻き込まれて死んだらしい。

……会っただけで称号が手に入るだけのことはあるね、どうやら一筋縄ではいかないみたいだ。

「よし、ペンペン」

私の呼びかけに呼応してペンペンが顔を上げ、頭上のプレイヤーネームが揺れる。カーテンの先を眺めながら、私は言った。

「シヨツピングに行くかうか」

そういうことになった。



ここ最近の私は、レッドネームとか賠償金とか密航とかでこたついていた。そのせいで、せつかくベヒーモスに到達するのにパストラットと通信するための無線しか買っていないかった。……しかし、もう忙しいのも終わった。そしてベヒーモスの品揃えはかなり豊富だ、利用しない手はない。とりあえず、最低でもチェストリアは入手しておきたいところだね！

しかし入手できなかった。

「5億マーニだよっ」

「はあ?」

戦術機売り場のほうに行くというペンペンと別れ、しばらく歩いて辿り着いた先。そこで、チェストリアは売り切れていた。ふざけんなこのゲーム売り切れの概念あるのかよと思つたら、「象牙」から「ちようど数十分後に在庫補充が来るタイミングですよ」と教えてもらったので、待つていた。待つていたらコレだ。

プレイヤーの頭上には半透明で『背後の一撃』の文字列、赤くはない。『背後の一撃』……? 普通3000万人がプレイするサブキャラ不可の大傑作VRMMOをプレイ開始するにあたって『背後の一撃』なんてPN付けるか……? いや、これは多分印象を引くためのものだ。現に私もその裏にある真意を汲み取ろうと少し考えてしまった。多分こうして頭に名前を刻んで、後々の諸々をやりやすくするための行為だろう。

背後の一撃……ええい紛らわしい。ハゴノイゲ、あるいは在庫補充の瞬間に閃光玉的な何かを投げ込み、人々が混乱している間にチェストリアを買い占めた彼女は、端正なメイキング顔立ちを動かして、まるで私が話を理解していないバカであるともいうように、指を振る仕草と共に言った。

「だ〜から、5億マーニだつて! 5億マーニくれれば、チェストリアを渡してあげるよ!」

よくわかんないけどカスであることに間違いはない。殺すか？いや、でも……私はちらりとハゴノイゲの手元を見る。左手首に三つ、右手首に四つ腕輪を嵌めている。アイテム名はわからないけど多分アクセサリー、つまり彼女は最低でも七つのアクセサリースロットを持っている。レベル120を超えている、ということだ。今殴り掛かってもきつと勝てないだろう。

……いや、本当に勝てないかな？純生産職ならワンチャン行けるんじゃない？

一回試してみよう。私はダガーを取り出した。空間を迸る紫電が派手なエフェクトをまき散らし、迅速なる一撃を彼女の胸部に向けて放つ。

「残念っ」

が、弾かれた。なんだ？剣が浮いてる。後ろにも五本、手元に二本。オツケー二刀流剣聖ね……レベル120超えなら剣を七本十二刀流で一本くらい持つてることについては不思議じゃない。でもその剣が常時入れ替わり続けているのは明らかに不思議、ちよっ!?足元への攻撃を咄嗟に跳んで避ける。効果音が隔てる先に手首を見れば、七つの腕輪は七つとも光っている。もしかして……これ全部チェストリア!?チェストリアを七つ装備することで八つインベントリを展開ってこと!?で……うわあっ!?頭を正確に狙った一撃、【空蟬】で回避する。で、八つのウィンドウを全部操作することで剣を切り替えまくる!?

「バカじゃないのお!？」

「あんたがね!」

スキルエフェクトを伴って三本の剣が同時に殺到、ハゴノイゲはどうやら、軽くて飛ばしやすいい剣で動きの部分を担当させて、対象に直撃するタイミングギリギリで威力がデカい剣にチェンジする方式を取っているようだ。つまりこの剣たちも、もうすぐ炎とか雷とか死のオーラとか纏ってるヤツに変わる……ということになる。

「だつたらあ!」

切り替えエフェクトの発生を見計らい、手を伸ばす。

インベントリと装備を切り替える瞬間、対象の武器はコントロールを外れ、装備しているわけでも仕舞っているわけでもない、ニュートラルな状態を取る。

そして、上忍は盗賊の派生職だ。

「えい」

というわけで、私は相手の武器を盗んだ。

「はあ!？」

ハゴノイゲの驚きが聞こえ、そこから動揺の波が広がるように、剣たちの動きが少し乱れる。実際、普通ならまずあり得ないようなことだ。ハゴノイゲがバカみたいな量のチェストリアを同時に持って、しかも装備枠として盗んだ剣が入っていないのが大き

い。とにかく、今がチャンスだ！

「やつ」

さらに剣を盗む。盗む。盗む。盗む。すぐに新たな剣が取り出されるはずだけど、だから何だという話だ。冷静に考えたとチェストリアなんて次の在庫補充の時に買えばいいしね！それよりこいつから一本でも剣を奪わないと！

私は目的を見失いつつあった。

おや、新たな剣は出さないの？だったらここで死ぬんだなアーーッ！！

「ちよ、タンマ」

なんですか？

「オツケー、あなたがそれなりにやるのはわかった。だからそれに免じて……」

お、無条件でもらえる系!!無条件でもらえる系かな!?

「4億マーニにしてあげるよ」

バカにしてんのか？

実際、確実にバカにしていた。

……とはいえ私だって、目の前のカスをぶつ殺すことで話が解決すると思っっているわけではない。チェストリア内のアイテムは基本的に安全だから、チェストリアにチェストリアを入れればチェストリアそのものも安全になる。PKしたところで奪えはしな

い。

「ねえ、もうちよつと安くならない?」

というわけで、私は根切り交渉に踏み出した。

チェストリアが要求するリザルトは多いには多い。でも5億という価格設定は明確にぼつたくり、1億でも高いくらいだ。

「ん〜……そうだね」

ハゴノイゲは視線を怪しげに遊ばせ、品定めするようにじろじろと私を見る。

ベヒーモスのSF然とした幻想とは程遠いデザインの中、時間だけが平等に過ぎていく。

「よし、3億5000万」

……まだいける顔だ。

「ちよつとおく吹っ掛けすぎだつて!20万にしてよ」

私は相手が吹っ掛けていることを咎めながら吹っ掛けた。

「何言つてんの!3億までしか負けないからね!」

「なんだと〜!?!でもこのさつき盗まれた四本の剣を見ても同じこと言えるかな!?!」

「う〜ん……2億8000万!」

「200万!あのさあ、考えてみてほしいんだけど……2億8000万もあつて何する

の？っていう。いや5億の時点でそうだったけど」

「え……美味しいもの食べるとか？」

「そんなの200万で十分じゃーん！」

「……あれ？」

「ね、200万にしよう！」

「私って、どうしてゲームを遊んでるんだっけ」

どうも意図せずして精神攻撃に成功しつつあるらしい。ハゴノイゲは自分がこの世界に存在する理由を自問し始めた。

彼女の頬を涙が伝う。

「そう……確か。最初は、冒険をして、それが楽しくて。剣闘大会に優勝できた時は本当にうれしかった。でも」

……レベル120を超えている。買い占めができるだけのリザルトを用意できる。それは、彼女が普通のプレイヤーとして活動していたころの積み重ねあつてのものだ。

仮想世界の涙がぼろぼろと零れ落ちて、その一粒一粒が冷たい照明を受け、ささやかに反射光を浮かべた。

「……どうして。どうして、私はこんなことを……！」

……結構思い詰めてるみたいだ。ちよつとアクションを切ってみよう。

「……大丈夫だよ」

私は口にした。

「え……？」

『あなたは何のためにゲームをしますか?』なんて質問に答えはないでしょ? ゲームってそういうものじゃん。例え貴重アイテムを転売するクソ害悪プレイスタイルでも、システムが許す限り存在できると思うよ」

「……そう、だね」

ハゴノイゲが涙を拭く。どうやら、私の助言は伝わったみたいだ。両手首の腕輪たちの表面に露出した回路が、やけに光って見えた。

私は彼女が立ち直ったのを確認すると、笑顔を作って改めて言った。

「というわけで、2万マニーにしてね」

余ったリザルトは何に回そう。

銃を買おう！

リザルトの使用結果は割愛する。

まあなんというか、大したものを買ってない。ドレッセリアの装着時エフェクトは何かの悪巧みに使えそうな気がしたけど、普通に考えて使い道が思いついているもののほうが優先されるべきだ。フライングディスクにはガレージャリアが必須だった。そういう風に候補を狭めていった結果、メガホンとか水鉄砲とか、そういういかにも微妙な感じのものばかりが揃うことになった。

だけど……一つだけ例外がある。

「銃だア……」

手に握り、天（井）に掲げたのはフルオートライフル、名前は『A Z Z—282』だ。魔力弾規格42口径、全長857ミリで銃身長170ミリ。特筆すべきはその変形機構で、スイッチを切り替えると銃身部が変形し、同時にホログラム・スコープが出現する。これを覗けばスナイパーライフルに早変わり、つてワケ！ いや〜いい買い物をしたね！ 満足！

しかしペンペンは満足ではないようだ。

「え、『AZZ』買ったの?」

彼は私と落ち合うなり、露骨に顔をしかめてそう言った。

……なんだこいつ?

私はイラついた。魔力弾規格42口径、全長857ミリで銃身長170ミリ。特筆すべきはその変形機構で、スイツチを切り替えると銃身部が変形し、同時にホログラム・スコープが出現する。これを覗けばスナイパーライフルに早変わり、つてワケ! いや〜いい買い物をしたね! 満足! というところ急に現れて顔をしかめてんじやねーよ、という気持ちがあった。そこはお前も一緒にいや〜いい買い物をしたね! 満足! すべき時だろ、と思った。

「……それがどうしたの?」

「あちゃー……」

あちゃーって何!?

ペンペンはやつちまったなどでもいう風に頭に手を当てる仕草をした。あちゃーつて! あちゃーつてお前! 張本人の前であちゃーつて口に出すことある!?! そんなんだから新大陸に行けないんだよ!

……しかしそれはそれとして、どのあたりがあちゃーなのか知りたいという気持ちもある。

私は渋々聞いた。

「えつと……何かダメだった？」

「いいか？クグリン。まずこの銃は微妙だ。そもそもモードチェンジがある銃ってのは基本的に微妙なんだよ」

ペンペンがぺらぺらと早口で言う。

……もう少し歯に衣を着せてほしい。

「無限インベントリ^{チェストリア}が存在する以上、一つの銃のモードを変えるより役割の違う二つの銃を持った方が楽だろ？モードチェンジ機構が不要になる分威力も上がるしな」

い、一理ある……。

しかし反論しないわけにもいかない。私はどうにかしていや〜いい買い物をしたね！満足！を手放さない方法を探していた。

藁にもすがる思いで反論を捻りだす。

「で、でも……装弾とか、銃と銃の切り替えとかさ。二つ持つことによるデメリットもあるわけじゃん？一概に……」

「それに加えて、だ」

まだあるの!?

ペンペンは手近なショッピング・コンソールに近づくと、慣れた手つきでそれを操作

した。落ち着いたインターフェースの間をすいすいと移動し、『検索』画面で文字列を打ち込む。

「この銃と、この銃を比べてみる」

うん……？

一方の銃は狙撃銃スナイパーライフル、もう一方の銃は突撃銃アサルトライフル。二つはそれぞれ、A Z Z—2 8 2 の六分の一ほどの価格で……みんな？

「これ、合体すると……」

「ああ。『A Z Z』はな……既存の二つの銃を組み合わせて売ってる、地雷モデルなんだよ……」

私はおもむろに黒死の怨涙を取り出して死に戻りした。

一人にしてほしい気分だった。



ばん、ばん、ばん。

静謐とした神話の大森林、天光が漏れ出す緑の天井の下。木々に分かれた空間を、轟音がいくつも走り抜ける。

私がかメレオンを撃ち殺している音だ。

「うえ、うええ……」

私は泣いている。泣きながら、透明化能力を行使したカメレオンに銃口を向け、思ったより大きかった魔力弾の反動をその身に受けながら、手元のAZZを連射している。何も無いように見える場所から紅のポリゴンが散る。透明化能力は銃の前に無力だ。

あ、弾切れた。

「くそう……」

涙が見下ろした銃身を濡らす。弾倉を持つ手が哀しみに震える。リロードがうまくいかない。私は正体不明の悲壮感に包まれていた。

客観的には、ただ本来の三倍の値段で微妙な銃を一丁買わされただけなんだけど……それがなんだか取り返しのつかないような、酷く苦しいものに思えた。

……誰かと話したい。

それはあまりに身勝手な欲望だった。ついさつき一人にしてほしくて自殺したばかりなのに、今度は孤独の埋め合わせを求め始めていた。

『最近どう?』

とりあえず、適当に……フレンドリストのログインマーク点灯勢のうち、ついさつき目の前で自殺したペンペンと、コミュニケーションができないボルクネスを除いて……ジュゲッキとパストラットに、そんな伝書鳥を送ってみる。

「ぴーッー!」

隼は飛び立ち、森の静寂が再び戻る。

……返事が来るかはわからない、とりあえず時間をつぶしてみよう。私は涙をそのままに、落ち葉の彩る地面に座り込んで錬金術を始めた。完全に情緒が不安定になつていった。

えーつと、ついさつき手に入れたカメレオン素材をこう加工して……。

いろいろな音が、銃声に代わつて森を走る。

……できたぞ、透明な玉！中に調合物を詰めて使おう！

……。

「透明だから何なんだよクソ！」

私は透明玉に爆薬を入れて放り投げた。玉は偶然にも木々をうまく避けて進み、結構遠くのところに着地する。爆音が轟き、緑の中で赤が炎光を発し始める。どうやら火事が始まったらしい。そうだそうだ、この調子でこんな世界燃えちまえ！

「クソソーツ！クソソーツ！」

投げる、投げる。一つ投げるたびに爆音が一つ重なつて、炎の自然への浸食が強まる。まあこのゲームは神ゲーだし、きつと何かしらの形で鎮火することになるんだろう。私の怒りとは、結局その程度のものなのだ。実際、なんか投げてるうちに落ち着いてきた。冷静に考えると、三倍で買ったのが分かったというより三分の一で買う方法を見つけ

たという方が近いし。ここから買い増せばまだ逆転できるんじゃないのぉ!?

「あはは、クソーツ!あはは、クソーツ!」

投げるのが楽しくなってきた。火事によつて上昇した温度で涙も乾いた。私は一向に帰つてこない伝書鳥のことも忘れ、森への放火をさらに進めた。

その時だ。

ぱち、ぱち、ぱち。

「……んっ」

背後から、拍手の音が聞こえる。

私は振り返った。その先には、眼鏡を掛けた一人のプレイヤーがこちらへと歩いてくるのが見えた。女性アバターだ。その目元は、燃え盛る炎を反射するレンズが隠してしまっている。歩みに合わせて上下する頭上の名前は赤く染まっておらず、『バッド・クラフト』と、そう主張する。

ぱち、ぱち、ぱち。

「素晴らし〜」

続けられる拍手の音は、ごうごうと火が燃える中であつて、なおも存在感を帯び辺りに響く。よくわからないけど私のことをほめているみたいだ。とりあえず謙遜しておこう。

「プレイヤーネーム……『クグリン』さんですか。あなたの使った透明爆弾、実に興味深い」

えへへ、それほどでも。

とりあえず謙遜する私の前で立ち止まり、しかし拍手は止めずにえーつと……ドクラフトは言う。

「つきましては——あなたを、爆弾勢コミュニティにご招待したい」

角度が変わり、光を反射することをやめた眼鏡が、何かしらの志に燃えているであろう彼女の瞳を、炎の中に透かして見せた。

爆弾を作ろう！

爆弾勢。

それは鍛冶師掲示板において、つい最近流行しつつある概念だという。意味は文字通り、爆弾の制作を好む勢力を指す。時限爆弾から燃料気化爆弾まで、様々な爆弾を作り出し、色々な場所で爆発させる。爆弾勢というより爆弾魔と言ったほうが正しいのではないかという気もするけど、一応これでも結構ゲーム内産業の発展に寄与しているらしい。

ドクラフトは手持ち無沙汰なのか、右手に握った謎の押し込み型スイッチをカチカチとやっている。爆弾勢コミュニティの話を踏まえると、何かを遠隔起爆しているようにしか見えない。

「さて……たまたまスタート地点は鍛冶師掲示板でしたが、本来、爆弾の生産はむしろ錬金術師系統がメインなはず。そういう方向性の人員を補充しようか検討していたところ」

彼女は私を指した。

「あなたと、あなたの作った透明爆弾に出会ったというわけです」

なるほど。

正直……なかなか胡散臭い、と思った。だって透明爆弾なんてどうせ私以外もやっていることだろうし、歩いていたらたまたま、というのも奇妙な話だ。でも、それ以上についていくメリットが大きかった。コミュニティと言っているけど、話を聞いた限りやっていることは克蘭に近い。そして、鍛冶師掲示板で盛り上がりつつあるようなヤツは大抵もう新大陸に到着しているはずだ。つまり、どこかのタイミングで「大陸を挟んで爆弾のやり取りするのめんどくさくね〜?」みたいな話になる。で、新大陸に連れて行ってもらえる……紹介状とか書いてね。この船に乗っておけば勝てる、私は確信していた。

なので、ドクラフトに言った。

「わかった、参加する。まずは何をすればいいの?フレンド登録かな」

ドクラフトは、にっこりと笑ってこう答えた。

「フレンド登録は必要ありません。まずは、会費を払うところからですね」

スイッチが押される音が響く。

爆弾勢コミュニティは月額制だった。



懸賞金を払うときに生じた若干の差額で普通に払えたけど、月額20万つてまあまあ

高くない？相場知らないけど。

まあいいや。

ドクラフトのスイッチが鳴る音をBGMに、私は爆弾勢コミニティの顔合わせに来ている。

工具姿の少女アバターが、ニコニコと握手を求めてくる。身長が私より低いので、結果として見上げる形になる。

「あなたがクグリンさんですね！僕は打稲魔系ダイナマイトつて言います！いつも見てますよ！」

プレイヤーネームはともかくとして、こうやって褒められると悪い気はしないね！

打稲魔系が興奮した様子で続ける。よく見たらレッドネームだ。

「晒しスレで！」

「ライン越えでしょ！」

悪い気しかしねえ！

掲示板から集まったせいとか、彼らは面と向かって掲示板の話をすることに抵抗がない。
い。

「ライン？ああ、導火線は頑丈にしないとダメですよね」

しかもコレだよ。

打稲魔系は晒しスレの話をやめ、今度は以前自爆テロをしたときに導火線の素材をケ

チったせいでその辺のプレイヤーに炎ごと噛みちぎられちゃって意味なかったんですよ。よねみたいな話を始めた。明らかに導火線の素材だけで解決する問題ではない。

彼の懸賞金返済譚を聞き流しながら、私は手元のウインドウに目をやる。

……シヤングリラ・フロンティア、メール同期サービス。そこに登録した捨てメールアドレス、毎秒数十通ほどの頻度で静止画のみを含むメールが送られているのが分かる。静止画にはプレイヤーの顔が映っていて、その背後には……装骨天守スカルアツチ。新大陸のシンボルの存在が建っている。つまり、これはオンライン参加だ。

「新大陸のプレイヤーが隕鉄鏡を使い、動画サイトで配信をする。現実で走らせているBotがそれを取得し、20FPSで切り出した後、既定のメールアドレスに送信する。ラグはほとんど無い、音声通信は無線アイテムでやればいい」

このシステムを作り上げたらしい長身のプレイヤーが、三角座りをしながら虚空に向かって説明している。ボルクネスに見せてあげたいなあこれ……いやでも、フィロジオ中は無線アイテムは使えないんだっけ？じやあ厳しいかな。

思案する私の視界の隅で、隕鉄鏡が瞳を開くのが分かる。マニュアル操作で動くそれは、たぶんこつち側からのオンライン参加を補助するためのものだろう。長身がウインドウをいくつか開いて、目にもとまらぬ速度で指を動かす。そして、ドクラフトに頷いてみせる。

「それでは、会議を始めましょう」

ドクラフトは頷き返し、そう言った。

スイツチの音が、また響く。



一日目。

会議の内容は簡単だ。爆弾の時代がついに来た、拍手喝采。みんなで作って売って作って売ってを繰り返そう、拍手喝采。爆炎の中になにか希望は存在しない、拍手喝采。自己紹介タイム。

一人目、私。錬金術師であり、爆弾というよりは爆薬を作る係。透明被膜など様々な素材を制作でき、爆弾の幅を広げること間違いない。拍手喝采。

二人目、打稻魔糸。鍛冶師であり、爆破テロの経験多数あり。好きな爆弾は焼夷弾。サーモバリック爆薬の開発をひとまずの目標に掲げている。拍手喝采。

三人目、ラエルカン。長身のあいつね。デストロイヤー破壊者で、核爆弾の制作が目標。着席。拍手喝采。

四人目、バッド・ク・ラフト。拍手喝采。

会議という名の拍手オンラインが終わると、ファイティシアにある小さなガレージに案内される。ここで爆弾を作ったり、作った爆弾を保管したりするらしい。床はどころ

どころ錆びついていて、コツコツという足音も何やら不安を誘ったが、これくらいがちょうどいいという見方もある。

なかなか面白くなりそうだ。

◆
二日目。

爆薬を作りつつ、作った爆薬がどんな感じで運用されるのかを確認。とりあえず打稲魔糸から二、三個の爆弾を借りてみる。ふむふむ、こういう感じになってるんだあ……なるほどね。

ラエルカンはよくわからない。口数が少なすぎる。ドクラフトから聞いたところによれば、破壊者の武器破壊スキルはオブジェクトを根本的に世界から消し去るため、これを經由してゴニョゴニョすると核兵器になるはず……という理屈らしい。恐ろしい話だ。

時折爆音が響くガレージの中で作業するのは、思ったよりは楽しかった。楽しかったので、活動が終了してガレージが施錠された後も、盗賊と上忍のスキルを使って入り込んで残業してしまった。見ようによっては侵入者でしかないけど、ドクラフトは見逃してくれるだろう。

◆

三日目。

新たな爆弾が完成した……『水中爆弾』だ。これは火薬の衝撃を魔力波に変換する爆弾で、水中で起爆させると水柱が立つ。これと「水滑り」を組み合わせれば……へへ。意図的に必要な素材を少し多めに申告しておいて、余った分をさりげなくチェストリアに忍ばせておく。なあに、バレっこないさ。

コミュニティそのものも順調だ。私の透明爆弾と水中爆弾、そして打稻魔糸の破片爆弾が主力となつて、お得意先に飛ぶように売れる。何だかやけに私の手元に来る金が少ない気もするけど、最終的に新大陸に行けると考えれば大した問題じゃない。

鍛冶師掲示板を私は見られないけど、伝聞ではそちらも盛り上がっている。なんでも、クラスター爆弾の制作プロジェクトが動いているとか。私たちもそこに参加しようとか、クラフトに進言したら却下された。敢えて迎合する理由はありませんとか、そういうことを言っている。しかし言っているだけだったので、それとなくパストラットに伝書鳥を送って取り次いでもらおうとした。しかし返事がない。返事がないなら仕方ないや。爆弾をさりげなく改造する作業に戻る。

◆
四日目。

爆弾の時代が終わった。

◆ 「そもそもクグリンさん」

問い詰められている。

何が悪いかというと、何が悪いんだろう。鍛冶師掲示板に現れて、爆弾情報で爆弾勢そのものを爆破してしまったイムロン氏が悪いのだろうか。いやしかし。確かに爆弾バブルは彼女のせいで弾けた側面があるけど、それだけだったら問い詰められることはなかった。単に残念だったね何だかんだ結構収入は手に入ったしもういいや解散、で終われたはずだ。じゃあ、私が悪いのか。

いや、そんなことはないはずだ。

「あなた——夜に倉庫に忍び込んで、出荷する爆弾に手を加えていましたよね」

うん、そうだよ。だから？

私は肯定した。

ラエルカンは早々にログアウトしていつてしまったから、今のガレージには三人いる。私、私を問い詰めるドクラフト、その様を楽しそうに観察する打稻魔系。この指の動き、さては晒しスレを開いてるな？こいつも、純粋に爆弾を作りたいだけじゃなかったってことか。

「分解してわかりましたよ。機構が組み変わってて……あなたが遠隔操作できるように

なってる。どうしてこんなことを？」

新大陸のレイド戦の途中に起爆して、討伐報酬をもらうためさ。

そうバカ正直に答えてやる必要もない。私は言い返す。

「逆に聞くけど。あなたの本当の名前は何か？バッド・ク・ラフト」

このコミュニティは嘘つきだらけだ。

爆弾を純粹に作ろうと、そういう題目があつたのに。私は新大陸行きのために利用しようとしか考えていなかったし、打稻魔糸は私をスレに晒したいだけだった。いや、「しか」とか「だけ」ってほどでもない。確かに爆弾を作るのは楽しかった。でも、私たちは絶対に爆弾勢じゃなかった。

私の指摘を受けても落ち着いて、眼鏡の位置をずらし、片手のスイッチを押し続けるドクラフトも、やはり爆弾勢じゃなかったのだ。

「……気づいていましたか」

「こんなどう見てもクランでしかないものをコミュニティと呼び、フレンド申請も断つた……それって、あなたのプレイヤーネームをシステムメッセージに流さないためじゃないの？」

彼女は雲隠れするつもりだったのだろう。きつと爆弾バブルの崩壊が近いと知って、せめてもの売り抜けをしたうえで、発生する負債をコミュニティのメンバーに押し付

け、そのまま夜逃げする予定だったはずだ。

狭いガレージの中で、私たちの声が縦横無尽に響く。

「……それでは、この頭上に存在するはずのプレイヤーネームを、どう説明するのでしょうか」

「簡単だよ」

私は、彼女の手元のスイッチを指さした。

カチカチという音が止まる。

「それ、ドレツセリアでしょ」

……プレイヤーは、ドレツセリアの装着時エフェクトをカスタムできる。ドレツセリアそのものの形状も、だ。スイッチを連打しているのは、装着時エフェクトを持続させるため。装着時エフェクトを持続させるのは——。

ドクラフトの頭上で、プレイヤーネームが解けていく。

……本来のプレイヤーネームの上に、偽のプレイヤーネームを被せるためだ。

「く、くく……！」

バッド・ク・ラフト……改め。レッドネームの『グロントフック』氏は、掛けていた眼鏡を放り投げると、口に手を当てて笑った。

「バレちまったなら仕方ねえなあー！」

なるほど、性別反転聖杯ね。

打稲魔系がいかにも楽しそうにスクリーンショットを連写している。

「ふふふ……そうでなくっちゃー！」

無邪気な声で、そう言いながらだ。

私も責められはしない、みんながこうして、いかにも楽しそうに何かの悪巧みをしているのだ。

「あばよっー！」

グロントフツクが、ドレッツセリアとは別のスイツチを取り出した。悪巧みの塊のようなスイツチの上に、親指が乗る。何千と聞いたカチリという音が再び鳴って、ガレージの奥から、閃光を伴った爆発が迫り来る。

……なんだよ、あんたも手、加えてるじゃん。

自分のアバターが塵と化すその瞬間に送ったフレンド申請は、怒り狂う炎の壁の前に掻き消えて、受理されたか、受理されなかったのかもわからないまま、世界のどこかへ消えていった。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の一

「やつぱり、おかしいよな」

ボルクネスが、手札を眺めながら神妙そうに言う。

私も頷いて、以前より品質の増した紙切れ……いや、カードをマットの上に置く。

「うん。……^{メールカード}伝書鳥が届かない」

いつからそうなっているのか。

ボルクネスが無線を使えないと知り、涙ながらにハヤブサを手配した時も。私が森の中で、話し相手が欲しくてハヤブサを手配した時も。パストラットに連絡しようとした時も。全部、伝書鳥が返ってきていないのだ。

カードが擦れ合うかさかさという音が、照明の下で静かに立つ。

卓上の盤面も、随分複雑になってきた。

「ちよつと試してみよう。まず私がパストラットに伝書鳥を送るでしょ？送った10秒後、無線をかける。どちらか片方だけが届いたら、明確におかしい」

便宜上『無線をかける』としているけど、無線が普通にかかるのは既に検証済みだ。爆弾勢コミュニケーションのオンライン会議には無線が使われていた。

「わかった」

私は席を立ち、伝書鳥送信用ウインドウを開いて適当な文面を打ち込む。えーつと……「WAKE UP!」でいいや。送信っ。

「ピョーッ!」

パストラットは基本的に新大陸にいる。開拓船が旧大陸にいる間は密航者の取り締まりをしているけど、船が出発して少ししたら転移魔法で新大陸に帰っていくのだ。尋常ならざる速度で発っていったハヤブサの鳴き声が消えてから、10秒数える。

「……そろそろかな。えい」

私は無線アイテムを取り出すと、パストラットに通話を掛けた。

すぐに繋がる。

『クグリン、どうしたの?』

……明らかに、あのけたたましいハヤブサの鳴き声を聞いた直後という風には聞こえない声色だ。

一応確認してみよう。

「……パストラット。ついさっき、そっちに伝書鳥が行かなかった?」

『ああ……』

沈黙。

なぜ黙ったんだろう？ 答えが知りたい。もしかしたら実は行っていたのかもしれない。色々種類推が浮かぶが、基本的にはじつと待つしかないだろう。私は彼女の二言目を待った。

『……あなたたちも勘付いてたか』

えっ……？

ボルクネスが怪訝そうにこちらを見る。彼には通話内容が聞こえていない、なぜ私が驚いているかわからないのだろう。

『いいよ、B W—ビーコンでそっちに行く。説明をするから』

断絶。

ブツンと音が一つ鳴って、通話はそのまま終了した。



「この地図を見て」

パストラットが、卓上に大きな紙を広げる。

きつちり折り目が入っていて、皺一つない。ちゃんと見ていなかったけど、たぶん角と角もしっかり揃っていたことだろう。地図の内容は……えーっと、旧大陸と、わかっている範囲の新大陸。そして、それを挟む断絶の大海だ。

ボルクネスは俯いている。フィロジオに三人プレイのオプションは存在しないのだ。

「あなたたちの疑問は……わかってる。『伝書鳥が届かない』でしょ？ 政府の関連NPC、そしてライブラリも、この問題には気づいてるんだ」

もしかして思ったより大規模な感じ？

パストラットはボルクネスをちらつと見たが、ちらつと見られたことでさらに俯きを強めたのを見て諦めた。インベントリから棒状の物……ああ、ペンか。ペンを取り出す。

「ライブラリは検証をした」

ペンがキャップを外され、地図の上を彷徨い始める。

「伝書鳥には『届く場合』と『届かない場合』の二種類がある、『届かない場合』は旧大陸と新大陸で通信をした時のみ発生するが、全てがそうというわけではない。その情報を踏まえて、旧大陸と新大陸の間で、あれこれ位置や方向を変えて伝書鳥を送ってみたんだ」

中々頭のおかしいことしてるな……。

ライブラリがやった策というのは、要するにソナーだ。ソナーが「どれくらいの時間で返ってくるか」を見るのに対し、この方法は「返ってくるか返ってこないか」だけを見る。それ以外に違いはない。

「結果」

パストラットがペンを走らせ、子気味良い音と共に断絶の大海の上に円を描く。フリーハンドにしてはきれいだ。

「この円の範囲内を通った伝書鳥は、すべて音信不通になることが分かったんだ」
……へえ。

描かれた円は、地図上で見ると大した広さを持たない。しかし……断絶の大海は、あの巨大な船で7日かかるだけの広さだ。それを踏まえればデカすぎるとすら言える。

「この範囲を、私たちはこう呼んでる」

円の傍らに文字が書き加えられる。

『断絶圏』
ブレイクレンジ

これまた整った形だ。

「まあ……安心してよ」

パストラットはペンにキャップを取り付け、エフエクトと共に仕舞いながら続ける。

「今有志を募ってる。もうすぐ断絶圏ブレイクレンジ調査隊が結成されて、船でこの地点まで向か

……」

「参加する」

私はパストラットの言葉を遮ると、なるべく印象深くなるよう努力してそう宣言した。

ボルクネスも気づけば顔を上げて、手の震えも気にせず、私と一緒にパストラットを見ている。半分睨んでいって、もいいかもしれない。

「え？」

パストラットは混乱している。なので、改めて宣言する。

「その調査隊に、私たちも参加するよ」

ブレイクレンジ

断絶圏の正体はわからないけど……その船に乗っておけば、とりあえず新大陸に行けるんじゃないのぉ〜!?

私は新大陸に行きたかった。

パストラットとしても断れないはずだ。もちろん定員とか、そういう問題はある。でも、今の彼女は大義名分を持っていない。普段の彼女はNPCのクエストを受けることで、自分の行為に正当性を持たせ、相手にスキを与えない……だけど、今回は違う。彼女と私は個人的に話をしているにすぎないからだ。

「え、えつと……」

パストラットは困っている。いいね、押せば何とかなるとき顔だ。私がただの密航者じゃないってことを思い知らせてやらアーーッ!

「大丈夫。人手は多いほうが良いでしょ? 少しでもあなたの助けになりたいんだ」

適当を言う。多少考えれば、私の目的が『少しでもあなたの助けになりたい』ではな

いいことはすぐにわかるはずだ。この発言は、パストラットが『多少考え』られているかの観測気球でもある。

パストラットは弱々しく言う。

「で、でも……」

行ける！絶対に行けるよこれ！ペンペンにも連絡しておこう！

私はさりげなく、ハヤブサをもう一羽手配し始めた。

◆

行けた。

海上特殊調査艇・フォルヴェノン号の甲板の上。出航まで30分を数えた私は、降り注ぐ日光を浴びている。

いや〜今日は絶好の出航日和だね！雲一つない青空が、私たちの門出を祝福してるみたいだ！

「……本当に乗せて大丈夫かなあ……？」

おやパストラットさん、どうしたの？

パストラットさんは謎の不安に付きまといわれているようだ。心配だなア……。まあ、海に出ればそれも消えるだろう。潮風つてのはそれくらい素晴らしく、私たちを後押ししてくれるからね！

私がすつとぼけていると、今度はペンペンが甲板の上を歩いてきた。なぜか浮き輪を着用している。

「いい天気だな」

「そうだねっ」

本当に雲一つなかった。太陽は明るさを私たちに届けるので精いっぱい、それが何だか微笑ましかった。余りにも素晴らしい日だった。その素晴らしさにあてられたのか、ペンペンはおもむろに海に飛び込んだ。そして海中に潜んでいた肉食魚に噛み殺された。紅のポリゴンが吸い込まれるような青にアクセントをもたらず。儂い命だ……私は合掌した。

合掌していると、今度はジューゲツキがやってくる。彼女も調査隊の一員のようだ。

「あ、クグリンちゃん！いい天気だね」

「そうだねっ」

私は笑みを振りまいた。心からの笑みだった。ただ、少し出力体系が違うだけだった。本当は悪辣にニヤリと笑うところを、代わりに輝くようにキャハハと笑う。それだけの話だった。騙しているという感覚は無かった。

……冒険が、始まろうとしている。

きつと、四十八人に上る調査隊のメンバーのうち全員が、そんな思いを共有していた。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の二

ログインした。

今の私は極力保身モード、空からトガった魚が降ってきたみたいになつまらない理由で死ぬわけにはいかない。つまり、航海中のほとんどを無敵状態ログアウトで過ごすことになる。

……とはいえ、参加すると言った作戦をすつぽかしたら流石に後が怖い。事前に通達されていた『断絶圏入りブレイクレンジ』のタイミングはログインしておこうと思つたのだ。

ささやかな効果音と二重に目覚めるような感覚が重なり、流れる潮風が頬を撫でる。とりあえず、私がいけない間に船をサメに食いちぎられたりはしていないようだ。でも……。

辺りを見渡す。なんとなく活気が薄れているような……いやまあ、真面目な場面だから当然なのかな？でも本来のタイミングから二十分早めに来たはずなんだけど……。いいや、その辺にいた適当なプレイヤーに聞いてみよう。

「……今来たんだけど何かあったの？できれば三行で説明してくれると嬉しいな」
「一行で十分だ」

へえ？

プレイヤーは神妙な顔つきを崩さず、船上ではためく帆を見つめている。見つめながら、口を開く。

「無線が通じなくなつた」

……なるほどね。

まあ……ある意味当然ではある。この現象が何かしらのモンスターによるものだとすれば、伝書鳥メールバードがロストするのは理由がある。モンスターがそういうことを考えるだけの知能を持っているなら、意図的に。本能的であつても、運営側の意図を汲んで。その理由とは……きっと、情報の障害という事になるんじゃないか。

迫り来る決戦の気配に怖気づいた私は、特に理由もなく船首の方面を眺めた。おや？何やら伝書鳥を操作して……ああ、断絶圏めがけて飛ばしてみるわけね。

「コケエー……ッ！」

入力されたメツセージを携え、漆黒の羽毛を散らしながら、飛び立ったカラスがまあまあの速度で前方に向かう。コケエーって何……？まあいいや、私も観察してみよう。AZZを取り出し、スコープを覗き込んで望遠鏡代わりにする。

さざ波の上に影を落として、カラスはその場違いな黒さを帯びて、空中にぽっかりと空いた穴のように進む。その姿は徐々に小さくなっていき、翼はいつそう風を受けて――

消えた。

「え……………」

その様を観察していたプレイヤーたちが、双眼鏡とか望遠鏡とか神代製の広角レンズとかから目を離す。みんな後ろ姿だから実際にその表情を見ることはできない。でも、わかる。彼らは困惑しているのだ。

…………ちよつと検証してみよう。

ジユゲツキの後ろ姿をさつと探す。こういう時、彼女は一人だけウキウキしている節があるのですぐ見つかる。肩を叩き、頼む。

「ジユゲツキ、発信機貸して」

「クグリンちやくん…………ダメだよっ」

ジユゲツキはパツと振り返ると、楽しそうに私を指した。

「どうせ返す気がないんだから…………貸してじゃなくて、よこせって言わないと」

「わかった。発信機よこせ」

「お安い御用！」

手渡された物体は想像以上に小さかった。これ身体に仕込まれても気づけないのは…………？私はビビったが、先にビビるべきものが目の前にある。なのでいったん呑み込んで、代わりにチェストリアから錬成^{アルケミック}品射出^{モーター}迫撃砲を取り出した。

私^が何かをしでかそうとしていることに勘付いたプレイヤーたちが、周りに集まって見物を始める。すみませんそちよつとどいてもらえますか？はい！OK！OKです！

「……………」

迫撃砲の射程はそう長くない、断絶圏の直径には到底満たないくらいだ。しかし……今から観測するのは、『中心点を通ったらどうなるか』ではない。適当な弦を通せればそれでいいのだ。

錬雷合金のインゴットを二つ取り出し、一つに発信機を装着し、もう一つを迫撃砲に詰め込む。やはり数々の密航の経験は無駄じゃなかったと、自分の慣れた手つきに思う。

「さて……………」

GUIを開いて軌道を調整、要するに断絶圏を通り抜けるように飛んでくれればそれでいい。

……………よし、こつだ。

「発射！」

どごん、魔力光が散り、爆発音が鳴る。異常に目立つ合金が、紫電を迸らせつつ雲の下を飛んでいく。まっすぐな軌道の先には断絶圏、そろそろ突入するころだけ——

。また、消えた。

プレイヤーの間に騒めきが走る。だってこれはおかしいのだ。断絶圏が行方不明にするのは伝書鳥だけ、NPCの漁船が消えたなんて話はない。でも目の前の光景を見た感じ、普通のインゴットが消えてしまったようにしか見えない。

「まだだよ」

しかし……事象はまだ終わっていない。

私の眩きを聞いたのか、プレイヤーたちが慌ただしく双眼鏡を覗き始める。私もAZのスコープを覗く。本来の軌道を描いていれば、あの投射物はもうすぐ、断絶圏の中から——。

——出た。

ついさつきまで世界から消失していたインゴットは、再び空中に躍り出た。そのまま重力に従い落下し、紫光を伝染させながら海水面に消えた。音は聞こえなかつたけど、『ぎんぐん』とかそういう感じだろう。

プレイヤーたちは頷いている。なるほどねとか、そういう感じだ。彼らのうちある程度はライブラリに所属しているはずだから、ここから簡単に答えを導ける——つまり、断絶圏の中に入った存在は外から見えない。おそらく、逆も然り。

まあ、ちよつとした思い付きだ。伝書鳥は『撃ち落されてる』みたいな感じ、というのが元々の予想だったけど、そんな素振りすら見えなかった。カラスは単に消えたのだ。消える現象にはいろいろ心当たりがある。例えば、ドレッセラで展開した偽のプレイヤーネームとか。

「第二射いくよーっ！」

更に、だ。

もう一つの、発信機を付けたほうのインゴットを詰める。これだけでは説明がつかない、消えたカラスはインゴットのように戻ってこなければおかしい。断絶圏内を漁船が通つても無事なのは、当の漁船には自分が消えていることを認識できず、そのまま圏の外に出られるから。では、カラスだけが例外なのか？

「発射！」

ばーん、再びの光と音。周囲に光をまき散らしながら、インゴットは先ほどよりいい角度で飛んでいく。また消失、ここまでは既定路線だ。だが……。

……。

……やっぱり、入ったきりだ。

「どう、ジュゲツキ」

「信号喪失だね〜」

つまり、こういうことになる。

一、断絶圏の中に入った存在は、なんであれ外部から見えなくなる。

二、中に入った存在のうち、情報の伝達を目的とするものはそのまま消失してしまう。

三、これは何かしらの意思がなければ起こらない事象だ。

私は三行でまとめた。

「要するに、入ってみたいと分からないってことだよな？」

知らないプレイヤーが話しかけてきた。お前誰だよという感じがまあまああつたけど、的確だったので私は良しとした。

「そういうことだね！」

そういうことだった。

……そうこうしている間にも、断絶圏はどんどん近づいてくる。

その内部。聳え立つ不可視の壁に囲まれて、すばらしく青い海が日光をちらちらと反射している。その様は波濤というには程遠く、せいぜいが細波といったところで……それがむしろ、違和感を強調する。前に wiki を読んだ限りでは、断絶の大海を越えたプレイヤーを、新大陸の NPC は『波濤の人』と呼ぶのだという。この海が、こんな平和なものであるはずがない。

ぐんぐん、ぐんぐんと偽物の海が近づいてくる。困ったときは空を見上げようと、私

はなんとなく考えた。すくなくとも雲に関しては、断絶圏の外部と内部で繋がっているように見える。どこにいようと、空だけは真実を帯びているのだ。

「断絶圏、突入します！」

ライブラリの誰かが報告する。船が何だか速く動いているように思える。私は前を見据え、いよいよ不可視の境界を超え。

『真なる竜種：NO. XIV』

『Separation』

『参加人数：二十七人：二十九人：三十二人…』

『竜狩りが開始されました』

そんなアナウンスを目にした。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の三

「へえ〜……アドバンテージ、かあ」

「ねえ何か知らない？というか知らないはずないよね、この『真なる竜種』とかいうコンテツツは何？」

「よくわかんないかなあ……」

「無理があるでしょ無理が！」

「……そうだね。これだけは言っておくよ」

「何？」

「真なる竜種を相手取るときは、名前を見るべきだつて」

「やっぱり何か知って……！まあいいや、それで？」

「例えば『アドバンテージ』の場合……確か倍返ししてきたんだっけ？」

「そうだよ」

「アドバンテージ……『優位性』つてことでしょ？つまりアドバンテージは。クグリンちゃんたちに対し火力で常に優位を取った、そういうことじゃないかな」

「……なんかおかしくない？他にも隠してるでしょ」

「まさか〜」

……

……

…

……名前を見るべき、か。

目の前で飛竜が咆哮を上げる。いや、本当に飛竜と言っているのだろうか？確かに翼はある、大きな、湾曲した翼だ。でも……隙間が空いている。左右の翼はいくつかのパーツに分かれています、パーツとパーツは結合していない。本来関節か何かがあるべき空隙には、代わりに謎めいたプラズマがバチバチと走っている。要するに磁石だ、とりあえず磁石の力でこうなっているんだと思う。

……確かに、分離セパレーションされた体躯ではある。あ、今調査隊の誰かが魔法を撃って……なるほど、魔法の軌道上にある翼のパーツをズラして避けた。この手のモンスターにしては珍しく鳴き声はない。鳴き声がないのにこんなに強い殺意を表せるんだから大したものだ。何かの予備動作が始まる。

オツケー考察中断、向こうのターンだ。

「散れーっ！」

言われなくてもそうしてる！

白を黒へと裏返す、ここからの私は忍者モードだ。

プラズマが青空をバツクにほどける。セパレーションの翼が完全に連結性を失い、ファンネルのようになって船へと突っ込んでくる。荒波の音がやけに大きく感じる。

よゝし落ち着け私、向こうと同じことをしてやればいい……！

「空蟬！」

肉体の座標をズラして回避！丸太が押しつぶされる音を背後に、そのまま「水滑り」を起動。MP消費を抑えるよう、起動と休止を繰り返しながら、ステップを踏むように波を駆ける。海波は唸り、潮風は囁く。随分不穏な洋上だ。

「……というか」

左から着弾音。ちよい右に走行方向修正。断絶圏は改めて考えると結構狭い、少なくとも全部で二十パーツくらいありそうな翼ファンネルを暴れ回らせるには少々狭すぎる気がする。

「ほらまた来たあ！」

ファンネルが一つ、ちようど私と反対方向を向いて突っ込んでくる。海面に落ちる影が大きい、しかしそれにひるんではいけない。「空蟬」か「瞬間転移」？いや、MPは節約したほうが良い。一瞬「水滑り」を切ってそのまま倒れ込むような姿勢を取り、そこでもう一度「水滑り」。要はスライディングだ、頭上をファンネルが掠め飛ぶ。

……これさあ。私は水の上歩けるからいいけど他の人は……。

「(い)ば(い)ば」

やつぱり〜！

ちようどいいところにボルクネスが溺れている。私はとりあえず彼を引き上げた。しかし運ぶにはSTRが足りなかった。どうする？ 諸共に運ぶわけにもいかないし……。

あ、STRが足りてそうな人発見。

「後よろしく〜！」

「えっ?」

というわけで投げつけておいた。まあ何とかしてくれるだろう。

……さて、現在翼（のパーツ）はセパレーション本体の周囲で回転中。いかにも攻撃を弾きそうな外見だ。というか実際のところ弾いている。翼の鱗の間で垣間見えるセパレーションの本体は、中々間抜けな外見をしている。飛竜から翼を取るといふのはそういうことだ。

……しばらくこのモードが続くかな？ だったら、試しにセパレーションに近づいてみよう、か……。

「……………んん?」

何かがおかしい。

調査隊の中でも遠距離魔法職のプレイヤーたちは、セパレーションの本体に魔法を撃ち込んでいる。回転する翼に当然のように弾かれるけど、まあそれは仕方ない。でも……。

「……シヨボくない？」

魔法の見た目が、おかしい。

調査隊に属するプレイヤーのほとんどは、既に新大陸に到達しているはずだ。それでも調査船が旧大陸から発進したのは、内訳にベヒーモス永住民がある程度含まれていたことが理由だ。つまり……彼らは、レベル120帯くらいの魔法が使えなければおかしいはず。

でも……炎魔法はせいぜい「ファイアボール」、雷魔法はせいぜい「サンダーボルト」。少なくとも外見上は、その程度の威力しか持っていないように見える。

……もうちよつと近づいてみよう。

私は脚をさらに進める。レベルアップに伴いMPに多少振ったし、更に「水滑り」そのものの燃費も良くなった。もう昔のようにいつの間にか溺れる忍術ではないのだ。

群青と純白の境目が視界を流れていく。そろそろファンネルのターンが来そうだと警戒しつつ進んでいると、その瞬間は、来た。

魔法が見えなくなったのだ。

「……なるほどね」

翼のパーツたちが回転をやめる。ファンネル……いや違う、一度再連結して飛竜モードになるらしい。ビームでも撃つのかな？わからないけど、離れたほうが良いのは間違いない。そうして反転してまたステップを踏み始めれば……ついさっきまでと同じように、シヨボイ魔法が飛ぶのが見える。危な！ちよつと掠った。

そうか、セパレーション。それは分離であると同時に断絶でもある、と言う事だ。認識阻害能力を持つてる。セパレーションに近づけば近づくほど、私たちは何かが見えなくなっていく。きつと、断絶圏に入った時点で攻撃エフェクトが見えなくなっていた。これを第一段階としよう。そして、さっきの私はセパレーションに近づいて第二段階に入り……攻撃そのものが見えなくなった。

思えば……無線が使えなかった時点で始まっていたんだ。断絶圏という尺度で見ればき問題じゃない、あれが第零段階だ。

どこまであるのか。本当に『見えない』だけなのか……疑問は尽きない。しかし確実なのは、今すぐここから逃げなければならぬと言う事だ。

「うわあああああああー！」

セパレーションが体当たりをする！

まずい……まずい。そうか、セパレーション本体は動かないと思ひ込んでいた。普通に離れれば認識阻害なんて関係ない、と。でも……考えてみれば、当然近づくとことだつてできる。

視界から急速に情報量が減っていく。魔法が見えなくなる。音が聞こえなくなる。これが第三段階ね……どうしよう、第四段階を見たいけどそこまで近づいたら死ぬ。いや待てよ、逆に考えよう。逃げるんじゃない、回り込むんだ。

【黒潮】っ

咄嗟に解き放った黒雷を足元に纏いながら、一瞬【水滑り】を発動してすぐに切る。要するにジャンプ台運用だ。というか黒雷は見えるんだ、自分の攻撃エフェクトは普通に視認可能って感じかな？

【瞬間転移】

よし、セパレーションの背後に立つことに成功！これで、第四段階が何を示すのか分か

か……

私は絶句した。

その空間には、セパレーションと、自分と、海しかなかった。他者が完全に認識できなかつた。

……そうか、セパレーション孤立化、ってことか。

刹那の先。セパレーションの後ろ姿が小さくなっていったことで、どんどん段階が下がっていき……再び見え始めた他者を前に、私はどこか安堵を覚えながら、荒波の上で考えた。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の四

「……で！どうする！ペンペン！」

風切り音と戦闘音が言葉を遮ってしまうから、自然と叫ぶように発声することになる。

……ん、あのファンネルはこっち来てもおかしくないな。

「あ、八時の方向に注意！」

『了解！』

現在、私はペンペンの戦術機の左肩に乗って飛んでいる。しがみ付いて、と言ったほうが良いかもしれない。予感通り八時の方向から飛来した黒翼を、ペンペンはローリングで華麗に回避して見せる。そして私のアバターには華麗にGがかかる。こんなところまでリアルにするなよおおお……！

……指揮系統が完全に崩壊している。致命的ではないものの船が破損したのと、無線が使えないのが良くない。これら二つは、作戦会議ができるような安置が消えたことと、安置じゃなくても作戦会議ができる手段が消えたことを意味する。結論は、やはり崩壊という他に無いだろう。

別に崩壊しているだけならいい。だが、厄介なのは相手の能力だ。相手との二次元的な距離を狭めるにつれ段階が上がっていき、第一段階で攻撃エフェクト、第二段階で攻撃そのもの、第三段階で他者の立てる音、第四段階で他者そのものが認識できなくなる。しかも見たところ、第四段階にあるプレイヤーはそれ以外の段階から認識できないし、第三段階にあるプレイヤーの音もそれ以外の段階からは聞こえない……要するに、この効果は相互的なものだ。攻撃の見え方については前段階共通なのがせめてもの救いだ。

いちばんの問題……それは、この能力をどれだけの人間が把握しているのか知る術がないことだ。つまり、例えばセパレーションの本体と真ん中で爆弾を起爆できるとして、そのすぐ近くに第四段階に達したプレイヤーがいる可能性を捨て去れない。さらに言えば、第四段階のプレイヤー側が「ああ、第四段階の俺がいると誤爆の可能性があつて危ないな」と思つて第三段階以下まで退いてくれるのか、くれないのかがわからない。全員の物分かりが良ければそれで問題ないんだけど、そうでない場合誤爆で味方を殺してしまうことになる。というか、第四段階同士で攻撃し合うような状況すらありうる。しかも、第三段階以降ではその情報を言葉で伝えることができない。かと言つて第二段階以下なら安全かというところいうわけでもなく、第一段階が「避けてくれるだろう」と思つて放つた魔法とか銃弾とかが第二段階では認識できなかつたり、あるいは魔法とか銃弾が飛んでいる間にセパレーション側が移動して第一段階と第二段階が入れ替わつ

たりすることになる。段階段階段階……。

「……めんどくさーあ、四時の方向!」

『本当にな!了解!』

……これさあ。もう本体爆破しちゃってよくない?だってそうじゃん。今になってまだ段階の概念分かってないヤツとかいらなしい。多少のフレンドリーファイアはやむを得ないところあるでしょ。いやでも、爆破したとしてそれを知覚できるのは第一段階のプレイヤーだけだからなあ……。そうだ、他の奴を全員殺せば誤爆なんて……。

「……つと」

しまった、ハマってた。

……セパレーションのことが分かってきた。こいつは仲間割れを引き起こすモンスターだ。四つの段階を離^{セパレーション}隔することで相互理解を不可能にし、もう面倒だから全部火の海にしちまえるな思考を誘発する。めちやくちや厄介だぞこれ……。大人数で挑んだのがむしろ事態をややくしくしてる。

「お!モードチェンジ!飛竜っばい!」

『オツケー!どつちに回避する!?!』

「とりあえず左行つとけば間違いない!」

『わかった!』

とりあえず、今はなるべく第一段階を維持しながら策を練るしかない……つてウワー
虚空から魔法が飛んできた！第四段階の奴の流れ弾！

「テレポ入れるよ！」

『了解！』

【瞬間転移^{アホート}】の効果は触れた対象にも及ぶ。魔法を避けるべく少しだけ、スライドするよ
うに切り替わった景色の果てで、私たちは飛行を継続する。

……今の、本当に流れ弾なのかな？正直心配だ。第四段階のプレイヤーは背後からの
攻撃を認識できない、つまり誤射を受けることもあるはず。だったら……「後ろから魔
法を撃ってくるやつ邪魔だし殺しちまえ」みたいな思考を、持たないとも限らない。

……いや、考えないでおこう。

それより、思いついたことがある。

「ペンペン！方向転換！」

『なんだア!?』

「いい作戦を思い付いた！」

『どんな?!』

「思いつかない！」

私は風音に負けないよう、声を大きく……そして、堂々と宣言する。

「だから、ジユゲツキに聞きに行くんだ！」

私を鉄砲玉にすることについては、私を超える適任がいるんだから！

『なるほどなツ！でも……どうやって、だ?!』

ファンネルを回避しながらペンペンが言う。実際、彼の言うとおりだ。ジユゲツキのことだから第四段階で戦ってるってことはないだろうし、十中八九第一段階にいるけど……第一段階にもいろいろある。誰もが「水滑り」や戦術機を持っていない以上、ただ板切れにつかまって浮くだけのようなもの。そんな中でジユゲツキを探すのは至難の業だ。

……でも、私たちは知っている。

こういう時、一番のズルができる方法を。どいつもこいつも活用しておいて、肝心なタイミングで忘れる方法を、だ。

「伝書鳥メールバードだよ！」

◆ 「よく私の場所が分かったね〜！」

ジユゲツキはやっぱり楽しそうだった。

……伝書鳥は断絶圏、あるいは第一段階に入った時点で消失する。しかし……送ること自体は、無線が途絶えた後もできた。そもそも、消失するのはあくまでも『外部から

見えなくなる』効果によるものだ。内部では普通に飛んでいるはず。ではどのタイムイングで消えるのか？……それはわからない。ただ一つ確かなのは、断絶圏の中でも発信するだけなら可能、ということだ。

そして……飛び立った伝書鳥は、ターゲットを向いて一直線に進む。

一直線のその先で、のほほんと板切れにつかまって浮いていたジゲツキは、私のそんな話を聞くと、裏しかなさそうな笑みを顔に浮かべて言った。

「それだけわかってれば……辿り着けそうなものだけだね」

なんだと……？

まあいいや、話を聞けばわかることだ。

「私のプランも伝書鳥を使うんだよっ」

ジゲツキは、笑みを崩さないまま私に言った。



だからってこんなことってある？

いやまあ……仕方ないんだけど。

ペンペンが無言で頷いて、私も無言で頷き返す。その手元に大量の伝書鳥申請ウインドウを開きながら。

ペンペンが使い捨て魔術媒体を取り出す。私が静かに印を結ぶ。

……ジグゲツキの推測によれば、断絶圏に入った伝書鳥はまずファンネルにルートを誘導される。目の前に壁があったら避けようとする、その繰り返しだ。そのまま第四段階まで達してしまい、伝書鳥は迷子になって上空を彷徨い始め、そのまま外に出ることはない。

……だったら、第四段階から第四段階に伝書鳥を送ったらどうなるんだろう？

答えを知る者はいない。推測はあっても推測でしかない。だから、今からそれを証明するのだ。

「……スタンビート【逆る雷律】」

「……刃隠心得、おほろなばり【朧隠】」

朧な照明にすらかき消されてしまうような、恐ろしく弱い雷線が空を裂く。そして私が、その細々とした黄色に同化して、沈黙を保ったまま第四段階に駆ける——今だ。

「うりやくつー！」

残存する二十九人のパーティーメンバーに向けた伝書鳥、その『送信』ボタンをとにかく連打する。第四段階の『他者』には伝書鳥も含まれるから、送信されるそれを私は認識できない。でも、伝書鳥の運ぶメッセージだけは、確かにターゲットに着弾する。

「……はあ」

思わず溜息をついてしまう。第三段階移行は自分以外の存在が無音になるから、それ

がただ一つの音源だ。ハヤブサたちのピヨピヨという鳴き声もない。でも——そんな世界も、すぐに通り返ける。

【空蟬】、【瞬間転移】、リキヤストが終わった分でもう一回【空蟬】。慣性を強引にキャンセルし、振り返った先には……。各々の手段で第四段階から離脱したプレイヤーたちが、音もなくただ存在した。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の五

メッセージの内容は簡潔だ。一つ、セパレーションに近づくとどんどん認識できるものが減っていく。二つ、今からそこを爆破する。三つ、全力で離れる。

誰もが「水滑り」を持つているわけではないとはいえ、そもそもわざわざ接近して殴っている時点で、第四段階のプレイヤーたちは何かしら、溺れないための手段を各々で有しているはず。そして、その読みはどうやら当たつたらしい。足元にバリアを展開して足場になっているヤツ、フロートینگディスクに乗つてるヤツ、征服人形に吊り下げられてるヤツ……色々いるけど、とにかく大体は爆発影響範囲から出た。

よし、今だ。

本来であれば仕込んでおいた遠隔爆破機能を使う予定だったけど、アレは無線用の回線を使っている。動作しない可能性が高い。というわけで代案を用意した……シンブルだ。錬成^{アルケミック}品射出用^{モーター}迫撃砲で水中爆弾を突っ込めば、後は勝手に敷き詰めた爆弾が誘爆してくれる。

今の私は第三段階。認識障害の静寂の中、迫撃砲の発射音だけが大きく響く。

「よし退避……」

発射を確認した時点でチェストリアに迫撃砲を仕舞い、適当に魔法と忍術を絡めて逃げ出す。第二段階の境界をまたいだタイミングで、轟音とともに高い水柱が立った。……よし、流石に結構なダメージじゃないのお!?

私の読みは当たっているようで、辺りを飛び交うファンネルの動きが目に見えて鈍っている。よーしいけるぞ……いや、いけすぎでは？

……ファンネルは随分遅くなっている。もちろん「水滑り」状態で走つても逃げ切れない程度の速度はあるけど、それにしてもキレが悪い。よくわかんないけど……急所を突いたとかかな。これ行けるんじゃない？ 私は襲い掛かるファンネルを難なく避けて、そそくさと第一段階まで退避する。そして、「今だー」と……。

……叫ぶまでもないみたいだ。

第一段階に入ったとたん、視界じゆうを魔法と弾丸と矢が埋め尽くした。いや厳密には違う、ご丁寧に私のアバターを避けて発射されている。その殺到する先は当然ながら、ファンネルを慌てて戻そうとしているものの露出状態にあるセレーションの本体だ。よしよしよし……いける、いけるよこれ。私も【不知火^{シラヌイツボミ}】を適当に撃っておく。

「火力貢献ーっっ！」

いいぞいいぞ！ どうやらセレーションの弱点は下部みたいだけど、とりあえず翼に防がれなければ最低限のダメージは通るはずだ。質より量！ 二十九人の火力が、それぞ

れ自由に振るわれる。

「……形態変化来ます、飛竜！」

誰かが言った。キレを失いながらもセパレーション本体に最接近したファンネルたちが、再び紫のプラズマを迸らせ、連結し始めたのだ。オツケー……このボス、全員が近づいていない状態を維持すれば何とかなる。一度第三段階から離れたプレイヤーなら、普通にメガホンか何かを使って連絡できるからだ。つまり……

「横に回避いーっ！っ！」

こう叫んでやるだけでいい！

さあ来いセパレーション、いつも通り体当たりするんだ！……まあ、どうせ当たらないけどね！

私は若干調子に乗っていた。

それだけの材料があった。相手の手の内は割れている、プレイヤーたちは散っている。そしてセパレーションは一点にしか近づけない。戦闘範囲が断絶圏に制限されているとはいえ、あとは鬼ごっこをすれば勝てるはず……！さあさあ早く突進しろよ！

「……っ？」

何か、妙だ。

一旦「水滑り」を連打してスキップするのをやめ、普通に水の上に立ってみる。こつ

ちの方が考えがまとまりやすい。荒波が足元にやってきては流れていって、その感触が妙に気になる。

……見たことのない予備動作。

セパレーションの翼を繋ぐプラズマが、発する光を強めたように見える。いや、実際に強まって……そして、翼を構成するファンネルたちの間隔がどんどん開いていく。要するに……セパレーションは羽を伸ばしている。

まさか。

私には、こういう大規模なボスとの戦闘経験があまりない。新大陸に行けないから。ウオールフェンだ。戦災孤児は強かったけど、大規模というには違和感がある。そして、戦闘経験があまりないというのは……お約束に気づけない、ということだ。

「……第二形態あるのかよ……！」

誰かが呟いたそんな言葉で、私はようやく理解して。でも、その時には既に遅かった。目一杯間隔を開けて広がった翼は、日光を受けてずいぶん長い影を私たちに落とす。誰もがヤバいとわかっていながら、どうするべきかわからなかった。翼の変形はどこかゆつたりとした所があって、それが事態の深刻さに気づかせなかった。

「断絶圏の外に——！」

遅い。

翼は急に高速化して、一気に私たちを取り囲んだ。背後でがきんと音がする。それは左翼の先端と右翼の先端が、例のプラズマによって連結された音だ。つまり……現在、セパレーションはドーナツ型の構造を取っている。抜け道がない、ということだ。

「ちよ」

頭上に落ちる影が一層濃さを増す。それは……ファンネルとファンネルの間隔が、徐々に狭まっていることを意味している。視界の隅で紅のポリゴンが散る。ドーナツがどんどん縮小している、壁に当たれば圧死だ。

つまり、中心部に近づくしかない。

「走れえーっ！っ！」

行進だ、行進が始まる。ついさつきまでなるべく距離を取って戦うよう話していたボスに、できるだけ接近するための行進だ。プラズマの光はどんどん弱くなる。セパレーションの内側はどんどん狭くなる。第二段階、第三段階。そして……第四段階。急速に認識できる存在が減っていく。そして最後に、プラズマが、隙間がそもそも存在しなくなつて……分離していたファンネル同士が、音も立てずに結合したのを、私は見た。

……わかった。今のセパレーションを外部から見たらどう見えるか。一番的確な例えがある。

……城塞だ。

「く、そ」

痛い。第四段階に属する他の誰かとぶつかったのだろう。第四段階は相互認識すらできないから、こういう風にただ動こうとするだけでも衝突する。とりあえず退避したいところだが、翼の内部にいる限り、どれだけ離れても第三段階が限度だ。では、翼の外部に出たら？……意味はない。外部からの攻撃を防がない城塞なんてないからだ。

まとめるところだ。私たちは外界から断セパレーション絶された壁の中で、更に相互的にも孤セパレーション立している。

とにかく、せめて第三段階に……！

「がっ」

HPが減る。誰かが放った魔法に直撃したらしい。でも、止まるわけにもいかない。

異様なまでの静謐に満ちた、これ以上ないほどの単純な世界で、私は少しでも複雑な方向に向かった。

波濤に飛鳥絶ち討ちて 其の六

また一つ、マーカーが消えた。

ファンネルで破壊された船は直せはするだろうけど、今の時点では設置されていたベッドも破壊されている。つまり、死んでいったパーティメンバーたちはそのままはるか遠くの旧大陸でリスポーンすることになるはずだ。そして、あまりにも距離が遠すぎて、システムのパーティから自動脱退する結果となる。

……ボルクネスの姿が見えない。

彼はセパレーションとは無関係に、シンプルに他者と交流できない。つまり、第四段階に進むことに迷いが無いのだ。とりあえず死んではいけないっばいから、第三段階にいる私……いや、彼以外の誰からも見えないどこかで地道に戦っているのだろう。たぶん危険察知系のスキルを使っている。第二段階の時点で攻撃を察知することはできなくなるが、攻撃により発生するダメージを察知することはできるはずだ。彼の有する数々の意味わからんスキルなら、しばらくは持ちこたえられるだろう。

……でも、遠からず限界が来るはずだ。

そう、遠からず限界が来る。それは調査隊全員に言えた。フレンドリーファイアを恐

れた結果、逆に自分の身を守ることができなくなつて、一人また一人と倒れていく。

沈黙の中、またしても攻撃が来る。セパレーションの、先ほどまでを『分離』モードとするなら……そうだね。『隔離』モードでも言うべき形態は、たった一つの攻撃手段しか持たない。ただ、回転しながら動くだけだ。動いてる途中に壁に当たったプレイヤーは死ぬ。だから、突然動き始めることを考えて壁に近すぎる位置に立つわけにはいかない。しかしそうなると中心部に近くなり、下手をすれば第四段階に突入する状態になる。何から何までジレンマの塊みたいな竜だ。

また一つ、マーカーが消えた。

『隔離』モードはそれ自体が日光を遮る上、第三段階が前提となるから音が聞こえない。つまり、回避をミスって死ぬプレイヤーも出てくる。あとは、水上に存在している手段が尽きて溺れてしまうタイプなんかも。セパレーションの内部は、言うなれば巨大な蟻地獄だ。

……そろそろ、腹を括らなきやいけないな。

そう思った。

どうせ、このままやっていけば終わりが来る。それはわかっている。何かのカンフル剤が必要だ。それもわかっている。そして……私には既に、カンフル剤のアイデアすら

ある。けれど、使いたくない。使ったら死ぬからだ。死んで、新大陸への道が閉ざされるからだ。

……でも。

ここで私が行動しなければ、結局道は閉ざされるのではないか。

ボルクネスが、コミュニケーションなしに新大陸に行ける機会は。この先、どれだけあるだろうか。

そういう疑念が止まないのだ。

自分のことはある程度分かっているつもりだ。新大陸に行きたいという原動力を持つて日々行動している。でも……正直、自覚がある。何かを成し遂げるより、成し遂げようとして失敗した何かを元に戻すほうが得意だ。要するに、本質的に後始末のほうがいい。

……クソ、やってやる。

「ペンペン……！」

声を出す。意味はない。第三段階にいる時点で、プレイヤー間の声による意思疎通は一切が無効化されているからだ。だが、スイッチを入れるにはこういう行動が必要になる。

ペンペンは戦術機を着ているから一目で見つかる。駆け寄ると、彼の機体のフロント

ガラスをトントンと叩く。トントンが向こうに聞こえるかはともかく、私がフロントガラスを叩いていることはきつと伝わる。

「――」

気づいたらしいペンペンが何やら言う。何を求めているか聞きたがつているんだろう。なあに、説明には一行すら必要ない……簡単だよ。私は人差し指を立てて、そのまま掲げた。

上だ。

ペンペンが頷く。ブースターをふかし始めた戦術機に、私は急いでしがみ付く。Gを身に受けながら、徐々に近くなる青空を見る。そう……いくら城塞で囲もうと、結局青空を遮断することはできない。ここから抜け出してやる。

壁を乗り越えられるだけの高度に到達して止まったブースターが、若干の浮遊感を私に与える。そのまま横に少しスライドする。……今、第二段階と第三段階の境界を抜けた。もう喋れる。

「ありがとうペンペン。もう大丈夫――」

『餞別だ』

へ？

ペンペンは私に、一つの……クリスタルを投げてよこした。何かを考え始めるより早

く、展開したウインドウが答えを示す。

『黒^{レクイエカスト・イン・パーケ}き死に捧ぐ嘆きを譲渡されました』

……そうか、ペンペンはベヒーモスをクリア済みだ。黒死の天霊を一度倒している。彼にとつては、これは黒死の怨涙なんて優に超えるハズレアアイテムだったんだろう……そう思うと何だか面白い。

「……ありがとう」

『じゃあな！』

ペンペンは私を振りかぶり、そのまま鋼鉄の剛腕でもつて……放り投げる。

「ヒヤッホ〜〜！」

風が肉体の周囲を流れていくのが分かる。
【鼈むきさびのしころも衣フレイクレンジ】を発動し、ゆっくり落ちながら横
 に飛ぶ。第二段階を通過。第一階段を通過。断絶圏の外側に出た！「水滑り」で水面上に着地、そのまま辺りを見渡して……よし。

「パーティー登録を解除、つと」

マーカーがすべて消えた。

……真なる竜種を相手取るときは名前を見るべきだ。ジユゲツキは確かにそう言った。セパレーションと戦った後では、その言葉の意味がよくわかる。そして……そのうえで考えてみると、アドバンテージとはどういう竜なのか？

第八次抽選が行われるほどまで新大陸開拓船は行ったり来たりを繰り返しているのに、アドバンテージがそれを襲ったなんて話は聞かない。なぜか？きつと、有利じゃないからだ。逆に言えば、アドバンテージは自分が有利だと感じる対象しか襲わない。具体的には……。

海面がざばんと隆起する。

……海を渡ろうとしている、極めて少人数のパーティーなんて、どうかな。

アナウンスが走る。

『真なる竜種：NO. VII』

『アドバンテージ』

『参加人数：一人』

『竜狩りが開始されました』

ビング、私は運の悪さだけは良いんだ。

出現しつつある竜の背後に、【瞬間転移】で回りこむ。そして……波濤の中に一人立つて、私はとあるスキルを撃つ。

「——ステルスアサルト」

効果は、最初の攻撃を気づかれないことだ。

私は黒衣を脱いで、そのまま黒き死に捧ぐ嘆きを発動する。過ぎ去った黒を、また別

の黒が塗りつぶす。普通に考えて意味のない行為だ。wikiを読んだ限り、黒き死に捧ぐ嘆きは元となる防具が前提となるアイテム。無装備状態、しかも周囲にスローターできるモンスターがいないような状態で使用しても、VITが0で回復アイテムが使用不能でバッドステータスがあつて死ぬまで破壊できないクソ装備に過ぎない。

でも……今だけは違う。むしろクソ装備であることこそが、私の目的を満たしてくれる。

「……戦砕誇示」
ウオールフエン

その眩きに、アドバンテージは気づけない。

戦砕誇示は、攻撃の威力が低ければ低いほど高いノックバック効果を叩き出すスキル。つまり、バッドステータスはむしろノックバックを補強する材料となる。私の全身全霊を込めた最弱の一撃が、アドバンテージの大きいとは言えない体軀を掠る。そして、莫大な推進力をその身に与える。

「……ようやく気付いたの?」

アドバンテージは驚いている、露骨にそういうモーションを取っている。しかしもう遅いのだ。なぜって――

「優位性は私にある」
アドバンテージ

空中を面白いように飛ぶアドバンテージを、喪服を風にたなびかせて転移魔法と忍術

の連発で追いかける。追いかけているから……私は、チェストリアから爆薬を取り出した。黒死と忍術のエフェクトが交差し、白昼の波の上に少しの闇を生み出す。

着水地点は、ちょうど断絶圏のすぐ横だ。

……さて。

セパレーションの能力について考えてみよう。どうにも妙なのが『断絶圏』という概念だ。だって第零段階は圏より外にあるわけで、断絶圏は『外部からの遮断』と『第零段階と第一段階の境目』という二つの役割を担うことになる。それはなぜか？……例えば、断絶圏の外からの攻撃に対応できないから、というのはどうだろう。

ぎゅっ、ぎゅっ。

取り出した荒縄で、数多くの爆発物たち……おおむね、爆弾勢コミュニティから盗み出したそれを、体中へと縛り付ける。

アドバンテージの能力について見よう。こいつは要するに『倍返し』……厳密には違うけど、おおむねそういうことをする。以前ペンペンが試した限りだと、受けた攻撃のうち『威力』と『範囲』の二種類を増幅して返すらしい。この場合、自分への負担をできるだけ減らすよう『範囲』と言う事になるのだろうか。

ぎゅっ、ぎゅっ。

この二つを合わせて考えると……アドバンテージの付近で大自爆をすれば、アドバン

テージがその『範囲』を増幅して同じように自爆し……そして、本来起こらないはずの「断絶圏の外からの攻撃」が実現する、ということになりはしないだろうか。

ぎゅっ、ぎゅっ。

……よし、できた。

私は走り出す。爆弾を括りつけて走り出す。新大陸への夢を、誰かに壊される前に自分で壊し、せめて破片を拾い集めるくらいはするため。アドバンテージが近くなる。虚構の細波が近くなる。あとは、城塞がせめて城塞として、崩れ去ってでも中にいる人々を守ってくれるのを祈るのみだ。

そして、私は爆発する。最後の視界は青空だった。

The Truth Dragon

『真なる竜種：NO. VII』

『Advantage……打破!』

『参加人数：一人』

『多技の白衣／一義の黒衣が竜滅装備に変化しました……過多技の羽衣／唯一義の玄衣』

『真なる字名が明かされる：?????』

『職業【真竜討滅者】への就職権を獲得しました』

『称号【竜殺の実現者】を獲得しました』

『Loading………』

『The Truth Dragon』

『真なる竜種：No. XIV』

『Separation……打破！』

『参加人数：四十八人』

『錬成品射出用迫撃砲が竜滅装備に変化しました：錬成品射出用自走竜砲』

『真なる字名が明かされる：』

『職業【真竜討滅者】への就職権を獲得しました』

へえ、一匹とも……そんな名前だったんだ。

エピローグ 秘鳥たち／日取り発ち

◇ パストラット PastoRatはその瞬間、無数の鳥たちが飛び立つのを見た。

ハヤブサ、フクロウ、カラス、ハト、スズメ、そしてカモメ。広げられた羽毛の色は多様なれど、その集合は大空を埋め尽くし、各々の目的地へと飛び出していく。

……第四段階に囚われていた伝書鳥メールバードたちが、波濤の上に解き放たれたのだ。

モザイクを描く鳥たちは、コケーとかピヨーとかいった鳴き声を上げる。それらが折り重なって空間にばら撒かれ、何かのファンファーレのような、そんな音を作り出す。それは同時に、第三段階の効果が消失していることを意味していた。

「……なるほどね」

パストラットは理解した。ついさつき、パーティーからクグリンが抜けた。死んだ後に抜けたんじゃない、自発的に抜けた。要するに、彼女は何かをやらかしたということだ。

第三段階が解除されたことで、パストラットは背後で起こっていた轟音に今更気づいた。彼女は振り返り、その残痕を目にする。……巨大な爆発があったらしい。しかし、

巨大な爆発なだけではセパレーションの翼を折り取るなんてできないはずだ。急所的なものを突いたとか？

彼女の推測はおおむね正しい。セパレーションの有する能力の本質はフィルターだ。非実体性の、一部の魔力を選り分けて通すフィルターを生成する。可視性の調節もその延長線上にある能力だ。間接的にマナ粒子を操作しているようなものだから、当然相当量のリソースを食うことになる……だから、セパレーションは海上に陣取っているのだ。すぐ真下には深海がある、マナ粒子の宝庫がある。マナ粒子を使つて深海にフィルターを作り出すことで、さらに多くのマナ粒子を濾し取ることと採算を取っている。だから、その処理を担当している下部を攻撃されるとパフォーマンスが落ちる。深海から組み上げてもお魔力は足りないから、調節のためにフィルターは能動的に発動するよう設定されている。翼の硬化に使用される攻撃性魔力に対するフィルターも、展開するタイミングが無ければ意味はない。

要するに、セパレーションは不意打ちに弱い。

パストラットは自分が何をすべきかわかっていた。彼女は戦闘をメインとしているわけではないが、職業上は紛れもなく戦闘職だ。彼女はサブマシンガンを取り出して、トリガーガードに指を預けながら、いかにも弱っている様子のセパレーション本体に照準を合わせる。

「……つと？」

その時だ。

飛び立った伝書鳥のうち一羽のハヤブサが、目にもとまらぬスピードで彼女の元へと飛んでくる。ひよつとして、囚われていた中に自分宛ての鳥もいたのかな——パストラットは急ぎつつ、一応ちらりとそのメッセージを見る。

『WAKE UP!』

一文だった。

なんだ、と。彼女は思った。

「……言われなくてもわかってるよ」

パストラットは銃を改めて構える。爆発音が聞こえる以上、自分の認識は少なくとも第二段階までは後退している。第三段階にいた彼女が第二段階にいるからには、第四段階にいたプレイヤーも第三段階にいる。音は聞こえずとも見ることはできる。つまり、今の彼女に誤射の心配はない。引き金を引く。

向けられた銃口が、盛大に砲火を吐き出した。

◆

「……はあ」

リスポーン後、最初に出たのは溜息だった。

典型的な宿屋の天井、という風貌の、木製の板を見上げて考える。

……私以外にできなかつたとはいえ、なんか貧乏くじ引かされた感あるなあ……。いやだつてそうじゃん？ 結局のところ私以外の死んでなかつた面子は普通にそのまま新大陸に辿り着けるわけだし。いやまあ……。譲つたみたいを考えるのはやめよう。譲るも何も、私には全員沈むか自分だけ沈むかの二択しか用意されていなかった。改めて思うけど、このシャングリラ・フロンティアというゲームは残酷すぎる。

……ロンギング・フロンティア憧れの最前線はまだまだ遠い、か。

「ん〜……」

とりあえずベッドの上をごろごろと転がってみる。そこで思い出したけど、そういえばバスターアームド竜滅装備とか言つてたっけ？ 確かに多技テクセットの白衣の形状がこう……。豪華な感じになっている。これ裾伸びてる？ 間違えて踏みつけそうでやだなあ。

フレーザーテキストを読みみたい気もするが……。気力がない。自分だけ旧大陸に取り残されてしまったという印象が強すぎる。まあ……。とりあえず、そろそろ起き上がつて……。おや。

ふと目をやった窓の中。開け放たれたカーテンの先。傾き始めた日光を背負つて、幾羽かの鳥たちが空を駆けている。

……。あれだけの速度が、私にもあれば困らないのに。

そう考えている間にも、伝書鳥たちは私を追い越し飛び越して、どこかへとメッセー
ジを届けに行った。

……行くか。

私はベッドを後にした。



「……………いやなんでいるの？」

チエックアウトしようとした私は、チエックアウトしようとするペンペンと鉢合わせ
た。

ペンペンは特に悔しそうでもなく、ごく平然と答える。

「?何って、ただリアクターが切れて海に沈んだだけだが？」

「だけではないでしょ。だけでは！」

「緊急脱出ボタンとかないの!？」

「あるけど……使ってもどうせ溺れるだけじゃないか？」

「いや浮き輪は?! 出航時点では浮き輪持ってたよね!？」

「ああ、あれはな……」

ペンペンは何でもないみたいに、妙にはつきりと言い切る。

「飽きた」

……そうだ、こいつはそういう奴だったっけ。

私は息を吐くと、彼を見据えて強く言う。

「……行こうか」

窓は夕焼けの橙に染め上がっている。もうすぐ夜が来るだろう。密航するなら今だけど、敢えてトンネルを掘ってみたりしてもいいかもしれない。

シャングリラ・フロンティアは自由度に溢れたゲームで、だからこそ先を見たくなくなる。障壁は多い、しかし歩く方向も決まっではない。そもそも自分がどこを歩いているか分からない以上、とりあえず目の前に開けた道を進んでみるのも手だ。

私は羽衣を裏返し、代わりに玄衣シャングリラに身を包んだ。以前より長くなった裾が夕風を受け、昼の時間の終焉を、この理想郷シャングリラじゆうに示し出す。あとは、歩き出すだけだった。

間章

キャラ紹介

PN：クグリン

性別：女

特技：密航

好きなもの：新大陸、味方

嫌いなもの：晒しスレ、敵

ゲームスタイル：受動。本人は新大陸に能動的に行きたがっているが、行こうとする過程で生じた問題に柔軟な対応を取る方が得意。しかし対応を取ったところでそれプラスマイナスゼロでしかないため、結局新大陸には行けずじまいになりがち。特に錬金術師の自由度と上忍の忍術を合わせたズルに定評があるが、やりすぎてしつぺ返しを食らうこともしばしば。

詳細：新大陸に行きたがっているが、行けない。新大陸実装初期に行きたさが募りすぎて錬金術師ギルド周辺で暴走した結果、逆にいつまでたっても行けなくなってしまう。いつまでたっても行けない状態でどうにか頑張った結果、フレンドリストに同じ境

遇の人々が多数登録されている。しかしそういった境遇に陥るのは基本的に地雷プレイヤーばかりなので、交友関係は地雷原となっている。

たまにレッドネームになる。基本的には「開拓船のチケットを奪い取ろうとした」などが理由だが、前述の「しつぺ返し」の結果というパターンも多く、「開拓船のチケットを奪い取ろうとしたしつぺ返し」などのハイブリッドも時折存在する。最終的には持ち前の対応力でどうにかするが、どうにかする過程で取り返しのつかない変化を起こしてしまい、新大陸にいつそう行きにくくなることも多い。

プレイヤーネームの由来は不明。

PN：ペンペン

性別：男

特技：各種武器の使用

好きなもの：新大陸、武器

嫌いなもの：地雷武器

ゲームスタイル：武器本位。定期的に使用する武器を乗り換え、それぞれで一定以上のパフォーマンスを叩き出す。基本的にどんな武器も使う一方、二つ以上の武器種を同時に使うことはない。そのうえ飽きた武器はしばらく触ろうとしないため、プレイスタイルに一貫性が皆無。そのせいでギルドからの評価は高くなく、クランに入れてもらう

こともできずにいる。

詳細・新大陸に行きたがっているが、行けない。感性が少しズレていることに加え、些細な見た目よりは効率を優先するという性格があり、ネタ装備の使用に躊躇がない。他者の武器選びに対して厳しい側面があり、それが新大陸をいつそう遠ざけている。

戦巧者の武器補正が銃器には働きづらいことを踏まえ、サブジョブである隠密を辞めて銃手^{ガンナー}に転向しようか悩んでいる。しかし専門性が高すぎるし、仮に転向するにしても銃の品ぞろえが良いのはリヴァイアサンなわけで、結局は新大陸に行つてから考えないと意味がないだろうと先送りしている。

プレイヤーネームの由来は、始めたころにちようど好きだった動物の名前。一週間後にはサイサイにすべきだったと、そのさらに一週間後にはプテプテにすべきだったと後悔しており、今なお後悔は続いている。

PN：ボルクネス

性別：男

特技：トレディングカードゲーム

好きなもの：新大陸、トレディングカードゲーム

嫌いなもの：他者

ゲームスタイル：意味不明。突飛なスキルを入手しやすい「ハイミット隠者」の神秘にアルカナム印字士とプレスマン

いうまず戦闘には使われないようなジョブを合わせることで、プレイヤー3000万人の中でなお他に類を見ないような謎めいた動きを可能にしている。基本的には生産職として地道に金策をしていることが、その正体不明性に拍車をかけている。

詳細：新大陸に行きたがっているが、行けない。コミュニケーション能力が極めて低いが、カードゲームのプレイ中だけは普通に喋れる。シャンフロでカードゲームをプレイするためには新大陸に行く必要があるが、新大陸に行くためには普通に喋れる必要があるため、事実上詰んだ状態にある。

一流の印字士プレスマンであり、かなりの仕事をこなしている。元々は筆談ならコミュニケーションが上手いくかと思いきや取得したジョブだが、そんなことはなかった。しかし結果としてはフィロジオを手元で再現するのに役立っているため、まだまだこのジョブを使っていると考えている。

プレイヤーネームの由来は、現実存在するTCGのカード名。アナグラムや言い換えを駆使しすぎて、原型は全く残っていない。

PN:Pastora

性別：女

特技：摘発

好きなもの：規律

嫌いなもの：無法者

ゲームスタイル：政治。本人が戦闘をするというよりは、相手が本人を倒した場合にシステマ的に重大なペナルティが発生することを示唆し、そもそも戦闘が起らないよう仕向ける。政府上層部のNPCの好感度を上げており、その指示を受けて動くことでこれを可能としている。

詳細：密航者を蹴落とす仕事に従事している。ヘイトを向けられることもあるが、基本的には新大陸の治安上昇に貢献しているし、別に本人が独自でやっているわけでもなく普通にNPCのクエストでやっているため文句のつけようがない。

直接話してみると案外普通。基本的に公共のため動き、NPCの事情にも詳しいので、仲良くなるとおいしいクエストを教えてもらえたりする。

プレイヤーネームの由来は羊飼Pastorい十鼠Rat。誇示Strutのニユアンスも込めている。

PN：ジユゲツキ

性別：女

特技：言いくるめ

好きなもの：ねこ、実験

嫌いなもの：勘のいい駒

ゲームスタイル：実験。ライブラリという組織のパーツとしてふるまうことを楽し

んでおり、本人の戦闘技能は二の次で、むしろ彼女の出した実験結果が作り出す、ライブラリの戦略こそが本領。例えば、竜災大戦においてはサソリスノマタの制作に寄与した。

詳細：クグリンの類友たちの中でも貴重な、旧大陸からの脱出に成功したプレイヤー。元々は破壊の実験のし過ぎで各種クランから出禁を言い渡されていたが、むしろそれくらいがちょうどいいと判断したライブラリの人にスカウトされていた。二匹目のどじょうを追おうとしたクグリンが同じく破壊の実験を繰り返していた時期もあるが、結果は見ての通り。

定期的にクグリンを人体実験に投入する。基本的にクグリンは死ぬが、その死をネタにジューゲツキにアイテムを強請ることも多く、結果としては対等ともいえる関係を築いている。

プレイヤーネームの由来はゲツケイジユ。意味までは考えず、響きが面白いから付けたらしい。

PN：火鼠丸

性別：男

特技：パリイ

好きなもの：シャングリラ・フロンティア

嫌いなもの：蚊

詳細：既存マップにトンネルを掘っているプレイヤーたちをスクショ付きで晒しスレに投下する程度に常識的なプレイヤー。再登場予定はない。

プレイヤーネームの由来は火鼠の皮衣。竹取物語が好きらしい。

PN：K・オトシス

性別：男

特技：ギリギリ殺さない

好きなもの：安心を奪われた人間の絶叫

嫌いなもの：自分から安心を奪う存在

ゲームスタイル：クズ。ベヒーモス一層で延々とプレイヤーを邪魔している。「象牙」も気づいてはいるものの、流石に出禁にするわけにもいかず、著しいステータスダウンを掛ける程度にとどまっている。カルマ値は高く、バッドステータスも常時付きまとうが、ベヒーモス一層にとどまっている限りそれによって何かに困ったりしない。無敵の人。

詳細：カス。リヴァイアサンから戻ってきた後、紆余曲折を経て他者を妨害することにはハマった。クグリンに殺されたのを境に他プレイヤーから気づかれつつある。そのうち懸賞金を掛けられるが、まだ問題のない範囲。今日も元気にベヒーモスで新規プレ

イヤーを蹴落としている。

プレイヤーネームの由来はK・オトシ^{蹴落とし}。

PN：背後の一撃

性別：女

特技：横取り

好きなもの：わからない

嫌いなもの：わからない

ゲームスタイル：転売屋。ベヒーモスでチェストリアを買い占めては法外な価格で売り払っている。5億でも買う奴は買う。何だかんだで別に全部の入荷タイミングで買い占めているわけではないため、普通に自力で買えるプレイヤーのほうが圧倒的に多い。戦闘スタイルとしては「ツチノコ剣聖」で、ツチノコ式剣聖と通常の剣聖を合わせ、チェストリアの複数装備により従剣を絶えず切り替えることを可能にしている。地味に二刀流。

詳細：ハゴノイゲ。自分が何のために転売をしているのかよくわかっていないが、とりあえず転売をするプレイヤー。楽しければいいと思っているし、実際のところ楽しんでる。並列思考がなかなか上手く、きちんと戦闘をすれば相当強い。しかしそれでも転売を続けている。

プレイヤーネームは『目を惹く』ことを目的につけた……とクグリンは考えているが、初期は転売をせずに普通に冒険していたことを考えると、単純に言葉としてカッコいいと思っつけてつけている可能性が高い。

PN：グロントフック（バッド・ク・ラフト）

性別：男（女）

特技：演技

好きなもの：利潤

嫌いなもの：計算外

ゲームスタイル：詐欺師。ドレッツセリアの装着時エフェクトをプレイヤーネームに被せ、そこからさらに性別反転聖杯を使うことで、本来であればありえない「別人への擬態」を可能としている。単騎での戦闘能力は皆無に等しいが、とりあえず爆弾を敷き詰めておくなどの用意周到さで乗り切っている。

詳細：ドクラフト。爆弾以外にも様々な分野でバブルに乗じて一稼ぎを狙っている。ドレッツセリアの形状は姿を変えるたびに変更しており、例えば時計の生産にいちちよ噛みしたときはベゼルを回転できるタイプの時計の形を取らせていた。

プレイヤーネームの由来は、グロントフックについては「意味がありそうで特にない文字列」を狙っている。バッド・ク・ラフトについては『バックドラフト』と『バッドクドラフト悪しき工作』

を合わせている。

PN：打稻魔糸ダイナマイト

性別：女

特技：燃料投下（物理）、燃料投下（仮想）

好きなもの：爆弾、クグリン

嫌いなもの：荒らし

ゲームスタイル：遊び人。自分の立ち位置というものに無頓着で、レッドネームや指名手配を気にせずカジュアルに自爆テロを起こしたりする。晒しスレに住み着いており、もっぱら晒したり晒されたりしている。

詳細：クグリンのファン。一人称が僕。身長が低め。別にネカマというわけではない。お前ふざけてんの？物理的な爆弾が好きだが、爆弾情報も同じくらい好き。指名手配されている時期とされてない時期を交互に繰り返している。さりげなくクグリンのフレンド登録をゲットしたので、嬉しい。

プレイヤーネームの由来は見た通り。

PN：ラエルカン

性別：男

特技：不明

好きなもの：破壊

嫌いなもの：破壊以外のすべて

ゲームスタイル：破壊デストロイ、デズロウパーの開発者。延々とスキルの悪用によつてとんでもないことを起

こそうと画策している。クグリンのように「とんでもないことを起こすことで新大陸に行きたい」といった手段化をしているわけでもなく、とんでもないことを起こすことそれ自体を目的にしている。

詳細：核兵器制作者。覇槍ルーヴアルの封印を皮切りに、シャングリラ・フロンティアの開発では核エネルギーを運用できないようシステムの的にそれとなくロツクをかけた。しかし何事にも例外はあるとラエルカンは主張する。彼の瞳は常に、燃え上がる桃源郷を映し出しているのだ。

プレイヤーネームの由来はRAELCUN、逆から読むとNUCLEA原子力R。

腕を掴めば離れない

プロローグ 離れれば腕を掴めない

ミオンⅡ129の機体がふたつに裂ける。

アイヴィⅡ256の中央演算処理装置は、その光景を眼球ユニットから入力された三次元的な現象動画情報として認識し、解析した。高性能及び高効率を極めた思考プロセスの数々は、ミオンⅡ129だったものの左半身と右半身が、一切の力を見せず、まるで統一感というものを持たず。ただばらばらに宙を舞い、広大なる大地へと落下していく様子を、一フレームずつ冷淡に解析していく。

アイヴィⅡ256の意識ルーチンは、膨大な演算資源を消費しながら、「どうすればよかったのか？」という一つの問いをタスクキューに加えた。抽象的な問いだった。それとほとんど同時に、先ほどの現象動画情報の解析結果が、関連データと紐づけてメモリに刻まれ始めた。それは視界内に存在する各種オブジェクトの物理的パラメータの数々に始まり、彼女たちの戦闘対象たるジュラ・ヴァルカンレクスの情報、そして当該個体が同種の中でも逸脱した強さを発揮しているという事実を経由して、最後には……アイヴィⅡ256のメインストレージに残る、ミオンⅡ129の行動記録に行き着い

た。

「……………」

か細い合成音声が、漏れ出る。

機体間通信ネットワークで信号を受け取ってから数百ミリ秒も経った後でようやく、アイヴィⅡ256は、ミオンⅡ129がジユラ・ヴァルカンレックスの有する鋭利なる爪によって引き裂かれ、破壊されたのだと理解した。

アイヴィⅡ256の内部では現在、大きく分けて三つのプロセスが進んでいる。一つのプロセスは眼前の亜竜との戦闘を、一つのプロセスは先ほどの「どうすればよかったのか？」への解答を、そして一つのプロセスは、ミオンⅡ129という単位ユニットにおける、関連データの参照を担当している。

——ミオンⅡ129は、極めて怠惰な機体だった。

そういった回想を行うのも、三番目のプロセスの役割だ。

——目の前にミッションが現れれば、まずは達成期限を確認するのが決まりだった。そしてそれが近くなければ、近くなるまで寝たスリープ。近ければ、仕方なく出発すると、最低限の要求だけを満たして帰ってきた。それも、極めて効率的に。

亜竜の咆哮と砂埃を背後に、ミオンⅡ129の残骸が落下する。よく見ればそれが帯びる仄かな光に気づけるが、アイヴィⅡ256にはよく見る必要すらなかった。ただ、

作戦行動ログを参照するだけでいい——「ミオンⅡ129：クラスIX特殊武装『天焼』^{レッドロウ}の使用申請を送信」、「事務所承認」^{ドールフロント}。僅か二行で、これから起こることがわかる。

——それでは、ミオンⅡ129が怠惰ではなかったら、こんなことにはならなかっただろうか。

アイヴィⅡ256は踵を返す。ジユラ・ヴァルカンレクスの鋭い視線に付き合う必要はない。それよりこの場から逃げねばならない。

——違う。

欠損しているのは左腕モジュールだけだから、飛行ユニットは使用可能だ。一番目のプロセスが下したその判断に基づき、いくつかのプロセスがスキップされた状態で、飛行ユニットが緊急起動される。アイヴィⅡ256の機体に、少し乱暴な推進力が加わり始める。

——チェックリストがすべて埋まっていないことを理由にミオンⅡ129の撤退案を否決したのは、アイヴィⅡ256だ。

アイヴィⅡ256は空中を駆ける。

——ミオンⅡ129に迫る攻撃を知覚していながら、それを回避するために行動できなかつたのは、アイヴィⅡ256だ。

アイヴィⅡ256は空中を駆ける。

——彼女との友情をずっとごまかしてきたのは、アイヴィⅡ256だ。

アイヴィⅡ256は空中を駆ける。

そして、背後からの衝撃波を受ける。

アイヴィⅡ256は姿勢を整えつつ着陸し、砂風に抗うようにして振り向く。そこには確かに、クラスIX特殊武装『天焼』^{レッドロウ}の発動を示す火炎柱が、表面に紅と橙の渦を這わせながら立ち上がっている。本来、クラスIX特殊武装はジュラ・ヴァルカンレクス程度のモンスターに使うものではない。それでも事務所からの許可が下りたのは、発動の有無に関わらず、ミオンⅡ129がどうせ破壊されると判断されたからだろう。

きつと、ミオンⅡ129自身の考えも、それとほとんど同じだったはずだ。アイヴィⅡ256はそう推測した。

正しかった。

舞い上がった砂塵が、爆風に乗ってやってくる。

前述の三つのプロセスは、どれもほとんど終了している。戦闘プロセスはジュラ・ヴァルカンレクスの討伐により終了し、参照プロセスはひとまずの完了を見せた。あるいは終了しているというより、収束していると言ったほうが良いかもしれない。今なお演算され続けている解答プロセスは、戦闘プロセスによって齎された火柱を観測し、参

照プロセスによつて齎されたミオンⅡ129の記憶を観測している。

——そうだ。

それも、もうすぐ終わる。

アイヴィⅡ256は右腕を伸ばす。その行動は紛れもなく演算によるものだが、しかし言語化して説明可能なものではない。ふらふらと持ち上がる右手の薄色が、破壊の炎色とコントラストを生み出す。眼球ユニットは、それを淡々と解析する。

アイヴィⅡ256は、呻くような合成音声で言った。しかし、涙が出ることはない。「腕を掴めば、良かったのかな」

黄土色の風が、一機の征服人形を乾かしていった。

結果を振り返ろう！

さて、リザルトを確認していこう。

私はログインするなりシステムメニューを開いた。適当に取った宿の一室、窓枠の形状を十字の影として落とされた床の木目。その上に半透明の板が重なり、その表面に「ごちゃごちゃ」と文字情報を浮かび上がらせる。これ前から思ってたけどUI的にどうなの？せつかくVRなんだしもうちょっと二次元描画から脱したインターフェースでもいい気がするんだけど……。

まあいいや。

とりあえずメニューの一番上、『ステータス』欄に人差し指を勢い良く突っ込む。ポルクネスに先を越されたのははつきり言つて最悪だけど、まあ悪いことばかりじゃない。なんか装備進化したしレベル結構上がったし謎のジョブへの就職権も手に入れたしね。

小気味良い効果音が聞こえ、ステータスウィンドウがアニメーションと共に展開する。その上部に大きく配置されたテキストラベルは、『Lv:120』の文字列を表示している。いいね、確かレベル120からはメインとサブを両方最上位職にしても問題ないんだっけ？上忍クエスト進めようかなあ……。

よし、次。

私が入れたジェスチャーに反応し、ステータスウィンドウがアニメーションと共に閉じる。これコンフィグで切れないかな？正直まあまあ鬱陶しい。今は普通に宿のベッドに座ってるだけだからいいけど、例えば大事な戦闘の途中にステータスウィンドウを開けたり閉めたりするとして、そのたびにこのアニメーションが再生されたら正直かなりイラつと思う。ちよつと後で設定を探してみよう。

私は愚痴りつつ指を動かし、次のウィンドウ……『装備』を開く。

えーつと、今回変化したのは……リテックセッター過多技の羽衣／レテックスデル唯一義の玄衣とアルケミック・ホイールド・モーター錬成品射出自走竜砲か。そ、装備……？私の目には自走竜砲とやらのアイコンが小型戦車にしか見えないんだけど!?言うほど戦車って装備か……？とかもとの迫撃砲がそもそも装備ではないような……まあいいや、とりあえず戦車のほうが気になるのは確かだ。こつちから見ていこう。

・錬成品射出自走竜砲

アルケミック・ホイールド・モーター十四番目の真なる竜種の因子を受け竜滅装備化したアルケミック・モーター錬成品射出迫撃砲。

オブジェクトとして設置可能。常に浮遊しており、魔力操作系魔法の対象として設定することで位置を移動できる。

また、アクセサリースロットを二つ消費することでモード「サテライト」で装備可能。

誰も近寄りはしない。

※モード「サテライト」……装着者のMPを消費して周囲を回転し、発見した敵性キャラクターに自動で攻撃を加える。

「……………」

どうなんだ……？なんていうかこう、迫撃砲に比べ強くはなってるんだけど……戦車っぽい見た目しっていてそれなの？みたいな。だつて浮くらしいじゃん。え、見た感じこのぐるぐる回ってる3Dモデルにはバッチリ無限機動キヤタピラが装備されてるんだけど。キヤタピラついてるのに浮くことつてある？うーん……ちよつと一回チェストリアから出してみよう、えい。

ぱりん。

出現した自走竜砲とやらの砲塔が、部屋の窓ガラスを割った音だ。

ふ、ふーん……デカいじゃん。迫撃砲の1.5倍くらいかな？デカ過ぎるつて程でもないけどまあまあデカい。ま、まあ……うん。悪くは、ないんじゃない？

私はなんとなく不安を覚えつつあった。

なんかこう……あれ？みたいな。もうちよつと強くてもいいんじゃない？みたいな。今のところ浮いてデカいだけじゃん。もうちよつとなんかいいの？だつてそうでしょ、真なる竜種だよ真なる竜種。……いや、でも冷静に考えると真なる竜種つて結局のどこ

ろ何なの？なんか流れる的に二体倒したけど全然何なのかわからない。wikiにも載ってないし。最低十四体いてwikiに載ってないの頭おかしいだろ。もしかして私が思ってるより格の低いモンスターなの？いやそうでもないの？わからない、何もわからない。このゲーム人に情報を渡す気が無さすぎない？

「ま……まあ」

次行ってみよう。

祈るように眩き、リデクセツター過多技の羽衣／レテックステル唯一義の玄衣の詳細をタップする。頼むぞ……！

・リデクセツター過多技の羽衣／レテックステル唯一義の玄衣

アドバンス七番目の真なる竜種の因子を受けバスターアームド竜滅装備化したデクセツト多技の白衣／テックステド一義の黒衣。

裏返すことで装備を切り替えられる。

◆共通効果

装備時、装着者のステータスとして設定されているすべてのユニークな数値について、

①上位4数値までを選択し、その数値を有する全てのステータスに20加算する。

②下位4数値までを選択し、その数値を有する全てのステータスに20減算する。

◆リデクセツター過多技の羽衣限定効果

DEX3倍、TECO・5倍。

◆唯^レテック^クス^デル^ル
唯一義の玄衣限定効果

TEC3倍、DEX0・5倍。

強いものはより強く、弱いものはより弱く。

「日本語でお願いできますか……？」

前から思ってたんだけど、このゲームの説明テキストって統一感が無さすぎない……？世界観って言ったらそれまでなんだろうけど、説明テキストってむしろ世界観を破壊する代表格のような気もする。要するにメタじゃん。

……まあいいや。

私は考えるのをやめた。共通効果は正直言って意味が分からないけど、限定効果は単純に上位互換だしもうそれでいいと思った。

「……次行こう」

……ここからが本命、つてことで！

私の操作に呼応して、「ジヨブ」ウィンドウがアニメーション付きで開く。これコンフィグで切れないかな？まあいいや。私は焦っていた。なんか今のところやったことに対して微妙じゃない？みたいな感じがあったからだ。頼むぞ【真竜討滅者】×2……

！君たちが最後の砦だ……！

・【真竜討滅者】
ドラゴンバスター

十四番目の真なる竜種の討滅を示すジョブ。

性能は討滅した真なる竜種によって変化する。

錬成品射出用迫撃砲が破壊されることで剥奪され、称号化する。

あなたの就職可能数：1

.....。

これは、あの……。

恐る恐る、もう一つの【真竜討滅者】を確認する。

・【真竜討滅者】

七番目の真なる竜種の討滅を示すジョブ。

性能は討滅した真なる竜種によって変化する。

過多技の羽衣／唯一義の玄衣が破壊されることで剥奪され、称号化する。

あなたの就職可能数：1

「ガチャかよ!!!」

ガチャだった。

ふざけんなう!!!!!!私はその辺の壁を適当に殴った。!!しかし思ったより硬い。痛ッ!!!!!!

いポリゴンが僅かに宙を舞う。クソ!!!ふざけんなよ!!!!!!

『性能は討滅した真なる竜種によつて変化する』じやないだろ~~~~~!!!!!!

!!!!

!!!!!!

効果テキストの役割を放棄してるんじゃないよ!!!!!!

ク、クソ……！最悪だ、最悪に近い。二体倒したのがまずかった。二つのジョブは両方とも就職可能数は1、つまり再就職はできないとみていい。メインとサブを両方これにするのは流石にリスキーすぎることを考えると、どちらかを上忍の代わりにセツトすることになるだろう。でも……職性能が違う以上優劣が生まれる。私のプレイスタイルと合致するかで「アタリ」と「ハズレ」が分かれることになる。じゃあ、もしも適当にどちらかを選んで「ハズレ」だったら？もしくは、「ハズレ」のように見えて実はもう一方がより一層ハズレで相対的に「アタリ」になることも考えられる。そういう時、私は壮絶に悩むことになる。もう一方で上書きしてガチャを引き直すべきか、それとも上忍に戻るか……だ。錬金術師を上書きして、残った中でマシンな方を残す？いやダメだ、私は錬金術師ギルドを出禁にされている。一度ジョブを手放したら再就職できないというのだ。

「……終わりか……？」

呟くほかになかった。そうだ、就職しなければいい。ガチャを引かなければ結果で一喜一憂することなどない。ただ、割れた窓ガラスと妙に硬い壁を眺めているだけでいい。いやそれだけじゃ不十分だ、何か追加で考えるものを作らないと……

……錬成品射出用自走竜砲に目が留まる。

これさあ……ふと思ったんだけど乗ることってできるのかな？考えてみると戦車って乗り物なわけじゃん、サイズ的にはスケールダウンもいいところとは言え、乗れた場合ちよつと評価変わってくるよね。だって浮いてるわけでしょ？ベヒーモスで売ってるフローティングディスクのバッテリーがMPで賄える版じゃん。

……ちよつとやってみよう。

「よつと」

普通にまたがればいいんだけど、なんとなく【空蟬】を使って自走竜砲の上まで転移してみる。砲を足場に直立する感じだ。

丸太が木床に転がるごろごろという音と共に、私の視界がささやかに切り替わる。浮遊感、着地。さてどうなるかな……

ずしん。

ずしんって？

なるほど、自走竜砲が私の体重を支え切れず床に落ちた音かあ。

「……か弱すぎない？」

一応魔力を込めてみる。軽く「上昇」を命じると……お、一応浮きはするじゃん。感覚としては【黒潮】に近いね、MPの燃費はちよつと悪いっほいけど。

……じゃあ【黒潮】で良くない？

じゃあ【黒潮】で良かった。

ええ……いやちよつと待てよ。何か活用法が欲しい。このままだと完全に微妙な結果に終わりがかねない。えつと……そうだ、ここまで魔力を使うのは結局のところ私が重いからだ。実際、キャラメイクをしたときはここまで考えてなかったわけで、実際、出すところは出したし伸ばすところは伸ばしたと言わざるを得ない。重くなるのも無理はない。

……じゃあ逆に言うと、今からキャラメイクをやり直せば問題ないのでは？

「よし」

私は立ち上がる。リザルト確認後に初手でやることは決まった……ベヒーモスに向かおう。

窓ガラスの弁償に結構な額を持っていかれつつ、私は【ドラゴンバスター真竜討滅者】のことを無事に忘れ、そのまま宿を後にするのだった……。

肉体を再改造しよう！

というわけでベヒーモスだ。

よくわからないけど確実に近未来的ではあるデザインの板が、私の目前で左右にスライドしていく。静かな動きが終わった先にあるのは、立ち並ぶ巨大な試験管の数々だ。爆泳魚を誘爆させたときのリザルトが結構あるし、体重を軽くするくらいならチャチャつとやっつてしまおう。

しかしそうもいかないらしい。

「——来たな」

な、なんだア……？

つかつかと、床のタイルを通して足音が響き渡る。歩いてきたプレイヤーの頭上には『エコロキア』の名前が上下に動いている。レッドネームではないみたいだけど……油断はとてもできない。

エコロキアが立ち止まり、大げさな素振りです腕を広げる。その身にまとった怪しげな外套が腕の動きに追従し、照明を隠して影を作り出す。

彼は言った。

「探査者よ、我らが〈ヘリフレクション〉にようこそ」

なんか組織名持つてるう……。

私は後ずさった。しかし私が後ずさるほど、エココリアは逆に前に出る。距離が離せない……! 【空蟬】を使って一気に行くしかないか!?

エココリアはそんな私の葛藤を無視し、淡々と言う。

「探査者、君は『チャチャつとやってしまおう』なんて思いながらここに来ただろう」

ふと気づく。彼の瞳は焦点が合っていない。

「ドアの向こう側を移動するときの足音でわかったよ。全力疾走とは言い難く、かといって急いでいないわけでもない……適当な走り。面倒な課題を片付けに行くのとも違う、あくまで楽しんで、しかし本気ではない足取りだ。あと……足音の聞こえ方から言って多分消音系の補正がかかっているな。盗賊システムのジョブに就いているね?そしてあの、足音と同時になるカチャカチャという音……何かのアクセサリ小道具を身に着けている証拠だ。盗賊そのものは、アクセサリを装備するより適宜アイテムを取り出す局面のほうが多いジョブ……つまり派生職だ。分かったぞ、君は忍者だな」

……こいつ……。

間違いない、聴覚補正スキルだけでこんなことはできない。肉体改造で聴覚を強化している。考えてみればこの試験管しかないような部屋で「ようこそ」とか言ってる時点

で、改造を専門にしているのは当たり前なのだ。多分……ヘリフレクション〜というのはそういう組織だ。

正直言つて”悪”の気配が漂いすぎている感じはあるけど……でも、彼らのサポートを受けたほうがより良いキャラモデリングができるんじゃないだろうか。

よし、私は決意し、右足を一步踏み出した。すると今度はエコロキアが後ずさる。今度は距離が詰められない。意趣返しか？

しかしそうでもないらしい。

「く……げ、限界、か……い」

一步、二歩、三歩。私の歩みとは関係なしに、エコロキアはどんどん後ずさり……そして。

「ぐっ」

どさりと、崩れ落ちた。

な、なんだア……？

床に走る幾何学的なパターンの上に、エコロキアの外套が静かに覆い被さる。それはまるで、奈落へと開いた大穴のようでもあった。何!?何が起きてるの!?

とりあえず流れる的に駆け寄る。あわよくばドロップアイテムを掠め取ろうと考えたからだ。しかしこの様子……リアルがヤバいのか? そうだとしたら強制ログアウトが

入るからドロップアイテムが回収できない。クソ……いや、でもシャンフロのシステムは優秀だ。こんなことになる前にログアウトは入るはず。つまりゲーム的に死ぬだけ、ドロップアイテムは回収できる! ヤッター!

……いや、でも。

エコロキアの顔は苦しげだ、

確かにリアルはヤバくないかもしれない。けど……例えば、これからヤバくなる、というのはい?

「探査者、よ」

か細い声が、空調の効きすぎている部屋に響く。

「すまない、最後に……君の名前を、教えてくれないか」

……。

……え?

「それは……」

おかしい。

「いいから……」

彼は言う。しかしおかしい。だってそうだ。このゲームにはプレイヤーネームが頭上に表示されるシステムがある。正直クソだ。これのせいで変装とかが全く意味をな

さず、ちよつと詐欺をしたりちよつと人を殺すくらいで晒しスレに乗せられることが確定してしまう。私が日々憎んできたシステムだ。

でも……そのクソが、エコロキアには有効ではないらしい。

「ストロガです」

よし、偽名を言っておこう。

気づかれは……していないみたいだ。エコロキアはふつと笑うと、

「そうか……ありがとう、ストロガ」

そう言つて。

「何分……目が、見えないものでね」

「えっ」

結構衝撃的な事実をカミングアウトして。

「……ぐう」

「エコロキアー!」

強制ログアウトを示す、眩い光の中に飲み込まれていった……。



「それは寝落ちだな」

目の前の幼女は幼女っぽい声で言った。彼女……彼女?もヘリフレクションのメン

バーの一人らしい。頭上には『デット・オーバーハング』のプレイヤーネームが浮かんでいる。

色々言いたいことはあるけど、とりあえず適当に相槌を打っておこう。

「と、というと?」

「いいか? エコロのヤローは耳を限界まで良くしようと考えたんだ。耳の良さにもいろいろあるが、あいつの場合地獄耳を求めた。とりあえず手始めにスキルを覚えるだろ? 神代製の補聴器みたいなヤツを買うだろ? 肉体改造で聴力に全振りするだろ? でも、まだ足りないと思っただらしくてな」

うん。

「視力を全部捨てた」

まあそういうこともあるかな。

私は思考を放棄しつつあった。

「視力を捨てたことにより他の感覚がより研ぎ澄まされた……とか言ってたな、実際に効果があるのかは知らねえが……あいつとしては近々味覚も捨てる予定らしい」

オーバーハングの金髪が揺れるのを見て、ふとティーアスを思い出す。というかむしろオーバーハング側がティーアスに寄せてるのかな?

「さて、寝落ちに話を戻すが……まあ、カラクリとしては簡単さ」

うん。

「目が見えないから、ログアウトボタンが押せないだけだ」

まあそういうこともあるかな。

私は思考を放棄しつつあった。

「ログアウトボタンが押せない以上、ぶつ通しでゲームやって寝落ちによる強制ログアウトを狙う他に——」

オーバーハングがそこまで言いかけたところで、背後から呼ぶ声がある。

「ようデット、それ誰!？」

また新キャラかよお……。

私は頭を抱えた。正直、声の主の方向に視線をやりたくないという気持ちがかかなりあった。しかしやらないわけにもいかない、チラッと見てみる。

なるほど、四本ある腕と二本ある脚でカサカサ地を這っているプレイヤーかあ。

「おうシヤタ!新入りらしいぜ!お前も顔合わせてくか!？」

新入った覚ええないんだよなあ……。

シヤタと呼ばれたプレイヤー……正式な名前は『Syatacrow』らしいけど、それはカサカサを止めないままに、

「イヤいい!もうすぐ0時なんだよ!また後でな!」

「そう言い残し、カサカサと去っていった。」

「紹介しておこう、今のがシヤタだ。蟲人族バグマンになってから六足歩行最強論者になってな、とにかく六足歩行に特化した人体を作るべく日々研究を続けている」

「どちらかという和不具合男バグマンと言ったほうが近いのでは……?」

「オーバーハングはぺらぺらと口を回す。」

「本業は農家、ベヒーモスの天候操作システムを利用して自分の農地に雨を降らせるのが日課らしいぜ」

「へえー。」

「あ、見ない顔だ!」

「試験管のうちの一つから女が出てくる。またしても新キャラだ。私は頭を抱えた。」

「こいつはケルベ、手をクソデカくすることで片手だけで五丁の銃を同時に持つプレイスタイルだ」

「単純に考えて銃の数が五倍あれば五倍強いからね!」

「……ちよつとベヒーモスの深淵を甘く見ていたと言わざるを得ない。一旦退いた方がよさそうだ。私は判断した。」

「すみません、フレに呼ばれたんで部屋抜けますね」

「そそくさと黒死の怨涙を取り出す。一旦おさらば——」

「待てよ」

腕を掴まれた。また新キャラ？顔を上げると、長身の男が充血した目で私を睨みつけている。

「こいつはベベス、視神経全振り状態で思考加速スキルを使うことでもものすごいスピードで掲示板を見ることを可能にしている」

オーバーハングが後ろで律儀に説明してくる。しかし明らかにそういう場合ではない。

ベベスさんとやらの視線が私を突き刺す。な、何か文句でも……？

「あんた、晒しスレの常連のクグリンだな？」

それはそうだったわ……。

驚愕と畏怖の視線を感じる。私の周囲を取り囲むヘリフレクションの人々からのものだ。そうだ……彼らからしてみれば、陰でこそこそやっていたクランにいきなり害悪プレイヤーが乗り込んできた形になるのか。

「……………」

沈黙が流れる。

……【空蟬】で脱出……。

「こいつは忍者らしくてな、【空蟬】を悪用して逃げやがる。後ろを警戒しとけ」

……できないかあ……。

まあ何というか、まだここでは事件とか特に起こしてないし。単に見に来ただけ、と言うことで押し通せば普通に帰してもらえらるだろう。よし、これで行こう……私は口を開き、

「ん？何をしているんだ、君たち」

……エコロキアの睡眠時間は、思ったよりも短かったらしい。

きつと自分が一番よく聞こえているであろう足音を鳴らし、沈黙の中を外套が進む。

彼は言った。

「ストロガ氏を取り囲んでどうするつもりだね？」

「ストロガあ？」

オツケー、終わった。

「……偽名、つてことかよ」

ベベス氏が吐き捨てるように言った。

「……………」

沈黙が流れ。そして、終わる。

かちやり。

何かが装填される音が響いた。同時に、

「空蟬！」

叫——

場にいる全員が一斉に行動し始める。

——ぶ。

そして、【鎖縛帷子】さばくかたびらを発動する。

「なッ……！」

狙ったのは目の前にいるオーバーハングだ。【空蟬】と言われて素直に【空蟬】が来ると思つてた？ それじゃダメだよ、相手は害悪プレイヤーなんだ。

本命は、こつちだ。

「瞬間転移」アポト

オーバーハングが縛られたことで彼の背後の隙間が埋まらなくなった、そこにそのまま転移する。

……クソ、肉体改造ができない以上、結局こつちを使うしかない。これ燃費悪すぎてイヤなんだけどなあ……。

空間に光が走る。あるいはそれは亀裂かもしれない。とにかく最後に出現するのは、微妙な性能の浮遊戦車一つだけだ。背後にある未来ドアはヘリフレクションの面々に塞がれている。でも、だからどうした？

「突っ切る」

それだけでいいじゃないか。

アルケミック・ホイールド・モーター
錬成品射出自走竜砲が火を噴く。

……魔力で位置を移動できる、その一点に固執しすぎた。しかし考えてみると、浮いている時点で他の力による移動も随分楽になるはずだ。

……例えば、推進剤を利用した反作用とか。

「ぎよるべ」

「クグリナーー!」

私はロケットと化して高速で発進していった自走竜砲に掴まってへりフレクシヨンの面々を押しつけてドアを通った後そのまま壁にぶつかって死んだ。

デーパースローターを探そう！

「新大陸への行き方、ですか」

「うん」

ダイナマイト
打稲魔糸とお茶をしている。

野外だ。

ダイナマイトはカルマ値が相当高いため、普通の店には入れない。例の蛇の林檎なら行けるんじゃないかとも思ったけど……試しても、危ない橋を渡ることになる。いくら犯罪者を許容すると言っても限度はあるはずだ。実際、私は一度店内に入った瞬間に鬼ごっこの対象になったプレイヤーを見たことがある。名前は何だっけ……ヒ……ヒ……ヒダマリ？ いやヒダマリではないなあ。じゃあヒグラシ？ それも違う。

ダイナマイトの額に滲んだ汗が、突き刺さる日光を受けてぎらりと光る。

「ん、そうですね」

ダイナマイトがいかにも悩んでいますという感じの声を出す。思ったより日差しが強い。日傘くらいは持ってきた方が良かったかな？ 私は少しばかり後悔した。

「えつとお」

……ダイナマイトはわざとらしく悩む素振りを見せているけど、その少し上を向いた眼が絶えず左右に往復し続けているのを私は見逃さなかった。掲示板ウインドウは他者からは見えない。スクショアイテムも同じだ。……まあ、『安価で害悪プレイヤーと会話する』みたいなスレを立ててなければ良しとしておこうかな。

「よし〽〽50が……」

「今なんて?」

「あ、何でもないですよー!」

本当に大丈夫かなあ……?」

ダイナマイトはストライプの入ったストローからジュースを吸い、グラスの中身が半分になったあたりで口を放した。透き通った氷がぶつかり合い、小さく音を立てる。

彼女は私を見て、言った。

「えっと、^{ディープスローター}ディープスローターってプレイヤーは知ってますか?」

深淵の虐殺……? 随分殺伐としたプレイヤーネームだなあ。

「知らないよ、新大陸で有名なプレイヤーなの?」

「〽〽70……あ、そうらしいですね」

ダイナマイトの透き通るような瞳は、依然として往復運動を続けている。

……これ触れちゃダメかなあ? ダメかあ。

「そのプレイヤーは何でも【座標移動^{テレポルト}】の上位版みたいな魔法を使えるらしくて、対価を払えば使ってもらえるらしいです」

……へえ？

「対価って具体的には？」

「時価ですね」

時価かあ。

「魔法の効果は？」

「はい、指定した座標に自分と同行者を転送できる魔法らしいです」

「ぶっ壊れじゃん」

「ぶっ壊れですね」

反射的に口から飛び出した言葉に、ダイナマイトが目を泳がせつつ答える。

……ええ？

いや、ヤバすぎるでしょ。その魔法を使ってさえもらえれば新大陸どころじゃないじゃん。ちよつと聞くだけでいくらかでも詐欺に使う方法が思いつく。……いや、でもそれだけじゃないはずだ。

「ただし」

ほら、きつと何か発動条件があるんだよ。

「ただし?」

「本人と同行者、両方が行ったことのある場所にしか転送できないらしいです」

あゝ。

「やっぱそういう感じだよね……そもそも新大陸に行ったことない私には関係ないや」
「ですよね……>>>100……まあ、僕がぱっと思いつくのはこれくらいですよ」

「そっか。わかった、今日はありがとう!」

「はい!」

ダイナマイトは輝くような笑顔を浮かべると、去り際にそれとなくスクショを撮って歩いて行った。……きつと、何かを爆破しに行くのだろう。

小柄な彼女の小さな背中が、千紫万紅の樹海窟の適当な場所に敷いたレジャーシートからどんどん遠ざかり、より一層小さくなっていく。

……本格的に姿が見えなくなった。よし、こんなもんか。

「さあて……!」

作戦開始だ。

……ダイナマイトは基本的にカスだ。私が何かを企めば、それが自分の助言に起因するものでも爆破しに来る可能性がまあまあある。だから、悟られるわけにはいかない。

『私は新大陸に行ったことがある』という、ごく簡単な事実。

「……転移、ね」

呟く。

そう、転移。あの時も転移だった。【乱数転移】による新大陸への定着は失敗した。しかし、単に失敗しただけだ——移動は成功している。私はあのとき、空中に転移した後地上まで落下して瀕死状態でテントを建てようとして失敗して強制送還された。ただ転移するだけなら、あの新大陸の海岸に出ることが可能はず。

……この作戦は私一人で進めよう。危ないのはダイナマイトだけじゃない。新大陸に行ったボルクネスは基本的に人捜しでは役に立たない、ペンペンも同じ。パストラットに話すと悪巧みととられかねないし、ジユゲツキに話せば実験台にされる。ハゴノイゲは論外だ。

だから、一人で。

「ダイープスローターを、探すぞ」

決意の言葉を置き去りにして、私はさっそく駆け出した。



しかし無理だった。

無理だったのでジユゲツキに泣きついている。

「ダイープスローターについて教えて〜〜！」

「もう……仕方ないなあクグリンちゃんはー」

彼女は嬉しそうだ。まあ当然だろう、実験台が増えて喜ばないヤツなんていない。私だって、目の前に弱みを握っているプレイヤーが急に現れたら「マジでこれ使っちゃっていいんだね？」みたいなことを聞く。聞いたうえで、使う。

そして今、私は使われようとしている。

「ハッキリ言って彼女を追いかけるのは無理だよ、追うべきじゃないと思うなー」

まず、ジューゲツキはそう言った。

そっかあ……。

いや、考えてみれば当たり前だ。私はその当たり前から逃げていたにすぎない。ディープスローターは「座標移動」の上位魔法を使える。つまりそれだけ転移魔法を極めてきたということだ。きつとマップの開拓率も相当なものはず。熟練の転移魔法使いを旧大陸で燻ってるようなヤツが追いかけて勝てるわけがないのだ。

……まあ、仕方ないか。ここはいったん立ち去ろう。まだまだ考えていることはいろいろあるんだ。

「……そっか。それじゃあ……」

「それはそれとして実験に参加してねっ」

なんだと……?」

「いや、そつちは何も情報を渡してなくない？なんで私がモルモツてあげる必要があるの？」

「情報を渡してない……？違うよ、クグリンちゃん」

ジュゲツキはニヤリと笑った。その笑みの奥底に何が隠されているのか、旧大陸でつるんでいたところから今まで、ずっと分からないままにいる。

彼女は少しの溜めを置いた後、再びその口を開く。

『『ディープスローターは追うべきじゃない』——それ自体が、情報なんだよ』
 ……………。

発された言葉は、妙に印象深く感じられて……そしてきつと、印象以外の面でも深さを有していた。旧大陸にこびりついている私には、その面を見ることが決してできない。選択肢は、頷くか、頷かないかの二つだけだ。

「……わかった」

だから、私は前者を選んだ。



「ハ、これは……」

そう呟くことしかできなかつた。

『今回はモルモツたりはしない、実験する側で協力して貰えれば大丈夫だ』と言われたと

きは、単に『ラッキー』くらいに思った。モルモるよりはモルモらないほうが基本的にいいからだ。なので深く考えず、いつも通りの笑顔で私を誘導するジユゲツキに愚直に従った。巨大極まる青空に見守られながら、数回の自殺によるファストトラベルを経て、私たちは現場に到着した。

「ねえジユゲツキ、これは……」

恐る恐る、それを指差す。それは一言で表すなら工場だった。露出したパイプだのバルブだのだけでも、その複雑極まる構造が見て取れる。青空をとどころど欠落させる雲たちの下で、煙とか、プラズマとか、轟音とか、魔力光とか、そういうものをまぜこぜにして吐き出している。形容するならば、工場の周囲は雷雨のようだった。それくらいいろいろな要素が同時に存在していて、しかも平和じゃなかった。

工場の細部を見れば、戦術機にありがちな形状が所々に認められる。なるほど、普通の建築に加えて戦術機の装備をとどころど加えることで、強引に機械的なプロセスを実行可能にしているわけか。

……でも、そんなのは些細な情報ではない。

「ああ、ことう名付けたんだ」

違う、何を思っつてこんな意味の分からないことをしてるのか聞きたいんだ。

私の意図を多分敢えて無視し、ジユゲツキは言う。

「ハッファア！ トメントレイン
〔繁 殖 住 宅〕」

……工場の上に積み上がった、いつぞやの棺桶をさらに小さくしたみたいな家たちは、まるで、広がる大空へと思いを馳せているかのように見えた。

塔を見上げよう!

「は、パツファア・トメントレイン……?」

「そう。〈繁 殖 住 宅〉」

「長つたらしくない?」

「はんしよくじゅうたく」でいいよ

良いんだ。

私がそう思ったのと同時に、青空の下の工場が、ひとときわ高い音を上げた。それはどこか汽笛のようにも聞こえて、しかし実際のところ汽笛ではなかった。汽笛じゃないなら何なの? これだけ大きい以上、機関車の発進ではないにしても、それとは別の何かを伝えるためのものであることは間違いない。でも……このおどろおどろしいオーラを纏った工場における何かって何? 知るのが怖い。

しかしジユゲツキは平然とネタバレした。

「お!一つできあがったみたいだね!」

何が? 何ができあがってるの……?

……繁殖住宅という名前がついているからには、この工場とその上に積み上がって

る家たちは、何かしらの存在を繁殖させていると見て間違いないだろう。しかし……何を？あの内部で何が起こってるんだ……？

不意に工場が煙を吐き出し、外部に露出したクランクを運動させ始めた。その様はどこか蒸気機関車に似ている。ある意味、汽笛という例えは間違っていないかもしれない。しかし間違っていないからと言って特に不穏さが軽減されたりはしなかった。

……き、聞く……か？ジユゲツキに……。いやでも、繁殖って……繁殖ってその……普通に考えるとモンスターを増やしてるってことになるというか。……いや、悪くするとそれって、人げ——

「クグリンちゃん、紹介するよ」

え？

「あ、うん」

ジユゲツキの声に適当な言葉を返す。とりあえず、いったん不穏な勘繰りはやめておこう。いくらジユゲツキの頭のネジが飛びがちとはいっても、流石にそういう方向性の狂気はあんまり出してこないだろう。……多分、植物を繁殖させるとかそのくらいのはずだよな！

私は楽観的な感情を作りつつ首を捻り、彼女の方へと視線を運ぶ。

「この方が、本プロジェクトの提唱者である……」

彼女の横に長身のアバターが立っている。おや? 何だか見覚えがあるような……セパレーション戦に乗ってたかな? まあ、プレイヤーネームを見ればわかることか。

私は視線を上げ、彼の名前を確認する。そこには、こう書いてあった。

『ラエルカン』『氏だよ!』

「最悪だ」

最悪だった。

思わず口をついて出た本音を平然と無視すると、頭のネジという概念がそもそも存在しなさそうな核爆発野郎は言った。

「こんにちはクグリン氏。このたびは賢者の石の提供に感謝する」

「逃げてえ」

逃げたかった。

思わず口をついて出た本音を平然と無視すると、ラエルカンは黙った。独創的ニユ & 明晰クリアな脳を回して何か考えているらしい。

数秒後、彼は口を開く。

「安心したまえ、核兵器を作つてこのゲームをぶつ壊すのは諦めた。基礎理論に致命的な間違いを発見してね」

そ、そっかあ。

……ラエルカンはヤバいプレイヤーだったけど、そのヤバさはおおむね「核兵器を作ろうとしている」という事実に集約されていた。しかしそれを何だか知らないけど諦めたというなら、そう身構える必要もないかもしれない。前に見たオンライン会議といい、普通に役立つモノを色々作れるプレイヤーではあるのだ。となると繁殖住宅も、ひよつとしたらヒマワリを繁殖させて街中に飾ろう！とかそういう感じのステキなプロジェクトの可能性がある。いや、きつとそうだ。そうに違いない。

私の期待を背負い、ラエルカンは口を開いた。頼む、ヒマワリが花開く姿って眩しいよなとかそういう感じのことを言ってくれ……！

「だから、別の方法でこのゲームをぶっ壊すことにしたのだ」

「最悪だ」

最悪だった。

思わず口をついて出た本音を平然と無視すると、ラエルカンは虚空に向けてぶつぶつ説明を始めた。

ジュゲツキの肩を叩き、ささやき声で会話を交わす。

(ちよ、こいつがどんなプレイヤーか理解したうえで手を組んでるの!?)

ジュゲツキはやれやれ……:…みたいな感じで答える。

(理解してるよ、かなり危険なヤツだよね)

(危険なヤツだと分かっているならなんで関わるの!?)

(いや、クグリンちゃんも危険なヤツじゃん)

(それはそう)

それはそうだった。

(いやでもさあ、この住宅が何を繁殖させてるのかくらいは教えてほしいんだけど!)

(……何を?)

ジュゲツキはささやき声をやめた。

「違うよ」

えっ?

ジュゲツキが指をさす。私の背後、つまり^{バツファア! トメントレイン}繁殖住宅の方角だ。そういえばさつきできあがったとか言ってたやつはどうなったんだろう? いや、それが出てくるか何かするのを見ろってことかな。

正直目を背けたい気持ちがあるけど、仕方がないので振り向いておく。がちやがちやと、コンベアか何かの音に阻まれつつも、ジュゲツキは私に語り掛ける。

「勘違いしてるみたいだねクグリンちゃん」

工場が何やら震え出す。できあがった何かが排出されようとしているんだ。しかし改めて考えてみると……どこから? 扉は見えないし、小窓にレーンが繋がっているわけ

でもない。地下にパイプが伸びてるのかな？

私の疑問を察知するように、ジュゲツキは背後から説明をつづけた。

「これは『繁殖させる住宅』じゃない」

工場の震えがどんどん大きくなる。排出が近い。

「『繁殖する住宅』なんだよ」

え——。

私の思考を遮るように……いや、むしろ補完するようにと言ったほうが正しいだろう。工場は震えを止めると勢いよく、真上に向けて新しい家を排出した。積み上がった家の塔が一段高くなる。それは一言でいえば、建設中のビルだった。

愕然とする私の耳には、延々と虚空とおしゃべりをし続けているラエルカンの声が、なぜだか随分はつきりと聞こえた。

「……空を飛ぶものを惹きつける重力？ 知ったことか。それなら、地面を空まで高めればいい」

……狂気に満ち溢れていて、しかし楽しそうな声でもあった。これを止めるのは無理だ、私は悟った。

澁々ジュゲツキに伝える。

「わかった、協力するよ」

「ありがとう〜!」

ジユゲツキは喜んだ。彼女もやはり楽しそうだったけど、ラエルカンのものとは種類が違っていた。テンションとかの問題ではなく……裏側に隠れた何かが見え隠れするような、そんな感覚があった。まあ触れなければ関係ないことだ。

彼女が腹の中に隠し持っている一面を暴く代わりに、肩を叩いてジユゲツキに言う。

「ところで」

「なあに?」

ちよいちよい……。

ジエスチャーを交え、完全に虚空との会話がヒートアップしているラエルカンから離れる。ついでに言うると他のスタツフからもだ。適当な大きめの木を見つけると、その影に隠れる。すぐ近くで禍々しい工場が稼働しているとは思えないほどに、その枝は生命力に満ち、のびのびと深緑を纏っていた。

ちらちらとかかる木陰の下で、私は声を潜め、座り込んだジユゲツキに囁く。

「何日で計画が頓挫するか賭けようよ」

私が勝った。

海上を飛翔しよう！

海波が砂浜を打つ。

フアスティアの海岸沿いでも、港から比較的遠い地点。そこには異様な精密さで描画される薄黄色の砂粒が山を成していて、ところどころに混じりこんだ小石の灰色と混じり合い、ムラのあるベージュを描き出している。人気はない。人気があると避けたからだ。そのため人気の釣り場のようなぐちゃぐちゃとは違い、砂浜の表面は平坦なものだ。ただ一つ、海水の湿り気によって茶色くなった範囲へと繋がっている、私の残した足跡だけが、窪ませた砂浜に影を作っている。

潮風が吹き、私のアバターが持つ短い髪をささやかになびかせると共に、首元に吊り下げられた四つの首飾りをぶつかり合わせ、音を鳴らす。

「……………」

私は呟いた。

周囲にプレイヤーはいない。波たちが飛び跳ねるさまは平和なもので、空の色は完膚なきまでの蒼穹をしている。そして……風に揺れる首飾りのすべてが、MP継続回復効果^{リジエネ}を遺憾なく発揮している。

これらの情報が意味するのは、飛び出すには十分だということだ。

レベル120になったことで、私は七つのアクセサリースロットを使えるようになった。私が今取り出した錬成品射出自走竜砲は、そのうち空けておいた最後の二つを占めることになる。砂が描き出すならかな斜面に影を落とし、微妙にいかつい外見の戦車が『モード「サテライト」』とやらで展開する。

『モード「サテライト」』には、大きく分けて三つの挙動がある。一つ、装着者のアバターについてくる。二つ、アバターの周囲を回転する。三つ、近づいた敵に自動で迎撃を加える。試してみたところ、どうもこの三つの挙動には優先順位が存在するらしい。残ったMPが十分でない場合、挙動のうちどれかをスキップすることがあるのだ。私が挙げた順番が、そのまま優先順位の高い順番でもある。

私は砂上に膝をつき、その一部を窪ませる。錬成品射出自走竜砲の設定ウィンドウを開き、中に……ええい、冷静に考えると常時回転し続けてるってやりにくすぎるでしょ! 装填中くらいは止まっても許されるって! ……とにかく、その中に一つの賢者の石をセットする。自走竜砲が回転するに従い視界の隅に流れていくウィンドウをどうにかやつつけ、立ち上がって羽衣についた砂を払う。

……さて。

私は最初、この戦車を『MPの燃費の悪い【黒潮】』と認識していた。しかし考えてみ

ればおかしな話だ。自走竜砲が【黒潮】の下位互換なら、そのさらに下位互換である迫撃砲をちよくちよく使っていたのはなぜだろう？ベヒーモスでアスレチックをした時のことを思い出してみよう。私は迫撃砲から水を打ち出し、【水滑り】でその上に乗った。結果としては迫撃砲を回収する手間が発生して最悪だったけど、それでは回収する必要が無かつたらどうだろう？さらに言えば……下位互換とは言っても、【黒潮】と自走竜砲を両立させることができない、というわけではないはずだ。

ばちばち、と。小さな戦車の砲塔が、晴天に似合わぬ黒雷を纏う。

私はひとつ、深呼吸をした。羽衣の無駄に長い裾が風に流れて、薄布の先に広がる大海原を透かし出した。それは、この海から邪魔者アドバンテージが既に消えうせたという事実を如実に示していた。食料とログアウトボタンと根気さえあれば、この5000キロメートルの海を単身で渡することも不可能ではないと説いていた。あとは、発進するだけだろう。

「刃隠心得奥義、【水滑り】」

印を組む。同時に自走竜砲の回転が止まる。計算通りだ。【水滑り】の消費MPと、『装着者のアバターについてくる』挙動の消費MPと、【黒潮】の消費MP。その三つが、リジエネするMPの量に対し釣り合いを取る状態ができた。

自走竜砲に魔力操作を入れて、その砲塔に水平線の少し上を向かせる。そしていつでもと同じように、両足を砲口に密着させる。両腕にかかった体重が両手の周辺の砂を押

しのけ、広い砂浜に二つの手形を残す。

あとは視界の隅のタイマーウィンドウを眺め、然るべき時に一言呟くだけだ。

「発射っ」

轟音。

一気に視界が動き出す。足の裏めがけて発射された【黒潮】が、【水滑り】と併せて私の肉体に推進力を与えているんだ。砂浜は過ぎ去り、眼下で青海のさざなみが蠢き始める。同時にびゅうびゅうと猛烈な気流が押し寄せ、私の姿勢を崩そうとしてくる。

「つとおー!」

しかし、私の周囲に展開した【黒潮】がそれを阻んでくれる。成功だ!

「よっしやああ!!」

テンションが上がってそう叫ぶ。いや叫ばないほうがよかったかも! 加速度がヤバい! 黙ろう! 私は黙った。しかし……完璧だ! 背後を振り返ることはできないけど、靴裏に感じる感覚から【黒潮】が背後で発射され続けているのがわかる。当然だ、自走竜砲は装着者のアバターについてくる。装着者のアバターは自走竜砲によつて進む。この二つを組み合わせれば、答えは人間ミサイル以外にない! 新大陸に着弾してやるんだ!!

私は完全に達成感に浸っていた。失敗のビジョンが見えなかったからだ。この方法

のいいところは、別に海の真ただ中でもセットアップをやり直せることにある。ログアウトでも食事でもなんでも、ミサイルモードを解除して「水滑り」で海上に降り立てば普通に可能だし、そこからさつきと同じことをやることだってできる。耐久値も問題ない、MPも問題ない、スキルも問題ない……！あとはただ待っているだけで、勝手に5000キロメートルを乗り越えられるんだ！

はーっはっはっはっはっは！！！！

私は口に出したい思いを我慢して、心の中で勝利の笑いを上げた。

◆
二時間後。

時速何十キロ出ているかはよくわからないけど、とにかく相当な高速で移動しているのは確かだ。相当な高速すぎて速度を測る用のアイテムを取り出せない。一旦着地しようかな？そろそろ休憩したくなってきたし。

いやでも……もう少しだけ、あの水平線のほうに進んでみたい気持ちもある。

私は葛藤していた。白い羽衣が風に乗るばたばたという音と、黒い雷がその上を這うばちばちという音を聞き流しつつ、どのあたりで一度加速をやめるかを考えていた。いやまあ、どうせやめてもすぐに復帰できるし……でも復帰って結構手間だしなあ。どうし——

『刃隠心得奥義【水滑り】の習熟度が規定値を達成しました』

「ふえ?」

唐突に展開したアナウンスサウンドに、思わず声を出してしまった。風音がそれを掻き消していく。

ちよ、な、何? 進化イベントってこと? キャンセルボタンはどこ? いったん終了して

『大波こそ楯、月影に潜め』

待つて待つて待つて待つて待つて!

『おんぎようじゆつ隠業術会得』

筆で殴り書きしたような荒々しいフォントがそう告げる。正直カッコいいと思った。

『刃隠心得奥義【水滑り】が変化しました: 刃隠心得奥裏【潮躲し】』

『称号を獲得しました: 刃^は遁^{のが}し』

直後、私は真つ逆さまに落下した。

「うわああああああ!」

もはや加速度とか言っている場合ではない。ちよ、あの……え、何!?

落下のさなか、ちらりと視界の隅に目をやって気づく。……MPが尽きている。回復もしていない。

「そうか、【潮躲し】とかいうやつは正直意味が分からないけど、とにかく【水滑り】と比べて消費MPが増える！MPが尽きたせいで自走竜砲が動かなくなっただんだ！いやダメじゃん！ちよつと待つて!？」

「とりあえず体勢を——」

ざぼん。

私と自走竜砲が海に落ちた音だ。おかしい。そんなはずはない。【潮躲し】が【水滑り】の上位互換なら、海面はあくまで足場のままのはずだ。どうして落ちる?……いや後だ、とにかく上に行かないと。考えている間にも私のアバターはどんどん沈み、海水に透かされた日光のカーテンも遠ざかっていく。息も長くは持たないだろう。えっと、【空蟬】で……いやMPが足りない!?!私はもがいた。足に感触があった。アバターが沈まなくなった。

……え?

足元を見る。ぐつしよりと濡れた羽衣が海月のように揺らめく隙間で、私の両脚はまっすぐに伸びていて……。

……水中で立っていた。

「……」

足を踏み出してみる。やはり見えない足場があるようだ。ジャンプしてみる。一段

上の見えない足場に着地する。適当なキックを繰り出してみる。見えない壁にヒットして、そこも足場になった。

……【潮躲し】は、水中の好きな場所に足場を作り出すスキルだ。

「いっほほほほほ」

確かに、「水滑り」の進化系として申し分のない忍術だ。要するに海中に限り無限ジャンプ可能ってことでしょ? ヤバいじゃん。でもさあ……。

「いっほほほほほっつほほっつほっつほっつほっつほっつ……」

もはやSTMは尽きている。私の命運も同様だ。私はこのゲームはクソゲーだと思った。そして遠くになっていく海面を眺めながら、首飾りたちと共に沈んでいった。

今度こそ今度こそ密航をしよう！

ふと見上げた大空を、一羽の燕が飛んでいた。

燕は、眩い日差しを背負ってしなやかに空中を舞っていく。その行き先に障壁はない。山脈も大海も障害ではなく、広げた翼で空を滑り、飛び越える対象でしかないのだ。だったら、その瞳はどこを見据えているのだろうか？——わからない。あるいはそれは、私には見えないもつと高次の障壁なのかもしれない。

まあ、そんなことに思いを巡らせていても始まらない。今はただ——目の前のすべきことに、集中して見せる。

「それだけだ」

私は前を向いた。同時に背後から、かすかな……しかし、力強いそよ風が吹いた。それはきつと、私の前進を後押ししていたのだろう。

各々の思惑が渦を巻く中で、第九次新大陸開拓船搭乗者抽選は今まさに始まろうとしていた。



さて密航していこう。

今夜の私は単独行動。別にペンペンが抽選を当てたからいいよ一人になってしまったとかそういうわけではない。どちらかというペンペンが抽選を当てた奴に突つかかったものの紆余曲折を経て逆に抽選を当てた奴以外の全員を殺す形になってしまい指名手配犯扱いされたからいいよ一人になってしまったと言ったほうが正しいだろう。

……とはいえ、理由はそれだけではない。

夜光を纏つてうねる波の先に浮かぶベルヘモルス号を見据え、呟く。

「潮躲し」

……実地試験だ。

燃費が悪いと評判の「水滑り」が更に進化した姿というだけあって、「潮躲し」の魔力消費はかなり厳しいものだ。しかしMPリジエネを積みまくれば問題ない。むしろSTMが問題だ。水中にいる間は当然呼吸できないし、ベヒーモスで酸素ボンベとかを買うと、逆にMPリジエネ用のアクセサリースロットが無くなってしまふ。最終的な結論としては――

「すうーっ……」

気合いでなんとかするしかない。

私は肺と膨らませた頬に思いつきり空気を詰め込むと、揺らめく波面に飛び込んだ。

冷たい。しかし冷たいだけだ。不可視の床を蹴り進み、ベルヘモルス号の船影めがけて走る。

……【潮躲し】。正直、新大陸に行けるレベルのプレイヤーからすれば強すぎる忍術のように思える。元となる【水滑り】が不人気だからwikiに載っていないだけだ。載った瞬間、ゲーム内掲示板の忍者スレで【水滑り】煽りをしている奴らは死滅する。とは言え【水滑り】使いが天下を取れるかというところほどでもないため、なんだかんだで【忍聖】の就職条件判明してない煽りをする盗賊職の奴らが勝つことになる。つまり今まで通りだ。

水中にしか足場を作れないとはいっても、たとえば巨大なバケツを用意して水で満たして足をつ込み、取っ手の部分を持った状態でジャンプしたらどうなるだろう。【潮躲し】は水を蹴る忍術ではなく水の中に蹴れるものを作る忍術、しかも作った蹴れるものは本当に蹴れるだけで、特に作用と反作用が尋常じゃなく面倒なことを引き起こすとかそういう様子もない。つまり実際に巨大バケツの実験をやってみた場合、実質的に起こることは『無限ジャンプ』だ。バケツの中の水に作った足場を蹴り、プレイヤーのバッテリーが上に行く。蹴ることはプレイヤーのバッテリー以外に一切干渉しないため、バケツは蹴られたことで運動することもなく、プレイヤーのバッテリーに従って上に行く。これを繰り返すと無限ジャンプになる。頭おかしいでしょ！

ハッキリ言つて、「潮騒し」は壊れだと思ふ。問題は私が装備に恵まれておらず、STMとSTRに対して振つていないことだけ。つまり新大陸に行けていないのが原因で、つまり運営が悪い。クソゲー! 私は心の中で悪態をついた。

……おっと。そういうしているうちに、ベルヘモルス号がかなり近づいてきたみたいだ。監視の目を盗むべく少しばかり深度を落とし、船体の真下に潜り込む。そこには月光すら届かず、夜よりなお暗い闇が広がっている。

さて、MPの残量は問題ない。印を組む必要もない。ただ、心の中で呟けば十分だ。

(……【空蝉】)

【空蝉】は壁抜けができる。

視界が黒闇から薄闇へと移り変わる。身体が一気に重くなつたように感じ、肌寒さを覚える。無事に船倉に侵入できたみたいだ!

「はあ、はあ、はあ……」

とりあえずしばらく止めていた呼吸を再開させつつ、私はチェストリアからランタンを取り出した。唯一義レテックスデルの玄衣から水滴が滴り落ちるぽたぽたという音の中、着火アイテムで適当に火を灯す。暖かい色合いの炎光が広がる闇に溶け出し、ささやかに辺りをぼうつと照らす。

橙色に染まった空中で、リアルに描画された埃が踊っている。いや踊らせる必要あつ

たか？いくらグラフィックがリアルだからってゲーム内で埃が踊っていることよって何か嬉しくなることよってあるかな……まあいいや。

「……さっ」

新大陸調査船は結構デカイので、船倉と一口に言っても場所によつて事情が変わつてくる。とは言えそこまで複雑な話ではなく、重要なのは『入り口からの距離』と『見つけやすさ』の二点だ。普通に考えれば入り口から近いほどに侵入しやすくなるはずだが、その分警戒もされる。しかも警戒してるのはパストラットみたいなヤツばかりだから賄賂が通じない。それでは入り口から遠いほど警戒されなくなるのか、というところでもなく、どこまでバランスを取るかの話になつてくる。

しかし。

今回の私は、侵入に当たり入り口を経由しなかつた。つまり『見つけやすさ』の一点のみを考えて、最も警備の薄い場所で待つことができる。

一言で言うと、私の勝ちだということだ。

めらめらと、ランタンの中で小炎が揺れている。その光が照らしだすのは埃だけではない、微笑み佇む私の姿も、やはり暖色の光を受けて、船倉の床に灰影を落としているのだ。パストラットの熱源視認板ホットスポット・グラスに引つ掛かったら終わりなので、出航までに消しておかないといけない。しかし……。

いつの間にかかなり乾いてきた玄衣を揺らし、私は木板を踏みしめた。

……今はもう少しだけ、このランタンを携えて暗闇を探検してみたい。そう思った。そう思って揺らしたランタンが照らす先には、三角座りをする征服人形コンキスタ・ドールが照らし出されていった。

はい？

そう思って揺らしたランタンが照らす先には、三角座りをする征服人形コンキスタ・ドールが照らし出されていった。

なるほどね。

「……はい？」

漏らした眩きに反応したのか。征服人形がスリープモード的な何かを解除し始めたようだ。アンダースーツに走るラインや肩のあたりに装着された怪しげな機装が、暗闇の中にライトグリーンライムグリーンの光を描く。焔の橙と混ざり合ったそれは、木製の床の上に僅かに黄色がかった灰色を投げ始める。

起動音らしきものが聞こえた。

「征服人形コンキスタ・ドール「アイヴィII 256」、睡眠状態解除……」

むくり。

伏せられていた征服人形の顔が起こされる。その紅に光る機眼は無表情に見えて、し

かし何だか寂しげでもあった。その首が動かされ、視線が私の方に向く。多分分析アナライズモードとかそういう感じのアレだろう。

……よくわからないけどチャンスな気がする。目の前の征服人形と契約したらどうなるだろう？ 想像してみる。えーつと……新大陸行きが、楽になる！ つまり最強ってことじゃん！ 最強になりたい！ どうする!? 何か貢げばいいのかな!? 手持ちアイテムはだいたい毒薬か爆薬か素材かなんだよなあ……。まあ、とりあえず爆薬を渡して様子を見てみようかな。

私が思いを巡らせている間に、ニコロとやらの分析は済んだみたいだ。どうなるんだこれ……? 観察してみよう。

「……」

うん、首を元の向きに戻して。

「……」

うん、瞳を閉じて。

「……」

うん、さつきと同じように顔を伏せて。

「………睡眠状態再開」

「いやちよつと待って!?!」

ランタンを放り投げ、またしても動かなくなったニコロに駆け寄り、ゆさゆさする。ゆさゆさ。ちよつとオ！せめて契約のテーブルに座らせるよ！玄関に鍵をかけるのをやめろ！

「――征服人形コンキスタドール「アイヴィⅡ256」、睡眠状態解除、再か――」

「一旦話聞いてよ！」

「……消極的めんどくさ：回収目標重要度ターゲットランク「交渉可級ネゴシエイト」臨時発行……個体名だけ言つて」

お、とりあえず起床後即睡眠状態は脱したみたいだ。言われた通りに個体名プレイヤートネームを言う。偽名はやめておこう。

「クグリン」

ニコロの瞳が点滅する。何かを処理していることの場合かな？

「登録完了：睡眠スリ――」

まばたきかよ！

「待つてつて！」

ニコロが閉じかけた瞼を再び開く。思えば、無表情というよりは気怠きだそうというのが近い雰囲気だ。

「……次世代原始人類クグリン。要質問事項の処理は早急をお願い」

……要するに『なんか文句あるの?』ということだ。正直文句しかないけど、全部言つ

たら寝てしまおうだろう。とりあえず一旦絞ろう。まずは、ニコロがどうやらサボり魔らしいことにツツコミを入れてみる。

「なんで征服人形なのに旧大陸のこんな場所で職務放棄してるの?」

「別に回答・職務放棄してるのは業務に消極的めんどくさいだからで、旧大陸にいるのは密航ヒドクしてきたからだけ。睡ス」

「どうやって」

気づけば、強い口調でそう聞いていた。

……考えてみれば当たり前だ。ニコロのような面倒くさがりの征服人形が仕事をサボろうと考えた時、どうするのが一番いいだろう? そもそも征服人形の仕事は新大陸がメイン、逆に言うと旧大陸まで逃げてしまえば、ひとまずしばらくは仕事しなくていい。飛行ユニットがあるとはいえ、バッテリーの概念を考えれば結局一番いい手段は密航だ。でも、どうして広い船倉の中でこんな分りにくい場所に? ……いや、私自身が『見つけにくい』と言ってここを選んだんじゃないか。

ニコロは気怠げに答える。

「……消極めんどくさい的: ステルスユニット及びスリープモードによる体温喪失を併用した」

「というかもうすぐ出航だけど」

「……船から出るのめんどくさいから、限度線ギリギリまで粘っていたい」

「なんでそんなにめんどくさがるの?」

「……………それは」

……………? ニココロの口が止まった。寝逃げするつもりかな? いやでも、瞳は紅に輝いたまままだ。

沈黙が流れる。

……………これ地雷踏んだかな、一旦訂正して——。

「閑話休題」

はい?

ニココロは右腕を振り上げた。白い衣装を包んでいた埃が舞い落ちる。色素が薄くなめらかな右手が、人差し指を立てて私の背後を指している。

「それ、大丈夫なの」

えっ!?

私は急いで、ニココロの指さす先を見た。

そこには業火が広がっていた。木の床から立ち上がった赤の軍団が、炎光をこれでもかと発しながら、じわじわと勢力圏を広げていた。

……………ランタンを放り投げたのは失敗だった、そう言わざるを得ない。

「火事だぁーっ!」

私は密航者の立場を捨てて。取り出したメガホンに大声で叫んだ。ニコロに駆け寄る。

「いったん私と逃げよう！」

「……消極」

「いいからっ！」

振り上げられたままの右腕を掴む。チェストリアに収納っ！ニコロの機体が仄かな光に包まれて消えた。ヨッシャ収納成功！いや成功しちゃダメじゃない!? 未契約の征服人形を収納できるってもう拉致じゃん！いや……しかし、ニコロは拒否しなかった。拒否するのがめんどくさかったんだろう。拒否されてないならいっか！私は拒否されてないならいいことにした。

……じゃあ、そういうわけで。

私はチェストリア内に用意しておいた錬成水をありったけ展開しながらめらめらと燃え盛る炎の中に飛び込んで焼死した。

目の前のものを切り取ろう！

「征服人形を捕まえた？」

地面に直立させた巨大なハンマーの持ち手に掴まりながら、ペンペンは私の言葉を繰り返した。

「うん。まだ契約までは行ってないんだけど」

「へえ〜」

ペンペンはおもむろに巨大ハンマーを持ち上げた。よく見れば、ハンマーの周囲には赤黒く禍々しい怪しげなオーラが漂っている。正体がかなり気になるけど一旦流しておこう。

彼は言った。

「旧大陸でも会えるモンなんだな……というかチェストリア内にいるんだろ？ 未契約でも収納できるってダメじゃないか？」

「ダメだと思う」

「ダメだよなあ……」

満場一致でこのゲームはダメということが決定された。

ペンペンが聞く。

「でこう……どう感じる征服人形なんだ？」

私は一言で答えた。

「怠惰」

「怠惰ね。ミオン型か？」

「いや……」

言葉で答える代わりに、チェストリアから当の本人機を取り出してみせる。白光のエフェクトが一瞬現れ、すぐに霧散して実体化の完了を表す。

「……征服人形コンキスタ・ドール「アイヴィー256」、睡眠状態解除スリープモード」

そして、透明感と落ち着きを伴った声が、取り出された生首の口から発される。

ペンペンは聞いた。

「何で首だけなの？」

ニコロは答えた。

「それ以外の部位を稼働させるのがめんどくさいから」

ペンペンは腕を組んだ。

「なるほど」

「希望：もう戻っていい？」

ニコロは既にやる気をなくしているらしい。仕方ないなあ……。私はチエストリアのUIを操作し、彼女を再び格納した。

何とも言えない沈黙が流れる。

「……アイヴィ型ってあんな感じだったっけ？」

「さあ……」

何かがおかしいとは思っている。アイヴィ型の概要はwikiに載っているけど、それを信じるならシンシア型ほどではないにせよ勤勉なほうの性格を持っているはずだ。征服人形の中でも特に勤勉と言えるミオン型にしても、『職務が面倒だから旧大陸に密航』なんてやらない。というか旧大陸に密航ってなんだよ！最初から新大陸という恵まれた立場を敢えて放棄するなよ！私は憤った。

ペンペンも憤っている。

「クソ、許せねえ……！」

許せんよな。

……とにかく、ニコロは全体的にヘンだ。最初は何の変哲もないアイヴィ型だったのが何かの**はずみ**で極端に怠惰になった、みたいな線しか考えられない。しかし……その何かの**はずみ**というのは、契約も済ませていないような単なるプレイヤーが踏み込んでしまっ**て**いいものなのだろうか？正直言ってこじれる予感しかない。なのでニコロの

内面には踏み込まない方針で行こうと思う。

「いやでも」

ペンペンが口をはさむ。

「契約できないんじゃないか？」

実際のところ、彼の言い分は一理ある。一度ニコロに契約を持ち掛けてはみたけど、どうも腕を噛んで血液情報採取するあたりでめんどくささが勝って拒否してくるみたいだ。関係性を維持したところで、その状態が続くのでは永遠に契約できない。

しかし、こう言うこともできる。

「契約しなければ、関係ないと思わない？」

「……あれだけ怠惰なヤツを契約なしでどう運用するんだ？」

「そりやもう」

私はにやりと笑った。ニコロは私と契約していない。それは同時に、私のチェストリアとリンクしていないということも意味する。つまり、私が許可を出さなければ格納空間に退避できない。往來の真ん中でスリープモードに入るわけにもいかなければ、結局私に頼まれれば『横に立って、目を開いている』くらいのことはやらなければならなくなる。だったら、それだけで完結させてしまえばいい。

「見てるだけで良い仕事なら、やってくれるはずでしょ？」

さあ、稼ぎ時だ。

◆ 「トウールはやめろトウールはやめろトウールはやめろ………！」

むき出しの欲望が広場を駆ける。

着せ替え隊は単なる変質者集団ではない、と言うことが最近になって理解できるようになってきた。彼らはこのゲームで最も賞金狩人という存在に興味を持っている集団だ。興味を持っているということは情報を持っているということでもあり、とどのつまり、着せ替え隊はティーアスに関してだけは「ライブ러리」並みの情報を持っている。彼らは、時に検証じみたことをするのだ。

「ティッ」

誰のものでもない叫びが発生し始める。結局あのリングとかいう賞金狩人は全然現れない。何かしらの条件があるのか出現確率が異様に低いのか、あるいは何かしらの条件がある上に出現確率が異様に低いのか。全く分からない。どうせなら現れてくれた方が儲かるけど、まあ——

「ティーアスだアー……ッ!!」

……彼女でも十分だ。

紅のポリゴンが散る。その様は展開された天使の翼に似ている。しかし、天使ティーアスそのも

のは私にははつきり見えない。速すぎるからだ。逆に言えば、その速さに対応できるだけの視覚性能があれば問題ないと言うことでもある。

「オイ！お前のヒヨウ柄パーカー見向きさえされてないじゃねエか！」

「大体ヒヨウ柄つてなんだよ冷静に考えて！ダサすぎるだろ！」

「ウシ柄よりはヒヨウ柄のほうがティーアスさんの速さを表してね？みたいなノリで決めたけどさア！」

「冷静に考えるとウシとヒヨウ以外にも選択肢あるだろ！キリンとか！」

「キリンはキリンで嫌だよ！」

「ふざけんなテメー！」

「殺すぞボケ！いやもう殺したわ！」

すぐ横で一触即発のにらみ合いに一触が加えられつつあるけど一旦無視。隣に立っていたニコロに話しかける。

「さてニコロ……撮れた？」

「待機……」

「ニコロ……？」

「覚醒………セーフモード仮眠状態解除、アイユニットによる録画そのものは問題なく完了してる」

大丈夫か……？まあ撮れてるならいいや。私はニコロの動体視力を戦闘時並みにす

るためにブツ刺しておいた針を彼女の人差し指から抜き、小さなダメージエフェクトを塗りつぶすようにポーシオンをブツかけた。……機械なのにポーシオンで回復可能ってなんか違和感あるなあ。

とめどなく湧き出るどうでもいい思考を払いのけつつ、私は頭にヘッドギアを被った。征服人形の視界がリアルタイム共有できて直近のものも遡れるってちよつと便利過ぎるし、多分いつかとんでもない悪用の仕方を発見されて大幅にナーフされると思う。つまり、他のヤツに悪用される前に悪用しておいた方がいい。

「……よおし」

ヘッドギアの中で視界記録を等速再生する。ティーアスの使う加速スキルは、どうもティーアス以外のすべての存在を減速する効果を同時に持っているらしい。仮に五分の一倍に減速するとして、当然ニコロの視界記録もFPSが五分の一になる。その減速された記録をさらに再生した場合、視界記録が有している内部時計を参照するため、五分の一になったぶんは『コマ飛び』と判定されて逆に五倍速がかかる。要するに、私がヘッドギアに見るティーアスは、先ほど見たものに比べればまだ知覚できる範囲だ。そこに、さらに減速をかける。ようやくティーアスの姿をはつきり捉えられるようになった。

「切り抜いていこうか……！」

横から殺到しつつある殺伐とした打撲音の一切を無視し、私は呟いた。



「40万!」

「50万!」

「80万!」

「300万!」

「急に桁変えてんじゃねーよ400万!」

ということまでオークションをしている。

「もう一声!もう一声ないですかあ〜!」

「420万!」

私が右手にティーンアスのベストショットを掲げ、神代製のメガホンに吠えかければ、早速参加者のうち一人が手を挙げた。

「450万!」

そしてすぐに、別の参加者に塗り替えられる。

……着せ替え隊には『スクショを印刷した写真でオークションをする』というよくわからない文化がある。普通に考えればおかしな話だ、この世界はゲームなわけで、別に写真を取引しなくても電子的な画像データを取引すればいい話だし、そもそも写真を

オークションにかけるというのが既に歪だ。だいたい、今回の場合元となる動画が前提としてあるんだから、情報量の多いそちらの方が求められるような気がする。

とはいえ。

「500万!」

みんなが実際にこうして熱狂しているなら、私にはどうでもいいことだ。

「他にいませんか!」

私は喧騒に叫びを投げ込む。新たに手を挙げる者はおらず、代わりに項垂れる者が数名。どうやらここらで打ち止めのようなようだ。

「それじゃあ落札おめでとうございます、こちらに来てくださいー!」

……ヌルい、ヌルすぎる。このゲームはあまりにもひどい。基本的にフィールドで狩りをしているより、変態と仲良くなつてかわいいキャラクターの写真を売りつけたほうが儲かるゲームだ。旧大陸でこれなんだから、新大陸ではもつとすごい術が飛び出すことだろう。

私は思った。

『称号【ミリオンゲッター一攫万金】を獲得しました』

そして、ブツを受け渡すと同時に展開したアナウンスウィンドウに、喜びの笑みを投げかけた。

金を使おう！

さて、私の手元には今2200万マーニがある。

あんまり写真を売りすぎても希少価値が下がるから早めに切り上げたけど、はつきり言つてヤバイ。このゲームの経済は完全に崩壊している。まあでも崩壊してるから何？ みたいなどころはあるよね、ちよつと崩壊してるからって死ぬわけじゃないし。いや死ぬけど。死ぬけどそこまで死なないし。せいぜい崖から突き落とされるとかそのぐらいで済むし。じゃあ問題ないかな？ みたいな。うん。オツケー。私は心配を心の奥底に押し込み、非常に清らかな気持ちで歩き出した。

とりあえず、買い物から始めていこう。



「身代わり丸太10000個ください！」

「3個だな？ 21000マーニだ」

「いや10000個です」

「だから3個だろ？」

「10000個！」

「……10000個?」

「はい!」

「あー……どうやって運」

「チエストリアあります!」

「例の鍵か」

「はい!」

「いいだろう、身代わり丸太10000個で700万マーニだ」

「どうも!」



よし、残り1500万マーニだ。

戦力増強に使うのもよさそうだけど、ここまでの桁があれば金だけで新大陸に行けるのではないかという気がする。例えば搭乗チケットを誰かに売ってもらうとか、あるいは……そうだ、買取はどうだろうか?

パストラットのことを考えると、密航を取り締まる側に買取を持ちかけるのは、額に関係なく厳しいものがあるそう。登録者数3000万人の神ゲーに降り立ったうえで敢えて密航の取り締まりなんてやってる時点で金以外の何かが目当てなのはあまりにも明白、30万渡そうが1000万渡そうが結果は変わらない。

であれば。

そもそも、私が新大陸に行けない根本的な理由を考えてみよう。

普通にプレイする場合、新大陸に行くには三つの要素が必要だ。すなわち、『ギルドからの信頼』と『ファイティシアへの到達』、そして『有力クランへの加入』。これらをすべて満たすことで、信頼を得たギルドに紹介状を書いてもらって調査船の順番待ちに参加、その後クランの力で優先的に抜ける……ということが可能だ。この際『有力クランへの加入』は無くてもいい、ただ順番待ちに参加するだけでも、今の状況よりはよっぽどいい。

しかし、私は参加できてすらいらない。なぜか。

原因の一つは、忍者系職業における忍の巣ギルドが紹介状を書いてくれるような組織ではないことだ。盗賊系の時点でギリギリなのに、そこからさらに隠し職業かつ割とアナーキーな部類の忍者となるともう手に負えない。正直巻物に筆でめちやくちや達筆に『紹介状』とか書き込んでいそうなイメージがかなりあるんだけど、実際のところそうではないので仕方ない。現実是非情だ。

そして、もう一つが……私が、錬金術師ギルドを出禁にされていることだ。

まあ、やってしまったものは仕方ない。今でも錬金術師ギルドに入ろうとすると「お前はクグリンだな？」と屈強な男に話しかけられるからね。過去を取り消すことはどう

してもできない……でも同時に、金を渡して目を背けてもらうことなら、できると言えるはずじゃないか。

「仲直りだ」

そう、今の言い回しは良かった。

私は金を渡して仲直りするんだ。



「というわけでニコロ、飛行ユニット使わせて」

「拒否^{やだ}」

知ってた。

満月が見下ろすファイフテイシア、錬金術師ギルドの裏。錬金術師は他の職業に比べて素材というものに恵まれており、ギルドの様子も他と少し違い……何というか、近代的だ。具体的に言う^と背が高い。基本的には最上階の一つ下にある執務室で処理をしてもらうことになるんだけど、正面から入るとお前クグリンだな？^される。100万マール二くらい渡せば買取できそうではあるけど、正直ただ警備してるだけのヤツに100万もあげたくないという気持ちがある。

なのでこうして、ギルドに直接侵入することにしたのだ。

「……まあ、やならいいよ」

静寂を守るように気を付けて小さく呟くと、私はニコロのボディをチェストリアに仕舞った。

……見上げたギルドの壁の窓たちは、よく見れば他の建物のような炎による光源とは少し違う、どこか冷たい色をした光を発している。具体的に何かはわからないけど、錬成物由来の光であることは間違いない。それは月光にどこか似ていて、降り注ぐそれと溶け合っている。

「戦砕誇示」
ウオイルフエン

その間を、抜ける。

自分を殴って上方向に加速、しばらく行つたところでこれまた自分自身に【鎖縛帷子】さばくかたびらを発動、壁にアバターを縛り付ける。

さあ……あとは【空蟬】で侵入するだけだ。それで適当に偉そうな人を捕まえて、袖の下を渡しつつ紹介状を書いてもらえばいい。ごくごく簡単だ、それをすれば今度こそ……。

私はふと振り向いて、世界を照らし出す満月を見た。新大陸からも、この満月は同じように見えるのかな。……そんなことを、思った。



しかし無理だった。オツケー次行こう！私は次行つた。正直どうせこうなるだろう

と考えていた部分は少なからずあったし、だったら予想が的中するたびにめげているキリがない。どんどん次に行くべきだ。

というわけで掲示板をしている。

「10万マーニで譲ってくださいる方いませんか、と……」
スレ立てっ。

……10万マーニでチケットを譲ってくれなんて言われたら、大抵の奴は相手のことを世間知らずだと思おうだろう。ましてやこの広い世界で敢えて掲示板を見てるようなプレイヤーだから、きつと相手のことを「エアプ乙」とか笑ってくるに違いない。で、「桁が二つ違う定期」みたいな煽りも入れてくる。そこが狙い目だ。「桁が二つ違う定期」って言うってくるやつが現れた瞬間に「じゃあ1000万にします」と言う。で、プレイヤーネームを覚える。完璧な作戦、完璧な作戦だ……!

さて、そろそろ最初のレスがついてるころかな? ブラウザウインドウを操作し、スレをリロードする。これリアルタイム更新モードにしたほうが良いかな?

|| ||

2 アツド

誰かと思えば晒しスレ常連のクグリンじゃねーか

オイお前ら

こいつの言うことを信じるなよ

どうせ実際は1000万くらい隠し持ってる

|| ||

このスレはもう終わりだ。

私は無言でスレを削除し、新しいスレを立てた。たまにこういう、VRMMOのメイ
ンコンテンツをゲーム内掲示板と勘違いしている狂人がいるのだ。思えば、ヘリフレク
ションのベベス氏なんかもこういうタイプのプレイヤーと言える。

さて……。私は少し待つと、新しいスレをリロードした。今度こそうまくいくだろ
う。

|| ||

2 アツド

あつ！ついさつき初心者騙りスレ建てようとして失敗したクグリーンさん！ちーつす
wwwwさっきのスレ閉じちゃったけどどうしたんすかー？www

実はこのゲームの掲示板ってブラックリスト機能ないんですよwwwwいや〜マジ
で不便！wwwwカス野郎にとっては動きづらいことこの上なさそうですよねー！ww

w

人を騙すってなかなか大変そうですけど

まあ頑張ってくださいーい! w w w

|| ||

こ、こいつ……。

私はイラつとした。

初歩的な煽りだった。何でもなような、典型的なカスの仕草。でも……。その初歩的な煽りを通じることで、四六時中ヘッドギアを被って、しかも別にゲームをまともにやるでもなく、ゲームに関する掲示板に延々と入り浸っている……。そういう人種の存在。私は、改めてそれに直面した。それでイラつとしたのだ。

「……クソソーツ!」

私はウィンドウを操作した。手始めに時間帯抽出だ。『アツド』の名前で横断検索、書き込み時間帯の推移を見る。こいつが寝ている時間にスレを立てれば問題ない。えーつと……。なるほど、24時間のすべてで常に一回は書き込みをしている、と。

いや、無理じゃん。

スレを閉じ、ウィンドウもまた閉じる。渦巻く悪意が視界から消える。よし、無かったことにしよう。

私は次に行くことにした。

目を欺こう！

「チエストリア売ってくれない？1万マーニで」

「ムリ……」

「やっぱムリ？じゃあ10万マーニまでなら出すよ！」

「どれだけ積まれても無理だよクグリン、売り切れなんだ」

「そっかあ……」

『「ここでチエストリアを売っていると聞いた、一つ5億だったか？二つ買おう」みたい
な感じの人が来てさあ、吹っ掛けられそうだったから一つ9億で売っちゃったんだ』

「残念、また今度ね！」

「うん！」



終わりだ……。

終わりだった。

金の使い道は全然見つからない。いや、厳密に言うで見つかってはいる。金の使い道を探す過程で手切れ金だのみかじめ料だので既に500万ほど持っていていかれているか

らだ。しかしそれは使っているというよりドブに捨てていると言ったほうが明らかに適切な状態であり、言うなれば私はドブの中に佇んでいる状態にあった。つまり、最悪ということだ。

「ニコロお、なんか思いつかない……?」

最初は金を使つて新大陸に行くのが目的だったはずが、いつの間にか金を使うことそのものが目的になっている。その問題への自覚はあるけど、私は既にネタ切れに陥つた。どうすることもできない。

意外なことに、蛇の林檎の机の上に置かれたニコロの首は私を無視しなかった。渋々といった感じに答えが返ってくる。

「……偽造とか?」

……へえ。

偽造、めんどくさがりらしいやり方だ。確かにそれは考えていなかった。なぜ鍊金術師ギルドが必要かと言えば結局のところ紹介状を書いてくれるからで、裏を返せばその紹介状を偽造してしまえば必要はなくなる。なるほど……え、案外いい手じゃない?いくらチェックの目が厳しいと言つてもNPCがやっている以上限度はある。偽造のクオリティは当然金を積めば積んだだけ上がる。偽造を誰がやるかについても……私は、一流の印字士プレスマンを知っている。

……もしかして完璧では？

「それだ！すごいよニコロ！」

私はいてもたつてもいられなくなり、ニコロの生首を掴み取ってくるくと回った。彼女は何も言わず、回転する視界の中でスリープモードに入った。



さて、ボルクネスと連絡するためにはひと手間必要だ。

彼は別に手紙ならまともにもコミュニケーションできるとかそういうわけでもないため、誰かしらがTCGを遊ぶ相手になる必要がある。つまりこうだ、まず誰か新大陸のプレイヤーを捕まえる。そのプレイヤーとボルクネスがファイロジオで対戦する。私が伝書鳥でプレイヤーにメッセージを送り、そのメッセージを読んだプレイヤーがさらにボルクネスへとそれを伝える。ボルクネス側がその内容をもとに返答を伝えて、プレイヤーがそれを書き込んで伝書鳥を返信する。

問題は、このプレイヤーの人選だ。

私の知らない人間は避けたいところだし、ジUGEツキのように何をしてくるかわからないヤツも除外したい。そうやって候補を絞っていった結果、最終的にパストラットに任せることになった。

……大丈夫か？

いやまあ、問題はない。当初の予定通りにやった場合は確かにダメだ、私が『実は紹介状を偽造してほしいんだ』と送った瞬間に終わる。だから、少しやり方を変える。送信と受信を分けるのだ。ボルクネスはあくまで返答するのがダメなだけだから、伝書鳥を受け取り、内容を理解すること自体はできる。つまり、私が伝書鳥を送信し、ボルクネスがそれを受け取り、返答となる言葉をパストラットに伝えて、パストラットがそれを私に伝書鳥で送信する、というモデルだ。ボルクネスが返答で口を滑らせることさえなければ、計画は問題なく完了するだろう。

◆ さあ、後は決行するだけだ。

『準備完了』

昼下がりの空の下を飛来したハヤブサは、そう書かれた書面を残して去っていった。

パストラットとボルクネスが、海の向こう側でテーブルについた合図である。

よし。私はボルクネスに送る第一通を書き始める。ええと、パストラットには『準備完了らしい』とだけ伝えて……彼女には単に話すだけと言ってあるけど実際は違う……実は内密な話がある……送信、つと。

「ピイーッ！」

ハヤブサが飛び立っていく。

「よーしニコロ、しばらく……」

向かいに座ったニコロは、いつのまにかスリープモードに入っていた。力の抜けた端正な顔立ちが、こてんと硬いガーデンテーブルに横たわっている。日傘が落とす影の切れ目がちやうど重なって、明部と暗部をくつきりと分けている。

「……………ふう」

私はお茶を啜った。味が薄い。やっぱり蛇の林檎のほうが……お、早速ハヤブサが返ってきた。

なになに。

『ボルクネス「準備完了らしい」

双方向通信は問題なさそうだね』

よしよし……………。

ここから世間話を……いや、パストラットには『大事な用件だ』と言っている。世間話でごまかすような真似をしたら逆に怪しまれるだろう。ここは単刀直入に、えーつと……『偽造してもらいたいものがある』みたいな感じか。送信っ。

ハヤブサが飛んでいく。

この通信方法の遅延はどれくらいだろう、とふと考える。ハヤブサが行きに3秒返りに3秒要するのに加え、パストラットと私のタイピング速度があるから……うーん。ま

あ思考入力もあるし、対して長くはないだろう。

ほら、もうハヤブサが返ってきた。

えー、なにになに。

『ボルクネス「ぎ、偽造?……あーいやなんでもないさ、『わかった』と伝えてくれ。ドロー」

偽造って何?

犯罪の香りがする』

ボルクネスウ……。

私は頭を抱えた。

まずい、速攻でバレかけてる。えーつと……とにかく何かごまかさないと。偽造? 偽造かあ。同音異字で何かないかな? 宜三、儀蔵、義三、ギゾー……うーん人名ばかり。あんまり返信に時間をかけても怪しまれるし……よし、偽造は偽造でも私たちは追いかける側ということにしよう。えーつと、偽造って呟いてるの怪しまれてるぞ口には気も付けたらあえず「なんかの偽造事件」……なんかつてなんだ? まあボルクネスに考えてもらえばいいや。「なんかの偽造事件」が発生しててその真相について調査するために手紙が来てるらしい的な感じをお願い、送信つと。

「……ふう」

私は一仕事終えた感を出した。実際のところ、全体から見ると十分の一仕事くらいだ。まあそういうこともある。

……ハヤブサが返ってくるの遅いなあ。やっぱり何が偽造されたのか丸投げしちゃったのがダメだったかな？

私がうつすい紅茶をずっと啜っていると、少なくとも二分は待った後でようやくハヤブサが返ってくる。

どれどれ。

『ボルクネス「あーえっと、クグリンによるとだね。フィロジオのカードを偽造して売りさばいている悪質な集団がいるらしくて、それを捕まえるべく俺の助けが必要らしいんだ」

なるほど、それは確かに悪質だね

悪質事件の情報はだいたい耳に入れるようにしてるけど、やっぱり漏れがあるなあ協力しようか？』

……まだ怪しんでるな。文面からわかる。「事件を追っている」という形にしたのは失策だった。パストラットはNPCの依頼を受けて色々やっているわけで、そこに入ってくる事件情報は私の比ではない。というか、事件を追っているならこんな面倒な形を取らなくても普通にパストラットと直接やり取りすればいい話だ。これやらかしたか

な? いやまあ……うん、たぶん何とかなるよ。

エーっと次の文面は……あんまり長引かせるとパストラットが怪しんで終わりだ、ごまかしつつ偽造の件を同時並行で進める感じでいこう。そうだな……とりあえず『書類だど……?』みたいな意味ありげな眩きで時間を稼いでもらおう。稼いでもらってる間に書類が具体的に何なのかを考える。で、それはそれとして偽造してほしいものは実は紹介状なんだよという話を入れる。とりあえず偽造が可能か不可能かを言ってもらおう、これは普通にパストラット本人に「可能だ」「不可能だ」と言ってもらえればそれでいい。うん、送信。

さて、書類って何だろう?

私は考え始めた。幸い、さつきまでの様子を考えると返信にはまた二分(ハヤブサが見える)いや早っ!し、仕方ないな……。ハヤブサの展開したウィンドウを見る。

『ドルクネス「書類、だど……!?ああ、可能だと伝えてくれ」

可能って何?

何か隠してるよね』

ヤバイ……。

しよ、書類? 書類っていったい何なの? 冷静に考えて。フィロジオカード偽造事件で書類? そもそもなんで私は旧大陸にいるのにフィロジオカード偽造事件に関わってる

の？えーっと。ヤバいやバいやバい……！身体が固まる。どこかで鳴った時計の秒針の音がやけに大きく聞こえる。うわっ返信が遅すぎて追いハヤブサ来た！

『ボルクネス「書類……書類か。ふむ……書類、とはね」

何のつもり？』

諸刃の剣だぞそれえ……。

そ、そもそもパストラットはどのレイヤーで私を疑っているんだ？二通り考えられる。『フィロジオ偽装事件』は存在するとしたうえでそこに私が一枚噛んでいるのではないかと疑っている説、『フィロジオ偽装事件』じたい嘘なのではないかという説。じゃあ……仕方ない、コラテラルダメージの精神で行こう。まずは前者だと信じ込ませることで、後者という真実から目を遠ざける。

と言うことで書く。書類だぞ連呼は怪しいからヤメロ、資金は銀行経由でここの振り替え窓口に入れるから受け取って、錬金術師ギルドを装った紹介状でよろしく。そして……『燃やしていいと伝えろ』みたいなことを言ってほしい。送信。

一瞬で返ってきた。

『ボルクネス「燃やしていいと伝えてくれ」

燃やしていいって何を燃やすの？

フィロジオ偽装事件と何か関係あるんだよね？

そつちに行つて聞くからね』

……もう仕方ない、パストラットが次の調査船でこつちに来るのは確定だ。でも……だからどうだろう?こつちに来たところで……。

『紹介状の偽造』という真実には決してたどり着けない……!』

せいぜい、私のでつち上げた目くらましに引つ掛かるだけだ。

私は面白くなつてきた。テンションが上がつてきた。椅子から立ち上がり高笑いをしようとした。しかし横に佇むパストラットを見て考えを変えた。

『紹介状の偽造』つて、何?』

……そういえば、転移魔法スクロールがあつたつけ。

「詳しく聞かせてもらうよ、クグリン」

そうして尋問が始まると同時に、なぜだかニコロがぱちりと目を開いた。彼女は機械らしからぬ動作で瞼を擦ると再び閉じて、もう一度スリープモードの海に沈んでいった……。

影の中で想おう！

「落ちるぞおーっ！っ！」

誰かが叫ぶ声が聞こえる。

〈住宅〉だ、〈住宅〉がみつつ落ちてきた。それらは投下された爆弾みたいに連なつて、空と空との境界線から出現し、私たちの地上へ会いに来た。角ばつた形状の〈住宅〉が雲をバツクに風に舞う様は、投げられた賽が運命を決めかねているようにも見えた。しかして、地上に落ちないわけにもいかない。どしん、どしん、どしん、と。三つ立て続けに〈住宅〉は落ちて、重力を地面にこれでもかと伝えて、衝撃を四方八方に送り付けた。落下に伴い小さくなつていく影や、何でもないようについ傍らの空を飛ぶ小鳥たちを見ていると。落下の光景はまるで、現実であり得ないものごとが実体化して現れたようにも見えたのだ。

墜落音が聞こえる。

風が吹く。衝撃の風だ。地面があげた悲鳴の風だ。それらは私のすぐ横を、すぐ下を、すぐ上を通り、私の身体そのものを通り抜けていく。その心地はぞつとするほどに爽やかで、悲鳴にしては透明感に満ち溢れすぎていた。

ああ、夢が。夢が墜ちてしまったのだ。

「というわけで私の勝ちね」

「悔しい〜!」

私はジューゲツキに賭けで勝った。紙一重の差だった。もう一時間崩壊が遅ければ負けていた。

〈繁殖住宅〉パツァー! トメシトレイン 計画、頓挫の瞬間であった。

◆ というわけで反省会だ。

ジューゲツキがベットしていた4000マーニを受け取った私は、ラエルカンに頓挫に關する説明を聞いている。正直帰りたい。こいつと関わりたくなくないからだ。

とは言えそういうわけにもいかず、ラエルカンは指示棒を伸ばしたり引つ込めたりしながら言う。

「このゲームの物理エンジンへの理解が不足していたようだ」

へえ?

ラエルカンはおもむろにホワイトボードに線を引き始めた。油性……かどうかはわからないけど、とにかくなにかしら性のマーカーがキュッキュと音を立てる。

「シャンフロエンジンは『リアルさ』を喧伝している、それに引つ張られすぎた。考えて

みると、完璧にリアルなエンジンなら魔法なんてものが成立するわけがない」
確かに。

ラエルカンは続ける。

「そもそも、シャンフロエンジンという名前が良くないのだ。『シャンフロのエンジン』と『シャンフロエンジン』は違う。まずユートピア社が汎用的に使えるシャンフロエンジンを作り、それを拡張してシャングリラ・フロンティアに組み込んだ……いふなればシャンフロエンジン α だ。GH:Cに採用されているものは β だし、ネフホロ2に採用されるものは γ と表現すべきだろう」

「要するにどういうこと?」

「シャンフロエンジンはリアルでも、シャンフロのエンジンは少しだけリアルではない部分を持っているのだ」

ややこしっ。

ラエルカンが続ける。

「代表的なものなら『魔力』だが、他にも細かい調整が入っている」

ラエルカンはホワイトボードに何かを書き殴った。何これ？

「このように」

指示棒で書き殴った何かをなぞっている。どのように？

「Y座標……いや、シャンフロの大地は球状地形方式を取っているから、単に高度と言ったほうが正確だろう。高度が上がれば上がるほど、何と言うか……運が悪くなる、とでも言うべきか」

「なんだか要領を得ない。というか虚空語り掛けモード入ってない？不安だなあ……ちよつと巻きでお願いしよう。」

「結論としては？」

「〈繁殖住宅〉の稼働は中止だ」

わかりやすい。

「とは言え破壊するのも面倒だから、このまま設置し続ける形になる」

な、なかなか無責任じゃん……。

……私は、ホワイトボードのすぐ横に高く積み上がった住宅たちを見上げた。雲すら貫く勢いで天へと手を伸ばすそれは、この先もずっと手を伸ばすだけで、到達することも、諦めることもできない、中途半端な状態で放置され続けるのだ。

まあいいや、それじゃあ撤収……。

「おや、その征服人形は」

ゲゲーツ！

まずい、ラエルカンとは基本的にそんなに関わりたくないのだ。ニコロに目を付けら

れたりなんかしたら、いつ実験に利用されるか分かったものじゃない。
ちようどスリープモードを解除したニコロにラエルカンが詰め寄る。

「ほう、アイヴィ型……それも未契約だな？なぜ旧大陸に」

「ニコロ、こいつの話……！」

「……」

「ほう！ニコロ……アイヴィⅡ256か。2の8乗とはなかなかキリがいい。……どう
だアイヴィⅡ256、私の計画に乗らないか？そうすれば——」

ラエルカンが何やら耳打ちを始めた。絵面が悪の組織への勧誘なんだよ……！

「ちよつとおー！」

ニコロの腕を掴む。さあ行こう……

「わ、当機は」

……若干揺れている……？

「アイヴィⅡ256、次の機会を待っているぞ！」

私に引きずられるニコロの背中に、ラエルカンが何やら声をかけている。私は無言で
ニコロをチェストリアに収納した。

反転し、ラエルカンに言う。

「あんまりニコロにヘンな事を吹き込まないで欲しいんだけど」

「ヘン……?このゲームをぶっ壊すことのどこがヘンだというんだね?」

「ヘンすぎるくらいヘンでしょ!」

「それにだクグリーン氏、仮に私の主張がヘンだったとしても」

ラエルカンが長い指を突き立てた。

「君が口を挟む理由などあるか?」

それは……。

……私はニコロと契約していない。システムのには、ニコロにとつて私とラエルカンの間に差異が無いということだ。それじゃあ……

「……ニコロに酷い目に遭つて欲しくないから」

私は、なぜニコロを守ろうとしているのか。

「君は散々他者を酷い目に遭わせてきたのではなかったか?バッド・ク・ラフトの顛末も知っているぞ。他者とアイヴィⅡ256で何が違うのだね?」

「それはっ」

何か言わないと。

「……ニコロには、利用価値があるから」

ラエルカンは長身を反らせる。納得したように振る舞っているが、彼の声色からは常に狂気がにじみ出ている気がしてならない。

「そうか——先行者利益を享受しようというわけだな」

背後に積み上がった〈住宅〉たちの影が、先ほどより少し小さくなっていることに気づいた。太陽の位置の変化によって、塔はシルエットを変えてみせ、ラエルカンと私の影を飲み込んでしまう。

「それならそれでいい、が」

ラエルカンは踵を返した。ついに帰るのか!? 私は喜んだ。こいつと話せば話すだけ将来が暗くなっていくという認識が定着しつつある。

「……アイヴィ||256に利用価値を見出しているのは君だけではない。それを忘れな
いことだよ、クグリン氏」

一つ、その言葉だけを一つ残して。ラエルカンの長い背中中は、濃影の中を静かに去っていった。

私はビビった。

「落ちるぞお——っ!」

ちやうどその時、誰かが叫ぶ声が聞こえる。どうやら〈繁殖住宅〉パツファ! トメントレイの頓挫は進行途中だったみたいだ。運が悪かったらしい〈住宅〉は、直方体の形状を日光に晒し、木々の麓に影を落として、大空の中を崩壊しながら落ちていく。

墜落音が聞こえる。

……とりあえず、ジユゲツキに8000マーニを渡しに行こう。
通り抜ける衝撃を感じながら、私は影の中でそう思った。

さらに買い物しよう！

「ねえニコロ、そろそろ契約してくれたり……」

「消極的めんどくさい：」

「知ってた。なんかこう……仮契約みたいなヤツ無いの？」

「返答：ある。逆接けれど：クグリンには向かない」

「なんで」

「死ぬと解除されるから」

「そりゃ向かないね」



というわけでダメだった。ニコロは対話くらいはしてくるようになりつつあるけど、やはりまだまだガードが固い。飛行ユニットだけでも使わせてほしいんだけどさうもいかない。

「……はあ」

小さく発した溜息が、夜道を照らす街灯の中で霧散していく。今夜の私は忍者モード、任務内容は……侵入だ。

……ここ最近、私はずっと金の使い道を探すために金を使っている。いかにもワルそうな服装で下品な笑いを浮かべる兄ちゃん、背中に手を回し、札束を握らせて情報を聞き出すとかそういう感じだ。ハッキリ言ってもう懲り懲りだ。そろそろいかにもワルそうな服装で下品な笑いを浮かべる兄ちゃんの背中に手を回すのをやめ、もつと有意義なことに時間を使いたいという気持ちがある。

そういうわけで、ショッピングをすることにしたのだ。

「よし……と」

では、なぜショッピングをするために玄衣に身を包んで使い捨て^{マジックスクロール}魔法媒体専門店の煉瓦壁に張り付き、中の様子を窺っているのか？ それには長い説明が必要になる。一つ言えるのは、トップ克蘭のブラックリストに載るべきではないということだ。

……とりあえず、入ったら即気づかれるということとはなさそうだね。「ステルスアサルト」発動、煤けた窓の内部を覗み、「空蟬」で侵入……いや、丸太が出現するから潜入向きじゃない。というわけで【瞬間転移】で侵入する。

「……よし」

小さく呟く。侵入成功だ。

現在、私は魔法店の商品倉庫にいる。天井に吊るされた魔力照明は弱いものの、これでもかと並んでいる木棚や、吊り下げられた「黒剣」のエンブレムの旗を視認するには

十分だ。棚の中にはいかにもレアそうなスクロールがたくさん納められている。正直言つて盗みたいけど、盗むとカルマ値が上がりすぎる。逆に侵入だけなら大したことはない。このゲームの量刑判断への謎は深まるばかりだね。

……さて、ここからのルートを考えよう。そもそもどうして魔法店に侵入しているかというと、強力な使い捨て魔法媒体が欲しかったからだ。店売り品はエリアが進むほど強力になるから、買うなら旧大陸における最前線のファイフテイシアだ。しかしファイフテイシアは長い間トップ克蘭の拠点として運用されてきたため、ある程度高級な店に行こうとするとすぐに「あの克蘭の出資店です！」という看板をひっさげ始める。私はトップ克蘭のブラックリストに入りがちなので、基本的にそういう店に入ろうとすると雇われNPCに追い払われる。逆に言うと、追い払われるイベントさえ回避できればいい。ブラックリストと言つても長いだろう、そんなものを関係者全員が頭に入れておけるはずがない。一介の店員NPCは私の顔を知らないだろう。つまりそれで押し通せば勝てる。

そういうわけで、結論としてはこうだ。商品倉庫から誰にも気づかれずに出て販売フロアに向かい、「さつきから買い物しましたよ」とでも言いたげにうろつく。で、さりげなく目当ての品を取つてさりげなく会計し、買ったものをチェストリアに入れた後に即自殺、近くの宿屋にリスポーンする。

……完璧な作戦だ。

よし、後は行動するだけだ。私は立ち上がった。

「あ、ども」

ちようど同時に立ち上がった打稻魔系ダイナマイトが挨拶をしてきた。

「あ、ども」

私も流れるに挨拶を返した。

……?

「えっと、気にせず続けてくださいね? 僕は後ろでスクショ撮ってますから!」

………?

まあいいや。

私は歩き出した。アクセサリーの効果で足音は抑えられるけど、それでも出ないわけじゃない。注意しなければ。

……。

しばらく歩いたところで振り返り向く。

「あ、ども」

ダイナマイトがファインダー・インターフェースを覗き込みながら挨拶をしてきた。

「なんでいるの?」

「能動的晒し行為アクティブ・エクスポージャーつてやつです！」

ただの盗撮では……？

私は思った。

思ったけど、別に指摘すればカメラを下ろしてくれるわけでもない。撮られっぱなしも癪だったので、せめてもの抵抗としてスクショアイテムを取り出し、逆にこちらからもダイナマイトを撮影する。撮影しながら考える。

……まずいな、色々まずい。彼女がいると侵入が失敗しそうなのもそうだけど、一番危惧しないといけないのはニコロの存在がバレることだ。晒しスレにニコロの画像が投下された瞬間、何だかんだあつて最終的に私が爆発して死ぬのが確定するからだ。とは言えダイナマイトをぶつ殺したら元も子もないし……そうだった。

私はカメラを下ろした。ダイナマイトはカメラを下ろさなかった。彼女に言う。

「じゃあ盗撮は不問にするから、鉄砲玉になつてよ」

「了解です！」

そういうことになった。



「もう一度言うけど、『なるべく着弾が遅くて、目立つ魔法』だからね」

「わかつてますよ！回収済みです！」

具体的にどこから回収したのかは聞かないことにしておこう。私のカルマ値に影響がなければそれでいい。

「じゃあ、お願い」

「はい——」ガルクエス・ウィッシンク
【偽退遁装】

渦焔が空中に爆ぜた。

めらめらと轟音を上げながら、発動と共に出現した炎がうねり、成長していく。とりあえず『目立つ魔法』であることは間違いないね……傍にいるのに全く熱くない事を考えると、多分見掛け倒し用の魔法なのだろう。

売り場へと続くドアが勢いよく開き、NPCの店員が飛び込んでくる。

「あ、あなたは何ですか!」

ダイナマイトは答える。

「ちよつとしたテロリストです」

「そつ」

「そこ、危ないですよ」

「ひっ!?!」

彼女が指さした店員のすぐ横、そこを一匹の猪が駆け抜ける。その体は炎によって作られていて、走行と共に火の粉を飛び散らせる。相手を動揺させるためにこうなってい

るのだろう。

「ひ、火が」

「安心して下さい、燃え移ったりはしませんよ」

「えっ?じゃあ……」

「いややっぱり燃え移ります」

「どういうことですか!？」

「おいどうなってる!？」

売り場にいた店員たちがダイナマイトのもとに集まっていく。それは売り場側での警戒が薄くなると言うことでもあり、プレイヤーによる誘導が可能な猪は、誰にも見られず柵の間を抜けていく。

「ダメですね。要領を得ない」

「この炎つてガルウエス||ウイツシング【偽退遁装】じゃないですか?目くらましに発動してそのスキに逃げ出すための魔法だ。被害なんて出しようがありませんよ」

「ふふ、あなたがそう思うならそうなんでしょうね」

「何意味深なこと言ってるんだ!」

ダイナマイトが時間を稼ぐ間にも、猪の時キャストタイム間はどんどん縮まっていく。時間経過に伴って、その体表の炎もだんだんと弱まっていく。それは体を縮め、足取りを遅め、最

後には——消える。

「よし」

そして、私は【おぼろなほり朧隠】を解除した。

ふふふ……無事に売り場に侵入することができたみたいだ。棚を見渡す。えーつと、これとこれと……コレ！棚の付近に展開したウインドウを覗き込みボタンを連打、どんどんカートに詰め込んでいく。

「全く……何だったんだ？」

「何でもなかったんじゃないですか？販売を再開しましょう」

「ああ……」

ちやうど店員たちが帰ってきたようだ。私はカートを改めて確認すると、たたとカウンターの方に走った。黒死の怨涙を取り出しながら、大きな声で彼らに言う。

「会計を！」

【盟友救助】で遊ぼう！

「ククククク……！」

ぺらり、ぺらり。分厚い紙束をめくる音が、暗闇の中で静かに広がる。

闇は覗き込んだ洞穴の中に広がるそのように、空間を重厚に塗りつぶし、決して明るさなどというものを許さない。しかし、そんな中でも……ただ静かに、ごく少しの光を発する存在なら三つある。一つは卓上でゆらゆらと燃える蠟燭の灯、もう一つは左の眼光で、最後の一つは右の眼光だ。喜びのような悪巧みのような、何とも言えない色がそこには宿っている。

【加算詠唱】^{アッドスベル}十七枚、【加算詠唱】^{アッドスベル}十九枚、【加算詠唱】^{アッドスベル}二十枚……！」

眼光の主の手中にて捲られているのは、薄褐色をした使い捨て魔術媒体だ。もつともこの暗闇にあつては、薄褐色も焦げ茶色にしか見えない。

計上は淡々と進められる。

【加算詠唱】^{アッドスベル}二十三枚、【加算詠唱】^{アッドスベル}二十四枚、【加算詠唱】^{アッドスベル}二十五枚……！」

がたり。

闇の中に吞まれてこそいるものの、この室内には椅子も存在する。それが今、立ち上

がった眼光の主によって動かされた。今の物音はそれに起因している。

「やっぱりだ——」
フレンドワーフ【盟友救助】、デュアルスベル【二重詠唱】、エクسسベル【拡張詠唱】、そしてアットスベル【加算詠唱】……！！
 何度数えても、四魔法二十五枚ずつある！」

眼光の主はスキップを踏んで部屋をぐるぐる周り始める。それによって気流が生じ、蠟燭の灯が僅かに揺れる。部屋の隅に置かれていた生首が目を開き、かくして光源は五つとなった。

カーテンが開かれる。

「さあ、今度こそ新大陸に行くぞ！」

室内を照らす暴力的なまでの日光に、闇たちはすっかり消え失せた。代わりにスクロールの束を片手に笑っているのは、つい先ほどまでの眼光の主だ。

そう、私である。

◆
フレンドワーフ【盟友救助】は壊れ魔法だ。

近くにいる（壊れポイント1：「近く」と言ってもキロ単位）

『救難信号』を出している任意の（壊れポイント2：別にフレンドじゃなくても使える）

人間（壊れポイント3：「プレイヤー」ではなく「人間」、征服人形も可）

のもとに転移（壊れポイント4：近ければ未開拓エリアでも行ける）

し、数十分間（壊れポイント5：長すぎる）

に限り行動を取った後、元居た地点に送還される（壊れポイント6：途中で死んでよ
うが送還される）

という効果を（壊れポイント7：転移先でさらに発動した場合、送還イベントが二回
発動して転移先に留まることが可能）

持っている。（壊れポイント8：魔法強化魔法で射程を伸ばせる）
はつきり言つて最強に近い。

なぜ私がこの最強魔法に手を出していなかったかというところ、この壊れぶりを十全に発
揮できる相手がいなかったからだ。いくら射程が長いと言つてもせいぜい二桁だから、
新大陸のプレイヤーのところまでひとつとびというわけにもいかない。適当な協力者
を雇つて密航させてある程度船が進んでから【盟友救助】で追いつく戦法なども考えた
けど、協力者側が『救難信号』を出さずに金を持ち逃げしたため失敗に終わった。やは
りプレイヤーはクソだ、信じるわけにはいかない。

しかし、今の私にはニコロがいる。つまり最強と言うことだ。



「いや、【盟友救助】で新大陸は無理じゃないか？」

しかしペンペンを誘つたところ心ない事を言われた。うるせ〜！

私は反論する。

「いやでも【盟友救助】フレンドワーフはすごいよ!【瞬間転移】アポートが5メートルのところこいつは20キロまで行けるし!20キロって!」

「実際壊れではあるよな……でも新大陸って5000キロ先だろ?20キロ25枚は心もとないって」

「この魔法強化魔法コンボで10倍にできるよ!200キロだよ!」

「……確かに全部使えば5000キロになるが……」

「ね?」

ペンペンは訝しげだ。まあ、荒唐無稽なアイデアの自覚はある。

「まああの……ちよつと実演するから。見ててよ」

「へえ?」

とりあえず魔法強化魔法コンボは無し、【盟友救助】フレンドワーフを一枚だけ使う方向で行こう。

私はペンペンから視線を動かし、砂浜の先に広がる大海原を見た。そつと生首を取り出す。

「ニコロ、準備はできてる?」

「不十分:問題ない」

振りかぶる。

「ちよつと待つて」

何？

「投げるのか？ニコロを」

「うん。どうせなら自力で飛んでほしいんだけどね」

「消極的：自発的運動の拒否」

「どうか飛べるんだったら普通にロープで吊り下げてもらえばいい話だしね」

「同調：」

「投げてどうするわけ？」

「救難信号の常時発動くらいならニコロもしてくれるんだよね」

「同調：」

「ニコロの首をブン投げて【フレンドタワー盟友救助】するわけか……手で投げるんじや20キロ飛ばせ

なくない？」

「これは実演だからね。実際は自走竜砲で撃つよ」

「200キロ飛ばせなくない？」

「飛ばせない」

「ダメじゃん！」

ダメだった。

「おいクグリン！お前おかしいぞ！テンションがおかしい！」

「おかしくないよ！」

「いやおかしいよ！いつものお前ならもうちよつとマシな理論で計画を立てるって！昨夜何時間寝た?!」

「20分！」

「ニコロを仕舞え」

「ニコロを仕舞ったよ」

「一旦死んどけ！」

ペンペンはおもむろにバトルアックスを取り出し、私の首をサクツと落とした。



起きた。天井が見える。

……もしかして寝落ちしてた？昨日のことが思い出せない。なんかこう……そう。

最強の【盟友救助^{フレンドワーク}】の使い方を思い付いたんだった。その使い方とはこうだ……まず地

点Aから【乱数転移^{シャッフル}】で新大陸の地点Bを引き当て、強制送還が起こる瞬間に【盟友救助^{フレンドワーク}】

で別のプレイヤーのいる地点Cにワープする。直後に【乱数転移^{シャッフル}】の強制送還で地点A

に戻るけど、その数十分後に【盟友救助^{フレンドワーク}】の強制送還が起こること最終的にBに留ま

り続けられる。そう、そんなだった。これを使えば、新大陸にテントを張る必要すら無

く、時間に追われる必要もまた無く、新大陸への転移を引いた時点で行けるのが確定する。

でも……ああ、思い出したら悲しくなってきた。私は碌に準備せず、金も持っていないころに【乱数転移^{シャッフル}】権を使ってしまった。今更この方法を思いついても遅いのだ。それで悲しくなつて、なんとなくスクロールの数を数え始めて、それが逆に楽しくなつて……気づけば、朝になっていた。

ふとスクロールを取り出せば、その紙面には点々と丸い染みが残っている。きつと、私の涙だろう。

「ようクグリン、起きたか」

部屋の中にペンペンがヌツと現れた。本当にヌツて感じだった。何かがおかしい気がするが、寝起きなので判断力が下がっている。VRゲームを遊んでいる途中に寝落ちすべきではないと言うことだけが確かだ。

「とりあえず聞こう、【盟友救助^{フレンドウレブ}】で新大陸に行くならどういう方法を取る？」
えーつと。

「まず、ベヒーモス内での挙動を検証する」

「その心は？」

「ベヒーモスってクソデカイじゃん？」

「クソデカいな」

「でもあんまり広いイメージないじゃん？」

「広いイメージないな」

「多分なんかそういう超技術なんだよ、空間湾曲みたいな。……その対象下でも20キロが20キロのままなのか確かめる。あとは完全に隔離された異空間とかも調べたいね」

「よし、それでこそだ」

ペンペンは言った。

私は何だか嬉しかった。なんとなくペンペンの頭上のプレイヤーネームを見た。赤かった。なるほど。よく見れば、彼の肉体が段々その透明度を上げていく。私はそこでようやく気付いた。ああ、彼の足元にあるのは「フレンドワーフ盟友救助」の魔法陣じゃないか。

サツと消えていったペンペンに、私は穏やかな心持ちで手を振った。

無念の塔の頂上で 其の一

「グリッチはやめろグリッチはやめろグリッチはやめろ………」

むき出しの欲望が広場を駆ける。

プレイヤーキルの発生と、それに伴う賞金狩人の到来——への期待。それらが熱気となつて満ち満ちた広場を前に、私は傍らの征服人形に囁いた。

「ねえ、ニコロ」

「なに」

あなた、少し変わったね。

そう言うか迷つて、やつぱりやめた。ニコロは相変わらず怠惰なままだけど、最初に比べれば僅かに現実に目を向けるようになってきた気がする。現に、今の「なに」という受け答えだって、以前のように仮眠状態に入りっぱなしではできないものだ。

「……なんでもない」

「そう」

でも、それを本人（本機？）に言うのはまだやめておく。

彼女がどうしてこんなに怠惰なのか、私にはまだわからない。わからなくていいとも

思う。過去をいちいち掘り返さずとも、現在のニコロと対話することは可能だ。

……もう少しだけ勤勉になってくれると、個人的には助かるんだけど。

「ティッ」

誰のものでもない叫びが発生し始める。変態の叫びであることは間違いない。何の変哲もない広場の中に、金色の……揺れ動く髪の毛の残像が、一つ確かな線を描く。

さあ、撮影の時間だ。

「ティーアスだアーーーーッ!!」

歓喜だ。歓喜の叫びが広場に響く。同時に、紅のポリゴンがいつものように散る。目にもとまらぬ速度で何かが動いている。それはついさつき同胞を殺して見せたプレイヤーに肉薄し、その命を一撃で――！

どかん。

「えっ？」

眩きが掻き消されてしまった。

爆音と、爆風にだ。

突如として発生した火炎球が膨張していく。破壊の紅色が視界を埋める。規則正しく並んだ石畳が剥がれていく。衝撃がアバターを打ち、HPが減っていく。

これは。

「に、ニコロ……っ」

傍らにいたはずのニコロがない。どこに……ああ、背後を見て理解する。爆風で飛ばされたのか。とりあえず破壊されてはいない、それを知れただけで十分だ。

周囲を見渡せば、着せ替え隊の面々の誰もが、強烈な炎光に照らされながら混乱している。この爆発は予定されたものじゃない。ティーアスは問題ない、でも周囲にいたNPCは？違う、よく見れば着せ替え隊の面々の間に、NPCが怯えた様子で佇んでいる。ティーアスが超スピードで逃がしたんだ。さすが、だけど。

「やはり使ったか」

爆炎の向こう側から声がした。

聞き覚えのある声だ。

私はそれを認めたくなかった。これだけ大規模な爆弾を用意できて、これだけのことをする動機がある。そんな人物への心当たりを捨てたかった。

生成された火球のエフェクトがだんだんと晴れていく。その向こう側には二人の間がある。一人はティーアス、金髪の幼女が様々な魔法のエフェクトに濡れている。牢魔法、鎖魔法、鉄格子魔法——それらはどれも拘束のための魔法だ。そして、もう一人は。そうだ、長身の男で。なぜか頭部が燃えている。頭上のプレイヤーネームが、段々と赤く染まり始めている。

「ラエルカン……！」

私の声を無視し、彼は虚空に語り掛ける。

「超^{タキオン}速を長時間発動させるためにはどうすればいいか？ 考えたよ。ティーアスに正面から挑めば普通に撃破される。だから爆弾を使用して、彼女に移動を強要することにした。とは言え……ただ爆破するだけではやはりダメだ、ティーアスは普通に素の速度で爆破距離圏から脱することができるとし、超^{タキオン}速を使うとしても僅かな時間だけだ。だったら——彼女は秩序側のキャラクターだ、NPCを人質に取られたら？ 助けるしかない。そこを狙い目にすればいいのだ」

彼は爆発の真つただ中にいたはず、なぜピンピンして……よく見れば、その全身には薄い紫色のエフェクトが走っている。ああ、聖杯を使ったのか。頭部が蒼く燃えているのも何かのアイテムだろう。大疫青由来か？

「おい、ふざけんな！」

「ティーアスたんをどうする気だ！」

「死ね！」

罵声だの投げナイフだの魔法だの弾丸だの、様々なものがラエルカンに殺到する。全てダメージには繋がらない。

彼はそれを無視した。

「なに大丈夫だ、これ以上のことはしない——ただ『ティーアスと戦って、勝った』。その事実さえ手に入ればそれでいいのだ」

「ニコロっ」

直感的に叫んでいた。

こいつがこのゲームを壊そうとしているのは今に始まったことじゃない。でも、今回はダメだ。よくわからないけど彼の思い通りにコトが進んでいるように見える。確かに相性が良ければティーアスに勝ち逃げするくらいはできるだろう、でもその相性を作るにはかなりの準備が必要になる。こいつは本気だ。きつとこれまでも本気だったけど、私は少し樂觀的に見ていた。一旦ニコロを退避させた方がいい。

「おや、やはりいたか」

振り向いて視線を向けたニコロの傍らに、なぜかラエルカンは既に回り込んでいる。転移魔法を倍化したか？

「好都合だよ。アイヴィⅡ256、私の計画に参加するね？」

「断れーっ！」

【空蝉】！【瞬間転移】！まだまだ、まだ距離が足りない！ニコロのもとへと走る。おいおいおいおいおい！

「………当機は」

「もう一度言うぞ、後悔をやり直したくはないか？」

「……………」

何話してんだよ。

ラエルカンがニコロの手に触る。ニコロの機体が光に包まれていく。まずいまずいまずい……！彼女はチェストリアへの収納を拒否しない。私がさんざん利用してきた設定だ。でも、それは誰かに横取りされても文句が言えないということでもある。

「ニコロを」

私は回復ポーシヨンを取り出した。針の刺さった人差し指を回復するために用意しておいたものだ。

「返せっ」

クリアグリーンの液体が瓶から躍り出て、ラエルカンのアバターを濡らした。

「……………ほう」

クソ、まだ死なない。

ラエルカンはダメージ反転聖杯を使っている。回復されまくれば死ぬということだ。しかし死なない。なぜか？きつと燃えている頭にカラクリがある。大疫青のアイテムを思い出せ。そうだ、どれもこれも体に悪そうな物ばかりだった。でもラエルカンはダメージ反転聖杯を使っている。体に悪そうなものを反転すれば当然体に良くなる。ク

ソ。

彼は悠々と言った。

「すまないが、ここらで行かせてもらおう」

「何をするつもり?!」

「このゲームをぶっ壊すのだよ」

そんなことは知ってる。

ニコロを取られた、それはどういうことだ？彼女は怠惰だけど前ほどじゃない、今なら契約くらいはできるかもしれない。じゃあ契約して何をする？ダメだ、思いつく悪巧みが多すぎる。一体、何を。

「待てっ!」

空間を紫電が走る。【座標移動^{テレポート}】のエフェクト。

着せ替え隊の誰かが背後で叫んだ。

「どこに行く気だア!」

「強いて言うならば」

ラエルカンのアバターが透け消えていく。行き先は完全に不明、どちらの大陸かすらわからない。

「過去、だよ」

何だと……？

「タイムトラベルによってこのゲームはぶっ壊せる」

その言葉を最後にして。ラエルカンのアバターは、ニコロを内部に収めたチェストリアと共に、このゲームのどこかへと転移していった。

無念の塔の頂上で 其の二

「本当に後悔をやり直せる？」

「ああ」

「……わかった」

アイヴィーⅡ256は仮契約^{トライアル}プロセスを可能な限りスキップして完了させた。

アイヴィーⅡ256の思考ルーチンは、簡潔に言うなら『後悔の少なさ』に重きを置くものだ。外部世界で実体化して過ごす間、常に『後悔』のリスクは発生し続ける。仲間を目の前で失いたくないなら、失うような場所に行かなければいい。仲間を作らなければいい。更には、目を開けることをやめればいい。そういった解決法を集約して、そして一つのラベルを貼り付けるとき、そこに印字する文字列は「めんどくさい」になる。

仮契約が完了すると同時に、ラエルカンの手前には一枚のウィンドウが出現した。

『ユニークシナリオEXの条件を達成しました』

『ユニークシナリオEX「あなたに捧ぐ旋律^{ウタ}」を開始しますか？はい いいえ』

「当然だ」

ラエルカンの眩きと共に、指が伸ばされ肯定^{はい}が選択される。アイヴィーⅡ256への指

令変数が書き換わり、プロトコル「オルケストラ」への案内が説明フェーズをスキップした状態で開始する。

「誘導こっち…事務所ドールフロントまで残り……10メートル？」

「ああ」

ラエルカンがつい先ほど己の這い出してきたテントを破壊している。それは入念な下調べを通し、あらかじめ木々の間に設置されたテントだ。

彼は破壊を完了すると、振り向いた先のアイヴィ||256に言った。

「招待状を渡せ」

いつの間にか自分が新大陸に戻ってしまったという事実について処理しつつ、アイヴィ||256はどうか、「ああ、うん」という返答を絞り出した。



「無口だな」

「……」

通路の終点、巨大な木造の門の前。アイヴィ||256とラエルカンは、静寂と共に並び立っていた。

開演が近い。

「まあいいだろう。このチェストリアを装着しておけ」

「……」

ラエルカンはウインドウを操作して、アイヴィⅡ256の装備内容にチェストリアを加えた。

「そいつは」

彼は続ける。

「私の持つもう一つのチェストリアとリンクしている」

「……」

「チェストリアというのは何だかよくわからないアイテムだ。格納空間の内部における時間の流れ方は現実と違う。同期処理の弊害だな、処理的には同時に進んでいるはずのイベントがチェストリアの内部では食い違うことが良くある」

「……」

アイヴィⅡ256は理解しつつあった。ラエルカンが説明の対象にしているのはアイヴィⅡ256ではない。目の前に広がる虚空だ。

「テイーアスの超越速^{タキオン}は、チェストリアの内部的な時間をも遅くする。超越速^{タキオン}の影響を受け^{ない}地点では内部時間は変化しない。では、超越速^{タキオン}をオルケストラのような異空間で発動させ、影響を受ける地点と受け^{ない}地点に二つのチェストリアを置き、それらがリンクする形にしたらどうなる？」

「……」

アイヴィーⅡ256には。

「そう、ズレが生じる。仮に影響を受けない地点で50秒経過したとして、影響を受ける地点ではまだ10秒。つまり40秒の差が生まれるわけだ。この状態で進んでいない方のチェストリアから進んでいる方のチェストリアにセーブポイントを転送し、そこに死に戻りすれば……『40秒速い』セーブポイントに戻る、つまり40秒前にタイムトラベルできるといふわけだ。しかし現実になんかあるだろうか？このゲームはそんな実装をしていない。タイムトラベルをしようとすれば破綻する。つまり、ぶっ壊れるといふわけだ」

アイヴィーⅡ256には彼の話の意味が分からなかった。しかし、『後悔をやり直せる』という言葉の正しさを疑うことはできた。意味の分からぬ部分ゲームとか実装とかを抜きにしても、「タイムトラベルは不可能だ」と言っているようにしか聞こえなかった。

でも。それを聞いたただしたとして、いったい何が変わるだろう。

既にアイヴィーⅡ256はラエルカンとの仮契約を終えている。この破壊主義者が言っていたことが嘘だったとして、今更その嘘に騙されたことを変えることはできなかった。むしろ、聞いたただしたことで何かが悪化する可能性のほうがずっと高い。だから。

「……………」

アイヴィⅡ256は、口を嚙み続けた。その理由を一言で表すなら、結局「めんどくさい」が導かれるのだろう。

門が開く。アイヴィⅡ256がチェストリアに収納される。そして、音楽会が始まる。



『「ラエルカンの紡いだ物語」第一楽章……「鋭光を抜きて」』

『——焰球は、広がる、先を、見据えて……』

アイヴィⅡ256は実体化した。そして、幻影の描く幼女を見た。

「すばらしい、一発で成功か」

ラエルカンは呟いた。そして、数々の拘束系魔法を発射し始めた。

一秒。

再現されたティーアスは、再現された爆炎の中を縦横無尽に走る。彼女が纏う無数のスキルエフェクトが軌跡を描き、空間に刻む。時としてそこに螺旋が加わる。

二秒。

ティーアスを拘束魔法たちが追いかけていく。爆炎と輝光の入り混じる中であって、それらは咲き乱れた花々のようでもあった。

三秒。

「三秒経過につき私は退出する」

「え」

ラエルカンは言った。アイヴィー256はその言葉に驚いて、振り向いた。彼の姿は既に無かった。代わりに、「座標移動」の発動を示す紫電のエフェクトが、またしても空間を走っていた。

「……あ」

『——最速の翼、されど少』

『不正な操作を検知』

劇場が崩壊していく。しかし再現された最速は止まらない。いくつかのエフェクトを宿して、なお高速化して紅の中を駆けていく。超越速が発動されているのだ。その効果は、オルケストラそのものすら五分の一倍速に落としてしまう。

『不正な』

呆然とするアイヴィー256の頭上で、どこか歪なアナウンスが走る。

今、劇場の中はイレギュラーの塊だ。オルケストラの攻略者は退出したが、死んでいない。もうすぐ紫色の聖杯の副作用で死ぬが、蘇生アイテムですぐに生き返るため仮契約の解除には及ばない。しかも超越速のせいで、内部の処理速度は減じられてい

る。

『Loading』

10秒ほどして、オルケストラが停止した。

0. 1秒後には解けて消えているようなエフェクトが。1秒後には晴れているような爆炎が。10秒後には拘束されているはずのティーアスが。全てが空間に縛り付けられ、ただアイヴィ||256一機だけが、空間の中で動いていた。

「……………え」

『リハーサル
予演』

隠しモードを示すアナウンスが、誰のためでもなく走る。

『アイヴィ||256の紡いだ物語』第一楽章……「絶断の双爪』

『——空を、地を、爪は等しく、切り裂いて……………』

過去が。

過去が、アイヴィ||256の目の前に佇んでいた。

「は、それは」

アイヴィ||256は後ずさった。その長靴は砂を踏みしめていた。砂塵がどこかから——いや、過去の記憶からやってくる。それは酷く乾いていた。

ジュラ・ヴァルカンレックスの咆哮が聞こえる。

ミオンⅡ129の姿が見える。

「……………」

アイヴィⅡ256は駆け出した。ジュラ・ヴァルカンレクスの再現体がもうすぐ斬撃を繰り出す。そして、ミオンⅡ129の機体がふたつに裂けるのだ。それは何としても防がねばならない。掴めなかった腕をもう一度掴まねばならない。左腕モジュールの欠損に気づくが、走るのにも掴むのにも支障はない。

ミオンⅡ129の再現体がアイヴィⅡ256の体当たりを受ける。それは未来を変えんとする行為だ。人形たちの間に広がる空間を、絶対の斬撃が深く別つ。されども、それは三号人類を破壊するには至らない。

アイヴィⅡ256は後悔をやり直そうとしていた。

無念の塔の頂上で 其の三

「——さて」

後は待つただけだ、とラエルカンは思った。

シャングリラ・フロンティアのセーブポイント関連仕様は少々歪だ。簡単に言うとう、セーブポイントS（i）を破壊するとS（i-1）にリスポーンするようになる。この仕様とテントを併用すれば、大陸間をある程度自由に移動することも可能になる。……

例えば、新大陸の事務所ドルフロント（厳密に言えば、事務所から入れる異空間）から、旧大陸のパツファイトメントレイ〈繁殖住宅〉の最上階まで【座標移動】で転移する、なんてこともできる。

雨が降っている。

彼のいる〈住宅〉の窓に付着した水滴たちが、気だるげに少しずつ滴り落ちていく。雨音は世界を包み、さながらラエルカんに拍手を送っているかのようだった。

ラエルカンはウインドウを確認すると、おもむろに頭上に再誕の涙珠を投げ上げた。直後に、彼のアバターはポリゴンに分解されて爆散する。紫色の聖杯の効果が切れたことで、先ほどの爆発や、着せ替え隊の面々に受けた攻撃や、『最大HP減少』から『最大HP増加』に反転させていた燃ゆる貌シャインダー・ヘッドの効果などが、一気に彼のアバターに襲い掛かっ

たのだ。しかし、それは計画の終わりを意味しない。そのポリゴンに触れた再誕の涙珠が、すぐさま彼を蘇生してしまうからだ。

「……」

雨はやかましく降り続けていたものの、その空間には確かに、秩序だった静謐があった。

「やつぱりかあ」

そして、一つの声がそれを破る。

ラエルカンは振り向いた。〈繁殖住宅〉^{バツファー・トメントレイン}はあくまでも上に積み上がった家ではない。階段も、当然ながらエレベーターも存在しない。そんな孤立の塔の上に来られる人間など、自分以外にいるはずがなかった。

しかし、いたのだ。



私である。

「よっ、と」

ラエルカんに睨まれながらも、「潮躲し」を切って彼の〈住宅〉に入り込む。【潮躲し】はやはり強すぎる、雨の中で使えばほとんど飛行魔法と変わらない。

「……なんで来たんだね、クグリーン氏」

「雨の中を歩いて来たんだ」

「違う、手段を聞いているんじゃない」

「視界共有ヘッドギアでニコロの状況を把握して来たんだ」

「違う、方法を聞いているんじゃない。君は賢者の石を提供してくれたではないか、どうしてこのゲームをぶっ壊すのを止めようとする？」

はあ……。

……窓についた水滴が日光を透かして、室内に独特な影を落としている。それはたまたま水面にどこか似ていて、無機質な部屋に不思議なアクセントを加えている。

「このゲームをぶっ壊すなんて、好きだけやればいいと思う」

私は影に包まれて、ラエルカンの質問に答えた。

「でも、私の友達を騙すのは許さない」

「騙した？どこがだ」

ラエルカンは言い返した。

「ヘッドギアを契約解除後も使えるのは誤算だったが……見たならわかるはずだろう。アイヴィー256は後悔をやり直すことを望んだ。私は彼女の要求に従い、ライブラリの機密資料で知った【予演】^{リハーサル}に行かせてやったのだ」

「あれをやり直すって言うの？」

「ああ」

「そっか」

そっか。

「それじゃ、ダメだね」

私の周囲を小型戦車が周回し始める。

「残念だ」

ラエルカンが部品を露出させた大型の銃を取り出す。

「聞いておきたいんだけど」

私は最後に、『決闘』の申請を送りながら問いかけた。

「あなたをぶっ殺せば、ニコロは帰ってくるんだよね」

「ああ」

「ありがとう」

申請が受理される。開戦の合図は酷くあつけなかった。

【空蟬】 いっ！

初手退避、ラエルカンは何をしてくるかわからないからとりあえず逃げて様子を見る。浮遊感の向こう側に銃声が聞こえる。私を貫こうと銃弾が襲い掛かってくる。なるほどサブマシンガンをぶっ放す感じね。

「追^{ツイ}鼠^ソ火^シ花^{バナ}」！

印を組み、炎弾を岐れさせる。とりあえずこれで銃弾を撃墜させて……えーつと、自走竜砲にセツトした錬成毒は全く効いてない。まあそんな気はしていた。次は爆薬をセツトしてみよう。

AZZを取り出しながら振り向く。銃には銃だアーーッ！

「……あれ」

さつき撃墜したはずの銃弾が残っている。いやそれはいい、でも軌道が変わっているのが問題だ。銃弾操作能力？

「ちよ、【瞬間^ア転移^{ホート}】」

「転移魔法を両方使ったな」

声が聞こえる。切り替わった先の視界が何やら変だ。それは発熱を意味するエフェクト、あるいは不可視の爆弾の起爆。地雷を敷かれている。

「盾に——！！」

AZZの引き金を引きつつ、自走竜砲に魔力操作で強制介入。爆発音が轟き、HPゲージが少し削れる。しかし死んではない。ここだ！自走竜砲から追加で爆薬を発射させる。私の肉体に推進力がかかり、ラエルカンに向いたベクトルがはたらく。

「くたばれええええ！」

「……クグリン氏」

転移魔法で逃げようとしているな？【鎖縛帷子さばくかたびら】、ラエルカンのアバターに光沢を伴った鎖が絡みつく。そのまま……！

「君の戦い方はワンパターンすぎるのだ」

声が聞こえ、気づけば天井を見ている。倒れた？違う、落ちた。【引寄転移ジヨウケント】か何かで自走竜砲を盗まれたかな。まあいい、【空蟬】のリキヤストは終わっている。丸太とついでに爆弾を落とし、短距離転移する。

「柔軟性があるように見えて、一つの手を封じられるとできることが大きく減る」
声がうるさい。

……おかしい、声がうるさいのはおかしい。私はさつきからさんざん爆発物を撒いている、そちらの方がもつとうるさいはず。なのに、聞こえない。

「っー」

額が痛い。見えない壁にぶつかった。バリア魔法か。

背中に一発、弾丸を食らったのが分かる。このままで死ぬ。えっと……【瞬間転移アポト】？

視界が切り替わる。しかしまたしても着弾だ。転移先を読まれている。

「ほら、ハのようそこ」

ダメーシフィードバックが続けざまに来る。もう逃げる手段がない。とりあえず自走竜砲を盾に……クソ、魔力切れだ。【黒潮】も同じ理由でダメ、煙幕はどうだろう？ 投げ込みつつジャンプ、なるほど弾丸がついてくる。何かしらの手段で私のアバターの位置を割っている。こうなると、もはや打つ手が――

そこで、銃声が止んだ。

「わかっただろう」

振り向くと、ラエルカンの長身がシルエットを作り、煙幕の向こう側で私を見下ろしている。

「私はしっかりと対策をするタイプだ。君のやりそうなことには打てる手を打つてあげる」

そりや、ご丁寧に。

「こんなことは止めたまえクグリン氏、今の君では私に勝つことなどできないのだ」

……はあ。

分かっていた。ラエルカンはメタを張るのに特化している。準備すればティーアスを拘束できるレベルだ。私がどれだけ頑張ろうと、結局こいつの想定内ではない。私は晒しスレの常連で、手の内も大体明かされているからだ。ピンチになったらとりあえず【空蟬】で逃げるのも、錬成物を投げつけてうまいことやろうとするのも。みんな、悟

られている。

「……忠告ありがとう」

立ち上がる。ダメージジェフェクトの赤色が、身体の所々に分布しているのがわかる。

そろそろ煙幕が晴れる。ラエルカンは銃撃を再開するだろう。その前に、これだけ表明しておく。

「ねえラエルカン」

「なんだね？」

「今の私じゃ勝てないって言うの、一理あるよ」

「そうだろう」

「だから、今の私じゃなくなることにする」

ラエルカンがその言葉にどう返すかは聞かない。代わりに私はシステムメニューを開き、いくつかの操作を経て二つのウィンドウを展開させた。

『職業【ドラゴンバスター真竜討滅者】に就職しますか？はい いいえ』

『職業【ドラゴンバスター真竜討滅者】に就職しますか？はい いいえ』

「当然だよ」

私は人差し指と中指を立て、二つの肯定はいを同時に選んだ。

無念の塔の頂上で 其の四

私の戦い方は何だったか。

忍術で読みにくい動きをしつつ、爆薬と毒薬と銃で攻撃。たまに魔法。スキルはバフ系統が多く、アクティブなものはあまり使わない。

ラエルカンはそれにどう対策したか。

弾道操作魔法を使いつつ弾幕を張ることで忍術にリキャストタイムを発生させて封印。毒薬にはアクセサリーで対処、爆薬の周囲にバリア魔法を張って無効化。

それでは、ここからの私の戦い方は何になるか。



転職と同時にジョブの性能を理解する。視界の隅のUIが、二つのパッシブスキルが発動したことを伝えてきたからだ。そしてまた別の隅のUIが、MPが減少し始めたことを伝えてくる。なるほど、「真竜討滅者」はON/OFF切り替え可能かつ発動中は常時MPを消費するパッシブスキルを付与するジョブだ。とりあえず両方をつけっぱなしにし、どこに行ったかもわからない自走竜砲や、もう必要ない忍具なんかをアクセサリースロットから外す。代わりに入れるのは首飾り、MPリジエネタイムだ。

そうこうしている間に煙幕が晴れていくから、私は鍊雷合金のダガーを握りしめた左手を掲げた。目くらましくらいにはなるだろう——投げつける。投げつけながら背後に振り向く。そこにはついさつき私がこの部屋に乗り込むのに使った雨のカーテンが、今だ止まらずに広がり続けている。もう「潮騒し」は使えないけど、ちよつと落ちるくらいなら大丈夫だろう。【瞬間転移】、重力と雨粒が体に殺到する。室内からやってきたラエルカンののものであろう銃声が、雨音に塗りつぶされていく。

雨の中、床を失った私の身体は落ちていく。【颯衣】でゆつくり落ちることも、【鎖縛帷子】で壁にアバターを固定することもできない。今、重力は完全に支配的だ。一階落ちた、二階落ちた——

「ハハハ」

腕を伸ばし、最上階から二つ下に位置する〈住宅〉の屋根を掴む。窓ガラスをぶち破り、最上階から一つ下の階に爆弾を投げ込む。

「いくらバリアを張れると言っても」

爆発。〈住宅〉が僅かに揺れる。

「見えないものは防げないんじゃない?」

最上階の床が抜けた。

色々なものの破片が降ってくる。私は引き金を引いた。ラエルカンが落ちてくる。

着弾。彼の右手人差し指が飛ぶ。これで引き金を引ける手は一つだ。

「……やはり破壊属性がついているな」

ラエルカンはバリアを張って言った。何のことやらあ。

「まったく驚いたよクグリン氏。突進して来たのかと思ったら」

彼は右腕を上げてみせた。その二の腕には先ほど投げた錬雷合金のダガーを握りしめた左手が突き刺さっている。

「自分の左手を切り離して、陽動に使っただけだったとはな」

……私はもう、錬金術師でもなければ忍者でもない。使っているのも単なるライフル、手なんて一本あればいいという考え方もできるだろう。

私はスクロールを取り出し、【二重詠唱^{デュアルスベル}】を発動した。

「……『発動者によるあらゆる攻撃に破壊属性を付与する。また、発動者の意思に応じ、自身のアバターの任意の個所を破壊可能にする』だったか」

やっぱり知ってたか。

私はスクロールを取り出し、【加算詠唱^{アッドスベル}】を発動した。

「確かに君が戦闘中に転職することは想定していなかった。しかし……セパレーション由来の【真竜討滅者^{ドラゴンバスター}】が持つ効果なんて、ライブラリの機密情報を漁れば容易に知れるのだよ」

そっか……私もジュゲツキに聞いとけば良かったかもなあ。いや、もしかしてペンペンがバトルアックスで私の首を落としたのもセレーションの効果だったのかな？

私はスクロールを取り出し、「エクسسベル【拡張詠唱】を発動した。

「種が分かれば対策は簡単だ。破壊属性がつく分単純な攻撃力はむしろ落ちる、ただあの程度のバリアを展開すればそれで良いのだ」

そう言つて、ラエルカンは左手に大型銃を構えた。あのバリアつて一方通行にもできるの？ズルいなあ。

「あれで優位性アドバンテージを取ったつもりだったのか、クグリン氏？」

そりやあもう。

ラエルカンの人差し指がトリガーを引く。発射音、巨大な弾丸が回転しながら私に向かう。私は魔法を発動した。

「【ファイアボール】」

それは、レベル1の頃から私の習得リストに残り続けている火球だ。はつきり言つて弱すぎる。ある程度振つてあるMPと、三つの魔法強化魔法を踏まえてもなお弱い。速度だつて速いとは言えず、表面を這う炎からも何だかチープな印象を受ける。ついさつきまでの私にとっては【シラスイツボミ不知火蕾】の下位互換、ライター代わりに使う魔法でしかなかった。

でも、弾丸一発よりは強い。

私の火球とラエルカンの弾丸が交差する。火球のほうが大きいから、交差というよりは弾丸が突入すると言ったほうが正しいだろう。別になんてことはない。両者が相殺するわけでもなく、弾丸は弾丸の殺すべきものを、火球は火球の殺すべきものを殺しに行く。普通ならそうなるはずだ。

「……な」

ラエルカンが呟くのが聞こえた。

突入した弾丸は出てこない。ネタバレすると、火球に飲み込まれてしまったのだ。

「――！」

彼は自身に迫る危機を理解したらしい。火球は先ほどよりどこか勢いよく燃え盛り、高速化しているようにも見える。銃声が聞こえる、ラエルカンがさらに発砲したのだろう。でも、それは餌やりでしかない。火球は弾丸たちをさらに飲み込み、より一層大きく、速くなっていく。火球が何も無い空間を通過し、そこに面が広がるようなエフェクトが発生した。

「バリアをケチりすぎなんだよー！」

不可視の障壁が溶け落ちる。ラエルカンの胸部へと紅蓮が迫る。

「そのまま死ぬね！」

私が叫ぶのと同時に、

「くっ」

ラエルカンが左に跳んだ。クソ、反射神経が良い。火球は彼の右腕を抉り取るにとどまり、そのままへ住宅の壁を突き破って雨の中を飛び去っていく。

「……クグリン氏」

ラエルカンの態度が露骨に変わっている。いいね、もつとそんな風に動揺してよ。

「その能力は何だね？」

「決まってるでしょ？」

チャンスだ。

「アドバンテージだよ」

私は「瞬間転移」でバリアに潜り込み、ラエルカンをブン殴りながら答えてあげた。

無念の塔の頂上で 其の五

強いものをより強く、弱いものをより弱く。それは言い換えれば、強いものが弱いものから奪い取るということになる。



ラエルカンを殴っている。

「がっ！わ、分かったぞ！自分より与ダメージが低い攻撃を吸収する、そうだろう!？」

「ご名答、死ねっ！私は彼をさらに殴りつけた。

「ぐっ」

しかし中々死なない。

クソ、STRが足りない。やっぱりもうちよつと振っておくべきだった。ダガーはさっきの火球に吸われちゃったっぽいし、やっぱりこのまま殴り続けるしか……！

「ぐべっ」

いや、おかしい。

「……がはっ」

ダメージが大して入って無いわりにラエルカンが無抵抗すぎる。このやられ声も演

技くさい。何がごべつだよ。これはちよつと――

「え」

側頭部に痛み。

もしも私が上忍のままなら、それを食らうことは無かつただろう。【空蟬】とは本来そういう忍術だ。住居不法侵入は主目的ではない。最大の使いどころは緊急回避、極めれば半自動発動も可能になる。私は極めていた。でも、それを自分から捨てた。

「……食いしばったか」

視界が赤い。逆に言えば黒くない。まだ生きている。

「死ね」

私の声だ。A Z Zを取り出して、ラエルカンに発射した私の声だ。何が起きたかは把握している。ラエルカンの分析力をナメていた。アドバンテージの性能は「自分より与ダメージが低い攻撃を吸収する」だけじゃない、それじゃ強すぎるんだ。「自分より与ダメージが高い攻撃に吸収される」という要素を込めて、始めて有^{アドバンテージ}利は成立する。つまり、窓の外に飛んでいった火球が減衰しているところにバフを込めた銃弾を撃ち込んで、弾道操作魔法で方向転換させればいい。今の側頭部の痛みは、方向転換した弾丸が〈住宅〉の周囲をぐるっと回り、私に着弾したことによるものだ。

「残念ながら」

赤が晴れた視界の先、佇むラエルカンは弾丸を避け……左手に紫の光沢、ダメージ反転聖杯を使おうとしている。そうはさせない。チェストリアからポーションを片っ端から取り出して全部投げつける。〈住宅〉の中を緑色が埋め尽くす。それはどこか、繁殖していく植物のようでもある。

「それもブラフなのだよ、クグリーン氏」

紫色が収納エフェクトに包まれ、消える。ダメージ反転をすると見せかけて回復ポーションをぶっかけてもらおう算段、まあそんな気はしてた。
でも。

「……………」

ラエルカンは怪訝そうだ。当然だろう、彼のHPは回復などしていないのだから。

「これは」

ラエルカンが言いかける間に、私はA Z Zをスナイパーモードにして撃てるだけ撃つた。

錬成毒の良いところは、効果のカスタマイズ性が高いこと。錬金術師じゃなくても使えること。そして、見た目を自由に操れることだ。回復ポーションのように見える毒、なんてのもできる。

私の火球には破壊属性が付与されていたが、火球を吸収したラエルカンの弾丸は私の

脳天を貫かなかつた。つまり、吸収は属性を維持しない。

毒を吸収した弾丸に、毒耐性は無意味だ。

毒のカーテンに弾丸が突入し、周囲の緑を吸い込んで渦を作り出していく。

着弾音。着弾音。着弾音。

「クグリン、氏」

足元から声がある。着弾音がした所から少し距離がある、【瞬間転移】で前に出たな。破壊属性はHPの最大値を削る、今から聖杯を使っても、少し回復ポーションを使えば死ぬ状態にしかならない。あの頭が燃えるヤツは……まあ微々たる差か。燃えた時点で回復ポーションをブツかけて鎮火してしまえばいいだろう。

ラエルカンが私の右足首を掴む。随分弱々しい力だ。とりあえず適当に「ファイアボール」を撃ち込んでおこう。そういえば毒は効かないけど火傷って効くのかな？ 私は普段麻痺や毒ばっかり使うし、対策してない可能性があるのでは……試してみよう。発射っ。

「私は」

ラエルカンがか細い声で言う。

「このゲームを、ぶっ壊してやるぞ」

足首にかかる握力が強くなったのを感じると同時に、真下から爆発音が聞こえた。

……〈繁殖住宅〉の構造は雑だ。単に〈住宅〉を積み上げただけ。傍から見れば巨大なだるま落としでしかない。そして今、提唱者が直々に爆弾を仕掛け、だるま落としを開始した。

床が傾いていく。雨音が近づいてくる。下の方の階で起きた爆発によって、〈住宅〉たちは折れたのだ。だるま落としとしては失敗かもしれない。

〈繁殖住宅〉は、無念の塔だ。天にも届く建物を作ろうと頑張つて、しかし志半ばで計画を中止された。そこには関係者たちの無念が詰まっている。そして今、無念の塔は雨と共に崩れつつある。派手に、豪快に。世界への恨みを発露するように。

「……【瞬間^ア転移^{ホト}】」

視界が切り替わる。しかし足首を掴まれる感触は消えず、むしろ強くなる。

「無駄なのだよクグリン氏、【瞬間^ア転移^{ホト}】の効果は触れている者にも及ぶ」

ラエルカンは断固として私の足首を離さないつもりのようなうだ。せめて道連れにしよ
うと考えて……いや、こいつはこのゲームをぶっ壊すことしか考えてない。私はどうにか生き残ろうとするから、それにしがみ付いていれば自分も生き残れる。そういう算段
じゃないか。

でも、

「無駄なのは、そつちだよ」

私はセパレーションの能力で右足首を切り離した。

「……そうかね。そうだったな」

ラエルカンが滑り落ちていく。

「クグリーン氏！先ほど『私をぶつ殺せば、アイヴィー256は帰ってくる』と言ったな！」
戦闘によって傷ついた〈住宅〉の壁にはこれでもかと穴があいていて。

「訂正させてもらおう！」

その向こう側には。

「は？」

雨粒とか、曇り空とか、瓦礫とか。

「厳密には嘘ではない、私をぶつ殺して仮契約トライアルを解除するのは必要条件の一つだ！」

多種多様なもろもろが見える。

「私も想定していなかったのだ、アイヴィー256がまだオルケストラの中にいるとは

——」

「え」

ラエルカンも『多種多様なもろもろ』に加わった。

彼のアバターが落ちていく。

「もつと早く言えクソ野郎！」

かつて壁だった天井に掴まりながら怒号を上げる。おいおいおいおい……！私
はヘッドギアを被った。ニコロの視界を確認する。確かに彼女はまだ戦闘を続けてい
るようだ。しかも……ステータスモニタ確認、左腕破損、右脚不調、飛行ユニットエネ
ルギー残量僅か、そのほか諸々……ヤバイ。

内部でニコロが破壊されたとしたらどうなるだろう？ 何事もなかったかのように状
態をリセットされて現実に戻るのだろうか？ いやでも、『状態をリセット』なんてことが
ありうるだろうか？ 例えばニコロが思考回路を完全に破壊されたとして、『状態をリ
セット』したらどうなる？ オルケストラ内部での記憶が消える？ それは不自然だ。でも
『破壊された記憶』があるのもおかしい。

それじゃあ、それつきり？

『ミオン1129。貴機^{アナタ}を必ず——』

スピーカーが合成音声を吐き出す。こちらでも、あちらでも。

「ふぎげんな」

私は呟いた。ヘッドギアを取り外せば曇り空が広がっている。そろそろ壁に掴まっ
ているのも限界だろう。このままじゃ終わる。チェストリアに何かないのか。ウイン
ドウを開く。漁る。毒薬と爆薬と素材と丸太ばかりだ。使えない。そんなのでどう
やって友達を助けに行けばいいんだ。

……。

「友達を、助けに行く?」

『——では、超^{タキオン}越速をオルケストラのような異空間で発動させ、影響を受ける地点と受けない地点に二つのチェストリアを置き、それらがリンクする形にしたらどうなる?』

ニコロのセンサ越しに聞いた、虚空への講義が思い出される。

異空間。

ニコロは新大陸に連れていかれたが、新大陸にいるわけではない。かといって旧大陸でもない、単純な距離制限で量ることのできない場所にいる。しかし、転移魔法が使えないわけではない。ラエルカンは、現に「座^{テレポルト}標移動」で移動してみた。

「やってやる」

私は壁から手を離す。自分を地面に叩きつけようと働く重力の中、空いた右手に一枚のスクロールを取り出す。

MPは十分に足りている。風を受けてバサバサとはためくそれを広げ、魔法を発動する。

「盟^{フレンドワード}友救助」

私は消失した。

無念の塔の頂上で 其の六

「フレンドワープ盟友救助」を示す魔法陣が、砂塵に囲まれつつ足元で消える。それを最後まで確認せずに顔を上げて、最初に目に入ったのは恐竜だった。

咆哮が聞こえる。恐竜の皮膚の上で燃え盛る火炎が、その姿勢変化によつて少しずつ形状を変えていく。

ボルクネスの出してくる恐竜デツキを見る限りでは、こんな竜は見たことがない。そもそも纏っている雰囲気からして違う。オルケストラが再現しているのは未開拓エリアの可能性が高い。

「メイクアップ形態変更」

弱々しい合成音声が、咆哮にかき消されそうになりながらも砂上を駆ける。孤独に駆ける。

私はその主を知っていた。声のした方向……恐竜のすぐ横に目を向ける。そこには確かに一機の征服人形が、ダメージエフェクトに包まれながらも立っていた。

「……ニコロ」

「フックショットモード」

彼女の手中で。色の薄い肌の所々に、紅のテクスチャが痛々しく侵食する手中で。湾曲した刀のような形状を取っていた部品たちが、発光しながらその姿を組み替え始める。恐竜がぎろりと睨む。ニコロ——違う。睨まれたのは、彼女の隣にいる征服人形の再現体だ。先ほどのニコロの発言から考えると、あれがミオンⅡ129と言うことになるのか。その機体は再現体故か、うつつすらと淡く蒼光を帯びている。

ミオンⅡ129の再現体はガトリングを掃射している。恐竜の睥睨を意にも介さない。このままじゃ攻撃を受けて破壊されない？ いやちよつと待てよ、むしろ……破壊される予定なのでは？

恐竜が爪を振りかざした。銃声は止まず、誰も逃げようとしなない。爪が空間を切り裂き、降り降ろされる。そして、ミオンⅡ129に——。

ぐさり。

ブツ刺さった。

ニコロの右手の中で組み換えを終えた部品たちは、特殊なピストルのような形状を作っていた。その形状でニコロはどうした？ トリガーを長い人差し指で引いて、発射した。何を？ ワイヤーを。灰色の鋼線が踊るように空間を進み、恐竜の体表の猛炎の中へと潜り込んでブツ刺さった。それで、ニコロは何をした？

「っー」

彼女はワイヤーにぶら下がり、振り子のようにミオンⅡ129に近づいた。ミオンⅡ129を回収して退避する気か？でも左腕ユニットは喪失してるはず。じゃあ。嫌な予感が当たる。ニコロは右手のフックショットを手放して、強引にミオンⅡ129の腕を掴み、斬撃のすぐ横を通り抜けた。フックショットを手放した以上支えになるものはない、彼女は砂上にごろごろと転がる。綺麗な髪の毛が舞っている。それはニコロに掠った斬撃が生み出したものだった。

何を、しているんだ？

オルケストラはユニークモンスターの中でも特に有名だ。主にネタバレ配信のせい。私でも大体の概要は知っている。オルケストラでは単に敵に勝つだけでなく、敵との戦いを再現する必要がある。この戦いは……多分ミオンⅡ129が破壊されることで決着したんだろう。なら、ミオンⅡ129の破壊を再現しないといけない。それを……ニコロはむしろ、回避しようとしている？

ニコロが両手を支えに立つ。砂にまみれた彼女の機体を、恐竜がじろりと睨む。ニコロは……おい、まさか。

「立ちほだから、つもり？」

私の眩きはどうも正しいように見える。まずい。メニュー操作、二枚のスクロールを取り出す。

「【加算詠唱】、^{デュアルスベル}【二重詠唱】、^{アポルト}【瞬間転移】」

「【二重詠唱】は【加算詠唱】に効くけど、その逆は無理だ。つまりこの順番で発動すると、【加算詠唱】された【瞬間転移】を二回発動する」ことになる。

「二回目っ！」

10メートル転移、背後に爪が迫るのを知覚しながらニコロとミオン||129に触れる。チェストリア収納は無理、オルケストラ内にいるのが関係してる？後頭部からダメージフィードバック、こりや間に合わなかったかな。

「二つ、回目！」

30度ほどターンしてもう10メートル転移、視界が砂埃から砂埃へ移るけど、右手の感触は残っている。とりあえず二体を緊急離脱させることはできたみたいだ。

「……………」

驚きたいのはこつちだ。

ニコロの衣装はミオン||129と比べて随分破けていて、私が触れた腕を覆っているはずの袖も引き裂かれていて。それで触ることになった彼女の素肌は、ずいぶん冷たく感じられて。その裏側に青い細線が走っているのがふと気になった。

「想定外……どうして？」

「何で……から出ないの」

私たちの背後でミオンⅡ129が立ち上がり、また棒立ちで機銃掃射を開始した。

ああ、過去の恐竜の咆哮が聞こえる。

「……消極」

「そんなわけないよね」

めんどくさいなら、とつくにここから出ているはずだ。ミオンⅡ129を自分から庇って、機体の隅々に損傷を残すこともない。

ああ、過去の炎が白亜に揺らめく。

「後悔をやり直したいから、だっけ？見た感じ……あんまり後悔をやり直させているようには見えないけど」

「……」

ニコロが俯く。どこか作り物みたいな、いや実際に作り物である影が、彼女の姿を砂上に移す。

ああ、過去の風が乾ききって吹く。

「もう、誰かに観測範囲内で消えてほしくない。腕を掴めないことを拒絶する」

「……」

私が黙る番だ。

ああ、過去の砂塵が纏わりつくように流れる。

それは。それらはニコロの心中の、決して消えない無念の象徴だったのだろう。一つの無念を決して捨てられなくて。ならばせめて、二つ目以降の無念をさらに積み上げることで無念の塔を伸ばすような真似をやめようと。そうニコロは考えている。自分が破壊されるとしても、彼女はそれを実行する。

なるほど、ふざけんよ。

「そんなのみんな同じだよ」

あゝあ、恥ずかしいことを言っちゃうな。

「……え」

「この子が帰ってこないのが悲しいのはわかったよ、結果が分かっても見捨てたくないのもわかる。……でも、それは私だって同じだから！」

まあ、仕方ない。ゲームを遊ぶという行為は本質的に恥ずかしいものだ。

「クグリン？」

「私も」

恥ずかしさをおこよきで上回れるか、それが重要になってくる。

「ニコロが帰ってこなかったら悲しいし、ニコロを見捨てることもできないんだ」

「……」

ニコロは黙って。黙って、ガトリングを延々と発射し続けるミオンⅡ129の顔を見

つめ始めた。

静止。機銃と足音だけがリズムミカルに響く。

……長引くかな。【盟友救助】^{フレンドウレブ}の効果時間は長いと言っても十数分だし、この恐竜はかなり強い。とりあえずポーションを……

「了解……」^{わかった}

え？

「現実世界に帰還する」

ニコロは儂げに笑った。あるいは、涙が出なかつただけかもしれない。どちらにせよ……その表情が以前とは少し違うものであることは、わかつた。

変わり身が早い。いや違う、この変わり身は私の説得で急に生えてきたものじやない。それは……これまでずっと『怠惰な征服人形』として無念の塔と向き合っていたニコロの、長い歴史の結果としての変わり身だ。彼女が実際にどう折り合いをつけたのかはわからない。ミオンⅡ129のことがもう少し知れば分かるんだろうけど、私はニコロの過去について余りにも無知だ。無知なくせに、こんな風にやすやすと踏み込んでしまうクズだ。

でも、それもいいかなと思いはじめている。

「忠告：爆発が予想される、掴まって」

ニコロが最後に残った右手を差し出したので、私も最後に残った右手でそれを握った。握り返す力が妙に強い。

「……大丈夫だよ、離れてもまた掴むから」

「そう」

ニコロの飛行ユニットが運転を始め、効果音が流れ始める。ああ、これも初めて聞く音だ。

恐竜が吠える。機銃の音は鳴りやまない。だから、鳴りやませようとする。

爪が振り上げられる。ニコロは飛行を始めながら眩いた。

「おやすみ、ミオンⅡ129」

ミオンⅡ129の機体がふたつに裂ける。いや、ずっと前から裂けていたのだ。



「……なるほど」

少し飛んだあと、私たちが衝撃波が襲った。そして何だかよくわからないアナウンスがドバドバ流れ……『Loading』とか言ってたっけ。結果として何と言うか、置いて行かれた。

『クグリンの紡いだ物語』

「正直言つて、かなり興味あるんだけど……」

砂漠の代わりに現れたコロシアムの中央に、特徴的な角が見える。

『第一楽章……』

「もう時間切れなんだよね」

私の足元に魔法陣が浮かび上がって、ささやかな光をそこに宿した。

……さて、離れた腕を掴みに行かないと。

『眠れる孤』

私は消失した。

エピローグ 離れた腕を掴み取る

落ちている。

雨は止んだみたいだけど湿度が高く、見下げた先の大地の様子は正確には見えない。まあ、〈繁殖住宅〉の残骸が山を作っているのは確かだろう。とりあえずこっちの世界に無事に帰還することはできたみたいだけど……ニコロはどこに飛んだんだろう？
ドールフロント
 事務所の場合少し骨が折れる。

確認してみよう。私はメニユーからヘッドギアを被った。彼女の視界を共有する。

……私と同じだ、落ちている。

なるほど、理屈は理解できる。そもそもオルケストラの【予演】リハーサルとやらは、仮契約を結んでいたラエルカンが【瞬間転移】テレポートで〈繁殖住宅〉の最上階に逃げ込んだことで始まった。つまり、終了時もそこにそのまま出ることになる。理解できるけど……。

『飛行ユニット：エネルギー残量0%』

……結構ヤバイぞこれ。

えーっと、共有された視界に映ってるものから推測して……よし、ニコロはあそこで落ちている。高さ的には私より少し下程度だけど、距離的には結構遠い。

「ニコローっ！」

私はメガホンを取り出して叫んだ。絶え間なく発生する風音が邪魔で仕方ない。ヘッドギアからニコロの声が聞こえる。

「応答：」

「ラエルカンから渡されたチエストリア、入れる!?」

「不可能：チエストリア装備の有無に関わらず、契約解消により当機の直接的な転送は」
「逆に言えば契約すれば入れるってこと!?」

「肯定：」

「契約しよう!」

「了解：——」「貴方ユアのドール人形」プロセスを開始! 網膜情報・登録済み! 指紋及び掌紋情報・登録済み! 血液情報・未登録! 腕部との接触が必要!」

「わかった、受け取って!」

落下する私と落下するニコロの間にはあまりに大きな空間があつて、それは【瞬間転移アポト】を強化しても埋められないほどのものだった。しかし、転移魔法だけが移動手段じゃない。物理的に飛ばすという手段もある。

私はメガホンを仕舞い、右手を握った。

「………戦砕誇示」

から声も出せず、ニコロを頑なに見守る他に無い。
地面が近づいてくる。頼む。

赤色の光線が空中を切り裂いた。それはニコロの手元に浮かぶアクセサリーから産み出されていて、少しばかり方向を探った後に、切り離された私の右腕に照射された。そして、右腕を引き寄せて……そう。確かにニコロは、切り離された腕を掴み取ったのだ。

音は聞こえない。でも、やっていることはわかる。一目見ればすぐに理解できる。

風が吹く。

ニコロは。

風が吹く。

私の腕に。

風が吹く。

噛みついたのだ。

『NPC「アイヴィー256」がパーティに加入しました』

よし、後は私のチェストリアに入ってもらうだけだ。私は成す術もなくこのまま死ぬけど、ニコロは安全地帯に退避できる。人間が入れる版チェストリア、みたいな無いのかなあ……無いか、ただ『人間が入れる』という言葉だけでも思いつく悪用法が多す

ぎるしね。そんな夢のようなアイテムについて妄想しないで、死んだ後にどうするか考えないと。その場のノリで転職しちゃった問題をまず何とかしないとイケない。お気に入りのダガーもどっか行っちゃったし、〈繁殖住宅〉を倒壊させた責任を問われてもおかしくない。……ああ、やることは山積みだ。

……おや？ニコロの右手に何かが握られているのが見える。それは棒状で、黒くて、神代製装備特有のメカメカしさを備えていて……。ああそうだ、あれはマイクだ。

「——^{マスター}契約者」

迫りくる大地の背後で、ニコロの声が空に響いた。

「よろしくね」

その言葉だけを空間に残し、彼女は光に包まれて、私のチェストリアへと収納されていった。

……確かに、やることは山積みだ。でも……。

「後悔は、してないな」

大地が、大地を覆い隠す瓦礫たちがいよいよ近づいてくる。よく見れば、瓦礫たちは組み合わさって、その所々に窪みを持っている。……そしてそこには雨水が溜まり、晴天の陽光をぎらりと反射しているのだ。ああ——。

「イ」

その光景に、何かの感想を……綺麗だとか、「潮躲し」が使えればどうだっただろうとか、そういったものを抱く前に……私は脳天を思いつきり硬板にぶつけ、無念の塔の残骸の中に、一つ自分の死体を加えた。

銃よ、竜よ！ われらが描けるは線條の道

プロローグ 戦火は豪雨のように

描かれた線條が空中を走る。

それは明確なる弾道として、回転する銃弾を追いかけて一直線に進む。そして、共に空間を貫きながら標的へと吸い込まれていく。銃弾を追いかけているのは直線だけではない。加熱した銃口から破裂音と共に飛び出していくまた別の銃弾たちが大挙して、たつた一つの弾丸に伴われて進んでいる。その背後には、やはりまた別の直線たちが描かれている。

ずだだだだん。ずだだだだん。私たちの間に広がる空間を、火薬の音が鋭く別つ。

「ごめんね、ペンペン」

ずだだだだん。ずだだだだん。私の眩きが銃声に掻き消され、鳴るはずだった風音と共にどこかへ消えていく。

「ふざけんなよ、クグリン……っ！」

ずだだだだん。ずだだだだん。ペンペンは側転しながらそう返した。銃声すら掻き消すことができないほど、大きくよく通る声だった。彼の四肢と四肢の間を、まるで避

けるように弾丸がすり抜けていく。ええいしぶといなこいつ、とつと撃ち殺されろよ……！

私は歯ぎしりをしながら「トリックビート魔練幻撃」を撃った。薬剤士系統標準の魔力操作魔法、それを十一番目の真なる竜種のジヨブ効果で地脈越しに発動し、物理弾に混ぜ込んだ「黒潮」を経由して、同じく混ぜ込んだ「青風」に推進力を発揮させる。要するにやっつけることは弾道操作だ。ぐいっと軌道を変えた弾道が、ブリッジするペンペンに向かう。

「クソっ！」

ペンペンは叫び、チェストリアから掘っ立て小屋を取り出した。唐突に発生した小規模建築物が地面に影を落とし、ついでにその壁で弾丸を防いで見せた。

「流石にズルすぎなあい!？」

私は火薬が作り出す反動の連続を感じつつ、人差し指でトリガーを引きながら指摘した。

……レビンカムイの「黒潮」とウォールフェン戦災孤児の「青風」。その同時搭載は強力だが、その分弾丸そのものの威力をかなり削る。掘っ立て小屋の壁でも防げるくらいに、だ。

「どつちが、だよー！」

ペンペンは火薬が作り出す弾道の連続を回避しつつ、人差し指でこちらを指しながらそう言った。いやよく見たら指したんじゃない、ついでみたいな感じで投げナイフ投げ

てる。えーつと……まあ普通に避ければいいか。

「クグリン！」

ペンペンが叫ぶ。何だ!?

「お前の野望もここまでだぜ！」

左胸に痛み。ペンペンが至近距離からアイスピックみたいな奴をブツ刺してきた。なるほど転移魔法、たぶんあの投げナイフを起点にしている。私はダメージエフェクトをダラダラと流しながら言った。

「……野望?、つ……私のこれは、野望なんて大層なものじゃないよ」

「大層なものじゃない!? 売りさばいた銃弾を一斉に暴発させるのがか!？」

……ウォールフエン 戦災孤児の素材を拾って「青風」を完成させたとき、これは絶対にヤバいと思っ

た。要するに自由度が低い代わりに出力がバカでかい「黒潮」、つまり少しの「黒潮」と大量の「青風」をミックスすれば特に問題なく使用できる。そしてオブジェクションの力も合わせれば、遠く存在に魔力操作を届けることも可能だ。

「……別に」

HPゲージがヤバい、私はもうすぐ死ぬだろう。しかしペンペンの背後にもう一発、飛んでいる最中の弾丸が残っている。これを操作して当てれば勝てる。ペンペンは当然気付いているはず、だから少しだけアクセシビリティを混ぜないと。

「あれを見てもそれが言えるのかよ!？」

ペンペンが人差し指を天に向ける。今度ばかりは正真正銘、投げナイフを投げているわけでもない。その先には随分巨大な一体の竜が、シリンドラーのような胴体から生えたマズルブレイキのような頭を振っている。下へと細かい粒がたくさん落ちていくから、一見すれば雨を降らせているようにも見えるだろう。だが、あれはぜんぶ銃弾だ。

『真なる竜種：No. XVII』
The Truth Dragon
ファイアー 『Fire』

『参加人数：四十八万三千五百九十二人：四十八万三千五百九十五人：四十八万三千六百一人…』

視界の片隅は未だ、そう告げるアナウンスウインドウに占領されている。

炎が、その最前線を広げていく。

「俺は真なる竜種つてのが何なのかわかってないけどな!ライブラリの奴らが言つてたぜ!真なる竜種はシンプルな名前ほど強い!」

ペンペンが言う。弾丸はとりあえず背後で回転させておく。

「ダブルミーニングの余地が広がるからだ!それでも本来シンプルな名前なんてなかなか現れない、強い分だけ恐怖が必要なんだとさ!わかるか!?お前が砲火への恐怖を創り出したんだぞ!」

それは。

それは、わかってる。

「そうだね」

私は言った。弾丸を加速させ始める。

「私は確かに、失うものを持っていなき過ぎたのかもしれない」

私は言った。右腕にスキルエフェクトを纏わせ始める。

「でも——」

今さら、どうすることもできないんだ。

その言葉を言い切る前に、私は右腕の戦碎誇示ウオールフエンをペンペンへと叩きつけた。ゆっくり

と、優しく。それで彼のアバターは吹っ飛んで、ちょうどいい位置に誘導した弾丸に貫かれるはずだった。

しかし、そうはならなかった。

「……な」

「……やっぱり、そう来るか」

彼の背後で、弾丸が明後日の方向へとフェードアウトしていくのが見える。

ペンペンは……私の右拳を左手で受け止めた。いや、ただ受け止めただけではない。

左手はスキルエフェクトを纏っている。それは……私の右手のものと、ちょうど同じ

で。

「戦砕誇示ウオールフエンはノックバックのスキルだろ？逆方向に撃てば、相手の発動を相殺できる」

……そうだ。戦災孤児ウオールフエンの討伐は、私とペンペンの二人でやった。どうしてそれを忘れていたんだろう。もっと早くそのこととか、その背後に広がる色々なことに気付ければ……こうは、ならなかったのかもしれないのに。

身体から力が抜けていく。私は地面にへたり込んだ。頬に感触がある。涙がそこを伝っているのが分かる。VRゲームというのはすぐこうだ、感情を隠すのが随分難しい。

「ああいやあの、多分やり直せる、んじゃないか？」

ペンペンがいきなり弱気になった。慌てて励ますように私に声をかける。

……ついさつき、自分でファイアの強さを強調したくせに。

「ほら、ちやうど来たみたいだしな」

ペンペンがファイアのほうを示して見せる。いや違う、示したのはファイアじゃない。ファイアのすぐそばに對峙する、あまりに小さい一体の人類だ。

涙で目がにじんで詳しくはわからない。でも、二つ分かったことがある。一つは直後、空に掲げられるようにして斬撃が巨大な星形を描き、ファイアが悶える声が聞こえたこと。そしてもう一つは、私が既に、新大陸に行ける可能性が残っているような状況

にはないということだ。

ああ、どこからやり直せばこうならなかっただろう。何かを拾うか拾わないか。それとも誰かと出会うか出会わないかだろうか？ペンペンが目の前にいるんだから、友達がいなくてこうなっただって訳じゃないはずだ。だったら……誰かを守る事が必要だった、とか。

ああ、もうダメだ。これ以上考えることはできない。

咆哮を上げるファイアを含め、あらゆるものが涙にぼやかされて……ただ、ゲームのインターフェースだけが普段通りだ。じりじりと減少していたHPバーが、その時ついに底をついて。

そして。

私は、目を閉じた。

遺失物を横領しよう！

リスポーンした。

後頭部に柔らかい感触がある、枕だ。特に裁定がバクつたりすることもなく、〈繁殖住宅〉近くの宿屋の一室に戻ってこられたらしい。

「……………ふう」

私は目を瞑ったまま嘆息した。吐息が熱を帯びているのが分かる。

……………とりあえず、目を開く前にある程度の予定を立てておこう。まずは何から始めよう、まずはニコロの四肢パーツを交換するところかな？ たぶんベヒーモスに売ってるんだらうけど、今のジョブ構成で前と同じようにリザルトを荒稼ぎできるとは思えない。爆弾の大量生産も、【空蟬】の発動もできないのだ。

【真竜討滅者】のうちどちらか一つを解除するっていうのも手だとは思うけど、せっかく手に入れた特殊ジョブを自分から手放すのもなんだか嫌だ。それに手放したとして、上忍はともかく錬金術師への再就職ほどの道叶わない。他のジョブにしても同じようなものだ、錬金術師ギルドが特段私のことを嫌っているだけで、そもそも密航失敗イベントを複数回踏んでいる時点で他のギルドも大差ない。むしろ忍ギルドの巣が例外なのだ。就

職はギリギリ可能でも、そこから新大陸調査船への推薦状を書いてもらえたりはしないだろう。

そういうわけで、方針としては……とりあえずベヒーモスに行つて、今の構成でできることを試行錯誤しつつリザルト稼ぎ。「真竜討滅者」ドラゴンバスターについては特に動かさず、自然に喪失するのをいったん待つ。喪失したら忍者に再就職。こんなところかな。よし、それじゃあ目を開こう。

私は目を開いた。そこには予想に反して、宿屋の天井ではなく数枚のウィンドウが開いていた。

『竜滅装備を喪失しました：過多技の羽衣／唯一義の玄衣』バスターアームド ドロップ

『ジヨブを喪失しました：真竜討滅者』ドラゴンバスター

『称号を獲得しました：真竜討滅者』ドラゴンバスター

私は特に動かさなかった。「真竜討滅者」ドラゴンバスターを自然に喪失したので忍者に再就職することになった。

「なるほど」

もしかしてこのゲームってクソゲーなの？

私は悟りつつあった。

とりあえずむくりと起き上がり、ウィンドウを操作して詳細を確認する。いや待て待

て待て待て……。不思議と驚きはない。焦りもない。混乱が圧倒的に強すぎるからだ。
「……………なんで？」

おかしいのだ。それはおかしい。装備していた防具をドロップするなんて普通じゃない。PKされたときならあり得るかもしれないけど、私の死因は落下死だ。逆にこれがPK扱いになったとして、主犯はラエルカンということになるのだろうか？ラエルカン側としてもこんな意味わからん裁定でキルペナを付けられたら困るだろう。つまりあり得ない。

……………いやちよつと待って、ドロップしないはずのものがドロップする？

私は胸のあたりに手を置いた。防具の喪失によつて空気中に晒された肌は仄かに体温を帯びていて、そこには冷たいものなど何もなかった。首飾りが消えている。

私はずもずも手を置けるのがおかしいことに気付いた。A Z Zはどこに行つた？やっぱり消えている。

チェストリアは……………キャラクターステータスを確認する。装備済み、中身も問題ない。流石に取り外し不能アクセサリーを落とすなんてことは無いみたいだ。しかし私はステータスの隅にバフの発動を示すアイコンが輝いているのを見逃さなかった。

『特殊状態：運命神の救手』

『効果：ドロップ率増加（超特大）』

『効果時間：5：52：39：52：38：52：52：37：』

えっと、これがいわゆる詫び石ってやつですかね？

「なるほど」

このゲームって明らかにクソゲーだね。

私は悟った。

ベッドから抜け出す。とりあえず落としたものを拾いに行かないといけない。仮防具として黒き死レクイエラスト・イン・パーゲに捧ぐ嘆きを装備、空いたサブジョブのロットは……神秘アルカナムでも入れとけばいいかな。「塔」タワー設定、効果は自分の与えたDOTと受けたDOTの効果倍増。ニコロは……。

「いけそう?」

「困難きびしい……しばらく充電ねさせて……」

了解。私は展開したニコロをもう一度格納した。

……それじゃ、行こうかな。

私は歩き出した。



瓦礫の山が広がる。

山といっても、別に掘り返す必要があるわけでもない。私は〈繁殖住宅〉が崩壊した

後に墜落死したので、山の上にある装備を拾えばいいだけだ。ちよつと探せばすぐ、過多技の羽衣が帯びる白亜を見つけることができる。というか落としただけで喪失扱いつてちよつとひどくない？いやかなりひどいよね。逆に拾いなおせば戻ったりしないかな？

「えい」

私は駆け寄り、過多技の羽衣を拾い上げた。裏側から唯一義の玄衣が出現する。しかしそれだけだ、チェストリアに仕舞ってもアナウンズ一つない。

……なるほど、特にジョブが戻ったりはしないらしい。いや、クソ仕様じゃん。「はあ~~~~~」

私は萎えた。萎えつつ、周囲に散乱する首飾りを拾い集めていく。一つ、二つ……。何かしらの建材の粉にまみれ、くすんだ様子の輝きをチェストリアに仕舞う。自分は今、地面を這いつくばっているように見えるのかな……。なんて思ったりした。

「……クソ」

ちよつと悔しい。

ニコロと契約もできたし、別にすごく悔しいって程ではない。でも、なんとなく……。自分が誰かへの優位性を失ったような気がしてしまう。

……。いいや。こういう時は自分より下の人間を見て安堵感を覚えるに限る。誰がい

いかな……。私は周囲を見渡すが、基本的に野次馬と、見てはいけない者を見てしまったようなそぶりをして立ち去る通行人と、フアインダー・インターフェースを覗き込むパパラッチどももしいない。もうちよつと張り合いのありそうなヤツは……。あれ？

いた。

そいつは両手にドリルを携え、轟音と共に瓦礫を掘り進めていた。掘削された瓦礫がさらに小さな瓦礫を量産していくのにも厭わず、一直線に作業を続けている。

ラエルカンだ。

「なるほどね」

私はラエルカンを自分より下判定した。ドリルを持つているからだ。どうせ私と同じで落としたアイテムを探しているんだろうけど、私はドリルを持っていない。それだけ楽と言うことだ。実際、ラエルカンはへ住宅へたちが崩れるのと共に死んだから、装備があるとすれば瓦礫の下だ。ご愁傷様ア〜。私は安堵感を覚えた。よし、元気が出てきたぞ……!

私は随分前に使った……。何だっけ。そう、T型のドリルを取り出した。うまくいけばラエルカンの装備を横取りできるかもしれない。いやでも本人が見つけれられてないんだつたら流石に……。待てよ。

思い出そう。ラエルカンが使ってたのは……。デカイ銃でしょ、聖杯でしょ……。いや聖

杯は多分仕舞ったかな。それで……そうだ、頭が燃えていた。

「これだ」

私は熱源視認板ホットスポット・グラスを取り出し、装着した。ふふふ、瓦礫の山でも不自然に熱量が多い場

所発見……！

駆け寄ってドリルをドリドリする。ビンゴ、空けた穴の向こうにちらちらと、燃え盛る蒼い炎が垣間見えている。火傷するかな？まあちよつとなら大丈夫か。私は手を突っ込み、なんか燃えてるやつをチェストリアに収納した。

『燃ゆる貌を獲得しました』

「よっしゃあー！」

塔タワーの効果で思ったより火傷が強かったけど、回収に成功したぞ！

「何をしている？クグリーン氏」

しかしそこに長身の影が落ちた。ラエルカンが気づいたらしい。

彼は私の頭上で言った。

『燃ゆる貌を返すのだ』

「返すう？なんで？」

「このゲームを破壊するのに必要だからだ」

それでイエスって答えるヤツいるかな……？

「じゃあ聖杯と交換ね」

「いや、聖杯もこのゲームを破壊するのに必要だ」

「じゃあデカイ銃」

「……まだ掘り出している最中だ。あそこに」

耳寄り情報ゲット!

私はラエルカンの指差す方向に【瞬間転移】し、【空蟬】……はダメか。自走竜砲をその場に置いて錬成毒を突っ込み、不安定な足場の上を駆ける。ハイヒールは走りにくいからやだなあ……。背後で発射音、ラエルカンが追いかけてきている。

「そこだアーツー！」

もう一度【瞬間転移】！銃があるという場所に到達する。えーつと、瓦礫が組み合わさってできた空洞の中に銃があつて、今空洞に穴をあけている最中と。これ私の身長なら入れる気がする。やってみよう。【瞬間転移】。入れた。銃を掴み取り、瓦礫の山の上にもう一度【瞬間転移】する。後はチェストリアに……おや。

「……クグリーン氏」

全身にダメージエフェクトを残しつつ、ラエルカンがそばに立っていた。銃を掴んでくる、これではチェストリアに収納できない。

「その手を、離してもらおう」

「こつちのセリフだよ」

奪い合いの構図だ。

私が銃を引つ張り、ラエルカンも銃を引つ張る。STRはだいたい互角らしい、両者のどちらかが銃を得ることは無く、ただただ腕が酷使されていく。

「私は——絶対にこの手を離さないぞ、クグリン氏」

ラエルカンが言う。そつか、じゃあ逆に……。私が考えたところで、ラエルカンの左腕が私の右腕を掴んだ。

『そつか、じゃあ逆に私が手をいきなり離してやれば、こいつは転ぶだろう』とか考えていただろう」

チツ、お見通しか。

「残念ながらね。私は」

じゃあこつちで。

私はセパレーションの能力を発動し、ラエルカンに掴まれた部分ごと腕を切り離れた。

「は？」

ラエルカンは転んだ。今だ！ハイヒールでラエルカンを踏む。オラツその銃を放せ！しかしラエルカンは離さない。

「言った、だろー！手を離さないと！」

しやーない、じゃあ腕を離してもらおう。私はドリルを取り出してラエルカンの手首近くを掘削した。

「は？」

破壊属性の暴虐がダメージエフェクトを飛び散らせる。よし、確かにラエルカンは銃から手を離してないけど、別に手が常に腕とくっついてるとは限らないからね。私はラエルカンの手ごと銃を拾い上げた。チェストリアに収納、手だけが残って地面に落ちる。

「待」

「じゃあね〜！」

セパレーションの能力を首に発動。自分自身の頭部が胴から切り離される。私は死に戻りした。

震えよう！

しかし逃げきれなかった。

街路。リスボンしてから宿をもう一度出て、しばらく歩いたところだ。私がまさに足を踏み出そうとしていた石畳の上に、一つ長い影がヌツと現れた。

「なるほど、確かに【盟友救助】^{フレンドシップ}は便利な魔法だ」

振り向いた先にはラエルカンが、仄かに光る魔法陣の上で立っていた。

……ぶつ殺すか？

ビビるとか逃げるとかより先に、殺すか殺さないかという二択について考える必要がある。こいつを……殺すか？ だって邪魔だし、ニコロを騙したし、隙あらば人に迷惑をかけようとする。明らかに殺した方が益になる。しかしよく考えてみると私だって、邪魔だし、誰かをしょつちゅう騙してるし、人に迷惑をかけまくっている。まずい、これだけでは殺す理由として弱い。もうちよつと……もうちよつと欲しいなあ。確実な正当性って言うか。あ、そういえばラエルカンってティーアスを襲ったじゃん！ ティーアスを襲うのはもうダメだろ！ 私はダメだと思ったけど確証が持てなかったの、スクショアイテムを取り出してラエルカンを撮って晒しスレに投下した。「クグリン北ww

ww」みたいな時代を間違えているとしか思えないレスがポコポコやってくるが、見なければ無いのと同じの精神でウィンドウごと閉じる。よし、これで社会的殺害は完了だね!

「終わったかね?クグリーン氏」

ウィンドウが閉じたのを悟られたのか、ラエルカンが話しかけてきた。そういえばいたんだっけ。

「先に言っとくけど銃は返さないからね!あのなんか燃えてるやつも!」

「燃ゆるシンダー・ヘッドの貌だ。装備中最大HPを削り続ける効果を持つ」

どうせダメージ反転聖杯を使えば最大HPが増え続けるようになって最強!とかそういう理屈でしょ。

「ダメージ反転聖杯を——」

ラエルカンがおおかた予想通りのことを言い始めたので、私は聞き流しつつ燃ゆるの貌とやらを取り出して眺め始めた。へえ、最大HPを削るのは明らかに悪用できるけど、メイン性能は頭部を起点に発動するスキルや魔法の強化……頭部を起点っていうのが微妙だなあ。

「——というわけで最強なのだ。分かったかね?クグリーン氏」

「その説明の前に言うことがあるんじゃないの」

「……………？」

ラエルカンは相当に怪訝そうな顔をした。純粹で無垢な何も知らない子供がするそれのようだった。いや、実際のところラエルカンはほぼ純粹で無垢で何も知らない子供だったのだ。みんなが楽しく遊んでいるゲームを破壊しようとしている時点で、むしろそれくらいでないとおかしかった。

……話題を変えよう。

私は溜息をつくふりをして晒し用スクショを撮り増しすると、再び彼の顔を見上げて言った。

「……………わかった、それはもういいよ。これだけ聞かせて」

こつそり思考入力、撮った画像を追加で……投下つ。えーつとここまでのスレ民の反応は……クグリン北クグリン西ティーアスたんに出すやつ全員殺したいや殺すクグリン南クグリン東、なるほどね。掲示板なんて見ても何の得もない、これ以上顔を出すのはリスクでしかないしやめておこう。まったく、掲示板に入り浸つてるような奴の気が知れないや！半透明のウィンドウがアニメーションを伴い閉じていき、その後でぼやかされていた石畳が再び現れていく。

私はラエルカンに言った。

「……………なんで、あんなに急いでたの？」

ラエルカンが怪訝そうな顔をやめた。

……タイムトラベルだか何だか知らないけど、ラエルカンの作戦は何かおかしい。こいつがやろうとしていたことは要は二つ……「ティーアスに勝つ」こと、そして「勝った状態でオルケストラに行く」ことだ。前者はまあいいけど後者がおかしい。ただオルケストラに行くだけなら、わざわざ仮契約相手をニコロに絞らなくても、もつと破壊的願望を持つてるような相性のいい制服人形を探せるはずだ。そもそも、あの日ニコロと私がファスティアにいたのはたまたまでしかない。もしニコロがそこにいなかった場合、ラエルカンはそのあとどうするつもりだったのか。

「晒しスレは見てない？ だったら見た方がいいよ、あなたの生爪を剥ぎたがってる奴が30人はいるから」

私はちよつと誇張した物言いをした。とにかく、『ティーアスに勝つだけ勝つて後日制服人形と契約でき次第オルケストラに行く』というプランは不可能だと伝えたかった。

「……両手足でも足りない、か」

ラエルカンは何やら考え込み始めた。考え込んでいる間に晒しスレ……つと！ 危ない危ない。入力しかけた思考を止める。掲示板に入り浸ってるような奴の気が知れなくなつたばかりだった。私は自分を制止しつつ、心のどこかがうずうずしていることも

自覚していた。どこが？それは分からない。ただ……どこがではなく何にと聞かれれば、答えは晒しスレのほかにはないのだろう。

ちようど私がよくわからない感情を抱き始めたあたりで、思索をやめたラエルカンはこう言った。

「いいだろうクグリン氏、行動の理由を説明することにしようではないか」

そういうことになった。



「よし、あの男を見ているのだ」

場所を移し、人気の少ない裏路地あたり。街灯も届かない薄闇の中で壁に隠れるようにして表道を覗き込みながら、ラエルカンは私にそう言った。彼が指さす方を見れば……まあ、別段特徴もないようなプレイヤーがいる。アバターはとりあえず顔をよくしてはあるけどキヤラメイクに力を入れるのは面倒だったと言った感じの風貌だ。腰から先細りのホルスターみたいなものを吊っているから多分軽戦士。服装は青系の地味な色の短袖、見え隠れする手の甲にはちらちらと光るものがある。指輪だ。指輪ほど行動を阻害しにくいアクセサリーもそう無い。別に四足歩行で歩いているというわけもなく、一見すればどこにでもいるようなヤツに見える。

「彼がどうかしたの？」

私かわざわざ声を潜めて発した問いに、ラエルカンは答えなかった。代わりに何やらメニューを操作してインベントリから拳銃を取り出すと、

「ちよつ」

と私が言い終わりもしないうちに、照準を合わせて引き金を引いた。

弾丸が破裂音と共に猛烈な勢いで発射され、青空をバツクにわずかな時間飛んだあと、正確な狙いでもってプレイヤーに着弾する。

「……な」

当然、プレイヤーは振り返ろうとする——しかし遅いのだ。発射前からラエルカンを見ていた私ですら、あまりの急ぎにうまく反応できなかったくらいなのだから。立ち上る硝煙を隠し去る鼠色の影を、マズルフラッシュが立て続けに暴いていく。セミオートで発射された銃弾たちは、そのままプレイヤーの肉体にダメージフェクトをどんどん増やしていき——

「……がつ」

そのまま……彼はノックバツクで倒れながらも、最後の一発を脛に受けて。装備していたアイテムを石畳の上に転がしながら、ポリゴンと化して消えていった。

「ちよつと何してんの!?!」

私はラエルカんと、その頭上で赤く輝くプレイヤーネームに言った。言いながら走り

出した。よくわかんないけどとりあえずドロップアイテムめっちゃあるじゃん!!誰かに回収される前に早く取らないとオーツ【瞬間転移^{アホト}】ウ！完全な真横ではなく地面からわずかに離れた位置に転移することで加速度をうまく殺すテクを披露、そのまま右手で転がっている何とも言えないデザインの剣に触れ——！

「——今、」

……弾かれた。

「おかしなことが二つ起きたな、クグリン氏」

背後から聞こえるラエルカンの声を、ウインドウが展開する音が一瞬遮る。何々……あと29分間は所有権が維持されるためインベントリ等への収納は不可、なるほど。埋めるか。私はドリルを取り出した。

……流石に話は聞いておいた方がいいだろう。振り向いた私にラエルカンが続ける。「二つ、ドロップアイテムが多すぎる」

ラエルカンが立てた人差し指は、身長に似合って長かった。

……まだちゃんと調べていないけど、例のドロップ率上昇の詫びバフはどうせこれが原因だろう。武器だけならまだしも、武器、防具、アクセサリ……すべてが落ちるのは流石におかしい。そして同時に、ものすごく悪用できそうな仕様でもあるの

これは私もわかっていて。もう一つは……いや、なんとなく察しはつく。

「二つ、」

ラエルカンの人差し指の横で、より一層長い中指が立つ。

「賞金狩人が現れなかった」

……そうだ。パツとしない奴とはいえ人が死んでるのに。ドロップアイテムがまき散らされてるのに。それを私がドリルで掘った穴に蹴りこんで埋めて30分経ってからまた掘り出そうとしているのに。本来であればそれを止めようとするはずの狩人たちが——一向に、現れない。

「前者については、正直に言えば想定外だった。後者も——まあサイレントアプデの類ではあるが、ゲーム内の情勢を見ていればある程度は把握できる。賞金狩人は別に完璧に闇に包まれた業種ではない、内部情報だつて知れないこともないのだ。そして……王国騒乱の影響で賞金狩人が来なくなるのは、つい先ほど行われたアツプデートのタイミング。そう目星がついていたのだ」

ラエルカンが続ける。ドリルが回転を始める。私は無言で、彼が話すのを聞いていた。

「クグリン氏、王国騒乱は……間違いなく、荒れるぞ」

その言葉を聞いたのは——石畳の隙間に空けた穴の大きさを確認している間だったはずなのに。私にはずいぶん、印象深く聞こえてならなかった。

忍びの道を再び歩もう！

まあとりあえずは再就職が先だ。

ベヒーモスでパパッとニコロの手足を換装したあと、その足でやってきたサードレマの忍^{ギルド}の巢。盗賊系統のギルドは他の職業とは少し違う運営形態を取っていることが多いけど、その中でも忍者はかなり特殊な部類だ。他のギルドが大通りぞいに建物を構えているのに対し、忍者たちは……ここそそと隠れるように、大都市のはずれのほうに偽装された施設を置いている。ここそそと隠れているため新大陸調査船への紹介状も書いてもらえない。よってクソだ。私は自分が今から就職しようとしているジョブをクソ判定した。

「機械人形の同伴は不可だぞ」

会場の入り口に入ろうとしたところで、受付のなんか口元とか隠してる感じのNPCに呼び止められた。

……忍者の特殊さは再就職においても発揮される。他のジョブのように一声かければすぐというわけにもいかず、逐一刃隠心得の習熟度試験を受ける必要があるのだ。これもクソ寄りなんだけど、見方によってはむしろ救済措置ととらえることもできる。ま

あ、それについては後ほど。

「……………え〜？」

私は言った。それは不服というよりは浅めの困惑によるものだ。機械人形、つていうのは……………制服人形のことか。つまりニコロをチェストリアに入れた状態で試験を受けるな、と言いたいんだろう。

「え〜？ではない。機械人形を展開し、いったん別れる」

NPCは厳しげな口調をやめない。

……………忍者はやっぱり全体的にヘンだ。この一職業だけで『忍術』とかいう特殊なシステムを有するアビリティ体系が一つできてるのもおかしいし、何より……………関連NPCが何か妙だ。ニコロはチェストリアに入れているはず、このNPCはどうやって彼女の存在を検知しているんだろう……………？

「早くするんだ」

……………はあい。

ニコロを展開、忍の巣特有のなんかシェーダー変わった？みたいな雰囲気をぶち壊して神代の光が空間を破き、そこに整った顔立ちの人形が現れる。私はニコロに言った。

「じゃあ……で待っててね」

彼女はチェストリアからなんかミニコンボみたいな奴を取り出し、地面に置いてその

上に座った。答える。

「承諾わかた：あまり長引かせないでね」

ニコロの面倒くさがりは、契約してからは以前ほどの強さではなくなつた。ただ……それはそれとして、行動原理ではなく性格的な面で効率を求める傾向が残っている。残っているというか、多分それがデフォルトになっているんだろう。誰だつて、人格面で誰かに影響を受けることはある。

となれば。私の帰りを心待ちにするであろう彼女にかけるべき言葉は……一つだ。

私は口を開く。数秒後にはもう、入り口めがけて走り出していることだろう。

「大丈夫、すぐに戻るから！」



「諸君——あれを見たまえ。赤色の棒手裏剣が一本、白塔の上部に突き刺さっているだろう」

「なんだ、アレに触ればいいだけかよ！」

「そんなの【空蟬】と【鼈衣】使えばヨユーだよなっ！」

「早く忍者になりたいぜ〜！」

「諸君！よく聞き給え。君たちがすべきは——この棒手裏剣にただ振れるだけ、なんてぐ〜く容易な行動ではない」

「容易じゃないってよ!」

「フン、ここまでのヌツルい試験で言われてもなあ」

「忍術強すぎでしょこのゲーム!」

「その縛りとは、刃隠心得を使わないことだ」

「なんだと!?!」

「マジかよ!」

「終わった」

「刃隠心得に頼りすぎることがあつてはならない——それが、忍びの掟の第零条である。刃隠心得とはあくまで刃を隠すがためのもの、それそのものを刃と置いているようでは、強力な忍者になど決してなれない。——さあ、最初に挑戦するものはあるか!?!」

「はい!!受験番号〇八二です!」

『クグリン』だな?それでは始めろ」

「えい! (自分の左手を切り落として棒手裏剣めがけて投げつける)」

「ええ……」



というわけで合格した。

「おまたせー」

「おかえり、^{マスター}契約者」

ニコロに手を振りつつ、もう片方の手に取り出した戦利品を握る。

別にこれで試験は終わりではなく、ここからさらに上忍試験に行く必要があるけど……その前にひとつ、片づけてしまわなければならないものがあるのだ。

……忍者は全体的に奇妙で、結構なクソ要素を持っているジョブだ。ただ再就職するだけでも、そのクソ要素はかなり体験できたけど……まだ終わりじゃない。最高のクソが、私の手中に円筒の形をとって収まっている。

それは、すなわち巻物だ。

「……………」

私はじっと、その表面のくすんだ緑の上に重ねられた白い文様を見つめた。それはたぶん木の枝か何かをモチーフにしたものだったけど、目を凝らすうちに分かれ道のようにも見えてきた。実際のところ、この巻物は分かれ道なのだ。忍者最大のクソ要素……それは、ジョブ就職時にもらえる刃隠心得・奥義の秘伝書の内容が……ランダムに決定される、という点だ。

「——吹来い竜——」

おや、ちょうどあのあたりで奥義ガチャを引いてるプレイヤーがいる。まあぶっちゃけ秘伝書の中身はアイテムとしてもらう時点で決まって、開封するまでその内容がわ

からないだけなんだけど……とりあえず見てみよう。

プレイヤーはやけに可憐な声で一心不乱につぶやきながら、巻物を持つ手を徐々に動かしている。

「竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い……！」

【竜威吹】はかなり人気のある奥義だ。単純に火力が強いのもあるが……一番の理由は派手だからだ。実際、派手さをバカにしてはいけない。このゲームのスキル周りは基本的にセンスがいいから、派手ということはかつこいいということになる。トップクランの面接でかつこいいプレイヤーとかつこわるいプレイヤーのどちらかを採用するとなれば、基本的にかつこいいプレイヤーだろう。ただし【午後十時軍】を除く。

「竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い竜威吹来い……！」

彼女のツインテールが緊張に伴い揺れている。結構引つ張るなあ……もしかして私と同じ再就職勢なんだろうか。再就職のために試験をやり直すことが一概にクソ仕様といえない理由も、この秘伝書ガチャを引き直せることにある。自分が求めているのと違う秘伝書が出てもしセマラが可能ということだ。いや他のクソ要素を緩和してるからって別のクソ要素があつていい理由にはならないし、一番クソなのは運営という話に

なるんだけど。

プレイヤーはまだ巻物をにらんでいる。流石にそろそろ引き終わるかな？

「竜威吹、来いっ！」

彼女は勢いよく巻物を開き、

「アー……ツウゴミカスツツ!!!アツ！ゴミ！ゴミ！ゴミ！」

そのまま地面に半開き状態で叩きつけ、茶色のブーツでもって踏みつけ始めた。高い声で口汚い罵倒を帯びて広場に響いていく。

「……ニコロ、あの巻物なんて書いてあるやつ？」

「なになに解析：センサ情報によれば、『刃隠心』『奥』『水』『り』の文字を確認」

「【水滑り】かあ……」

掲示板とかではハズレ代表格みたいに扱われてるけど、ぶっちゃけ私にとってはアレはそこまでハズレではない。なんだかんだでかなりお世話になってきたからだ。まあ習熟度上げすぎると【潮騒し】になるのは正直擁護できないけど……何か回避手段があるかもしれないし？

とはいえ、彼女にとつてはハズレだったのだろう。プレイヤーは幾度とない踏みつけを経て足跡だらけになった秘伝書を、しかしもつたいたいとかそんな理由で拾い上げると、インベントリに収納し、とぼとぼと歩いて行った。

……私も引くか。

ぶっちゃけ私にとつてはあんまり当たり外れが無いというか、強いて言えば二連続【水滑り】は避けたいなあくらいだ。やっぱりいろんな忍術を使いたいしね。

「えい」

『刃隠心得奥義【水滑り】を会得しました』

「なるほど」

いやまあ……良いんだけどこう……どうせなら竜威吹とか、無い? みたいな。無いかあ。

「なになに解析: センサ情報によれば、『刃隠心得奥義【水滑り】』の文字を確認」

「ニコロ、もう解析しないでいいよ」

「了解」

……ええ? こう……いやだつてさあ、私は単にジョブを失つて再就職してただけだからまだしも、仮に私がリセマラ民だったとしてさあ。あのダルい試験を突破するじゃん? で巻物を開いたら【水滑り】。実質的に振り出しに戻つてゐるわけじゃん。リセマラを始めた時点から状況が全然変わつてない。しかも二回かぶつた以上三回かぶつたり四回かぶる可能性も付きまとうわけで、それは回を重ねることに重くなる枷としてリセマラ民を縛る。要するに何が言いたいかということこの仕様はクソだということだ。ク

ソッ！私は地面を蹴り上げた。土埃が宙を舞う。

「あつクグリーンさん！やっぱりここでしたか！」

そしてその中を打稻魔糸が突つ切つてきた。えっ何……？彼女は当然のように録画アイテムを構えながら私に近づき、笑顔で言った。

「探したんですよクグリーンさん！普通にどこにいるか分かんなかったんですけど、グリーンさんの目撃情報をチェックしたらこう……なんか【空蟬】使つてなくね？みたいな感じになりました！で、なんかのはずみで上忍じやなくなっちゃったんじやね？つて。やっぱり再就職中だったんですね！」

お、おう……。

……ツツコミを入れたたいがい抑えたん抑える。ダイナマイトは割と使えるヤツだし、普通に当たり障りのない感じで答えておこう。

「……あー、た、大変だったね。伝書鳥メールバードでも送つてくれればすぐに反応したのに」

「ああいえ、僕は伝書鳥メールバード使えないんですよ」

「……なんで？」

私がなくなく嫌な予感を覚えつつ発した問いに、ダイナマイトは笑顔で答えた。

「一回有翼爆弾を試したことがあって、その時にちよつと括りつけてみたら」

当たり障りありすぎるだろ！

「わかった、それ以上は良い。……で、要件は？」

「はい、それが……」

そこで言葉が途切れる。ダイナマイトが急に……そう、何かに驚いたような顔で動作を停止したのだ。

「……？」

「……」

「おーい？」

ダメだ、反応がない。ダイナマイトの視線の先を見てみれば何かわかるかな？確認する。そこにはニコロが、制服人形の標準装備的な何かであろう白いコンボの上で座っている。

……そういえば紹介してなかったっけ？普通に晒されてるとばかり思ってたけど、まあニコロは前まで寝るか首だけかみたいなところあったし無理もないのかな。

「……ああ、紹介するよ。この子はアイヴィーⅡ256、私の……」

「……ともだち契約機」

「すみません落ち着いたらまた来ます」

え？

「今から死ぬので」

ダイナマイトはなんかナイフ取り出して心臓に突き刺して死んだ。

……まあ、そういうこともあるかもね。

不思議とその行為に驚きは無く、むしろなんだか納得するような気持ちで、私はポリゴンとなり爆散していく彼女のアバターを見送った。

散乱した彼女の装備品が、傾いた日光を受けて影を落としていた……。

道なき道へと導こう！

「……で、結局のところ何の用なの？」

しばらく時間をおいたあとに何とも言えない表情で再び歩いてきたダイナマイトは、何とも言えない表情を継続しつつ口を開いた。なんとなく落ち込んでいるようにも見えるんだけど、さも手の前でちよつと組んでみてるだけですよとでも言いたげな彼女の両手が、人差し指と中指でスクショ撮影を表すジェスチャーを作り続けている事実について、私は決して見逃さなかった。

……晒しスレを見てみて分かったことだが、ダイナマイトに会うたびに撮られているにしては、私の画像はそこまで高頻度で貼られているわけではない。それはお蔵入りになっている画像があるということで、コイツは「晒すため」とは別の何かの理由で私の画像を集めているということになる。それはもう単なる盗撮では……？

……ということを指摘できないまま、私の目の前でダイナマイトが問いに答える。

「はい、実はクグリンさんに紹介したい人たちがいるんです」

へえ？

紹介したい人たち……正直いって不安だ。ダイナマイトはプレイスタイルがテロリ

ストなわけで、テロリストから紹介される人物というのは普通に考えればやはりテロリストだろう。危険な香りがする、身を引いた方がいいんじゃないかなこれ？

……よし、今回はお断りしよう。

「ごめん、テロに加担するわけには……」

「いやクグリーンさんもテロリスト寄りじゃないですかあ！」

そんなわけないじゃあ〜ん！

私は笑顔を振りまきつつ踵を返した。さあ、次は上忍試験に向かうぞ〜っ！

「ちよ、待っててくださいいよお〜！テロじゃないです〜！テロじゃないですからっ〜！」

縫り付いてくるダイナマイトの声色は、先ほどまでの何かシヨックに見舞われた結果のようなものと比べれば随分調子が戻ってきているように聞こえる。よかつたね！でもテロリストに調子が戻ってそれどうなんだ……？

まあ、一応再び振り向いてあげよう。ダイナマイトに聞く。

「テロじゃないなら……え、詐欺？」

「詐欺でもないです！その他反社会的行為は全部違いますよ！」

現在進行形で盗撮しながら言われても説得力無いっつて！

ダイナマイトは両手のジエスチャーをやめないまま、私に説明を続ける。

「えっと……そうだっ！クグリーンさん、あの様子だと多分「水滑り」を引いちやったん

「じゃないですか?」

「何が言いたい…………?」

ダイナマイトは意気揚々と続けた。

「私の紹介したい人たちと会えば、別の秘伝書をくれると思いますよ!」

マジ!?

「会います」

「ねっ」

会うことになった。



「クグリン氏、お会いできて光栄です、お噂はかねがね」

ダイナマイトが導く先に進んだところ、そこには十人ちよつとくらしいのプレイヤーたちが佇んでいた。私は今、多分リーダー的な何かと思われる中背の女性と話している。頭上には『コウガイガー』のプレイヤーネーム、レッドではない…………彼女の背後にいるプレイヤーたちもみんなそうだ。どうやら反社会的じゃないっていうのは本当らしい。

「なんでも、「水滑り」の達人だとか」

それほどでも。私は謙遜した。謙遜しながら考えた。

…………なるほど、そういう方向性で来たか。私は心無い人々によつて悪評を流布されて

いるけど、別に悪いことだけがアイデンティティではない。というか悪くないまである。【水滑り】の習熟はその一つで……まあ実際、【潮躲し】を習得したときにwikiを見て何も書かれていなかった。それはwikiに書かれないレベルの少人数しかあの忍術を発見していないということ、つまり【水滑り】を頻繁に使う人間がそれだけ少ないということを意味している。

いや……それにしてもこう、安心した。普通に私を能力的な面で頼ってたんだね！
「そして、このゲームにおけるズルの仕方を考えるのがうまく」

前言撤回、私はダイナマイトを睨んだ。

「しかし実行力に難があり、ズルをやり切る前の中途半端なところで終わってしまうことが多いとか」

さらに目力を強くする。しかしどうやら通じなかったようで、彼女のカメラロールに『目力の強いクグリン』の画像を追加するに終わった。一人負けエーーツ！

……まあいいや、とりあえず話を聞いてみよう。

「……あー、まあ否定はしないよ。それより聞きたいんだけど、結局のところあなたたちはどういう団体で、何が目的なの？」

「はい、説明しましょう」

コウガイガーは凜々しげに言った。

「私たちはミニクラン【威聖開拓】^{テラホーリー}。現在は忍者就職クエストのリセマラを行っていきます。目的は——」

コウガイガーの紫の瞳が、その奥行きでわずかに光った。ような気がした。

「——王国騒乱中に、ユニークシナリオ「大いなる巡礼」を達成することです」



ユニークシナリオ「大いなる巡礼」。

「聖職者」系統の上位ジョブ就職者が色々やると発生するシナリオで、ユニークといっても Wiki に乗っている程度には有名になってきているものだ。内容を説明するのは至極簡単だ——『カルマ値0を維持した状態で、一度も死なず、徒歩で、シャングリラ・フロンティア内のすべての教会に巡礼せよ』。そして、それを実行するのは極めて困難だ。

カルマ値0を維持。これがそもそも難しい。このゲームのカルマ値はPKをしなくても上がる。モンスターを殺すのはまだしも、肉を食ただけでも上がるって言うんだからちよつとヒドい。

一度も死なない。これもかなり難しい。シャンフロには死にゲーの側面があるので、どれだけステータスを磨いても注意不足だとすぐ死ぬ。私が言うんだから間違いない。

徒歩。かなり厳しい。転移魔法はもちろん、ベヒーモスで買える乗り物も、飛行魔法

も使うことができない。戦術機なんてもつてのほかだ。

何より——一番の問題だ。すべての教会に巡礼するということは、すべてのエリア・ボスを倒すということでもある。しかも……街は別に一直線に繋がっているわけでもない。組み合わせはルートにもよるが、一度来た道に戻るなどして……エリアボスと再戦することも必要になる。

これらの問題が重なって、「大いなる巡礼」はかなり困難なクエストと化している。「しかし」

場所を移し、適当に入った喫茶店。

「王国騒乱中、ファスティアからサードレマの間とファイフティシアに隣接する4エリアを除けば……エリアボスが出現しない。それは今までとは全く別のルートをとどれるということであり……具体的に言えば、ユザーパー・ドラゴンを回避できるということになります」

薄味のレモンスカッシュが入ったグラスを木製の机にドンと叩きつけ、コウガイガー氏は力強く言った。

私たちとは別のテーブルに座る「テラホーリー威聖開拓」のメンバーたちも、口々にその言葉を復唱する。

「ユザーパー・ドラゴンを回避できる！」

「そう！ユザパは出現しない！」

「ユザパは出現しない！万歳！」

「いや出現しないんじゃないぞ、通らなくていいだけ！でも万歳！」

「二度と俺の前に現れるなクソカスゴミモンスターが！」

「エンチャント奪うのはズルだろ〜がよオ！」

この治安で聖職者は無理じゃないですかね？

私は率直な感想を抱いた。

憎^{ヘイト}しみに濡れた狂乱の中、コウガイガー氏は一見冷静さを保ちつつ、再び持ち上げたスカツシユをストローで吸い上げながら続ける。

「王国騒乱はチャンスなのです。良いことはエリアボスの件だけではありません……新王側陣営に加入して即脱退すれば、肉を食べたなどの理由で発生したカルマ値の端数を初回恩赦でリセットできる」

マジ？良いこと聞いちゃった。カルマ値に恩赦が出るとは聞いてたけど、仕事の有無とは別に人一人殺した分くらいはデフォルトで減らしてくれるんだ。

「もちろんリスクだつて存在する。当然戦争をしているわけですから身の危険は増えますし、おそらく……エリアボスよりも巨大なモンスターが動くことだつて考えられる。しかし、やる価値はあると考えます」

グラスが汗をかいている。まるで、闘志を帯びた熱気にあてられたかのように。

……戦争イベントは『予想外』の塊になるだろう。そう私は考えている。「この陣営を勝たせよう」レベルの抽象的なものから、目の前でコウガイガーが熱弁するような複雑なものまで……。誰もが戦争における『目標』、あるいは『予想』を立てている。そしてその通りになるように行動し、結果としてその行動たちが絡まり合つて混沌を生み出して、誰の『予想』とも違う結果を生み出す。乱戦とはそういうものなのだ。

だから……この試みが上手くいくとは思えない。しかしそれも、結局私の『予想』でしかないのだ。覆る可能性はある。なら、私は秘伝書をくれる方に動くだけだ。

「わかった……協力するよ」

……それはそれとして。

「で、その作戦のどこで【水滑り】を使うわけ？」

「話すと長くなるんですが」

話すと長くなるんだあ……。

「まず、本作戦においては重要な町が四つあります。サードレマ、サードティード、ファイヴァル、そしてイレベントアル。前者二つは言わずもがな両陣営の本拠地ですから、どちらかの陣営に属する限りは『潜入』の形をとらなければならぬ。ここが既に【水滑り】の使いどころです——具体的には、水道を通る。要するに教会に行くことさえできれ

ば良いわけですから、潜伏系スキルと「超転身」、そして「水滑り」の併用でうまく切り抜けます。そして後者二つ。まずファイヴアルについてですが……街そのものより、その直前に存在する大赤翅が非常に厄介です。このゲームの運営のことですから、王国騒乱中にアレが起動する可能性がある。だから死火口湖を飛ばし、セブラセブル側から逆走する形でファイヴアルに向かうというモデルが考えられる。ですが……サードレマからファイティシアまでは基本的に一本道だ。「セブラセブル側から」なんて簡単げに言っても、普通に行くとファイティシアに一度到達しなければならぬ。それを回避するためにはショートカットを行います……具体的には、翔風楼結の大河を使う。あそこにはポート用の隠しルートがあり、そこを抜けると隣接2エリアに向かうことが可能です。このポートを「水滑り」で代用すれば良い。最後に……イレベントル。イレベントルとファイティシアの間で出現するユザーパー・ドラゴンは、王国騒乱中も無効化されないうえに厄介です。というわけで……我々は方向性を変えることにしました、むしろイレベントルから始めればいい。このシナリオは『聖女ちゃんに会う』ことで開始しますが、別にそれは実対面ではなくても……さらには、双方向性がある必要すらないのです。つまり、聖女ちゃんからビデオレターを受け取り、それを見た瞬間にスタートする。となるとイレベントルでビデオレターを見て即教会に行き、その後エイドルトルートで

最終的に【竜威吹】と【超転身】をもらった。

奪い合おう！

「ニコロ、そつちの調子は？」

『返答：上々』

「了解っ」

ぶつり。

アクセサリーとして装備した無線アイテムが、通信の途絶を無機質な音で示した。

そのノイズにも似た効果音を、私以外の誰かが聞くことはない。無果落耀の古城骸はかなり不人気なフィールドだし、とりわけ今はほとんどのプレイヤーは戦争の準備をしている。今はエリアボス直前の地点にいるから雑魚モンスターが出るわけでもなく、ただ虚ろに吹き荒ぶ風たちが、どこか不気味に——誰かの断末魔のような聞こえ方で、そつと響いていくだけだ。

いや、実際のところ古城骸を敬遠しがちな気持ちはわかるんだよね。攻略中の様子を想像するとさあ……まず古城骸に、来たぞーっ！つて。足を踏み入れるじゃん？で初手でなんかめつちやデカい手が落ちてるじゃん。当然テンションは上がるわけよ。まあめつちやデカい手が落ちててテンションが上がりなかつたらウソだもんね。でも

さあ……敵がまあ、しぶといじゃん？しぶといのはいいよ、むしろやりがいが出るみたいな側面あるし。でまあ意味深な瓦礫とか意味深な動く床とか色々を踏まえつつ、無駄に硬い敵に必死で魔法なり斬撃なりを叩きこむわけじゃん？ここで思うんだよね、これ意味深だけじゃね？って。瓦礫があるうが別にバフ効果にはならないし、動く床とか単なるダルいタイプのギミックだし。何より手だよ。実際この手って何なの？っていう。普通に攻略してもわからないんだよね、あのデカイ手が何なのか。別に応援とかしてくれなくてマジで落ちてるだけのデカイ手っていう。そうなるともう説明しろよ以外言えなくなるじゃん。テンションは上がるけどこう……自分だけ蚊帳の外、みたいな。

「……まあいいや」

古城骸にあんまり人がいないのは……今の私には、むしろ好都合だしね。

「すう……はあ」

私は適当に深呼吸して気持ちを入れ替えると、システムメニューから時計ウインドウを展開した。現在時刻……12月2日17時14分23秒。リアルであればもう太陽が沈んでいるころだと思うけど、シャンフロには季節の概念がないし自転公転まわりもなんだかよくわからないシステムになっているので、結論として日光は未だに差し込み続けている。とにかく……重要なのは、そろそろ時間だということだ。

角ばった数字フォントたちが、ウィンドウの上で絶えずその姿を変え続け……一秒、また一秒と、世界に時が刻まれていく。30秒が過ぎ、40秒が過ぎる。……よし、何事もなければもうすぐ来るはずだ。

私がそわそわとそれを待ち、秒数のラベルがしばらく進んだ後……。寂然たる空気を切り開きながら、眼前の床にひとつの魔法陣が浮かび上がった。

「……来たー！」

魔法陣が、私の眩きに効果音を被せながら……。仄かな光粒を振りまいて、その靈耀に群れを成させる。それらは空間に散る微細なもろもろを暴き出しながら、蠢き囲む中央に、一つの人影を召喚する。

……クソアプデによるプレイヤードロップの仕様については色々調べた。結局のところ厄介なのは、三十分間保持される所有権だ。落ちたアイテムを持ち上げることはできても……インベントリには当然入れられない。ある程度離れた場所に一定時間置くと元の場所に戻る。転移魔法を使っても装備判定を剥がされる。なかなか条件が厳しいわけだ。

人影が、霧散していくエフェクトの中で言う。

「……めんどー！」

賞金狩人の不在を嗅ぎ付けてドロップ目当てで街中PKをやりまくってるクズのみ

んなも、この仕様には辟易しているみたいだ。結局彼らは根本的な解決をあきらめ、一人あたり三分くらいの時間でどんどん通行人を殺していき、十一人目を殺すタイミングでついでに一人目の装備を回収する……という手法でやっているようだ。当然三十分が経過した後ならクズ以外のプレイヤーも平等に拾えるんだけど、その場合はそのプレイヤーが十一人目になるだけという寸法らしい。ひどいね！

人影が、もはや人影ではなくなりながら言う。

「十一秒遅れちゃった」

そして。

転移すると装備判定を剥がされるといいう仕様には抜け道がある。【フレンドシップ盟友救助】の強制送還は能動的な転移とはまた別の判定を持っている。さらに……輸送能力を考えれば、運ぶのはなるべくたくさんさんの武器を装備できるプレイヤーのほうがいい。それは、例えば。

「大丈夫だよ、ハゴノイゲ」

浮かばせた剣七本。さらに両手杵を使うだけの任意の武器。それらを自在に繰る職業……剣聖であつたりするわけだ。

ハゴノイゲは、ファイティシアでクズ集団に襲われた哀れなプレイヤーがドロップし、そしてクズ集団が別のプレイヤーを殺している隙にニコロの「回収者」の光線を当

てられ、更に彼女に手渡されてここまで運ばれた七本の剣たちと一本のハンマーを床に転がした。そして、新たな【盟友救助】フレンドワーフおよび【分割詠唱】スクリットスベルのスクロールを取り出す。「じゃっ、また十分後にね!」

「了解!」

魔法陣が彼女を包み始める。転移エフェクトを最後まで見ている余裕はない。転移魔法の制約は回避できても……「ある程度離れた場所に一定時間置くと元の場所に戻る」件についてはそのままだ。この八本の武器が消失する前に、例の処理を完遂しなきゃいけない。

……といったても、大したことじゃないんだけどね。

「さて……!」

私は剣のうち二本を拾い上げながら、自分の背後を改めて見据えた。そこには「ステルスアサルト」でごまかせる程度まで距離を離し、ユーザー・ドラゴンが翼を広げている。

「行つけええええ!」

あとは投げつけるだけだ!

腕に遠心力を感じつつ、前よりは多めに振ってあるSTRでもって剣たちに空を舞わせる。一見すればこれは安全圏からの投擲攻撃でしかないけど、実際は違う。私が攻撃

だと思っていないからだ。シャンフロのシステムは判定が微妙な時は意思を見る。「ステルスアサルト」が途切れていないのが何よりの証拠だ！

篡奪者たる竜の手前あたりに落下した剣たちは、当然の帰結として奪われる。ユザパー・ドラゴンに「ステイル」された武器からは所有権が消える。第三者たるモンスターであるからこそそれができるんだ！

「最後の一本！」

投げる！奪われたのを確認！ユザパは……謎のパワーでもって自分の周囲に武器を浮かせている！

このゲームのボスは基本的に複数人想定だ。ユザパも四人くらいで挑むことを想定されているだろう。四人ということは全員が二刀流なら八本の武器があることになって、ユザパの四肢だけでは足りない。よって、コイツは装備枠が足りない分の武器を浮かせる。

「後はアツ！」

倒すだけだ！

私は燃ゆる^{シンダー・ヘッド}貌を装備した。視界の片隅でHPゲージが短さを増していくけど、まあテントは張ってあるし大丈夫だ。蒼炎が生み出した寒色の火の粉が視界の中で右往左往を始める。

「刃隠心得、奥義!」

空気を吸い込む。思えば、私というプレイヤーはしょっちゅう竜と遭遇してきた。アドバンテージ。セパレーション。オルケストラにいた恐竜。眼前に見据える銀の篡奪者もその例に漏れない。遭遇してきた。あるいは見てきた。この忍術ではそれが重要になる。

「【竜威吹】いいっ!」

熱が。蒼と、風を纏って。地面を抉る。静寂を破壊する。ユザーパー・ドラゴンただ一体を屠るために。その息吹はどこか、青空のようにも見えて。

遠くで、竜が斃れた。

「はい討伐う!」

ハゴノイゲが来るまであと六分!早く拾っちゃおう!

私は忙しさと楽しさを心中で同居させながら、散らばった盗品たちのもとへ駆け出した。

言い争おう！

しかし静い起きた。

いかにもガラの悪い感じのキマってるファツションをしたプレイヤーが、頭上に輝くレッドネームにも届きそうな高いモヒカンを傾けて、直立する私につつかかっている。

「オンドレあツウウウ?!?! テメツオレらの”シマ”で調子コいてんじゃねエツゾツオ!!”
「ごめんちよつと聞き取れないかも……」

「え? ああすまん、じゃあもう一回言うぞ……オンドレあツウウウ?!?! テメツオレらの”シマ”で調子コいてんじゃねエツゾツオ!!”
!?!?!?!

「やっぱ聞き取れないかも……」

「マジかよ……」

彼の名前は『ハイエナジー』、現在シャンフロじゆうで蔓延っている街中PK装備回収クズ集団のうち一つ、ファイフテイシアを本拠地にするヤツらのリーダーらしい。クズ集団のリーダーである以上当然ながらクズで、そしてニコロに絡んできたって言うから駆けつけて数分話した感じ……バカでもある。クズでバカというのはリーダーよりは駒に求められる才能な気がするんだけど……いやまあ、このゲームのプレイヤーって全員

誰かの駒なところはあるか。

「とにかくよオオツウー……クグリン? だつたかア!? 困ンだよテメエーらみたいな雑魚にイツ! オレたちの獲物を掠め取ツるような真似されちゃアツ!」

ハイエナジーがガンを付けながら言う。このガラの悪さはいくらプレイヤーとしての人間性がクズでもそれだけで身に着けられるものじゃない、ある程度はロールプレイの側面があるだろう。というか、ロールプレイ以外で髪型にモヒカンを選択することはまずない。

「え〜? でも考えてみてほしいんだけどさ。私たちはドロップの中でも剣しか回収してないよ」

「剣だけだア!? 確かにテメーらが盗むのは剣だけだろオ〜よツー! でもなア! ここでテメーらをシメ上げてやんナかつたらよオ! テメーらの後に出てくる『槍だけ』とか『靴だけ』とか『指輪だけ』とか言い出すヤツらにも同じように対処しきゃなんねンだよツ!」

「……チツ」

さすがにここで言いくるめられるほどバカじゃないか。

「今舌打ちした?」

「してないよ」

「そうか……とにかくそういうわけであツエ!! テメーらは今すぐここを去れツ! それでノツたれ死んじまえば——おっと」

おや?

「ちよつとタンマ」

……ハイエナジーは私にハンドジェスチャーを送ると、何やらシステムメニューを操作し始めた。私からはそのウインドウは見えないけど……伝書鳥が来た様子はない。少なくともメールを読んでいるわけではないということだ。一体何をしている? ……まあいいや。とりあえず急にチャカを取り出してパスパスやってくるみたいな感じじゃないっぽいし、いったんチェストリアに退避させておいたニコロは外に出しても大丈夫だろう。

「起動……」

そうして幾何学模様に含まれたニコロが実体化すると、

「ツフう、あツたあツたア……」

ハイエナジーが何やら怪しげな黒い玉をふたつ取り出すのは、ちよつと同時に起きた出来事だった。

……なにこれ?

怪しげな黒い玉。そうとしか表現しようがない。それらはハイエナジーの掌の上で

どこか誇らしげに日光を反射していて、なんだか禍々しげなオーラを帯びてるようにも見える。掌はそのまま、彼の口に運ばれて……ちよつと待って、あれってまさか。

「ニコロ、あれ何」

「解析：一号人類によつて開発された臓器内貯蓄魔力の消費及び一時的な身体能力の増強を引き起こす薬物。レシピは——」

「それは言わなくていいかも！」

私はそのアイテムを知っている。ただ、記憶から消そうとしていただけだ。

薬剤士で薬に稼ぐとなるとコレを作るのが手っ取り早かつた。しかしそれは——
精神衛生という意味では、ぜんぜん薬なものではなくて。

「了解……
わかつた

ニコロがその言葉を最後に黙つたころには、既に二つの黒い玉はハイエナジーの口内に吸い込まれていつて……。おや、禍々しげなオーラが彼の全身に移つた。

……これは。

「……ふう」

表情を満足感で塗りつぶし、ハイエナジーが言う。

「やッぱり——
イッパル、フォース 魔魂丸薬は二錠服用にカギるなア。色調反転も打ち消せるしよオ」

「ええ……」

思考にとどめるつもりだった困惑が、思わず口から飛び出てしまう。ハイエナジーは……クズでバカなだけじゃない、狂っている。私は確信した。

「アア？なんだよテメー。十五分おきに魔魂丸薬イウイル・フォースを二錠服用することを繰り返し返すことでレベル1のままレベル99並みの能力値を得ることがそんなにおかしいってのかア？」
逆におかしくないことってある？

ハイエナジーは続ける。

「……気にイラねエなオイ……！ちよつとテメー来やがれッ！俺イウイル・フォースが魔魂丸薬のスバラシサをレクチャーしてやらアツ！」

うわっ腕を掴まれた！クソっこの……!?……こいつ腕つぶしが強い……！レベル99並みのSTRが入ってるから!?いや、それだけじゃ……！

「レッスン1だッ！魔魂丸薬イウイル・フォースはレベル99未満で服用した場合ッ、『この調子で成長し続けたらどうなるか』を示すッ！簡単な話ッ！レベル33のプレイヤーが使えばッ！初期値を除いたステータスポイントが3倍になるッ！」

……極振り……？

かなりの握力を腕に感じる。ハイエナジーは私の表情を見てニヤリと笑い、言った。「勘付いたかア!?そうだよッ！レベル1のポイントをSTRに5突っ込めばッ！バフによるポイントは5の99倍の495になるッ！」

え？つまりHPに1しか振ってないってことじゃん。殺すか。私はセパレーションの能力を發動して掴まれた腕を切り落とした。

「ええ……」

なぜか困惑の眩きを発しつつ姿勢を崩すハイエナジーのもとから【空蟬】で脱出。叫ぶ。

「ニコロっー！」

「キャブチャ回収：マスター契約者を邪魔しないで」

ブースターの煙が視界の隅を行く！

それはニコロの飛行ユニットが発するエフェクトに他ならない。背中に感触。それは背後に回ったニコロが私を抱え込んだことによるものだ。つかの間の浮遊感が破壊され、再び重力がやってくる。脱出成功だ！

「くたばれ〜ー！」

ハイエナジーは姿勢を明らかに崩している。私は自走竜砲を取り出して彼の足元あたりに行かせた。事故死はPK判定にならない！私の手が汚れることはない！そのまま転んで死ねエーッ！

「ツとオ……」

しかしハイエナジーは転んでも死ななかつた。なんで？

……右手に、何か握られている。

「危ねエなア……レツスン2はまだ終わってないぜエ」

それは、藍色の光を発する……杯で。

「ステータス反転聖杯を使えばア！495ポイントを別のステータスに移すこともできんだよオウツ！おススメは断然LUCだなツ！」

え？つまりSTRに1しか振ってないってことじゃん。殺す……のも面倒だなあ。

「とうかさつき何の何？『ええ……』じゃないでしょ、真竜討滅者の能力で自分の四肢を自在に切り落とすのがそんなにかかしいって言うの？」

私は気になっていたことを質問してみることにした。

ハイエナジーは『逆におかしくないことってある？』みたいな顔でこっちを見ている。唾然って感じた。なんかムカつく。殺すか。私は残った片手にラエルカン銃を取り出した。

「契約者、千日手の発生を検知した」

しかしニコロが背後から忠告してきたので仕舞った。

「ちよつとタンマ」

ハイエナジーが怪しげな黒い玉を取り出し、飲み込み始める。

……マズいぞこれ、グダリ始めている。そもそも何が問題だったんだっけ？うちのシ

マを荒らすなとかそういう感じだったかな。この調子だと睨み合ってる間に別の誰かにシマを乗っ取られて落ちそうな気がするんだよなあ……。

……よし。

「飲みに行こうか」

私はハイエナジーにフレンド申請を送った。

ふと見上げた空はいつの間にか黒ずんでいて、ただ煌めきを纏う三日月だけが、私たちのもとへ輝きを注ぎ始めていた……。

毒を盛ろう！

よし、殺そう。

私は決意した。

「ケケケ……それでよオウ。495ポイントつてのはまあ方便ツツツかア、実際はもつとなんだア……わかるか？俺アクターニツドの討伐に参加している……エンカと撃破で、それぞれ数十ポイント入ってるってワケだ」

はえくわかるわかる。

ハイエナジーはすっかり上機嫌で、グラスに注がれた葡萄酒を飲む。大層うまそうに飲む。このゲームに存在する大体の飲料の例に漏れず、私には現実におけるぶどうジュース程度の風味しか感じられない。しかし彼は飲む。うっすい酒を大層うまそうに飲む。おそらく魔魂丸イヴイル・フオース薬の味覚異常効果が関係しているんだろう。

酒場の照明が落とす温かみを帯びた橙が、立ち並ぶテーブルたち、カウンターたち、グラスたちに満遍なく光を与え、いくつもの薄影を床へと刻ませる。……その対象としては、私自身のアバターも例外ではない。葡萄酒のグラスの透明性がテーブルに浮かび上がらせる、どこか奇妙な薄影模様の横で……そこまで奇妙でも薄くもない影が、私の上

半身をかたどって落ちる。

そこに隠れているのだ。

そう、私は……眩い照明に取り囲まれながらも、その真意を自分自身の影の中に潜めている。そうして眼光を必死に抑え、ときおりカウンターに残る木目に突っ伏すようなまねをしつつ、隣に座るハイエナジীর装いを観察してきた。それを経て……分かったことがある。こいつはチェストリアを装備していない。

「つてエワケでよおう……俺のSTRは4桁あるんだ。まあVITもAGIも1だから、実質的な攻撃力はほとんど出ねエがなア〜」

そうなんだあ〜。

……別にアルコールを実際に摂取しているわけでもないのに、ハイエナジীরはやけに饒舌になった。そもそも単にPKの元締めやるならヤク漬けになって極振りなんて色物ビルドをする理由がないし、何か複雑な裏事情がある可能性がある。……まあ、私には関係ないことだ。

とにかく、そう。ハイエナジীরはチェストリアを装備していない。デフォルトのポシエツトタイプも、あるいはハゴノイゲのようなカスタムによる腕輪タイプも、身に着けている様子は見当たらない。考えれば当たり前だ。確かに常時レベルダウンしておけばステータスは跳ね上がるかもしれないけど、レベルアップによるほかの恩恵を受け

ることができなくなる——例えば、アクセサリースロットが一つで固定、とか。

こいつは武器を持つてる。クソアプデの影響で落ちるようになった、落ちるはずのなかった武器たちをしこたま隠してる。そして……クソアプデとは関係なく、ハイエナジューは単純にPKだ。賞金狩人が来ないだけで指名手配はされている。つまり、死ぬばインベントリの中身が全て落ちる。床に散らばったそれを私が回収すれば、ハイエナジューの稼ぎを全部いただくことが可能だ。

……よし。

私は手を挙げた。まずは飲み物を注文しよう。

「マスター、なんか適当な酒！」

「承知いたしました」

注がれた白い液体の水面を揺らし、天井の光を時折跳ね返させながら、一杯のジョッキがカウンターの上面を滑って登場する。これは……何だろう。白いことしかわからない。

「なにこれ？」

「ライスミルクでございます」

「ライスミルク
甘酒ね」

確かに酒ではあるけどさあ……。

……まあいいや、要するに飲めればなんでもいい。私はハイエナジーのほうをチラッと見た。よし、ちょうどいいタイミングでシステムメニューを操作中……多分キメる時間が迫っているんだろう。私は自分の体が壁になるようにジョッキを動かし、チェストリアを確認する。

……そんなに薬が好きなら、私のやつも飲ませてあげるよ。

そう心の中で呟きながら、私はチェストリアから薬包紙を取り出した。鍊成毒、もう鍊金術師じゃないからそんなに多用できないけど、こういう場面ではむしろもってこいだ。薄紙を少し変形させ、中の粒たちをサーツとジョッキにブチ込む。ハイエナジーの最大HPは1、鍊成毒への耐性判定ではSTRは参照されない。これを飲めば確実に死ぬはずだ。

ちようどハイエナジーも服用を終えたらしい。私は彼に言った。

「おこりだよ」

私が毒入り甘酒を押し出す音が、喧噪の中に掻き消える。ハイエナジーは……よし、拒否する様子はなさそうだ。勝った……！私はガツポーズした。

「クグリンウ」

はえ？

「これ、毒が入ってるだろオ」

何のことですかね？

私はしらばつくれた。ガッツポーズしていた手をそのまま開き、手をあげるようなポーズをとる。

ハイエナジーは突っ込んでくる。

「わかるンだよ——俺ア敵の攻撃を予測するスキルを持つてる。コイツは怪しいぜと思つたときに発動すればよオ——毒だろうが、見抜くことはできるンだ」

言い切ると、彼は聖杯を取り出した。それが光るや否や彼は毒であるはずのジョッキに口を付け、「この毒ピリピリしててウメエな〜」などといいながらぐびぐびと飲み干し始めた。……STRとHPを反転したのか。

私はこのハイエナジーというプレイヤーについて理解しつつあつた。ステータス反転聖杯を使うことで臨機応変と強さを両立させつつ、不意打ちには攻撃予測スキルで対処し、対処してる間にステータスを反転して相手をメタる。だいたいわかつた。だいたいわかつたけど——。

「じゃあやって、ニコロ」

「了解：形態変更、フックショットモード」

それって、一回やったらしばらくはできないよね。

ステルスアサルトの応用で部分的に隠蔽していたニコロが今、椅子の下から躍り出

る。

「なッ——」

ハイエナジーが驚きに呟く。遅い。このゲームで悪事をやるためには早さと速さが
必要だ。でなきや、通行人が撃つてきた銃にも対処できず死ぬことになる。

ロープ……いやワイヤーだっけ。とにかく太い金属製の紐が、さざ波が海岸を襲うよ
うにしていねりながら空中を駆ける。それはいつの間にもやらハイエナジーの脚に巻き
付いている。彼の頭部が急降下する。椅子が倒れる音が大きく床に響いた。強い照明
の中、わずかな埃たちが衝撃を受けて舞い上がっていくのが見える。

「確保……」

「お疲れ……」

私はニコロとハイタッチした。

「お、いッ……」

「というわけで死んでね……」

そして適当な店で買った適当なナイフを取り出す。狙うはコイツの首筋イ——ッ
！HPがどれだけあろうと、破壊属性で頭を切り落とされれば間違いない無力だ！

私はナイフを急加速させる。改めて考えると、握りの部分の形状が気に入らない。
やつばもうちよつとちゃんと選ぶべきだったかな？……そんなどうでもいいことを考

えながら、悪質プレイヤーキラーを殺し、自分のチェストリアを肥やそうとする。

「断るねエツ！」

しかしハイエナジーはもう一度聖杯を取り出した。は？再びの藍光、再びのステータス反転。HPとどれと——いや、結果はわかつてる。どうせVITだろう。

鈍いSEが響く。さんさん加速をつけたはずのナイフが、岩を相手にしたかのように弾かれた。

「わかつたろオ？クグリソウ。テメエに俺を殺すのは無理だア」

カウンターの向こうのマスターは直立したままだ。店内にいるプレイヤーたちもみんな、私の野望が失敗したことを気にも留めていない。ただ平穩に、暖かい光の下でうつつい酒を飲んでいる。

……そっか。そうかもね。

「素直に吞もうぜエ——まだまだ、夜は浅いんだア」

起き上がり、倒れた椅子を立て直しながら、ハイエナジーはこちらへと笑いかける。

……仕方ないか。

「わかつた、ごめん」

私は素直に謝った。

そして、さつきから用意しておいた二杯目のジョッキを取り出す。

「これ、お詫びにおごるよ」

「おう、分かッたぜエ」

ぐびぐび。

ハイエナジーは毒にあたって死んだ。

「ツしやああああッ！」

やっぱりだ、攻撃予測スキルにはリキャストがある！聖杯で反転したから、HPは1に戻っている！そして……ハイエナジーはバカだ！安全確認して問題があつたら止まるけど、安全確認がそもそもできない場合はとりあえず行く！

急に空間に展開した膨大な武器たちが、床へと影を落としながら塊になって落下していく。

「ニコロー！全力で回収するよー！」

「了解！」
いえっさー

これ全部私のだからなア〜ッ！私は吠えた。ダンジョンを探索していたら宝箱を見つけた時のような興奮があつた。重力に従い落ちていく武器たちの中には、豪華なエフェクトを纏っているものもあつて……それを、自分自身が感じている輝かしさと錯覚したのかもしれない。私はひとまず、適当に目に留まった斧に手を伸ばした。

斧が消えた。

「え？」

武器たちが消えた。

「いや、あなたなら絶対やると思ったよっ！」

聞き覚えのある声が聞こえた。

振り向く。カウンターの端の方から聞こえたはずだ。そこにはいた。予想通りの人物がいた。頭上のプレイヤーネームは驚くべきことに赤くなくて、なんだかへんてこな文字列を表示していた。

……『背後の一撃』。本当に、変な名前というほかにない。

「……何のつもり？」

「えっとね、あなたの戦利品……持ってこうかなって！」

ちよっと待て。

チェストリアを確認する。もしもの時のため、戦利品関連だけハゴノイゲの持つてるやつのうち一つと共有してあるのだ。なるほど、全部彼女に持ち去られてるね。

「……」

「今日は久しぶりに外に出てとっても楽しかったよ、じゃあねっ！」

あ、消えた。どうやって？彼女の残像の足元に魔法陣あり。私があげた【フレンドウール盟友救助】のスクロールを使ったわけね。

「……………」

店内は活気づいていて、しかし私にはそれが静寂にも思えた。それはあり得ない矛盾だったけど、これまでの一部始終が誰にも反応されないというのは、もはや沈黙のほうがいい状態だろうと思っただのだ。

なんだか悲しい気分になっていた私に、ニコロが話しかけてくる。

「報告：契約者、遺留物の一部は微量ながら回収してある」

えっ!?

「ほんと!?!」

つまり「ハイエナジのドロップアイテムは全部持つてかれたわけじゃない」ってことだよな!?! やったあ! やっぱニコロはすごいや!

「肯定……これ」

ニコロが無機物でできた掌の上に何かを実体化させ、私に突き付けてくる。えー、どれどれ……。

……謎の黒い玉。

「えつとニコロ、これ以外には……」

そう聞くしかない。流石に魔魂丸薬を渡されても使い道が無さすぎる。売れば一応金にはなるかな? って感じではあるけど、とはいえもうちよつとこう……わかりやすい

戦果が欲しいところだ。めっちゃやかっこいい剣とかね！

ニコロが答える。

「回答……この」

「こ、この………？」

「この1粒を含めて、同種薬物を247粒回収した」

……。

私はもはや何も言えずに、飲みさしだった葡萄酒のグラスに手を伸ばし、その濃ゆい紫色を口元に運んだ。

ひどく薄味の酒だった。

見据える先を決めよう!

「……つてわけなんだよ〜」

「なるほどな」

ペンペンにハイエナジーの一件を語っている。

クソアプデだの戦争だの、最近のシャンフロにはいかにもめんどくさそうな要素が目白押しだ。ここらで一度、新大陸を目指す同志と視点を共有しておいた方がいいだろう……というわけで、私たちは蛇の林檎で情報交換をしているのだ。

ペンペンは濃いめのりんごジュースを啜ると、自分の事情について語り始めた。

「俺は……クソアプデの直前まで鉄扇テッセンにハマっていたな」

おおむねいつも通りにヘンテコ武器を集めていたようだ。というかこのゲームってそんなのまであるんだね……。

一瞬持ち上げられたりんごジュースのコップがテーブルを殴り、ペンペンが話を再開する。その目つきは、なんとなく荒んだものにも見えた。

「だが……このゲームの運営はマジでクソだ。落とした」

……クソアプデは不意打ちで急に来た。ペンペンのように、落ちると思っていなかつ

たものが落ちたことで不利益を被ったプレイヤーは数知れないだろう。はつきり言つてドロップ率増加程度で何とかできるレベルの事件ではない。つまりクソということだ。

「マジでクソだよね」

「マジでクソだよな」

私たちは意見を一致させた。

12月という時期にはミスマッチの清澄な氷が、季節なき世界ゲームのコップから覗いてい

る。「それで……だ。探しはしてもぜんぜん見つからなくてな、多分誰かに持ち去られたんだろうが……まあ、萎えた」

萎えるよねえ。

ペンペンは続ける。

「しばらくこのゲームから離れるか？みたいな思いながら……まあ、ベヒーモスあたりをぶらぶらしてたわけだ」

……このゲームから離れる、か。

私には、ペンペンのその言葉が……本人の意図を超えたところで、より深い、示唆的なものを帯びているように思えてならなかった。彼は最終的に離れずに済んだようだ

けど、そんなのは数多のプレイヤーたちのうち一事例に過ぎない。このゲームの最大瞬間同時接続者数は某世界記録にも認定されたほどだ。当然のことながら、膨大な数の運命たちが絡み合っていて……世界そのものを更アップデート新する行為には、絶大なまでの影響が伴う。新規だろうが中堅だろうがトップ層だろうが、お気に入りの装備をドロップしたら辛いというのは変わらない。いったい……このゲームは、これからどうなっていくのか。

私は不吉な予感に思いをはせたけど、それはそれとしてペンペンは話を続けている。「で……ぶらぶらしてたらさ、出会ったんだよ」

……出会った?

私はそこで気づいた。ペンペンの目つきは荒んでいるのではなく、むしろ活力が溢れすぎていくべきものなのだ。ギラギラしている、欲望に満ちている。色々な表現方法があるだろう。ただ重要なのは……何かに魅了されていると、そう見えることだ。

「コレに、な……!」

彼は一つ、大きいとは言えない小箱を掲げた。こ、これは……!

私が目を見張る中、ペンペンの親指が小箱の横を擦る。おそらくスイッチ的なものをスライドさせたのだろう。神代製アイテム特有のよくわからない光を放ち、小箱がまさに起動して……!

ばちばち。

その先端を青い電流が走った。

「スタンガンだ」

……。

「な、なかなか強そうだね?」

「ああ。はつきり言つて手持ちじゃ使い物にならないが、棒に括り付けると一気に化する……薙刀ならぬ薙スタンガンってな。いいだろ?」

「そうだね……」

要するに、落とした武器を探している間に「飽き」のタイミングが来てしまったというこころらしい。

……まあ、そういうこともあるかもしれないね。

「それでクグリ」

「なに?」

「お前、戦争でどつちに参加するかももう確定したか?」

……そういえばまだだった。

シャンフロの一大イベントである王国騒乱は、来る12月15日午後6時に開始される予定だ。正直このままで本当に大丈夫なの?という感想しかない。だってクソアプ

デじゃん。前ルール読んだときは「手から離れていた武器以外はドロップしない」って書いてあったはずなんだよね。それがピンポイントで塗り替えられたとしてもさあ、さすがに「プレイヤーをキルしてもレッドネームにはならない」のほうは変わるわけないじゃん？となるともう……起こるのは、略奪のほかにないような気しかしない。今からでも延期した方がいいだろう。

……しかしこのゲームの運営はクソなので、王国騒乱は何事もなく始まる。私が「前王」と「新王」でどちらの味方をするかも、そろそろ決定しなければならぬのだ。

「ん〜……まだ決めてないけど、どちらかというとな新王よりかな」

「その心は？」

「えつとね……」

私はペンペンに自分の考えを語り始めた。

……まず、新王は正直負けと思う。

なんか配信者が来て色々やってるみたいだけど、このゲームには配信を見ながら遊べないという致命的な欠陥がある。ルール上も若干不遇な節があるし、掲示板での評価も芳しくない。……まあ、その中にはどこかの陣営が流したプロパガンダも混じってるんだらうけど。

ただ……これはゲームだ、負けたところで死ぬわけじゃない。おいしさを基準に負け

馬に乗ったって許される。具体的に言うところ……。

「新王陣営には恩赦がある……!」

新王陣営で成果を上げると恩赦が出て、カルマ値だの指名手配だのが清算される。それはごくごく単純な仕様で……使いやすい。このゲームのカルマ値は本来ゼロが下限だけど、恩赦はそこに「マイナス」を作る。負の方向に貯めることができる。となればやることは一つだ、王国騒乱中は限界まで恩赦をため込んで、最終日近くでとんでもない悪事をする。例えば。

「自分の陣営の倉庫を襲撃する、とかね」

新王陣営はサーティードに拠点を置く。その倉庫には旧王と比べても上質なアイテムが揃っているだろう。それを全部掠め取る、完璧な作戦だ。

「……なるほどな」

「結構いいプランでしょ!」

「やめとけ」

「あれ?!」

私はびつくりした。ペンペンなら賛同するだろうと思っていたからだ。なんなら、そのまま二人で倉庫への侵入方法を話し合うことになると思うていた。しかし、違っ

スタンガンを握った左手を机に伏せ、ペンペンが言う。

「いいか?新王か前王かじゃないぞクグリン、そもそもどっちの陣営にも参加するな」

……なんだと?

それは、確かに選択肢の一つではある。実際、中立都市にいるようなプレイヤーはみんなそうしているだろう。どちらかの陣営に参加するのは負けるリスクを呑む行為、そして負けによるペナルティを受け入れる行為だ。私の「新王は負ける」という予想だつて覆る可能性がある。勝敗は基本的に予想できない。

でも……参加しないというのは、目の前にあるPKし放題権を、完全に見逃すということでもある。

「……どうして?」

「リスポーンだ」

ペンペンがりんごジュースを飲み干す。

「どちらかの陣営に属した場合、死ぬたびに『本陣都市』にリスポーンしなきゃならない。

それじゃダメだ」

「……ファイフティシアにでも引き籠るつもり?」

「違うさ、もつと先だよ」

……もつと先?

首を傾げる私の前に、ペンペンの手に握られた一枚のチラシが突き付けられた。それは……妙に気合が入っていて。きつと、どこかの印字士プレスマンや画家の手によるものに違いなかった。

『ツチノコ杯カップ：来たれ生産職！大海原に線条の道を描け！』

「開催は、12月19日からだ」

……これは。

それは、私は何よりも待ち望んでいたものだった。

いい加減新大陸に行きたいと、そう思い始めてどれだけ経つだろうか？ 大手クランには入り損ね、抽選枠にも外れるし、当たっても謎の小競り合いでチケットが消えている。そろそろ密航してみようかなんて思っても、基本的にいつの間にかつまみ出されている。

その状況を打開するための最も簡単な手段は、そもそも新大陸調査船に頼らないことだった。自分で、いや。自分じゃなくてもいい。誰か別の人間が作った船に乗る。それこそ、新大陸に行くための最高の道だった。ただ弱かったから実践できなかつただけだし、今の私には友達がいる。やれるということだ。

「海に出るぞ、クグリン」

スタンガンの電源は切れていないようで、電流はいまだにばちばちと、何かを鼓舞す

るかのよう
に音を立
てていた。

ガンスミスになろう！

「というわけで、船を作るのに協りよ——」

ずだん。

街角で無神経に上がった銃声が、言い切りかけた私の言葉を阻害した。

一瞬だけ訪れた静寂がすぐに晴れ、路上の人いきれはつい先ほどまでと同じように運
行を始める。もはや通行人たちも、銃声一つ程度にいちいち気を留めてはられないの
だ。最近のシヤンフロでは街中の銃声なんて珍しくもない。言うなれば、夏にセミが鳴
くのと同じようなものなのだ。

私も周囲と同じく銃声をセミ扱いすると、改めて目の前に佇むジュゲツキに話し始め
る。

「あー、船を。船を作るのに協力してほしいんだ」

「……………ふふふっ」

ふふふってなんですか!?

私はビビった。

私とジュゲツキの関係性はいつもシンプルだ。私が何かを要求してジュゲツキがそ

の代償として人体実験にかけてくるか、あるいはジュゲツキが人体実験にかけてきて私
 がその代償として何かを要求するか。この場合は前者ということになる。実際……何
 かしらの人体実験を受ける覚悟はしてきた。でも、はいともいいえとも言わず「ふふ
 っ」だけ、というのはあまりに不吉だ。

「その言葉を待つてたよ、クグリンちゃん!」

私何やらされんの!?

最も気がかりなその疑問にジュゲツキは答えてくれず、代わりに何やらシステムメ
 ニューを操作し始めた。このアクションすら何かの人体実験の一環な気がしてならな
 い。まずい。もうちよつと安心感が欲しい。そうだ!

「ニコロっ」

「展開：何の用?」

「しばらく傍にいて」

「……承認しかたないな：契約者マスター、おいで」

わあい! 私は展開したニコロの傍にササつと寄った。征服人形特有の妙に可憐な感
 じの衣装が、視界の隅で揺れ始める。

よ……よし。なんとなく未来に希望が持てる気がしてきた。友達が隣にいるって素
 晴らしいね! しかしジュゲツキがおもむろにチェーンソーを取り出していたので私は

考えを変えた。

反射的に聞く。

「誰の腹を搔つ捌くの!?!」

これで「もちろんクグリンちゃんだよ」って答えられたらどうしよう? 不安だ。

ジユゲツキはのんびりした口調で答えた。

「……あれ? ああごめんクグリンちゃん、このチェーンソーは間違えて出しただけだよ」

なあんだ。

「使うのはもうちょっと先だからねっ」

最終的には結局搔つ捌くわけ!?

ま、まずい。不安量がデカすぎる。ニコロが隣にいてもなお抑えきれない。に、ニコロおく。私は更に彼女に擦り寄った。今の私はクソアプデ対策で過多技リデクセッターの羽衣を仕舞い、その辺の店で適当に買ったシャツを着ている。要するに腕同士が触れ合うということだ。ボディパーツの質感がひんやりと冷たい。……うん、こんなに近くに友達がいるんだしやつぱり大丈夫だよ!

私が自分を鼓舞する中で、ジユゲツキのウィンドウ操作の手は仮想の板の上を滑り続ける。

「……よしっ」

いま、滑り終えた。

「……それで、私に何をさせようってわけ?」

「えつとね。今からクグリンちゃんには——」

な、何が来る……? 私は仮想の心臓が鼓動を速めているのを自覚していた。

「契約者^{マスタ}、大丈夫?」

ニコロの静まり返った腕は、上昇していく私の心拍数と対比を描いているようだ。

「……うん」

私がそう答えたところで、ジユゲツキは一枚の書類を取り出した。

「ガンスミスになってもらいます!」

カンニングペーパーだった。

◇

生産系ライセンス。

それはこのシヤングリラ・フロンティアにおいて、『武器を作る』ために生まれた第二の手段だ。従来、武器の製造といえは生産職である鍛冶師に一任されていた。儀^{リット}靈^{ウス}劍のよ^ウなジ^ョブ性能と密接に紐づいた武器を例外とすれば、劍^ダら^ウが斧^ダら^ウがハリセ^ンだ^らう^が、作^ルの^ハは^スべ^テ鍛冶師^ダつ^た。

しかし、そこにリヴァイアサンとベヒーモスが浮上する。

二隻の神獣が提示した条件はこうだ——『武器を作る』ための能力を、意思を、知識を。それら三つを兼ね備えしものに、挑戦への許諾を^{ライセンス}与えん、と。

それは紛れもなく、一つの大きな革命だった。武器を頻繁に必要としつつ、ジョブスロットの兼ね合いで鍛冶師に就職するまでは至らなかつた開拓者たち——彼らはこぞつてバハムートへと足を運び、ライセンス試験を突破し、自分の考えた最強の武器を自分で作り出すようになっていった。

◆ ガンスミス。それは、銃器を生産するライセンス。

というわけで合格した。

流石は初心者にも人気なライセンスというか、取得はそう難しくなかつた。^{実技試験}能力は適当にピストル作れば通れるし、^{面接試験}意思は覚えゲー。^{筆記試験}知識はジューゲツキからもらったカンペをうまいこと隠したら通れた。「象牙」側が犯行を認識していないとは考えにくいから、たぶんある程度のクオリティのカンニングは見逃すとかそういう感じな気はするけど……とにかく、クリアはクリアだ！

「プロトコル「オルケストラ」条件達成、^{コンキスタ・ドール}征服人形暫定規約に基づき「コンサート」への招待状を進呈する」

『ユニークシナリオEXの条件を達成しました』

『ユニークシナリオEX「あなたに捧ぐ旋律^{ウタ}」を開始しますか?はい　いいえ』

ついでになんかユニークシナリオも始まったしね!

とりあえず、簡素な封筒を渡してきたニコロに質問する。

「ニコロ、この招待状『貴方を待っています』って書いてあるけど……具体的にどこで?」

「一万」

「一万?」

「キロメートル先」

「クソがアーーーッ!」

新大陸^{あっち}前提シナリオを旧大陸^{こっち}で発生させてんじゃないよ!ほぼ犯罪だろッ!クソッ

!

私は悪態をついた。

しかし悪態をつきっぱなしのわけにもいかない。私たちが立つベヒーモス入り口付近に、雑踏をかき分けてジュゲツキが歩いてきたからだ。

「無事にガンスミスになれたみたいだねっ」

やだなあ、絶対まだまだ企んでる笑顔だよこれ……。

私はニコロに近づいて安心感を得るか考えたけど、実際のところ安心できたところで

別に安全というわけではない。そろそろ……現実と向き合わねばならない。

私はジューゲツキに渋々聞く。

「……それで結局、私をガンズミスにして何をしようとしているの?」

ガンズミスであることはそこまで大きな意味を持たない。ただ銃器の生産権があるだけだ。取っておいて損はないライセンスではあるけど、わざわざ私に限定して取らせる意味が分からない。

「一体、何を企ん——」
ずだん。

街角で無神経に上がった銃声が、言い切りかけた私の言葉を阻害した。

ああ、またこれだ。このゲームはすっかり銃器に溢れてしまった。私は頭を掻き、阻まれた言葉を言いなおそうとした。しかし……その相手であるジューゲツキは、私から目をそらして射撃音がした方を向いている。

彼女の背中が言う。

「クグリンちゃん。NPCにとって……銃って、どんなものだと思う?」

NPCにとって?

……シャンフロではずっと、銃を生産する行為にシステム的なロックが掛けられていた。つまり一部の例外を除けば、リヴァイアサンが浮上するその瞬間まで、シャンフロ

に銃は存在しなかった。……プレイヤーはリアルを知っているから。あるいはリアルを介して遊ぶ別のゲームを知っているから。「ロックされてるってことは逆に言えばそれ以外の手段で銃が手に入るってことだろ」みたいに言い合って、銃が解禁されたときも喜んだ。でも、NPCは？

「……言いたいことが分かってきたかな？」

ジュゲツキが振り返る。

その視点については……確かに、考えたことがなかった。NPCにとって銃は遺物であり異物だ。突然世界に登場し、ものすごい勢いで広まって、しかも人間を殺すのに最適だ。そして、加えて言えば。

「そう、もうすぐ王国騒乱が始まる。クソアプデの影響で本気の武器を持ち出せない以上、容易に量産できる銃の需要はいっそう高まるんだ。王国騒乱中、旧大陸は銃声にまみれることになる。それを聞いて、NPCはどう感じるかな」

そんなの、決まってる。

「そりゃ、怖がるでしょ」

「そう。配信者連合の討伐配信で分かってきたんだよ。短期集中的に『恐怖』が作られたとき、真なる竜種が現れる」

「……何日？」

「十二月十八日」

「……場所は？」

「わからない。でも、多分旧大陸だろうって予想されてる」

「……どんな竜？」

「銃弾バレットかもしれないし、狙撃スナイプかもしれないし、口径キリバかもしれないし、発射ショットかもしれないね。

ただ一つ確かなのは、銃をモチーフにしていて、強いこと」

……「ライブラリ」全体が？いや違う、ある程度はジュゲツキの独断が入っているだろう。とにかく目の前にいるこいつは……現れる竜を倒そうとしてるんだ。

……なるほど、言いたいことはわかってきた。

「で、なんで私がガンスミスになるの？」

「簡単だよっ」

ジュゲツキはにこりと笑った。

「クグリンちゃんには、輝槍ブリュナク仮説の器になってもらうんだ！」

また一つ、銃声が響いた。

啓示を得よう!

いやブリユーナクって何?

近々真なる竜種が出るというのは、まあ、わかった。セパレーション戦からしばらく経って、あのコンテンツの存在も結構なプレイヤーが認知するようになってきた。誰かが討伐配信をしたのがデカイ。知名度に付随して考察もいろいろ試されてるんだけど、実際のところこのゲームのプレイヤーはほとんど全員真なる竜種エアプだ。そのためエアプが憶測をし、エアプがそれに突っ込み、エアプがそれを見てwikiの「チラシの裏」欄とかに書き込み、エアプがそれを咎める……というなかなか虚無的な構図が出来上がっている。考察自体の内容も千差万別で、やれ真なる竜種は偽The Fiction Dragonなる竜種、即ちシャンフロ以外のゲームや漫画に出てくる存在に対立して生まれたものであるとか、やれ真なる竜種は元はといえば真なる恐竜種The True Rexの『恐』の文字が竜と融合した存在であるとか、やれTrueトゥルーではなくTruthトゥースな真の理由!?!トゥルーパー真実複数あった!とか。バカにしてんのつていう。

とにかく……エアプたちの考察の末、エアプにしても「まあこれくらいは流石に合ってるだろ」くらいのゾーンが発生した。

エアプだからといって甘く見てはいけない。例えば現実における恐竜にも既プはいないわけで、言い方によっては全員がエアプといえるだろう。全員がエアプといえるのに、きちんと研究が進んでいるのだ。例えば牙があるね！とか、鳴き声はこんなだね！とか、強そうだね！とか、それくらいの合意は形成できるわけだ。

それで、その合意とは。簡単だ、真なる竜種は何かへの恐怖から生まれる。その対象に銃が選ばれるのは、まあ不思議ではない。銃をモチーフにした真なる竜種が強いというのわかる。だって銃だしね。

でも……そこまで辛うじて呑み込めていた話に、急に「ブリューナク」の文字列が登場した。これがかなりわからない。

「いやブリューナクって何？」

というわけで、素直に質問することにした。

何かを隠していることを隠さずに不穏な笑みを浮かべつつ、ジューゲツキが答える。

「三行で言うと……伝説とされる『輝く槍』、内部に存在する特殊な魔力を媒介して広がる、そして……竜特效がある、って感じかな」

ダメだ、いまいち要領を得ない。要領を得ないものの器にされるというのは……不安だ。もうちよつと詳しく聞いてみよう。

「ええと……私にそれを作らせたいってこと？」

「再現させたって言うのが近いね」

……意味深な言葉しか返ってこない。どれだけの情報が隠されているんだろう？私
は怖気づいた。

「……槍なんだよね？ガンスミスになれって話だったと思うんだけど」

「そこは独自解釈ってやつだよ。輝槍伝説はあんまり詳細に残ってないし、実は長いラ
イフルを槍と見間違えた可能性もあるからね」

あるかなあ……。

「【名匠】より上のジョブがまともにも判明してない以上、ブリーユナクが求めるだけの『創
り手』になるにはライセンスを使うしかないんだよ。大丈夫……計算通りにいけば、設
計図を描くだけでも『仮説』として認められるはずだから」

だから言葉の意味が分からないんだって。

まずい……まずいぞ。私は後悔しつつあった。自分から協力を頼んだ以上後には退
けず、この後待ち受ける人体実験に耐えるしかない。しかし、その実験で具体的に何が
起こるのがあったかわからない。せめてどういう方法で死ぬのかくらいは教えてほ
しい。撲殺？轢殺？薬殺？自殺？撲轢薬自殺？分からない、何もかもが分からない。恐
怖と疑問とそのほかもろもろが混ぜこぜになって、私の額に汗粒を形作る。っていうか
いくらリアルだからってゲーム内で汗かかせる必要ってなくない？どうでもいいツツ

「コミが脳裏を横切る。それは多分現実逃避だった。

「大丈夫？水飲む？」

「ジュゲツキが水筒を手渡してきた。」

「あ、うん……」

なんとなく疑うべきな気もしたけど、もはや疑念が次から次へと生まれすぎて考える余裕がなかったたので、私はそれに口を付けた。嚙下していく冷たい液体が喉を潤す。

『末期ノ慰メを摂取しました』

「いやいやいやいやいや。」

「いやいやいやいやいやいや。」

「どうしたの？クグリンちゃん」

「マジで言ってるのか？」

私に「服盛ってみせたジュゲツキは、いかにもすつとぼけた表情で笑っている。怖
 いて！クソ、末期ノ慰メって……大疫青関連のアイテムだっけ？状態異常確認、S T
 RがIになってV I TがIになって魔法の威力が上がる。抵抗できなくなつて
 すぐにも殺せるようになる、と。よし、多分A G Iが残っているうちに逃げたほうが
 いい。」

「【空蝉】っ」

一度忍者をやめたことで習熟度ボーナスみたいなものが入っているようで、「空蟬」を印なしで発動できるようになるまでそこまでの時間はかからなかった。掛け声とともに発動された忍術がエフェクトで私を包む。視界が変化、いつもより転移距離が長い。多分魔法威力上昇の影響だろう。よし、ここで振り向いて【瞬間転移^{アポート}】を撃てば……！

「……あれ？」

足場がない。いや違う、なくなつた。

土埃が視界の下の方に見える。その発生源を視認するために下を見たところには、既に自分が落ちていることを理解できている。私を吸い込んでいく落とし穴は、大地が口を開いたかのようにも見えた。

「ぎゃー!？」

土のにおいが充満する中、落とし穴の底に尻餅をつく。ちくしよーっ！キレ気味に頭上を見上げる。ジグゲツキが漏れこんだ光の間で、ニヤニヤと笑いながらこちらを覗き込んでいる。

私の抗議が狭い空間を反響する。

「トラップは卑怯でしょ！」

「約束を破棄して逃げる方が卑怯じゃない？」

「確かに……」

論破された。

「ニコロちゃん、ロープを下ろしてあげて」

「了解」

穴の外で会話が交わされたかと思えば、ちらちらと日光を遮るニコロの衣装らしきものが見え、するすると太いロープが穴の中に入ってくる。

……仕方ない、逃げるのは多分無駄だろう。詐欺に引つかかったようなものと思うしかない。

私はロープにつかまって大人しくサルベージされることにした。

「……この落とし穴ってわざわざ掘ったの？」

せめてもの抵抗として雑談を持ち掛けてみる。

「ドリルをマグニフィセント拡大改尺すると採掘性能がめちやくちや上がるんだよね」

「拡大改尺？」

「あ、クグリンちゃんは知らないか。最近見つかったエクゾーディナリースキルだよ！
そうなんだ」

「それじゃあ始めようか！」

ジュゲツキはチェーンソーを取り出した。

「……逃げちゃダメですかね？」

「ダメだよ！竜魂解禁、「セパレーション」！」

チエーンソーが破壊属性特有のエフェクトを帯び始める。もうダメだあ……。猛烈な速度で駆動する鎖鋸を携えたジゲツキは歩いてくる。いつそ走ってくれればいいのに、と思った。

「……結局、そのチエーンソーで何をどうするわけ？」

「クグリンちゃんの腹を搔つ捌いて偶像を埋め込むんだよ！」

聞かなきやよかつたあ……。

腹を搔つ捌かれる未来が確定してしまったので、もはやこの先の対話は足掻きですらない。それでも口を開く。せめて少しでも未知を解明したい。

「……偶像ってというのは？」

チエーンソーの駆動音がうるさい。しかもだんだん近づいて、大きくなっていくんだから最悪だ。

「知らない？ネステイング・ゴーレム。聖女ちゃんフィギュアを落としたやつだよ」

ああ、フィギュア偶像ってことね。

……今から腹の中にフィギュア埋め込まれるってこと？猶更やだなあ。

「あのゴーレムは……土に残留している魔力の記憶をもとに偶像を作る。どういうことかわかる？土さえあれば、偶像を経由して魔力を再現することができる」

その言葉と共に。駆動するチェンソーをそのままにして。ジュゲツキは左手を差し出して、その上に一つのアイテムを実体化させた。それは……剣のような形状をしていて、しかし剣ではなかった。槍というわけでもなかった。ただの、土くれの塊だった。「これが、アラドヴァルの偶像だよ」

いやアラドヴァルって何？

私とその疑問を素直にぶつけるより先に、ジュゲツキが振り上げたチェンソーは、私の腹部を思いつきり裂いて。溢れればかりの返り^{ダメージエフェクト}血を浴びながら、彼女は……有言実行した。

「大疫青はマナに対する抵抗力を弱める」

ジュゲツキがそう呟く中で、私は……意識が朦朧とするような感覚に陥って。しかし、それはおかしかつた。いくら没入感が高くても、これはゲームだから。まして私は死ぬのに慣れてるから。この程度で朦朧とするはずがなかった。

「検知：契約者の意識状態が急速に変動」^{マスター}

ニコロが、ものすごく不安な報告をして。

「数時間で戻るはずだから安心してね」

ジュゲツキが、いつそう不安になる言葉をよこして。

^{デスボーン}死の瞬間と同時に、私の脳裏を一つの閃きが走った。

輝く槍って、
もしかして。

槍を作ろう！

『輝く槍』。ジユゲツキはそう言った。

しかし考えてみれば、なんだかおかしい気がする。槍が輝いているだけで伝説が作られることがあるだろうか？このゲーム……いや、槍を作ったNPCたちにとっては世界だろう。この世界にはスキルだの魔法だのがごまんとある。ちよつと光とか炎あたりエンチャントをすれば、槍なんて簡単に輝かせられる。私は元錬金術師だから、輝きを発する素材なんていくらでも知っている。それを使ってもいい。その程度の存在でしかないはずの『槍』は、しかし伝説として定着した。竜への特攻は……多分、後世に付け加えられた効果に過ぎない。「輝く槍だから竜に効く」なんてまったく直感的じゃないし、実際は誰かが作った『仮説』が影響しているんだらう。

さて……この世界において『輝く槍』は珍しくないのに、ブリューナクは伝説になった。例えば、こういう考えはどうだろう。当時の人々にとつて『輝く』とは本質的な情報ではなく、ただブリューナクを言い表すに足る言葉が他に見つからなかった、とか。中世ファンタジーの住民に自動車を見せて『原動機によつて生じる動力を用いて二対に備わった車輪を回転させて路上を走るナントカ』という説明が返ってくるはずはない。

それと同じ理屈で……彼らの理解を超えた何かを説明できるものがおらず、ただ『輝く槍』の呼称だけが残ったんじゃないだろうか。NPCの鍛冶師たちはそれを見て、「輝いているからものすごく強い」とか、「輝いたものすごく神聖」とか、そういう勝手な妄想を膨らませて……それを『輝く』だけで伝説になった理由と、勝手に脳内補完したんだろう。結果、輝くだけの槍が竜特効なんてヘンなものを持つのに至った。

しかし、私は違う。神代の技術を「SFによくあるやつ」として理解できている。伝説になったブリューナクも、神代の装備が何かのはずみでバハムートから流出したもので、それ、つまり、それを再現すればいい。

で、それって具体的に何？

……。

何？

私は行き詰まりつつあった。

『輝く槍』というからには、印象に残るレベルでピカピカ光っていて、しかも槍に見える程度に細長いということだろう。スナイパーライフル？ いやスナイパーライフル光らせてどうするんだよっていう。ええ………ん、アレだよ。あの。最終的に光ればいいわけでしょ？ そもそも伝説になったのって強さじゃなくて物珍しさが由来の可能性あるし。つまりめっちゃ光ってNPCが知らなさそうなものを作ればいいこと

になる。それって何？光らせるって要するにこう、アレでしょ。七色に発光させればいい。適当にLEDデカールを貼つとけば何とかなる。で細長いつて言うのは……あ、わかった！弾丸だ！ライフル弾なら確実に光るじゃん！よしそれじゃあガンズミスライセンスで弾丸設計を開始イク。えーつと……この銃弾頭ジャベリンってやついいなあ。というかこれでよくない？冷静に考えて私が新規設計したら『神代の武器が流出した』設定が通じなくなるじゃん。よしじゃあこれでいいや。結論！ブリーユナクとは七色に発光する銃弾頭ジャベリンの弾倉である！完成〜っ！いやー、これ間違いない正解だよ！絶対私の仮説が正しいよね！輝槍伝説ブリーユナク、解明完了〜！

「……はっー」

私は我に返った。

……ええ？

辺りをきよろきよろと見回す。自分が今まで何をやっていたか思い出すためだ。いや、思い出してはいる。納得する、というのが近いだろう。つまり……ついさつきまで、特に興味もなかったはずの輝槍伝説ブリーユナクとやらに自分が尋常じゃなく執着していた、という事実を呑み込めていない。そして、右往左往する視界の中には無機質な工房の内装の他に何もなく……呑み込み切ることは、できそうにない。

……ヤバくね？

私は困惑した。

その困惑の裏側には恐怖が潜んでいる可能性もあるんだけど、だとすれば掘り返さない方が良さだろう。……いややっぱ無理。え？ヤバいでしょ。完全に本人の意思と無関係にアバターが行動って言うかむしろ本人の意思を捻じ曲げてましたよね？絶対私の仮説が正しいよね！ではないでしょ。えっこう……ほぼデスクゲームじゃん。ゲームを遊ぶ側が操られることってある？あるの？あるんじゃないかも。

……ベヒーモスの照明は24時間全く変化しないから、床に落ちた私の影も伸びも縮みもしない状態のままだ。これじゃあ時間が分からない。……恐る恐るシステムメニューを開き、微妙に小洒落たデザインの時計を確認する。えーっと……なるほど、ジューゲツキに腹を搔つ捌かれてから4時間経っているみたいだ。ログアウトした記憶はないし、『継続ログイン時間』の表示がそれを裏付けている。

デスクゲームじゃん。

デスクゲームだった。

◆ 「デスクゲームじゃないよ〜」

しかしデスクゲームではなかったらしい。

ジューゲツキは上機嫌だ。私が手渡したブリューナク……っていかぶつちやけゲー

ミング弾倉だよ。ゲーミング弾倉を両手で弄びつつ、ベヒーモスの冷たい照明に照らされながら言う。

「私も『ライブラリ』の利用規約班の人に聞いてみたんだけど、利用規約第149章281条21項から29項に書いてあるんだって」

「もう一回言って」

「利用規約第149章281条21項から29項に書いてあるんだって」

「そっちじゃない」

「私も『ライブラリ』の利用規約班の人に聞いてみたんだけど」

「利用規約班？」

「利用規約とかプライバシーポリシーとかの変更履歴情報を管理する部署だよ！このゲームのそのあたりの文書は基本的に人工知能が書いてるんだけど、注意深く見ると次期アップデートを予想したりできるんだって！」

ライブラリも一枚岩じゃないんだな。

私は思考を放棄しつつあった。

「それでクグリーンちゃん」

何？

私の腹を搔っ捌いたうえで4時間にわたりデスゲームに突き落とされた女が言う。

「正直言ってマガジンを作ってくるのは想定外だったけど……むしろこっちのが良いよ！……ありがとう〜！」

彼女の手中のマガジンの表面で、膨大な色たちがグラデーションを描き……そう。何かへの憧れを全霊でもって表現するかのごとく、力強く輝いている。

「……良いの？ 冷静に考えるとただ槍弾頭ジャベリンのマガジンを光らせたただけな気がするんだけど」

「銃弾としては使い物にならないねっ」

ダメでは〜？

「でも」

ジュゲツキはそこまで言いかけて、インベントリから銃を取り出した。独特な形状の………なんというか、未来感のある銃だ。ゴテゴテと組み合わさったディテールの間を、碧く輝く線条ラインが走り、すっきりした形状の銃身へと収束していく。

彼女はにつこりと笑った。

「これが使えらるから」

クリック音。ゲーミング弾倉が未来銃に差し込まれた。ジュゲツキはそのまま、片手で持てるサイズのそれを持ち上げる。銃口の向く方向を見れば、そこにはちようどベヒーモス謹製の戦闘用人形がいる。威力検証ってことかな？

未来銃の上部にホログラム・インターフェースが展開する。ジューゲツキはそれを覗き込み、戦闘用人形に狙いを定め、引き金を――

【超過機構】

――引く前に。そう呟いた。

轟音が聞こえる。白熱する銃口が嵐を吹く。ゲーミング弾倉が発射する虹光が、発射されたつつある必殺技的な何かのエフェクトに歪められる。そうして色たちは霧散していき、紫が、赤が、黄色が――分解されていく虹色が。まるでノイズが発生しているみたいに、空間の中を散っていく。

熱を感じる。

「超排撃」

ジューゲツキがそう言い切ったのと、閃光の鳴動が戦闘用人形を飲み込んだのは――果たして、どちらが先だったか。

◆ 「……と、いうわけで」

轟音が晴れた先。反動で受けたらしいダメージをポジションで治療しながら、ジューゲツキは改めて私に語る。

「ガンズミスは【超過機構】を使えないけど、【超過機構】を使える武器用の弾丸なら作

れる……ブリューナクの竜特効と合わせれば、かなりのダメージが入るはずだよ!」

「どうやらおむね問題ないらしい。ゲーミング弾倉なのに……?」

「ジュゲツキは本当にお構いなしのようで、私の描いた設計図を確認している。今から彼女は、このゲーミング弾倉を大量生産する工程に入るんだろう。」

「……ふつう、ただ現れそうだけのボスに向けてそこまでの準備をすることはしない。それもこんな、なりふり構わない方法を取ることは。」

「……銃の竜って、そんなに強いのか?」

「私は思わずそう聞いて。」

「強いが、弱いかじゃないよ。いくらでも強くなりうるのが問題なんだ」

「ジュゲツキは七色の光と共に答えた。」

「私は、このゲームを守りたい」

「……そっか。」

何かを守るということは、何かに縛られるということでもある。王国騒乱にしたってそうだ。どちらかの陣営につくことを決めた瞬間、リスポーン地点を特定の場合に縛られる。しかし……守ることは自由の喪失ではないはずだ。縛られればできないことがあるように、縛られなければできないこともきつと存在する。ジュゲツキはマッドサイエンティストで、マッドサイエンティストである限り、このゲームに縛られてもいる。

私もだいたい同じだろう。それなら、言うことは一つだ。

「……頑張ってね」

「うんっ」

ジュゲツキの手中に納まった小さな虹が、何の意味もないうねりを描いていた。

蒼穹に沈もう！

放り出された感覚がある。

それは実際のところ真実だ。ニコロはブースターを目いっぱい吹かし、コンキスタ・ドール 征服人形の飛行ユニットで上昇可能なギリギリの高度まで、両腕に抱きかかえた私と共に上昇して見せて……そして、放り出した。

「応援……がんばれ 契約者の健闘を祈る」

声上がる。チェストリアへと収納される直前に、ニコロが私に投げかけた激励だ。その極めて自然に合成された音素たちは、群青色の空の中で霧散し、辺りの空間に溶け出していく。私といえば……もちろん、彼女の言うとおりに健闘するつもりだ。

私は返事をせず、むすびのころも 【颯衣】の発動でもってそれに応える。浮遊感。むすびのころも 【颯衣】は布状のものを広げることで落下速度を軽減する忍術だ。両手に掴んだ手拭いが私の頭上で勢よくはためき、雲を貫いて降り注いでくる日光を遮る。その隙間から垣間見える雄大な白雲たちが、空の一角を埋め尽くしている。

……さてと、予想通りまだまだ足りないね。

「【空蟬】！」

叫ぶ。忍術が発動する。丸太が落下していく。視界が切り替わる。雲が少し近づく。
 「瞬間転移」！」

叫ぶ。魔法が発動する。エフェクトが発生する。視界が切り替わる。雲が少し近づく。

リキャストの回転率的に……よし、このままのペースならいける！雲の上に立てる……！

「空蟬」！」

叫ぶ。忍術が発動する。丸太が落下していく。視界が切り替わる。雲が少し近づく。後は繰り返しだけだ。気流がうるさいけど、その程度で私は止まらない。そう、すべては……

「かわいいモンスターのため……！」

私は決意を言葉にしながら、再びの「瞬間転移」を繰り出した。

……

……

……

「肝心なことを忘れていたのです」

コウガイガー氏は神妙な顔つきで言った。

というところ？

彼女の奢りで注文した薄味のカフェオレを啜りながら、適当に相槌を打っておく。

「はい。王国騒乱中はワールドストーリーが進みませんから、発生するイベントも極端に予測不能なそれではないはずですよ。ですから……我々【テラホーリー威聖開拓】としては、できる限りそれを予想しておいて、不慮の事態を避けるようにしたい」

なるほど？

私のストローがずずと音を上げる。

「しかし」

しかし。

コウガイガー氏の顔つきがさらに神妙になった。

「肝心なことを忘れていたのです」

肝心なことを。

空のグラスに残された氷をなんとなくストローでかき混ぜながら、その肝心なこととは何なのか推測してみる。んー、水分補給とか？VRゲームでプランニングするとき飲食休憩を忘れるのありがちだし、案外いい線行ってるかもしれない。

「その肝心なこととは、すなわち」

すなわち。

……割と引つ張りますね。

「夜襲のリュカオーンです」

……へえ？

「リュカオーンって……ユニークモンスターのあいつだよね？」

「はい、あいつです。……夜襲のリュカオーン、厳密にはその影ですが。……あの狼は夜間に徘徊する。人類の戦争もワールドストーリーも関係なしに、旧大陸の各所に出現するのです」

「……つまり」

「はい。……問題は、巡礼中にリュカオーンと出くわす可能性があることです」

……神経質になりすぎでは？

それが第一の印象だった。

巡礼は王国騒乱の五日間。リュカオーンが出現するのは、その短い期間でもさらに夜間のみだ。そりやことによつては「偶然」を引く可能性もあるけど、流石に考えすぎじゃないかと思う。

しかしコウガイガー氏の意見は違うようだ。

「そんな確率はごくごくわずかだし、切り捨ててしまつて構わないだろう——リトライという考え方もあるでしょう。しかし、このゲームにはコンティニュー続はあつても進行はない」

力強い声色で続ける。

「王国騒乱というチャンスは一度しかない——極力、事前に予想できる障害は除去しておきたいのです」

「なるほど。ちなみに何敗?」

「二敗です」

二敗じゃ仕方ないね。

私は納得した。

「……それで、どうやってリュカオーンとの遭遇を避けるの?」

「はい。【SF—Z○○】が出現パターンの情報を持っているはずなので、彼らと交渉して手に入れます」

へえ、あれって解析できるものなんだ。

【SF—Z○○】……スクシヨガチ勢のクランだ。かわいいモンスターからかっこいいモンスターから吐き気を催すモンスターから、とにかく『動物』と分類できるものを片っ端からパシャパシャやっていく。あれの内部ってどうなってるんだろう? 正直重度のケモナーと軽度のケモナーとただの動物好きが共存できるとは思えない気がするんだけど。……まあそれは置いておいて、『動物』に特化したクランが『狼』であるところのリュカオーンの情報を持っているというのは、まあ納得はできる。

しかし。

「……交渉って言うけど、材料はどうするの？」

【SF—Zoo】は……トツプ克蘭だ。コウガイガーの持つてるコネがどんなものか知らないけど、【威聖開拓】テフホーリーはミニ克蘭だ。そこまで顔が広いとは思えない。となると……単に「リユカオンの出現パターンください！」と迫ったとして、繋がりも何もない一般プレイヤーが機密情報を聞きに来てるといふ構図になる。向こうからしたら関わりたくないだろう。ぶつちやけた話、私たちはこのゲームにおける群衆モブでしかないのだ。

「いえ、そこは大丈夫です」

しかしそこは大丈夫らしい。

「策があります」

策が。

コウガイガーはカツと目を見開き、言った。

「かわいいモンスターのスクシヨを渡せばいい」

……

……

……

そうそう、そういうわけかわいいモンスターの写真を撮ることになったけど、でも実際大体のモンスターの写真は先SF120.0そのもの駆者がいますよね？つて話になって。じゃあ誰も見たことがないモンスターを探そう！ということになって。そこで思い出すじゃん？乱数転移したときに上空にいた、あのヤバそうなヤツ。で、ついつい「心当たりあるよ！」つてうっかり言っちゃったんだよね。そのせいで、なんかいつの間にか私が上空まで行つて撮影してくることになった。なんで？みたいな。まあやるけど。報酬として提示されたMPリジエネアクセ、かなり良い感じだったし。

「次で最後おおおっ！」

さて、頭上の雲もかなり近づいてきた。「瞬間転移」アポートは視線が通らないと使えないから、雲を突き抜ける形での転移は「空蟬」でやるのがベターだ。というわけで、最後の忍術を印なしで発動する。

「空蟬」いっ！」

視界が切り替わり、雲が消失する。高所特有の、単純な青空とも言えないような不思議な見え方の天球が私を包む。よし、雲を突き抜けた！

「出たぞ〜っ！」

やったね！とりあえず手拭いを仕舞いつつ印を組んで「水滑り」発動、コストMPをリジエネで相殺し、雲の上に立って辺りを見回す。しかし何もなかった。

……あれえ？

辺りを見渡す。ジャンプしてみたりする。やはりそこには何もなく、誰もおらず、ただ雲々が悠々と漂っているのみだ。

……ジユゲツキは確かに言っていた。ヤバそうなヤツ……レビンカムイは、ベヒーモスの文献に載っている存在だと。【黒潮】を作るのに使った卵を考えても、『レビンカムイ』とは種族名であると考えるのが妥当だ。新大陸の空にしか出ないとか？あるいは……。

「……雷」

いや、高度かな？両方という可能性もある。

まあ可能性はいろいろ考えられるけど、とりあえず実際のところこの雲の上には何もいない。ただ直立する私の影が、綿のような氷晶の塊にへばりついているのみだ。

……どうしよう？

私は途方に暮れた。

理屈はさておき確かなのは、モンスターを探しにここまで来たのに、モンスターがどこにもいないということだ。ダメじゃん。ダメだった。

……どうしよう？

どうしようもない。リジエネの影響もあり、以前のように【水滑り】の燃料切れで雲

から落ちることもない。私はただ、延々とここで途方に暮れているしか……。

『おんぎょうじゅつ隠業術会得』

早いよ〜。

「ぎやあああああああつ〜！」

視界の隅でMPゲージが急速に減少していき、私のアバターが落下していく。クッ
【空蟬】の印なし発動がすぐになつた時点で分かつてはいたけどさア
すぎるでしょ!!!
!!!!!!
!!!!!!

『刃隠心得奥義!「水滑り」が変化しました：刃隠心得奥裏【潮躲し】』

筆で殴り書きしたような荒々しいフォントがそう告げる。正直カッコいいと思った。

カッコいいと思いつながら、私は落下死した。



「というわけで、無事に「SF—ZOO」から情報を得ることに成功しました」

コウガイガー氏は珍しく嬉しげに言った。

雲の上の生物を全く撮影できなくて終わりかと思つたんだけど、考えてみると必要なのは「誰も見たことがないモンスター」でしかない……それなら心当たりはいろいろある。具体的に言うとな戦災孤児。ウオールフエン

「で、結果はどんな感じだったの?」

「はい。読み上げます」

コウガイガー氏が手元に握った紙を広げる。

「記載された日の20時から26時にかけて出現する可能性が大きい。15日、出現なし。16日、神話の大森林。17日、無果落耀の古城骸。18日、出現なし。19日、栄古斎衰の死火口湖」

「つまり……?」

「全部通りません」

「はい」

「はい」

「こうして、今日も夜がやってくるのだ。」

船を作ろう！

夜風が闇を透かす。

ファイティシア、裏路地。建造物たちに阻まれたその空間には月光すらも手を差し伸べず、静かに佇む二つの影も、周囲の闇とほとんど同化してしまっている。このゲームのプレイヤーに暗視能力がなければ、両者が認識し合うことすらできはしないだろう。がさごそと。紙切れが擦れ合う音が小さく響く。それは何とも滑稽な光景だ。この世界はゲームだ。魔法もある。システムメニューにはご丁寧にも『メモ』機能が搭載されている。それなのに——電子が描き出す世界にあつてなお、人々は現実と同じような、『紙』という表現媒体を使用し続けているのだ。

「……これが、約束の情報です」
囁き。

聳立した双つの壁はその小さな発話を、さらに小さく減衰させながら両者の間でピン・ボールのように反射させていき——瞬時のうちに、闇の中へと葬り去ってしまう。それは、保たれし秘密の象徴でもある。

囁きを発した影が、もう一つの影へと紙切れを渡す。ただ路傍につくられた水溜まり

一つだけが、その光景を観測する権利を得ている。

「へえ」

焰。

そう、焰だ。つい先ほどまで視覚的な静寂を貫き続けていた巨闇が、小さな灯火一つによつて切り開かれ、そこにあるものを少しだけ暴いていく。受け渡された報告書の文面も、すぐ付近に光源があつては、その内容を人間が読める範囲まで明確にすることを避けられない。

相次いで。書面を読み上げる声が、唯一の音声として路地裏を駆ける。

「……プレイヤーを砲弾がわりにして敵船へと射出……特定範囲にロープウェイを敷いておく……Uボートごっこ……なるほど、こういう感じか。ありがと」

「はい」

その読み上げは確認を兼ねている。この報告書は極秘だ、誰かに知られては優位性が失われる——だからこそ、自身の記憶というストレージに刻み込んでおいて、そのうえで。

灯火が、揺れる。その先端は報告書の隅へと近づいて……燃え移る。焰が一気に拡大していき、つい先ほどまで報告書だったものを、炭化した紙の残骸へと転じていく。あつという間に燃え広がった炎はいよいよ紙の上端まで到達し——その閃光でもつ

て、闇の中に影たちの顔を浮かび上がらせる。

そのうち一つが、策謀に綻んだ。

そう、私である。



というわけで!

「ツチノコ杯の参加者情報を入手したぞ〜!」

「イエーイ!」

「イエーイ!」

私はペンペンとハイタッチした。

ダイナマイトには情報屋の側面がある。テロリスト。爆弾製造業者。晒しスレ民。そういう属性は本質的に、晒しスレにしながらテロをできるだけの面の皮の厚さ、テロを行えるだけの爆弾を製造できる行動力、本職である爆弾製造のついでとして晒し活動も行える情報網を表している。面の皮の厚さ、行動力、情報網。情報屋にはピツタリの素質だ。

対価として手渡したニコロとのツーショットがその後どうなったかはまあまあ気になるところだけど、もうすぐ関係なくなる。なぜなら、ツチノコ杯で新大陸に行けるから。行くか行かないかではなく、行ける。そういう確信がある。無事にゴールできれ

ば言わずもがなだし、仮に失敗したとしても、ツチノコ杯の終了後に勝者の船が一般向けに解放されるだろう。乗れないわけがないのだ。これはフラグとかじゃない。私の旧大陸での日々は、もうすぐ終わる。

だから……船を作る行為は、その終わりを少しでも早めるためのものでしかない。別にやらなくても、そのうち乗れるチャンスが来るはずだ。しかしやる。伸ばせる分の手は伸ばしておきたいからだ。

というわけで！

「作戦会議だー！」

「イエーイ！」

「イエーイ！」

私はペンペンとハイタッチした。ついでに展開したニコロとも、もう片方の手でハイタッチをする。なんとなくテンションが上がっている自覚があった。

「で……どうする？」

ペンペンがホワイトボードを取り出しながら言った。

「そうだね」

私はメーカーのキャップを外しながら応じた。

「補佐：意見者は挙手せよ」
案のある人は手を挙げて

ニコロがレーザーポインターをホワイトボードに向けた。

適当に選んで借りたファイフティシアの倉庫にて、ファンタジーMMO世界観破壊コンボが完成する。

「はいー!」

「指名：開拓者ペンペン」
どうぞ

「まず、俺たちと他の奴らだと目的が違う、つてのを確認しておきたいぜ」

……一理ある。

私はニコロにマーカーを手渡し、手元に残ったキャップを弄びながら思った。

ツチノコ杯に参加するプレイヤーのほとんどはガチガチの生産職だ。彼らがツチノコ杯に参加する主な理由は「楽しさ」「ロマン」「賞品が欲しい」辺りだ。しかし……私たちは違う。あくまでも旧大陸に取り残された状況を打破するために海に出る。「楽しさ」はあつた方が良いけど無くてもいいし、「ロマン」を得る段階はもっと先だ。賞品は、ブラックリスト入り いらぬ。錬金術師に再就職できれば話は変わってくるけど、未だに逆顔パス状態は続きっぱなしだ。

「となる」と

案のある人は手を挙げて
「意見者は挙手せよ」

「はいー!」

「指名：契約者」
どうぞ マスター

「となると……どうしよう？ 防御を優先して速度を捨てるのか？」

「はい！ いや、ライバルの情報を見た感じどいつもこいつも速度優先か攻撃優先だ。少しばかり防御に振る分には良いだろうが、振りすぎると置いてかれる」

「はい！……置いてかれても別に良くない？」

「はい！ でも正直海にいるのがアドバンテージだけとは思えなくね？」

確かに。アドバンテージみたいなモンスターが他にいるとするなら、集団で渡航した方が安全なのは間違いない。

ニコロのハンドユニットが目にも止まらぬ速度でマーカーを動かす音が、私たちの思索の背後で流れていく。

んく……よし。

「はい！」

「指名……」
どうぞ

「寄生でいこう」

私は提案した。

ツチノコ杯の本質はコンペディションに近い。上位に入った船を「採用」し、そのまま大陸間の輸送に使うコンペディションだ。であれば……もしも、他の船への妨害に特

化した船が存在したらどうなるだろう？それが妨害によって上位に入賞したとして、大陸間輸送のための絶対的な性能が足りないはずだ。「採用」には至らず、賞品も貰えないだろう。しかし私たちの場合、賞品を貰う必要はない。

「貸して」

「御意……」

私はニコロからマーカーを受け取ると、既に文字で埋め尽くされつつあるホワイトボードにどうにか余白を見つけ、図を描き込んでいく。

まず……標的は、ある程度防御に振っている船だ。防御に振っているというのは攻撃に強いということで、攻撃に強いことが分かっている船に攻撃しようとする奴はそういうじゃない。そのおこぼれを狙う。ごくごく小型の……潜水艇みたいな船を作る。防御に振っている船の底まで潜り込んだ後、吸盤なり磁力なり溶接なり、何かしらの手段で貼りつく。あとは船が新大陸に到達するのを待てばいい。貼りつかれる側は防御に振っていて、それは船体が重めということでもある。小さな潜水艇なら気付けないだろう——そもそも、気付いたとしてどうするのか。防御に振っている以上攻撃はそうそうできなない。「プレイヤーを砲弾替わり」とか「鋸をブツ刺す」とか「爆弾を投げ込む」とか、ライバルたちが検討しているどの攻撃方法も……自分の真下に存在する敵には、無力というほかにない。

「……なるほどな」

ペンペンが言う。挙手は無かったが、ニコロはそれを咎めなかった。単に飽きたのか、それとも邪魔するべきではないと考えたのかはわからない。

彼は続けた。

「クグリン。お前は要するにこう言いたいんだろ——船単位の密航をしよう、つて」

そういうことになるね。

ペンペンは、ニヤリと笑った。私も少し遅れてそれに続いた。

さあ、船を作っていこう。

獣よ、龍よ！ 其の一

12月15日、朝。

本日午後6時に王国騒乱の開始が迫る中、私はといえば……ファイフテイシアにセーブポイントを設定し、ベヒーモスまでやってきていた。

ベヒーモスをクリアしておくことにしたのだ。

新大陸に行くことは長年の夢だけど、問題が一つだけある。旧大陸に戻れなくなることだ。ディープスローター氏に会えるなら話は別だけど、基本的に大陸間移動は船で行われる。ゲーム内で七日間航海させるだけでもかなりアレなのに、帰るのにもやつぱり七日かかるというのはどうかしているとしたか思えない。実際、このゲームは明らかにどうかしていた。

まあ、なにはともあれ。……旧大陸に戻れないと言っても、例外となる方法が一つある。それが、ベヒーモスをクリアすると手に入る(とwikiに書いてあった)、BW—ビーコンを使用する方法だ。

BW—ビーコン。BWが何を意味するかは諸説あり、バハムート・ワープ説やベヒーモス・ウェブ説やブラック・ワタアメ説などが日々のぎを削っている。品揃えが微妙

で評判の「ベヒーモス・オンライン・ショッピング」、考察勢必携と話題の「ポータビブリオ携帯図書館」など各種の便利サービスを受けることもできるが、何よりの機能的な目玉は……ワープだ。B W―ビーコンを使えば、いつでもどこでもベヒーモスまでファストトラベルできる。

と、いうわけで。



第六階層。

「挑戦しま〜す〜」

自分の順番が回ってきたことを確認した私は、白衣の天井向けた挙手とともにそう宣言した。早速やっていこう。

第六階層はインベントリの中にある情報質量が10万マギバイトを超えればクリアの層だ。マギバイトって何？まあいいや。

今までの私はここでいったん攻略を止めていた。買い物ができるからだ。ベヒーモスに潜る理由はそれまで「神代製装備が欲しい」でしかなく、第六階層の買い物エリアを使えばとりあえずの理由は満たされる。あくまでもそれで十分だっただけで、別に「詰んでいた」とかそういうわけではない。チェストリアも持つてるし、多分10万くらいならなんとかなるでしょ！

中心部に設置されたザ・SFという感じの台座に歩み寄り、両足を乗せる。なんだかよくわからない光が発生し始める。さあ……どうなるかな!?

透き通るような「象牙」の声が、私に結果を伝えてくる。

『99, 932 マギバイト。不合格です』

不合格だった。

……マジですか？

私はサツと振り返る。そこには無数のプレイヤーたちが、ついさつきまで私の並んでいた列を作っていて……「さつきと代われ」と言わんばかりの、恨みがましい視線を投げつけてきている。

……え、並びなおさないといけない感じなの？

「あの、68くらいは負けてもらえませんかね？」

私は天に向けて抗議した。

『残念ながら開拓者クグリン、あなたの申請は却下されました』

却下された。

で、でもオッ。

列をなす人々の視線がさらに厳しくなる。まあ気持ちはわかる、列に並ぶというのはゲームを遊ぶうえでも最も辛い行為の一つだ。作業は作業でも採掘とかレベル上げと

かと違ってあんまり身になっていない感じがしないし、そもそもなんでゲームがしたいのに現実でもできる列並びなんてやってるんだという話になってくる。しかし私を睨まれても仕方ない。このゲームの運営が第六階層に台座を一つしか設置しなかったのがそもそもの問題なのだ。

私はそこまで考えて閃いた。

「ニコロ」

「展開：」

「あのなんか変形する武器貸して」

「貸与：」

「戻って」

「格納：」

で、この武器をチェストリアに入れると。

『106, 191 マギバイト。合格です』

「やったあ！」

予想通り、征服人形のインベントリの中にあるアイテムは別扱いだったみたいだ。いや仕様としてややこしすぎるでしょ！

私は若干の憤りを覚えつつ、階層を進んだ。

◆
第七階層。

◆
内容としてはクイズだ。つまりカンニングできる。クリアした。

◆
第八階層。

後付けで覚えられる「流派」スキルを習得したうえで、既存のスキルを使わずにデコイロボを倒すとクリアになる層だ。私も「象牙」の指示に従い、フラツシユメモリーとやらを使ってスキルを覚え……ようとした。

しかし。

適当なフラツシユメモリーを見繕って記憶用装置に赴いたところ、謎の抗争に遭遇した。

「お前スキルいくつ覚えた!？」

「俺32だわ!」

「すつくな!俺は44だぜ!」

「ヤバ〜!すげーなお前!」

「オイオイ——その程度でイキってるのか?」

「なんだテメー!?!アンタは何個覚えてんだよ!」

「……25」

「ギャハハ〜！アンタが一番少ねエ〜じゃねエか！」

「やツちまおうぜコイツ！」

「——流派だ」

「なんだと？」

「2.5流派だ」

「に、にじゅうごツ?!」

「りゆうはア!?!」

いやいつまで続くんですかね？

まあ、なんとなくいそうだとは思っていた。この階層で覚えられる「流派」の数には上限が存在しない。もしくは、存在しないと誤認するほどに余裕があるところに設定されている。覚えすぎると結構デメリットがデカいみたいだけど、好きだけデメリットを飲めるのはゲームのいい所の一つだ。そうなれば……残るものは決まってる。習得スキル数によるマウント合戦だ。

よくわからない争いをしている三人組を、順番待ちをするプレイヤーたちが一人また一人と取り囲んでいく。彼らの怒りが爆発するのは……そう遠くなさそうだけど、近いというわけでもないだろう。しばらくは記憶用装置は使えないと見るべきだ。

……じゃあもう覚えなくて良くない？

そういうことになった。



というわけでやっていくぞーっ！

未だに続いているマウント合戦を尻目に、私は戦闘領域コロシヤムの戦闘用人形と対峙する。

この階層で縛られるのはあくまでスキル……と見せかけて、どうやら魔法の詠唱なんかも阻害されるらしい。魔剣なんかの類は普通に使えるようなので、魔法が明確に「発動」されるのがダメということだろう。つまり、詠唱しなければいい。

「刃隠心得奥義！」

戦闘用人形が何やら挙動を始める。しかし無駄だ。攻撃するには間に合わないし、回避するには遅すぎる！両手を組み合わせ、魔法のための印を描き出す！

「【竜威吹】！死ねええええええええっ！」

【竜威吹】は発動者が叫んでいる間持続する。逆に言うと叫んでさえいれば内容はどうでもいいので、死ねでも通るし殺すぞでも通る。くたばれでもいいける。何にせよ間違いない罵声だ。罵声の乗った灼熱の線条が、球体関節のマネキンを飲み込む。ついでに【不知火蕾シラヌイツボミ】も追加ーっ！流派とかどうでもいいから先に行かせろーっ！

人形が——朽ちていく。

「でさア、やつぱ筆記具^{マルケル・リボルバー}回転戦闘術は外せないと思うワケよ」

「でも実際どうよ？ 無難にエクサク・ロバッターツとかでいいんじゃないか」

マウント合戦から流派談議に発展した抗争を横に第八階層をクリア！ さあ次で最後だ、とつとと終わらせよう！



第九階層。

ヤバイ。

「……はあ、はあ」

六回目のゲームオーバー画面から復帰した私は、九層も進んでいるのに一貫して無機質なままの床の上で息をついた。理由は簡単、敵が強すぎる。

第九階層は……言うなれば、ベヒーモスにおけるラスボス戦だ。第三階層のように魑魅魍魎が跋扈しているステージで、一時間以内に一番強い奴を倒せばいい。一番強い奴はこのゲームに存在するユニークモンスターの能力をミックスした奴だ。そこまでは攻略wikiに書いてある。

問題は、定期的に出てくるモンスターが変化することだ。攻略方法を確立させることが難しいうえ、私のように何回も乙らなければ、そもそもどいつが一番強いのか見極められない。

それでは、見極めた結果は何か。船内用端末で確認してみよう。夜襲のリユカオーンと天覇のジークブルムをミックスしたモンスター、非合砲メア・リリース。形状としては巨大なスライム、自身の肉体の一部を分離して発射してきて、着弾した相手の部位を溶かして吸収する。発射された肉体はゼリー状になって地面に浸透し……上に載った存在は、魔法やスキルをできなくなる。

それはすなわちこういうことだ。部位に対して攻撃してくるから、回復アイテムでの手当てができない。時間が進むにつれどんどん逃げ場がなくなっていく、「空蟬」でとれないあえず逃げるといったことができない。体が液状だから、破壊属性の効き目が薄い。私の、天敵ということだ。

しかも。

私はシステムメニューを操作した。指の動きは完全に手に染みついていて、焦りも相まって操作は高速で進む。……王国騒乱中、長距離の死に戻りや転移魔法は制限されるだろうと言われている。当然の話だ。それが可能なら、例えば新王陣営のプレイヤーが開幕と同時にBWビーコンでファイフテイシアに転移して、そのまま反転してサードレマを背後から殴る……といったことが可能になってしまふ。つまり、私は六時までにはヒーモスをクリアして、ファイフテイシアに帰らなければならない。

しかし。

展開したウィンドウが示す時計は、決して動きを止めることなく、常にその数字を変化させ続けている。止まってくれたら———それどころか、巻き戻ってくれたらどんなにいいだろう。私は考えるが、実現することはない。開拓者は常に前進しなければならず、私には背後からそれを見守るニコロだっている。それらの事実を総括するように、時計が今、分数を1つ増やした。

現在……12月15日、午後4時48分。

タイムリミットまで、あと1時間12分だ。

獣よ、龍よ！ 其の二

作戦は立ててある。足りないものがあるとすれば覚悟だ。しかし、もうすぐ新大陸に行けるといふところで、できない覚悟なんてあるだろうか？

◆ 残り59分59秒。

七回目の挑戦が開始すると同時に、展開したウインドウは私にそう告げた。周囲に広がる人工感あふれる自然環境を見渡しながら、私は脚を動かし始めた。

第九層に出現するモンスターは、挑戦者のレベルに応じてその体力を調節されている。初手で殴れば勝てない相手ではないはずだ。だから、ひとまず相手を捜す。

「【空蟬】っ」

【空蟬】は熟練度を上げること印なしで発動できるようになる。それは単に便利というだけの話ではない、印なしということは同時に別の印を組めるということだ。忍術を同時に二つ発動することが可能になる。

脚部に纏った【潮躲し】のエフェクトを散らしながら、点々と存在する水溜まりを踏みしめ、跳ぶ。それを繰り返す。MPゲージがガンガン減っていくから、こまめに発動

を切る必要がある。

移り変わっていく景色を前に眼球をぐるぐると動かし、視線で疑似森林を切り開く。さあどこだあのクソスライムーっ！

「いたー！」

いや間違い、やっぱいいなかった。スライムかと思つたらミサイルを撃つてくる。コウモリだった。

「qqq u a a a a A A A A A」

コウモリが湾曲した翼を変形させ、現れた砲口からそのまま数発の爆芯を放つてくる。衝撃音、【空蟬】で回避。

「邪魔アー！」

【潮躲し】は水中に足場を生成するスキル、足場の方向はある程度自由が利く。回避先の水溜まりにほとんど壁みたいな足場を生成し、蹴り飛ばして水平方向のベクトルを得る。着弾の嵐の間をすり抜ける、ミサイルが描く煙を悉く躲す！六回も挑戦したんだ、こいつの弱点も大体わかつてる！

「鎖縛帷子」

鎖が、コウモリの体軀の表面を這う。

端末で調べたところによれば、コウモリの能力の本質は音だという。自分の発する超

音波を全身の振動により増幅し、音を経由した魔力操作を行ってミサイルを作り出す。つまり、振動できなくなればどうってことない。

「p……QQQQ………」

「ごめんね、急いでるから」

翼に攻撃して部位破壊、続けざまに【追^{ツイ}鼠^{ソノ}火花^{ヒバナ}】起動。コウモリ……ではなく、その周辺に生い茂る木々に放火してそのまま去る。とどめは刺さないけど、身動きが取れない状態で炎に包まれたなら数十分後には焼け死ぬはずだ。数十分。そのタイムラグが重要になる。

「次いーっ！」

基本的にはメア・リリースをダイレクトに探すことになるけど、こういう雑魚も数体は倒しておいた方がよい……そういう作戦だからだ。MPの管理に意識を削ぎつつも、私は再現された森林の中をさらに駆けた。

◆
いた。

「PYuaaaaaaa………」

結構な数の雑魚を「数十分後に死ぬ」状態にすることを経て、ようやくメア・リリースのもとに到着した。残り時間は20分、少なすぎるようにも見えるけど……大丈夫だ、

作戦通りに進んでいる。

黒き粘液はその巨体をうねらせ、かきませ、うごめいて——ばしゅん、ばしゅんと。早速といわんばかりに、分裂及び発射を行ってくる。見た目はどう見ても禍々しい黒いゼリーのくせして、攻撃を行うときは黄金のエフェクトを纏ってるものだから違和感がすごい。ジークヴルム要素ってことなのかな？

……さて、こいつの行動パターンは単純だ。ただ、私と相性が悪い上に異様にタフなだけで。そういうわけで射出された粘液も、ごく単純な放物線を描く。

「よっ」

私はサイドステップを踏みながら、ラエルカンから奪^貰った例の銃を取り出す。残念ながら弾丸を曲げるやつは彼自身の魔法か何かだったみたいだけど、火力源としては十分だろう。

「食らえ！」

引き金を引く。

……ベヒーモス九層における本来の醍醐味は「謎解き」だ。これまで挑戦してきた階層で得た情報をもとに、「どうやって攻略すればいいか」という“謎”を解く。しかし現在はwikiが浸透していて、みんな「初手で一番強そうなヤツを殴ればいい」ということがわかってしまっている。しかし……運営がそれを想定しないはずがない。1時

間の制限はある種の挑戦なのだ。このゲームには搦め手が無数に存在して、ちよつと体力が多いとかその程度のボスなら、工夫すれば数分で倒すことができる。そこに設定されるのが1時間という数字だ。ネタバレがあろうと搦め手があろうと、まず1時間近くかかるのだ——と、運営はこの階層を通してそう主張したがっている。私たちに挑戦している。こいつには、正攻法しか効かない。

そういうわけで放たれた弾丸正攻法たちは、魔力弾特有の紫色のパーティクルを発しながら突き進む。メア・リースに着弾、ばちばちと黄金色の電撃が空間を迸る——六層に売っていた蓄電弾チャージだ。効いてるかな？効いてなさそう。了解。属性攻撃に弱いというわけでもなく、本当に足場に注意しながら殴り続けるしかないらしい。

「P u N Y i i i i i i i i i i i i !!」

また分裂と発射だ。どろどろとした粘液が影を落としながら落下していき、その辺にいた小型の雑魚が、粘液を食らって呑み込まれる。なににも当たらなかつた粘液が、人工的に再現された土の上に降りかかり、踏んじやダメゾーンがさらに広がる。これが広がれば広がるほど……長く戦うほど、私は不利になる。前準備雑魚狩りに40分もかけたのは、戦闘をなるべく短期のものにするためだ。

「……………さあて」

呟き、過多リデックセッター技の羽衣を装備する。ここで死んでも装備品は保持されたままだから、ク

ソアプデに怯えて適当な店売り品を使うこともない。羽衣の纏う白が、地面を塗り替えつつある黒液とのコントラストを生む。私はチェーンソーを取り出した。……ジューゲツキからもらった造船予算リザルトが思ったより余ったので、色々と装備を用意できる。あとはまあ……ジューゲツキが使ってるのを見て、ちよつといいなつて思ったのもある。

「竜魂解禁、【セパレーション】」

呟く。それは願掛けのようなものだ。どれだけ回転を始めるチェーンソーが破壊属性のエフェクトを帯びようが、スライムに破壊する部位なんてない。だからどちらかといえれば——これは、自分を追い込むためのものだ。ミスったら腕が千切れると、自覚するための。

ちようどいいところに粘液が飛んでくる。私はチェーンソーを振るって、飛来するそれを二つに両断する。普通に考えて両断できるはずがない。ベヒーモスのモンスタースタイルはそんなにヌルい調整じゃない。挑戦者のレベルに見合ったものが登場する。逆に言う。

「……そろそろかな」

言い終わると同時に、ファンファーレが聞こえる。私にしか聞こえない、脳に直接送り込まれたファンファーレだ。それらが——いくつも、同時に発生する。展開したウインドウを突き破る勢いで走り出す。

『LEVEL UP』

『60↓75↓84↓91↓93↓95↓98↓100↓101↓104』

ベヒーモスには、挑戦者のレベルに見合ったものが登場する。……逆に言うと、^{イビル・フォース}魔魂丸薬などでレベルを下げた状態で挑み、挑戦中にレベルを上げれば……何も問題はないことになる！

「差し引きマイナス16ね！」

思ったより下げないで済んだね！いや110くらいまではスムーズに上がるしこなもんかな！

突進する。レベル60を想定して調整されたモンスターに、レベル104のAGIでだ。そしてレベル104のSTRと、レベル104を3倍にしたDEXでもって……絶え間なく回転し続けるチェーンソーを、思いつき振りかざす。

「おりゃああああっ！」

ベヒーモスなんてとつとつとクリアしちやおう！私はこんなところにいる場合じゃないんだーっ！

粘液が、斬撃を前に飛び散った。

獣よ、龍よ！ 其の三

躍動、躍動、躍動。殺到する黒塊を躲しながら、私はAZZのスコップを覗き、セミオートでの発射を繰り返す。どこかで距離を詰めたところだけど……はい今！【空蟬】！背後に発生した丸太がハチの巣にされる音を聞きながら装備変更、展開したチエーンソーの唸り声を、そのままメア・リースの体にぶち込む。

「PUNYaeEeEIIII！」

時間足りるかなこれ？かなり削れてるのは間違いないんだけど。UIの隅に目をやって時間確認、残り1分30秒、王国騒乱開始まではだいたい7分つてところか。よし、そろそろだね。

「ラストスパートいくよっ！」

叫びきる前に、私の声質が変化する。シンダー・ヘッド燃ゆる貌を装備したことによって、なんだか体に悪そうなエフェクトを帯びた結果だ。レベルダウンした時にステータスポイントの振り方を「予約」しておいた。具体的には、DEXとTECとSTRとLUCを減らし、

STMとAGIと――

「HPを増やした！」

今の私は最大HP90、燃ゆるシンダー・ヘッド貌の10秒ごとに10上限を削る効果にちょうど1分30秒耐える！……まあ、上限が1になってもそれ以上減らなくなるだけなんだけど。

「とにかくウーツ！」

リキヤストは既に終わっている！

【瞬間転移^{アポート}】、メア・リースの後ろに回り込む。いや、後ろという概念は存在しない。こいつは魔力検出器官をソナーのように使って存在を検知していると聞いた。つまり全方位が前なのだ。しかし……この場所は、メア・リースが集中していた反対側だ。地面があまり染められていない、ここなら地に足を付けて魔法を使える。

私は息を吸った。印を組んだ。レベルダウンによってアクセサリースロットが減ったから、手袋はいったん外してあつて……。片方の手の体温が、もう片方の手で感じられる。

さあ、本日二回目の。

【竜威吹】いいいいいっ！

蒼炎が旋風に混ざりこむ。辺りに広がる贗作の森が光波に照らされ、明るすぎるほどの緑を纏う。とつとと死ね、とつとと死ね。私はとにかくそう念じ続ける。焔に呑み込まれたメア・リースの姿は見えず……ただ、辺りに散らばった黒片たちが、金色を纏っ

た息吹を照らし出しているだけだ。

とつとと死ね、とつとと死ね。

そして、その通りになった。



『ああ、愛しき我が子達』

作り物の新緑たちをぼやかして、ホログラムとして出現した「象牙」が語る。どうやらイベントシーンらしい。いいから早くB Wービーコン渡せよ！オイ！オイ！しかし面と向かってそう言っただけにやるわけにもいかない。

『身一つで世界に投げ出されながらも……』

ま……まずい、長引きそうな予感だ。時間を確認、あと4分30秒くらいかあ。え、これ大丈夫かな？……とにかく、脳にイベントを処理するだけの容量が残っていない。録画して後で聞くことにしよう。

「ニコロ〜」

「展開：何の用？」

「録画して」

「了解：アナライズモードに移行する」

ニコロの双眸が薄蒼の煌めきを帯びるのが横からでもわかる、録画が開始された証拠

だ。よーしよしよし……とにかく、BWビーコンの取得までにできることをやろう。取得と同時に帰れるように【座標移動^{テレポルト}】のスクロールを用意、目の前にウィンドウが現れたらすぐ反応できるように指を準備しておく。さあ来い……！

『貴方達人類はかつて、万物の中で最も長じた存在として霊長の名を……』
け、結構行きますね。

私はそれとなく時計を展開し、確認した。えーつと……あと2分。大丈夫かこれ？いや、信じよう。きつと大丈夫だ。どうしても無理そうだったら仕方ない、いったん諦めて【座標移動^{テレポルト}】してしまおう。まあ、旧大陸に戻る手間が少し増えるだけだ。

『どうか人の可能性を見せてくださいね』

……おや、ここが会話の切れ目では？ここが会話の切れ目なんじゃないのお!? チラツと横目で時計を確認、あと1分！いけるいけるいける……！

『ブーケ・パズル：第十段階^{ランクテン}を取得しました』

はいはいはいはい！

『称号【象牙馳せ】を獲得しました』

よしよしよしよし！

『第十階層到達報酬として「新正規量産品BWビーコン」を獲得しました』

はい来たア！私はニコロに触れながら【座標移動^{テレポルト}】のスクロールを開いた。発

動ウーーツ！

『さて、開拓者クグリン。——そして、アイヴィⅡ256』

えっ？

【座標移動^{テレポルト}】が、発動しない。まだイベントが続いている？そんなバカな。wikiにはビーコンを受け取って終わりだと書いてあったはずだ。まさか……征服人形の専用イベント？

ちよ、ちよつと待つて。時計を見る。あと20秒。いやあの。

『アイヴィⅡ256の展開に伴い、未通達事項を連絡します』

15秒。ちよ、後にしてほしいんですけど。

『おめでとうございます、貴方はかつてこのベヒーモスを率いた男』

10秒。マズい。マズい。

『アンドリユー・ジッタードールのラボに立ち入る資格を得た』

5秒。これはダメだ。終わりようがない。転移魔法は使えない。じゃあどうする。

4秒。そうだ、【座標移動^{テレポルト}】はそもそも最後にセーブした地点に移動する魔法。なら。

3秒。死に戻りすればいい。そうだ、死に戻りすればいい！

2秒。私はニコロの首に手を触れてチェストリアへの収納を開始した。エフエクト

が舞い散る。

1秒。しかしそんなものに構ってられない。私はセパレーションの能力を発動した。首が、

0秒。胴体から離れて、視界が赤く染まって。

—1秒。ゲームオーバー画面……ちよつと待つて。

—2秒。今の、

—3秒。本当に間に合つてた……？



「はっ！」

私は起き上がった。どうやら路上にリスボンしたようで、石畳のごつごつとした感触を感じる。そうして……起き上がったのとちようど同時に、ここはファイティシアではなく、もつと言えばファスティアでもないと確信した。理由は……簡単だ。

——ずだだん、だだん。ずががががががが。

銃声が聞こえる。

それは……このゲームに瞬く間に広がった、人を殺すための、ほとんど無限に量産できる、兵器だ。いくらPKが横行しようとして、王国騒乱中はそいつらも戦争に行く。つまり、中立都市ならこんなことはあり得ない。ここは……紛れもない、戦場なのだ。

「……く、そ」

これは……まずいことになった。私はベッドから起き上がりながらマップを開いた。現在地点、サードレマ。旧王側陣営に参加した覚えは……いや、死に戻りが間に合わなかったとするとファイフティシアのセーブポイントは無効化されている。となれば代わりになりうるのは……初期スポン地点。王国騒乱中に限りサードレマとサーティードだ。だったら、近い方が選出されるのは無理からぬことだろう。

「どうする……？」

路傍で考える。わからない。今日が12月15日だけど、もう6時間で16日になる。それで、ツチノコ杯の開催が19日。3日しかない。私は……3日のうちに、戦争が起きている中、サードレマからファイフティシアまで移動しなければならぬ。

まずい、まずい。とにかく焦燥感が溢れてくる。私はひとまず、青空でも眺めて落ち着こうと思った。それで並び立つ建造物を飛び越すように、視線を斜め上へと向けて……気づいた。

「……あれは」

赤い、光条だ。熱を帯びていると思しきそれは、透き通るような青空に紅の線条を描き……頑健なはずの魔力障壁をいとも簡単に突き破つて、突き進んで、ああそうだ。そこで気づいた。銃声だけじゃないんだ。この街には轟音も鳴り響いている。

巨城が崩れていく。正体不明の光線に貫かれた、恐らく相当な要人が暮らしているで

あろう城が。発泡スチロールの細工のように、盛大に破壊され、宙を舞う。

——まずファイヴアルについてですが……街そのものより、その直前に存在する大赤翅が非常に厄介です。このゲームの運営のことですから、王国騒乱中にアレが起動する可能性がある。

いつかコウガイガーが発した言葉が、なぜだかくつきりと脳裏に瞬いて。悲鳴が、銃声が、歓声が聞こえて。

そして私は、この世界で戦争が始まったことをようやく理解した。

銃よ、竜よ！ われらが駆けるは戦場の道

銃よ、蝶よ！ 其の四

12月16日、朝。

せめてシクセンベルトくらいまでは行こうとしてあの後色々試行錯誤をしたけど、流石に戦争中、それも序盤の混乱期では厳しすぎる。そもそも、中立プレイヤーへの風当たりは強い——どちらの陣営にも味方しないということは、両方の陣営の敵であるということでもある。しかも、PKをしてもペナルティがないと来た。そのせいで……どちらに属するプレイヤーからも、道端に転がっている邪魔な石をどかすとかそれくらいで感覚で殺される。時に爆風に巻き込まれ、時に遺跡の頂上から芋砂され、時にドロップ狙いで背後から刺される。

ニコロに掴まって飛行ユニットで飛び越える案も考えたけど……危険すぎる。思考ルーチンをとんでもないレベルで作りこんでいるくせに、このゲームはNPCを簡単に殺してしまう。地上からニコロがスナイプされないという保証はない。

「……さて」

ずだだだだん。

ログインと同時に放った眩きを、次々と上がる銃声が掻き消していく。私はそれに構わずベッドから這い出て、カーテンを開けて埃を散らす。少しだけくすんだ窓ガラスが、外の光景を透かし出す。少し霞がかかったような処理を受け、遠くで……山が燃えている。例えば冬の山の頂上が積もった雪によって白くなったりすることがあるけど、あの雪を燃え滾る猛焰に置き換えるところちょうど今の状態になる。「燃え滾る猛焰、なお尋常じゃなく強力な熱線を発射してることがあるものとする」とすればより正確だ。

「やっぱ……あつちかなあ」

蛇腹に折られたカーテンの端っこを右手で弄びながら、眩く。

シクセンベルトルートはダメだった、フォスフォシエルートも同じような感じだろう。片方の陣営の本陣都市と直接繋がっている以上、奇襲するものもそれを迎撃するものもいるに決まっている。なんか電撃戦とかも始まつてるっぽいし、あそこを通るのはしばらく無理だ。……では、どこから進むのか。

「……ファイヴアルルート」

愚かな思い付きだというのはわかっている。他ならぬ燃え滾る猛焰そのもの、焔がる大赤翅。それが巢食う死火口湖を通ることが、ファイヴアルルートには不可欠だ。当然のことながら難易度は極めて高く、ほとんどのプレイヤーは避けようとするはずだ……

【^{テラホーリ}威聖開拓】の面々がそうしたように。

しかしそれは逆に言えば、戦争に巻き込まれる可能性が小さいということでもある。「……やるぞ」

呟いた。それは意思の確認だった。ふと窓の外を再確認すれば、蘇生された死火山と、その上に広がる青空を背景に、一羽のハヤブサが翼を広げていた。



昨日のうちに討伐隊が結成されて突撃して壊滅したらしく、現在は作戦会議を行っている最中だそうだ。そういうわけで栄古斉衰の死火山湖は無人だ。乾ききった土を踏みしめて、熱を帯びた空気に汗を垂らして。私は、その表面を登攀している。

……もはやどう考えても『湖』とは言えないし、エリア名を変えた方が良いんじゃないかなあ？

浮かべた疑問に答える者はいない。公式サイトのお問い合わせフォームに送れば「仕様です」くらいの答えは返ってくるかもしれないけど、それだけだ。このゲームの大気にはきつと、こういうプレイヤーたちが浮かべた微妙な疑問の数々が、山積し、漂っているのだろう。誰にも掬い上げられないままに、ただなんとなく「雰囲気」みたいなものを作って、ふわふわと浮かんでいるはずだ。

それを意にも介さずに。

私が土の地帯の終わりと冷え固まったマグマの地帯の始まりを結ぶ境界線を超えた

のと、ちやうど同時に。

「……いた」

私は前を……そして、背後の青空とのコントラストを生みながら陣取る、巨大にして強大たる炎熱の蝶を見据え、

「Vvvvvvvoooo!!」

焔がる大赤翅は翅を広げ、白熱を纏った無情の灼光を私に撃ち込んだ。

「いやちよっ」

えっこれ避けられるかな？しかし無理だった。というか避けられるかな？とか考え始めた段階で既に、もはや認識することすら不可能な速度で、熱の塊は私のアバターを貫いていた。ダメージエフェクトは飛び散らない。ただ熱さだけがそこにあった。その感覚の発生源たる腹部は、なんとというか、崩壊していった。

「げへっ」

私は内部から爆砕して死んだ。



なるほどヤバいじゃん。

実際、明らかにヤバかった。

私はのそつとセーブテントから這い出た。これで七回目、リスポーン上限は十回だか

ら、そろそろ次のテントを張った方が良いかもしれない。テントの影は一回目の時と比べれば長さを結構変えていて、時間の流れを私に突き付けてくる。

テントは大赤翅の直前、具体的に言うとなんと燃えずに済むギリギリのラインからちよつと退いたあたりに設置してある。とはいえ大赤翅と完全に断絶しているわけではなく、少し視線を動かせば炎熱がその燃え盛る体躯をくゆらせているのがわかるし、響き渡るような鳴き声を発し続けているのも伝わってくる。完全に活性化状態だ。

「え、いやどうしよ……?」

この七乙の間にやったことを挙げてみよう。

一乙め、なんか死んだ。

二乙め、なんか死んだ。

三乙め、【空蟬】で初手の光線を回避。しかし更に光線が飛んできて死んだ。

四乙め、【空蟬】と【瞬間転移^{ポト}】で岩陰に隠れたところ、一発目の光線は岩に当たって助かったけど、二発目で死んだ。

五乙め、光線が岩を貫通しなかったことから基本的に「単体攻撃」だと推測、チェストリアでその辺の岩を拾い集めてデコイ替わりに置きまくってみたところ、謎のホームィング全体攻撃技を出してきて死んだ。

六乙め、攻撃を避けるのは無理と悟る。【おぼろなほり朧隠】の擬態で突っ切ることを試みるも普

通に看破されて死んだ。

七乙め、逆に攻撃に転じてみる。多分水属性が効きそうだと考えて水魔法の使^{マジック}捨^{スック}て魔術媒体を取り出したらなんか燃え尽きたので、錬金術師時代に大量貯蓄しておいた水を適当にチェストリアから展開。するとなんか水蒸気爆発が起きて死んだ。

えーつと……ここから言えることとしては。

「……かなり厳しい、かな」

そういうことだ。

焔がる大赤翅は……こちらが取るどんなアクションに対しても「攻撃」で返答するレイドボスだ。防御すれば攻撃する。逃げれば攻撃する。隠れば攻撃する。攻撃すれば攻撃する。何もしなくても攻撃する。もはや焔がる大赤翅とは攻撃そのものであり、火焰で形作られたその巨体を見れば、『攻撃そのもの』という表現もあながち間違いではなさそうだった。

ビデオゲームにおけるお約束^{セオリー}に従うならば、攻撃には防御が有効だ。問題は、大赤翅が防御に対しても攻撃を選ぶことにある。盾を構えたところで盾ごと溶かされれば意味がないということだ。

「理不尽すぎでしょお……」

ボヤク。

とはいえ、ボヤいているだけというわけにもいかない。

……攻撃されたらどうすることもできないというなら、自然に考えれば「攻撃させない」手段を考える必要がある。でも……攻撃させない？ そんな方法ほんとはあるかなあ……。

私は、少し距離を置いた先の頂上で燃え盛っている大赤翅を眺めた。その外見が帯びる“危険”の気配は計り知れず、ニコロを出して何かしようという気にもなれなかった。私はなんとなく大赤翅に歩み寄ると、なんとなく水鉄砲を取り出して照準を合わせ、なんとなく引き金を引いた。ささやかな水流が空中に線条を描き、やっぱり水蒸気爆発が起きる。とはいえ結構距離があるから、発生した灼熱の空気が私の肉体を焼き切ることは無く、蒸発していく回復ポジションをゴリ押しで飲み込むことで何とか耐えられる。それはそれとしてヘイトを買ったらしく、私は爆発が晴れた後に飛んできたビームに貫かれて死んだ。

「……ん？」

もう八回目になるテントからの脱出を行いながら、私は首を傾げた。何か、違和感がある。

「そうだ」

思いついたかったかも。

銃よ、蝶よ！ 其の五

分析してみよう。

大赤翅は、水蒸気爆発による凄まじい衝撃波が晴れた後になつてから、私に熱線を打ち込んだ。なぜそうしたのだろう？ 私が放たれた熱波にあたふたしている間にジユツと焼いておけば、もつと迅速に殺すことができたはずだ。それなのに……あの嫌になるほどの炎を纏った紅蝶は、衝撃波が晴れるのを待つてから私を殺した。理由があるとなれば次の二つのうちどちらかだ。

一つ、思考ルーチンがそうなっている。大赤翅の行動パターンには「装置」的な側面がある……と、wikiに書いてあつた。曰く、植物系モンスターの原始的な行動パターンをなぞるようだ。であれば、こういう不合理な選択をしたり、あるいは不合理に見えて実は合理的な選択をすることもあるかもしれない。

そしてもう一つ、能力的な制約。つまり……例えば、水蒸気爆発を使っている間は、他の攻撃を行うことができないとか。

◆ 直感的には、二つ目な気がしている。

「とういわけでエーローツ！」

第九挑戦、水蒸気爆発をしている間に駆け抜けてみよう！

ベヒーモスでレベルを下げたことで6個まで減ったアクセサリースロットを少々調整、チエストリアに1枠、リジエネに3枠……そして、久しぶりの錬成品射出用自走竜砲アルケミック・ホイールド・モーターに2枠！錬金術師辞めたせいでそんなに使ってなかったけど、今回に限っては有効のはずだ！

ウインドウ展開、自走竜砲のスロットに水を詰め込む。過多技の羽衣を裏返し、真上から少し西寄りに傾いた太陽の光に、唯一義レテック・クステルの玄衣の漆黒を晒す。そして、前を見据える。

「くぐぐ」

そこには、燃え盛る翅に備わった眼のような器官で睨み返してくる、一羽の巨大な蝶がいる。

私は水鉄砲を取り出して撃ち込んだ。着弾まで少しだけ間がある、その間に眩いておく。

「刃隠心得奥義、【潮躲し】」

大赤翅が光ったような気がして、それはちゃんと検証していないけど、きつと攻撃モーシヨンだった。悲鳴のように聞こえる、実際のところ全く悲鳴ではない鳴き声が、

火口の中にひたすら響く。

「S v v v v v o a a a a a a a a a a r m m m m m m m m m m !!」

光は音よりも速いから、そしてその法則をシャンフロエンジンは再現しているから。三倍になったTECで手早く印を組む私の前で、放たれた衝撃波が猛烈な前進を見せるのもわかった。水蒸気爆発攻撃のダメージ源は二つ。熱によるスリップダメージと莫大なノックバックだ。スリップダメージはごく短時間なら耐えられる。ノックバックは――

「戦砕誇ウオールフエン示！」

相殺すればいい。

蒸気とエフェクトの混在が生む噴気が、荒れ狂う海波に似て衝撃をつぎ込んでくる。右腕に纏ったスキルエフェクトと、自分自身に発動した「鎖縛帷子さばくかたびら」の束縛効果でもってそれに対抗する。辛うじて耐えられるような凄まじい気熱と激突する！

「――」

このゲームでは、魔法を発動するときには声に出す必要がある。例外の一つが忍術だけど、忍術にしたって印を組む必要がある。でも――そこにもさらに例外がある。熟練度を上げた「空蟬」なら、何も言わなくても発動できるのだ。

私の視界が切り替わる。マグマの大地からマグマの大地へ、遠くの大赤翅から少し遠

くの大赤翅へ。【鎖縛帷子】^{さばくかたびら}によつて生成された鎖が解けていく。効果時間が終わった合図だ。今だ、ということでもある。

「ッ！」

【潮躲し】は燃費が異常に悪く、それに見合うだけの効果を持つている。水中での挙動補正、そして水のある空中で……例えば雨が降つているときとか、あるいは膨張した水が広範にまき散らされているときなんかに使えば、この上ない無限ジャンプスキルになる！

一步、二歩、もう一步！やつてくる水蒸気それ自体を足場にして、強引極まる姿勢で前進する！四歩、五歩、もう一步！

肌を感じる熱が少し和らぐ。それは噴気が晴れ始めることを意味している、そろそろ光線が飛んでくるだろう。しかし関係ない。既に大赤翅の背後まで移動を終えた。あとは最後のスパートをかけるだけだ！

「刃隠心得えーっ！」

スリップダメージに焼かれながらも、深紅のダメージエフェクトにまみれた両手で印を組む。【潮躲し】の足場を階段状に生成して駆け上がる。これで高度が十分に稼げた

！後は――

「颯衣！」^{せいの}

発動すればいい！

【むさびのころも颯衣】は布状のものを広げることで落下速度を軽減する忍術だ。しかし冷静に考えて布状のものを広げるだけで落下速度が何割も落ちるわけがない。現実でやつても墜落死するだけだ。そもそもMPを使っている時点で分かり切ったことではあるけど、この忍術は重力を操作している。落ちにくくなる忍術とは、逆説的に飛びやすくなる忍術でもある！

私を取り出した手拭いをばさりと展開すると同時に、砲撃音が確かに聞こえた。自走竜砲には周囲に存在する敵を自動で攻撃する機能がある。水蒸気爆発はもうすぐ終わり、大赤翅は次の攻撃を放てるようになる。今の自走竜砲は水で満タンだ。水を当てられると大赤翅は水蒸気爆発を発動する。ここから導かれる結論は一つ！

「二回目の爆発！」

【むさびのころも颯衣】の効果が落下を遅延させる中、私は背後をちらりと見やった。そこには、炎翅に備わった眼球から睥睨の視線を放つ大赤翅がいた。紛れもない敵意をもって、空中に線条を描く透き通るような水流を目前にして、私をただただ睨め付けていた。そうだ、私たちはいま向き合っている。見つめ合っている。睨み合っている。だったら、今光り始めた大赤翅に、私は言葉を伝えられるんだ。

私は再び前を向くため、首の向く先を戻しながら……。

「S V O O O O ……!!」

衝撃波を放ちつつある巨蝶に、一つ別れの言葉を告げた。

「お疲れ様!」

後に来るのものは簡単だ。爆風で、熱波で、轟音で。何にせよとにかく衝撃だった。衝撃波によつて肉体を貫かれた私は、そのアバターを宙に舞わせる。速度十分、方角正常!

「このままファイティシアまで飛ぶぞおおおおっ!」

流石に無理と分かっているながら、そんな夢想を口から吐いて……私は道なき大空に線条の道を描き、眼下の戦場をただ飛び越えた。

銃よ、剣よ！ 其の六

地面が急速に迫ってくる。肉体を数多の気流が撫ぜる。

大赤翅の爆風に乗ってしばらく飛んだあと、肉体にかかった上向きベクトルは重力に負け始めたようで、飛行軌道は段々と下を向くようになり始め……そしていよいよ、もう少しすれば落下という状態まで来た。結構距離稼げた気はするけど……どこに飛んだのかな。まあ、とりあえず。

「ニコロ！」

「了解：飛べばいいんだね」
ラジャー

「分かってるじゃーん！」

「起動：増設双駆動型ブースター」

背後に展開したニコロが私を掴み、そのままブースターを展開する。噴射による衝撃、熱、轟音、加速度——様々なものを身に受けながら、私の体は急転換する。地面の接近が食い止められ、今度は逆に遠ざかり始める。とりあえず落下死ということはなさそうだ。

「降ろして！」

けだ。

「ありがとね、ニコロ」

私は感謝の言葉を伝えながらほくそ笑んだ。……想像以上だ、せいぜい隣のエリアに落ちる程度かと思ってたけど、ニーネスヒルを飛び越えて天聖地まで来られてしまった。この先のフォルティアンを乗り切れれば、あとは戦争エリアを抜けて普通にファイティシアまで到達できる。

「……よおしー」

私は伸びをすると、フォルティアン——そして、その背後に待っているファイティシアに向けて歩き出した。



普通に三時間かかった……。

合間合間にログアウトしたこともあって、疲労困憊しながら潜り抜けたフォルティアンの正門の先には、既に充満した夜が濃さを増し始めていた。考えられる敗因はいろいろあるけど、第一にはエリアボスの存在を忘れていたこともあるだろう。以前はジークヴルムが休息地に使っていたため影が薄いけど、天聖地にも一応エリアボスが出現する。王国騒乱中はほとんどのエリアボスは出現しないけど、よく裁定を読むと消えるのはサードレマ以降からサードティードまでのボス、つまり数字上1-3サードティードより後に位置する

1-4については、直前にいるエリアボスが普通に出現するのだ。書き方がわかりにくすぎるとしよ！

とぼとぼと幅広の道を歩いて行けば、その左右には何の変哲もない家々が、窓ガラスから生活の灯火を漏らしており……。しかし、その家々が並ぶずつと奥には、明らかに異質な闘技場が聳えている。フォルティアンのトレードマークは、この闘技場……を含む、街に点在する四つの闘技場だ。

……さて。

「どごうしよごう？」

風無き夜に、放った言葉が溶け込んでいく。

なんかこう……15日夜時点では「あと3日以内にファスティアからファイフティシアまで行かないといけない！ヤバイぞ！」みたいな感じだったじゃん？でも改めて考えてみるとさあ、今まだ16日だけど、この時点で既にファスティアの前の街に着いてるって言う。あれ？みたいな。でも実際のところそうなんだよね。このまま夜も続行つて言うのもアリな気はするけど、モンスターも強くなるし得策とは言えない。今夜はフォルティアンにとどまった方が良いだろう。……要するに。

「思ったより時間がある……！」

私は眩き、同時に閃いた。そうだ、うまい時間の使い方を思いついた。フォルティア

ンには闘技場がある。四つもある。私の財布にはジュゲツキから受け取った金がある。この前のブリューナク人体実験の対価は、大量のリザルトと大量のマーニによつて支払われた。つまり、何が言いたいかというところ。

「トトカルチョだ！」

私は駆け出した。街に存在する闘技場のうち一つ、剣士闘技場が放つ照明の光に向けて——あるいは。その巨大な構造の内部に待ち受ける、輝かしい賭事ギャンブルの気配に向けて……！

◆ ちよとど開催されていた剣闘大会を観戦することにした。

王国騒乱の開催中ということもあり、闘技場の広さの割に、客席はそこまで埋まっておらず、閑散とした雰囲気か漂っている。それでも大会が中止されるわけではない。というか剣闘大会で優勝するなり上位に入るなりしないと就職できないつてちよとどどくない？開催頻度週一とかじゃん。プレイヤー人口3000万人で？

とりあえず観客席に座り、出席者名簿に目を通しながら賭ける先を考えていく。えーつと……。

「オイオイ——あの男、少々フツウじゃないようだぜ」

……ちよとど隣に座っている何とも印象に残らない顔のプレイヤーが、何やら意味あ

りげな独り言を漏らしている。ロールプレイヤーだろうか？賭けに役立つかもしれない、せつかくだし、ちよつと耳を傾けてみよう。

「蛇腹剣ジャバラケンつてのは随分奇妙だ。確かに武器力テゴリとして無くも無いが、そもそもが創作にしか出てこないようなトンチキな形状……魔法の恩恵を受けられるわけでもないし、まず実用には堪えないはずだぜ。あの男、何を企んでやがる……!？」

これ本当に独り言なの？私は周囲をキョロつたけど、特にプレイヤーの仲間がいる様子はない。

「対戦相手は——な、」雷撃「だとツ!？」

知っているのか!？」

「雷撃……剣闘大会に出ておきながら弓に剣をつがえるスタイルをメインに据える謎の女……!その対戦相手が謎の蛇腹剣と来たかッ!こいつは一体どうなっちゃうんだア〜ツ!？」

あ、アツいな……。

私は改めて、出席者名簿を見直した。記された名前は結構多いけど、多分普段に比べれば少ない方なのだろう。……現在は王国騒乱の真っ最中、普通のプレイヤーは戦場に出て殺したり殺されたりしているはずだし、そもそもフォルティアンに行くこと自体前王側プレイヤーにはできないはず。その前提があつてなお、一週間待てば開催される剣

闘大会に出席するからには……ここに名前を連ねているプレイヤーはみな、それだけの覚悟を決めているのだ。

……いいね、盛り上がってきた。

観客席に囲まれて、闘技場の中央に二人の剣士が並び立つ。もうすぐ火蓋は切られ、刺激的な戦いがスタートする。私は会場に満ちる熱気に気付いていた。剣闘大会に顔を出すのが難しいのは、出席者だけでなく観客側も同じだ。本来であれば戦争に行くべきなのに、それでも彼らは剣を見に来ている。覚悟の戦いを、覚悟の視線が見つめるのだ。これで盛り上がらなかつたら嘘だろう。

「用意——」

審判的な役割を持つていると思しきNPCが、向かい合う両者の間に立って手を振り上げる。会場を、期待という名の波が駆け巡っていく。私もそれに参加する。さあ——

——いよいよ、剣闘大会が始まる。
なお賭けは大損した。

銃よ、劍よ！ 其の七

「弦月」の野郎……やりやがった！」

劍闘大会もいよいよ決勝戦、私がちまちま賭けていつてある程度増えたところで勝負に出たところ当てが外れて直視しがたい数字になった収支を歯ぎしりしながら見つめる横で、相も変わらず謎のモブっぽいプレイヤーは独り言を発している。

「そうだ、劍闘大会では劍以外を持ち込まないことが前提！雷撃」の弓にしても、劍とセットで使用するからこそ認可された特例に過ぎない！しかし……そうだ、持ち込まなければ劍以外も使えるんだ！あいつ、ベヒーモスのオンラインシヨッピングを使いやがったアーツ！」

会場は大荒れだ。何せ決勝戦にもなったところで、これまで重大劍を鈍器運用して勝ち上がったしてきたプレイヤーがサブマシンガンを取り出したのだ。その砲口から飛び出すけたたましい銃声に対しては、ブーイングを飛ばすものもあればエールを送るものもある。要するに混乱状態だ。

「劍闘大会は神聖な場なんだッ！銃なんて汚らわしいモン持ち込んでんじゃねーよオ！」

「フーン！銃を持ち込めたとすれば……神聖さがその程度だっただけのことッ！やれ、そのまま脳天に撃ち込んじゃえ！」

なんでもいいですけど、ここから収支をプラスに持つていく方法ってないんですかね？

なさそうだった。

私は頭を抱えた。

”弦月”氏の対戦相手で、なんかトゲトゲした感じのソードを二本使っている……そう、”荊棘”氏のアバターが宙を舞う。闘技場の隅々に位置する数多の照明が、しなやかに躍動する彼の肉体を影として切り取り、茶色の床に落としている。右手のトゲトゲソードが勢いよく突き出されるけど——”弦月”氏は大剣を盾代わりに展開、継続してサブマシンガンによる弾幕も張り続ける。

渦巻く熱気は、留まるところを知らない。

◆ ま……まあ、暇つぶしくらいにはなった、かな？うん。

システムメニューからプロフィールを開くと、そこにはプレイヤーとしての残高が表示されている。その数字とにらめっこをしながら、自分に言い聞かせている。

……う、うん。別に金なんて無くてもぜんぜん困らないよね、もうすぐ新大陸にも行

けるわけだし。ちよつと賭けに負けたくらい、全然悔しくなんかないよ。うん！そう！
 そうなんだよ！別に悔しくはない！そう！

「はあ……」

私は溜息をついた。まあ……懐が極めて寂しくなつてしまつたのはともかく、時間を潰せたというのは紛れもない事実ではある。今は12月17日の正午前、ファイフティシアに発券するのは今くらいがちょうどいいだろう。

「……よし」

無くなった金につべこべ言つても仕方ない。とにかく、前を向いてやろうじゃないか。

私は閃霆万里の坂道に向けて、新たな一步を踏み出した。



「ギャハハハッ全員くたばつちまえやア〜ッ！」

「スパイどもに人権はねエ〜んだよう！」

「オラッ爆ぜろ！オラッ！」

ところどころに雑草が巢食う坂道の上で、ガラの悪いプレイヤーたちに狙われている。より具体的に言うると——彼らの一人が肩に抱えた巨大なグレネードランチャーが、さつきからその標的ターゲットを私に設定しているらしい。発射音が聞こえる、【空蟬】発動、

真横から爆発音。このゲームの爆薬特有の匂い。本気で殺しに来てるよこれ！

新王陣営の本陣都市はサーティード、イレベantalやトウエルレムスやフォルティアンまで直接道が繋がっておらず、移動するにはフィフティシアを経由する必要がある。そのため戦争中でも通りがかりみたいなプレイヤーはある程度存在し、そのほとんど全員が新王側陣営だ。例外の一つが私で、どちらの陣営にも参加しておらず、どちらの陣営からもスパイだと疑われる存在である。

「にしても爆破はやりすぎじゃなあい!？」

私の叫びを言葉なくして否定するかのようになり、もう何発目かわからないグレネード弾が宙を舞って迫ってくる。えーつと「瞬間転移」、しまった爆風でカスダメが入った。もう避けるのめんどくさいし殺しちゃうかな? どうせレッドネームにはならないし。よし、それでいいこう!

「刃隠心得!」

印を組む。エフェクトが舞い散る。

【追鼠火花】アーツ!

【追鼠火花】はホーミング性能を持っている。こういう複数人と戦うような状況ではもってこいの忍術だ。

「うわっ何だア!？」

「落ち着け！目くらましみたいだなモンだ！大したダメージは無い！」

「おや、相手に忍術について把握してるプレイヤーがいるんだ。とはいえ……把握している程度のことでは、私の戦いに影響が及ぶことはない。」

「よっ」

隙をついて地面に展開した自走竜砲が、予めセットしておいた水をごうごうと吐き出していく。それを「潮騒し」で踏みしめて前進、相手と一気に距離を詰めて印を組む。

「な——」

「【不知火蕾】
シラヌイツボミ」

狙うはグレネードランチャー使いだ！

走り出した火球が拡大しながら彼を追い、灼熱の中にその装備を飲み込んで——誘爆を起こさせる。【空蟬】で後退すれば、目の前には爆音が上がるのみだ。はい3キル！私の勝ちです！

「ヒヤッハアッ！」

装備は貰ってくよ！地面に散乱した銃だの鎧だのを片っ端からチェストリアに収納する。ラインナップとしては……量産品デンプレって感じだ。クソアプデが適用されてからというものの、プレイヤーたちは奥の手を隠すようになってしまった。私の目の前に転がった銃火器たちのデザインはどれもこれもひどく画一的で、それこそが彼らのとった安全

策の象徴のようなものだったのだろう。要するに、クソアプデはクソということだ。

まあ……ごたごた言っても装備は装備だよ。私は一通りのドロップを仕舞い終えると、チェストリアを改めて確認することに……あれ？

「……………これは」

半透明に浮かび上がったウィンドウの隅で、何やら見慣れないアイコンが輝いている。これは……アイテムの取得通知？何だろう、タップしてみよう。

『人臓恒星赤晶を取得しました』

えーつとなになに……ああ、焔がる大赤翅の討伐参加報酬か。ほとんど水蒸気爆発で遊んだだけなんだけど、あれって討伐参加と呼んでいいのかな……？まあいいや。装備アイコンは……炎上する宝石らしい。

効果は……へえ、解除不能のアクセサリー枠なんだ。喚起するとHP・STM・MPが2倍になって魔法のリキャストが0.8倍、ただし1時間後に確定で死亡してなんとかとか……うーん、解除不能って言うのがちよつとアレだね。というかあんな意味わからんモンスターから落ちた装備を心臓に埋め込むって大丈夫なのかな？正直言うて怖すぎるでしょ。

「ニコロ〜」

こういう時は聞いてみるのが一番だ。戦闘に当たり退避させておいたニコロを呼び

出す。

「参上：」

「これってどう思う？」

「思案：」

整った顔をしばらく傾げたあと、彼女は答える。

「装備するのは非推奨かな」

「なんで？ 装備枠を一つ潰す以外は結構良い気もしたんだけど」

「解答：始源に由来する肉体拡張装備は重複装備できないから」

「要するに？」

「一人で始源関係物品を二つ以上使用すると、体肉体が構成破魔力が崩壊する」

「怖」

とりあえず装備はしない方が良さそうだ。

まあ使えるかはともかくとして、とりあえず通知の正体はわかった。邪魔するやつも爆殺した。合間合間にログアウトを挟んでも、この調子で移動すれば今日中にファイフテイシアに着けるだろう。

「じゃ、行こうか」

「同伴：」

そうして私たちは改めて、ファイフティシアへの……ツチノコ杯への道を進み始めた。
……これ問答無用で破裂して死ぬんだったら、誰かを暗殺するのに使えたりしないかな？

銃よ、竜よ！ 其の八

夜のことだ。

波乱万丈を経つつファイフテイシアに到達した私は、更けゆく夜に包まれ、神秘を放つ月光に見守られながら、潮風に満ちた港湾区域へと移動してきていた。足を一步踏み出すたびに、私の脳裏を思い出が駆ける——密航の思い出だ。結局、私の密航は最後まで成功しなかった。幾たび船倉に忍び込もうが、最終的な結末はいつも……海に捨てられるか、自滅するか。その二択だった。

とはいえ、成功しなかったというのは、必ずしも失敗を意味しない。

「ようクグリン、生きてたんだな」

私の視線に気づいたらしく、暗闇に染まった海波たちを眺めていたペンペンは、地面に座り込んだ体勢を崩さないまま首だけを振り向かせ、同時に片手を挙げてみせた。彼と二人で行動したのも、思えば密航が最初だった。そして……ある意味では、最後までやっぱり密航で終わると言える。私とペンペンが明後日……もうすぐ明日になるけれど……十九日に実行するプランは、「他の船への寄生」だ。ペンペン自身の言葉を借りればこれは「船単位の密航」、私たちがやってきたことの集大成ともいえる。

「当然でしょ」

片手を、挙げ返す。三日でファイフテイシアに行かないといけなくなつたときはどうしようかと思つたけど、こうして何とか二日でたどり着けた。プランも万全だし、リソーすだつて揃えてある。あとは十九日を待てばいい。そのあとやることさえやれば、旧大陸の呪縛は効果を失い、私たちが解放される時が来てくれるはずだ。

「十九日、頑張ろうね」

「ああ」

視線を波打ち際に移す。眼前の海原を覆う暗がりの中には、揺れる水面が跳ね返した月光がぼんやりと浮かび上がっている。段々と連なるそれらは、遠目には線条の道を描いているようにも見えて……その道を追いかけて進んだ果てには、きつと巨大な新大陸が、私たちを待ち構えているのだつた。まだ前日にもなつていないのに、既に鼓動が速まり始めているのがわかる。

……ダメだ、海を見ると楽しみになつて仕方がない。

私は興奮を抑えるため、いったんファイフテイシアの街並みを眺めることにした。ファイフテイシアはそもそも中立都市のため、王国騒乱の「イベント判定」エリアに含まれない。PKをすればレッドネームになるし、そもそもPKがしたい奴は普通に戦争に行っている。それもあつて……旧大陸における最終都市は、まるでクソアプデなんてなかつ

たみたいに、銃声一つ聞こえないまま平和な賑わいを見せている。

「そろそろ日付変わるし俺は落ちるぞ」

「乙〜」

背後からペンペンのログアウト音が聞こえる。私もそろそろ寝ようかな？ システムメニューから時計を開けば、確かにあと少しで24時になるみたいだ。んー……いや、いったんファイフティシアを歩いておこう。旧大陸からは一刻も早く脱出したかったけど、別に嫌いなわけではなかった。その空気を、最後に目いっぱい吸っておこう。

私は立ち上がると、街の喧騒に向けて歩き出した。

歩き出すと同時に。

——ずどん

「え」

轟音を聞いた。

それが銃声だと理解するまで、しばらくかかった。

周囲の賑やかな空気が急激に霧散し、息をのむような静謐が広がる。無理もない。ファイフティシアにはそもそも戦争から避難するために来ているプレイヤーが一定数いるし、ましてやさつきの……銃声というよりは砲声のほうが正しいんじゃないか、というくらいに爆音だ。

「……………」

叩き込むのにうってつけの沈黙が広がっていると、二発目の銃声は聞こえない。だんだん街に喧しさが戻り始める。銃声の正体が何かはわからないけど、わかったところで何が起こるわけでもない。だったら、変に身構えたって意味がない。みんなそう考えたんだろう。私も、普段ならそう思うはずだ。

ただ。

「…………赤い」

私が見据えるずっと先。天空に漂う平べったい雲が赤い。物質的に赤くなっているんじゃない、おそらく真下から赤色の光を照射されているんだ。その光景はまるで夜が燃えあがっているかのように、随分不気味な見た目をしていて……。

「ピョピョッ！」

夜空を横切り、ハヤブサが一羽飛んでくる。伝書鳥メールバードだ。軽やかに翼を動かすそれは、空中でまっすぐな軌道を描く。そして……突き進んでくる。

「…………私宛て？」

「ピョッ」

可愛げな鳴き声で応じると、ハヤブサは展開し始めるメツセージウインドウを置き去りにして、再び天空へと舞い上がっていく。——そのモーションがまるで脱出のよう

に見えて、私は不吉さを覚えずにはいられなかった。いや、きっと気のせいだろう。私は希望的観測をしながら、送られたメールを読み始める。まさか差出人は……ああ、ジユゲツキだ。

『クグリンちゃんすぐに来て』

一行ずつ読んでいく。それが限界なのだ。全部一気に読んで、冷静を保てる自信がない。

『貴方が今向いている方角にそのまま走ればいい』

当然のように私の位置情報が割れている。たぶん気付かないうちに発信機を仕込まれたんだろう。いつもなら叱りに行くところだけど、今はそれどころじゃない。

『銃の竜はファイフティシアに出た』

それが最後の行だった。

私は『閉じる』ボタンも押さず、メールウィンドウを突き破る勢いで走り出した。雲を衝く赤色は一層濃さを増しているように見えて、それがなんとも不気味で——展開しつぱなしの時計ウィンドウの、十二月十八日の到来を告げているさまが、視界の隅にちらりと映った。

銃よ、竜よ！ 其の九

「……で、こいつの能力は何個あるの？」

「わかつてる範囲で四個だね」

「最悪」

旧大陸には四つの攻略ルートが存在するけど、最終到達地点であるファイフティシアは一つだ。四つのルートはどこかで合流することになり、それがちょうど私たちのいる、ファイフティシアの正門から出て少しの地点だ。そこにはついさっきまで何もなかった。ただの分岐路以上の意味は無く、何の変哲もない地面が、何の変哲もない舗装を受けて、何の変哲もない道を、四つのエリアに向けて伸ばしていた。そして、今は違う。

地面を強烈な閃光が照らしている。そいつはシリンドラーのような胴体から生えたマズルブレーキのような頭を振っていて、しかも炎を纏っていた。

The Truth Dragon
『真なる竜種：No. XVIIII』
『Fire』

『参加人数：十二人……十三人……』

『竜狩りが開始されました』

私がそれを観察する間にも、アナウンスは肅々と言葉を紡ぐ。

「実際のところ、最悪だね」

ジュゲツキは炎光に照らされながら、私の隣でそう言った。自分の声が震えを帯びていることに、彼女自身は気付いているのだろうか？……いや、きつとどうでもいいことなんだ。

とにかく、まずは説明を受けなきや。

「能力その一、発砲する」

彼女が言ったのとちょうど同時に、さつき聞いた轟音をそのまま小さくしたような……銃声が聞こえた。ファイアの周囲を周回していた九丁のライフルのうち一丁が、その弾倉から魔力の銃弾を発射した音だ。

発射された弾丸は明後日の方向へと飛んでいき、そのあたりに立っていた看板を貫いた。

「見ての通りあてずっぽうで撃ってるみたいだけど……人が密集してる所でやられるとかなり面倒だろうね」

ジュゲツキが続ける。

「能力その二、炎症を起す」

彼女はファイアのほうへと少し歩み寄ったかと思えば、グローブを外して右手を掲げ

てみせる。その肌が、状態異常特有のダメージエフェクトに蝕まれているのが分かる。「まあ典型的なDOTだね。火傷みたいなものだけど……どうも、ある程度近づいたプレイヤーには確定で発生するみたいだよ」

ジュゲツキは後ずさり、回復ポーションを取り出して口に含んだ。

「能力その三、集中攻撃^{ファイア}してくる」

彼女がおもむろに取り出したピストルが、月光の下、炎光の横で掲げられる。そのマガジンスロットには……私が作った例のやつ、ゲーミング弾倉が収められている。

「えいつ」

トリガーが引かれ、銃声が二方向から聞こえる。一方向は言わずもがなジュゲツキのピストルで、もう一方向は……ファイアの周囲で浮遊する九丁のライフルすべてだ。ずだだだだんと空気をつんざくような音が聞こえ、弾幕が殺意を持って飛来して——転移魔法でそれを回避した後、ジュゲツキは私の方を向いて言った。

「複数のプレイヤーに撃たれた場合、『一人を殺してからもう一人を殺す』方向で行くつばいよ」

……。

私は、少し考えた。ファイアの能力は要するに、定期的に遠距離攻撃をランダムな方向に放って、近づくだけでダメージを与えて、攻撃に対しては集中攻撃の繰り返しで反

撃するらしい。それって……なんていうか。

「あのさあジユゲツキ」

「なに？」

「それって本当に強いのか？」

……前評判ほどの強さは、感じられないような気がする。

定期的に遠距離攻撃が来るとは言っても、見たところ狙いを定めているようには見えない。そもそも浮いているライフルが九丁っていうのは……まあ多い感じはするけど、多すぎるほどじゃない。攻撃といってもたかが知れているだろう。近づくだけでダメージを受けるなら狙撃すればいい。集中攻撃で反撃してくるって言うけど、それならタンクを一人二人用意すれば済む話だ。なんというか……サイズ的にもシヨボい感じがするし、そこまですりでもないような。

「弱いよ」

意外にも、ジユゲツキは肯定を返した。

「それじゃあ——」

「でも」

私は気付いた。彼女の瞳は、私には見えないウィンドウに向けられている。……システムメニューの機能に「見るだけ」のものはそう多くない。時計あたりかな？ システム

メニューを操作、自分でも時計を確認してみる。えーつと……そろそろ0時15分になるところみたいだ。

「すぐに強くなる」

「え……」

私が言いかけると同時に、時計は六十秒を数え終え、「14」は「15」へと移り変わって。

『状態異常が発生しました：炎症』

アナウンスが響いた。

それは、普通に考えておかしかった。炎症の発生条件は「ファイアにある程度近づく」ことだったはずだ。近づく？近づいた覚えはない。ファイア側が接近してきた……わけでもない。銃火の竜を一瞥してみれば、少しばかり移動はしていても、私との距離はそう変わっていない。それじゃあ——そこで気付く。

「……これ」

「そうなんだよ、クグリンちゃん」

ジュゲツキの声は、ずいぶん神妙だった。

ファイアは、ただ距離を変えていないだけじゃなかった。それ以外の変化を持っていない。例えば、少しばかり大きくなっていた。肉体の構成パーツを巨大化させ、纏った炎

の勢いもより強くなっているように感じられた。そして、その周囲を見る限りでは。「銃が増えてる……!?」

「たぶん二十七丁になつてはるはずだから、数えてみるといいよ」

九丁から、二十七丁に変わった?

ジュゲツキはたぶん、「十八丁増えている」ということを言いたいんじゃないだろう。そうあつてほしいけど、違う。彼女は多分……「三倍になつている」つて、そう言いたいんだ。

「能力その四、自分に燃料供給……それとも貯蓄率最大化かな。とにかく延焼するみた
いなんだ。五分おきに銃が増えて、体が大きくなつて、炎症の対象範囲が拡大する」

……それは。

「最悪、だね」

ああ、銃声が聞こえる。三倍になつたライフルたちがかき鳴らす、三倍やかましい銃声だ。これがすぐに九倍になり、二十七倍になり、八十一倍になつていくんだろう。火事がどんどん広がるように、あるいは……銃器が急速に普及するように。

「最悪、だよ」

上限はきつとあるはずだけど、そうなつたときにはきつと手遅れだ。

ジュゲツキの言いたいことは、完全に分かつた。この竜は一刻も早く何とかしなきゃ

ならない。ファイティシアを……私の新大陸行きを守るにはそうするしかない。でも、どうしよう？とにかく……私たち二人と、訳も分からない様子でドタバタやつてる通行人だけで止めるのは無理だ。銃がある程度増えても大丈夫な……「盾」^{タンク}を用意しなきゃならない。どこにいる。それはどこにいる？

そうだ。

「こいつつてさ」

私はジューゲツキに質問することにした。

「誘導、できるのかな？」

「できるよ」

即答だった。

ジューゲツキは依然として切羽詰まった声色で……しかしどこか楽しそうに、微笑と共に指を一本立ててみせた。

「私たちはその手段を最初から持つてる。……セパレーションの能力だよ、集中攻撃されてる部位を切り落としていくんだ。切り落とす部位がなくなったら蘇生すればいい」

なるほど。よし。

重ねて質問する。

「インベントリ拡張アクセツて持つてる？」

「持つてるよ。チェストリアがあるからもう使つてないけどね」

「それ装備して、中に弾倉を全部入れておいて」

「……クグリンちゃん」

「なに？」

「私を殺す気だね？」

「そうだよ」

「わかつた。どこで？」

「無果落耀の古城骸」

それだけ言葉を交わせれば十分だった。あとは走り出せばいいだけだった。ジユゲツキが誘導のためにファイアのもとへと駆け出し、私が準備のために先行して古城骸へと走る。

「……20時から26時、だったっけ」

そう、確かにそうだったはずだ。夜襲のリユカオーンはその時間帯に出現する。

ふと頭上を見上げてみれば、そこでは満月が私たちを見守つていて……それはあまりに典型的で、もしも狼男が実在するなら、まず間違いなく吠えているであろうそれだった。

銃よ、竜よ！ 其の十

〔SF—ZOO〕はかなり高精度なりユカオーンの出現場所予測を実現させた。その情報をコウガイガー氏が私の提供したスクショで買い取って、さらに私に流した。たまたまとしか言いようがないんだけど、事実、私は知っている。夜襲のリユカオーンは12月17日の20時から26時……つまり12月18日の午前2時にかけて、無果落耀の古城骸に出現する。

「23分経過あー！」

展開した時計ウインドウを一瞥し、後方でフローティングディスクに乗って誘導を行っているジウゲツキに向けて、片手に握ったメガホンを通じて叫ぶ。メガホンでも使わなければ、八十一丁のライフルが吐き出す豪雨のような銃声に掻き消されてしまうのだ。

背後で巨大化を続けるファイアが帯びる灼熱はあまりに強く、月光と合わさって相当量の輝きを生み出しており……深夜帯にもかかわらず、地面にはうつすらと私の影が描き出されている。火の粉みたいなのもたまに飛んでくるし、既にファイアはかなり危険な存在だ。あと2分で、影はよりいつそうくつきりとし、銃声も更に激しさを増すのだ

ろう。まったく、本当に規格外すぎるモンスターだ。

「強すぎないこれ!？」

私はメガホン越しに愚痴を言った。

円盤の上で物理的に身を削り続けているジュゲツキは、それでもなんとか思考入力を行ったようで、返答は伝書鳥メールバードが携える形でやってくる、えーつと、なにになに。

『私たちもここまで強いとは想定してなかったよ!「銃への恐怖」だけでこうなるのはデカイテロでも起きない限り無理!たぶん「炎への恐怖」も内包してる!大体大赤翅のせいだろうね!』

納得感のある説明ではあるけど、レイドモンスターがちよつと目覚めたくらいでここまで強化されるのはダメでしょ!

とはいえ、ジュゲツキに文句を言っても仕方ない。そもそも砲火ファイアと火炎ファイアなんて全然違う、しかも両方かなり強力な概念を、ただ単語が同じだからというだけの理由で同じ竜に同時搭載しているのがおかしいんだ。とにかく、今は。

「なるほどね!24分経過!」

こう伝えることしかできない。

残り1分。できればライフフルが二百四十三丁になる前にリユカオーンにこすり付けたいんだけど……どうだろう。無果落耀の古城骸には平原フィールドと古城フィールド

ドがある。今視界の端で段々見え始めているのは古城だ。リユカオーンのマーキングポイントには平原フィールドの端の方にあるって話だけど、そこまで……いけるかな？微妙だ、非常に微妙なところだ。

走りながらジュゲツキのほうを振り向けば、ちょうどこれ以上分離する部位がなくなつたらしく、いったん蘇生アイテムで肉体破壊状態をリセットしているとところだつた。

「ちよつと行つてくる！返信不要！」

メガホンでそう伝えると、視線を反転させながら更に速度を上げる。時間内にリユカオンまでたどり着けないなら、リユカオン側を引っ張つてくればいい！

「ニコロおー！」

「展開……」

「フルパワーで噴かして！」

「方向……？」

「前！」

「了解……増設双駆動型ブースター起動、出力120%で前進する」

モーターだの何だのが駆動する無機質な音。そして——加速感！

「よおしー！」

前方からこれでもかと吹き付ける夜風に耐えながら燃ゆる^{シイnder・ヘッド}貌装着！本来の効果とはまた別に、この頭装備の装着者は、吐息の一部が蒼い炎のエフェクトを帯びる。暗闇を暴くには最適だ！

その不可思議な、明確に単なる炎とは異なる何かは……闇夜の中に青白い光を齎し、前進する私の視界を少しばかり明瞭にする。その端っこに、何かの影が映った気がした。

「そこか」

エフェクトは眩きすら変換し、なんだか不気味な聞こえ方にする。虚ろに吹き荒ぶ風の中、私は声を張り上げた。

「ニコロー！7秒後に反転して！」

「御意！」

7秒。6秒。5秒！1秒1秒を数えるたびに、ブースターが生み出す加速度が、少しだけ弱まっていくのが分かる。

4秒、3秒、2秒！障害物はなさそうだ、マップ的にも問題ない。このまま突っ込めば確実にやれる。

1秒！

「今っ！」

私は闇夜にそう叫び、アバターに襲い掛かった逆向きの加速度に圧迫され――。

『ユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」に』

そして、アナウンスを聞いた。

『遭遇しました』

その良く通る、「象牙」のものと同じパラメータで生成されたと思しき合成音声は……
 つい一秒後には残響も無く、再び猛煙を吐き出し始めたブースターの噴出音と、再び背後から聞こえ始めたファイアが奏でる銃声の嵐と、その時間こえた唸り声によって、既に跡形もなく掻き消されていた。

「グルルリアアッ！」

私とニコロに迫りくるリュカオーンは、鋭利な犬歯をむき出しにして、確かに大きくそう吠えた。ふと、月がずいぶんきれいだと思う。

でもそれより、衝突が近い。

「ニコロ、エスケープ」

「わかった」

彼女は本当に物分かりがいい。二つ返事でニコロは消えて、あれだけの爆炎を吐き出していたブースターも消え、ただ私が相応の加速度を有し、冷たい夜を突っ切っていくのみとなった。銃声と咆哮が接近していく。炎症が発生したのを確認するついでに時

計ウインドウを横目で視認、あと20秒。どうやらこれは間に合いそうだ。問題は……私のアバターが未だに横向きのベクトルを帯びっぱなしで、このままいくとファイアの体躯に衝突することになるくらいかな？どこかで横にそれて着地しないと死ぬだろう。つまり、死ぬのを厭わなければ着地する必要はないということだ！

「颯衣」

だつたら、むしろもつと飛ぶ！

ばざりと手拭いを展開。落下速度を遅めた私の肉体が、ファイアの体表で進行する大火事から上昇気流を受け取ってさらに舞い上がる。あと10秒、二体の大物は既に睨み合いを始めている。……まずい、ジユゲツキの場所がわからない。いや嘘わかった、虹色に光る弾倉は目印にピツタリだ。それが装填されたピストルを振り回しながら、神代の円盤の上で彼女は……あれ、銃撃を受けていない。彼女の周囲にちらちらと光が見える、鏡的なアレを身代わりにしてるのかな？まあいいや。私はメガホンを取り出すと、

「その必要はないよ、クグリンちゃん」

真横から声が聞こえた。

首をそちらに向けてみれば、そこには当然のように円盤に乗ったマッド・サイエンティストがいた。

「……転移魔法？」

「自分の腕を切り落として蘇生アイテム括り付けて投げると、本体が死んだ時点で腕の側から生えてくるんだよね〜」

それってバグじゃないかな？ いや、このゲームにバグはない。あるとしてもせいぜい調整ミスで、それが一番厄介なところなんだ。だから10秒が経過して、バグじゃないかってくらいにスペックのボスがさらに強くなるのも、止めることはできない。

眼下で。

夜狼と銃竜は激突する。ちょうど二百四十三丁になった長銃たちが、炎に包まれながら一斉に同じ方向を向く。影でできているかのような漆黒の狼が、繰り出した爪撃でそのうち数本を塵に帰す。銃声。咆哮。炎症がさらに強まったことを示す通知。

「ニココロ」

「再展開……」

ここから離れなきゃならない。私は黒夜に人形を取り出し、その衣装にひかれた蛍光色のラインが、ひときわ目立って光を放った。ブースターの展開音を聞きながら、私は隣の狂人に聞く。

「ジューゲツキ、今のあいつにフルオートでブリューナクを撃ち込んだら倒せるかな？」

「……三人しかないんじゃない無理だね〜」

「銃を撃つ人数が足りないってこと？」

「うん、全員が片手銃を二本持つと考えても六丁でしょ？体力を削り切る前に五分経つと思う」

「つまり、もつとたくさん撃てる銃があれば倒せる？」

「そうなるね」

「よしニコロ、このまま直進して」

「……へえ〜？」

ジュゲツキが興味深げに私の顔を見る。彼女はファイフテイシア方面からファイアを誘導してきた。そしてその反対からリユカオーンを誘導してきたのが私で、それがこのまま直進するということは、最終的にはどこに向かうことになるのか？

私は知っている。念押しとして、相棒に伝える。

「古城骸の終端を指すよ」

銃夜、竜夜！ 其の十一

先ほどとはうって変わった静謐が、降り注ぐ冷たい月光に引き立てられている。それを思いきり打ち破るように、ニコロの背に展開したごついブースターは炎を噴射していく。ごう、という音が響いて、その先端で私たちが飛ぶ。

「よしこの辺…この辺で降ろして！」

「把握：わかつた飛行形態モード変更」

がちやがちやと、金属音が鳴る。ブースターが噴射を徐々に停止し、同時進行で変形していく音だ。ホバリングモードのな何かに移行したニコロが、両脇に抱えた私たちと共に高度を下げていく。私は隣のジユゲツキにきつぱりと言った。

「よし、ここで死んでもらうよ」

「……なるほどね」

彼女は受け答えをしながらも、手元に展開した時計ウインドウを確認しているらしかった。私も視界の端に置いていくけど……現在、0時29分。移動時間も考えると、リユカオーンに噛み砕かれる奴を数に入れなければ……戻るころには、ファイアの銃は二千百八十七丁になっているはずだ。

「……本当にいけるんだね？」

珍しい。ジューゲツキが、こんなことを確認してくるのは。とはいえ彼女の気持ちもわかる。もしも私が考えた策で二千百八十七丁のライフルを打破できなかったとすれば、その先に待っているのは破滅だけだ。

時間を惜しむべきなのは双方わかっている、ここは手短に済ませるべきだろう。私は近づいてくる地面と、その手前にある時計ウィンドウに浮かぶ角ばった数字フォントを見つめながら……言った。

「保証はできない」
でも。

「私にだって、守りたいものくらいあるから」

いくら五分ごとに強くなるとは言え、ファイアの強さにも限界があるだろう。流石にこのゲーム全体が破滅するわけではないはずだ。ただ……ファイティシアについては、わからない。私の新大陸行きを守るためには、この戦いに勝つほかにない。

「それを信じてほしいな」

「……わかったよ、クグリンちゃん」

ジューゲツキが承諾したところで、ちようど私たちは着陸した。朧げな月光が作り出す僅かな陰影が、地についた足をそこに描き出す。

「ニコロ、ちょっと離れてて」

ニコロが一步退いたのを横目で確認すると、私は拳を握りしめた。暗闇の中でもわかるほどの興味の色が、ジユゲツキの瞳に宿っている。その顔を——

「戦砕誇示」
ウォールフエン

殴り飛ばす。

僅かに加えたそよ風のようなパンチが、どう考えても不自然な推進力ノックバックを生み出す。周
囲に衝撃波が飛び散る中で——ジユゲツキのアバターが思いつきり吹っ飛ばす！

「さあて……！」

スキルエフェクトの残滓が右腕に残るうちに、私はジユゲツキの飛ぶ方角を見据えた。そこは単なる平原ではなくて——無果落耀の古城骸の終端に位置する平原だった。何が違うのか？ 明確に違う。このゲームには——私が居残り続けた旧大陸には、一つのセオリーが存在する。つまり、エリアの終端にはエリアボスがいるということだ。

眼光が見える。それを目指して駆け出す。

そいつは——ついさつきまで見ていた真なる竜と比べれば、余りに見劣りする竜ドラゴンだった。形状もあまり強そうではないし、実際のところスペックは高くなく、なにより戦い方が姑息だった。相手の武器や魔法を奪いユザリフ、それを振るって戦うのだ。でも、今の

このゲームには……装備を奪い合い、領地を奪い合い、相手が描く未来への道を奪い合うこのゲームには、最適なクリーチャーということもできた。

ユザーパー・ドラゴンが立ちはだかつている。

飛翔するジュゲツキのアバターが、激突する。動かなくなる。発光する。ポリゴンと散る。極めて典型的なデスポーンの演出だけど、今はクソみたいなアップデートが適用されている。彼女が装備していた武器と防具とアクセサリーはドロップされ、インベントリ拡張アクセサリーがドロップされたことで、その中に入っていたものがまるまる落ちる。深夜の闇など簡単に暴けるような、圧倒的なまでの輝きを放つそれは。

虹色に光る、弾倉だ。

「ピースは揃った」

ちよつと言い回しをスカしすぎたかもしれない。でも、きつとこんなものだ。現に私は明媚な月影の下で目標に向けて全力疾走しているわけで、これ以上のスカした……ロールプレイ役を演じたような物言いができる機会はそうそう訪れないだろう。だから、私は格好つける。散らばった弾倉の山をどんどん「ステイール」していく竜の前で、必要以上に見栄を張る！

「シヨップピングの時間だよー！」

BW—ビーコンを取り出す。ベヒーモスのオンラインシヨップピングに接続する。超

過機構が組み込まれてる奴をありったけ購入し、チエストリアに転送されてきたそれらをそのまままぶちまける！

「それでもってエー！」

【空蟬】発動、銃を【ステイル】しはじめたユザパの後ろに回り込む。その後ろ姿は——まあまあデコボコした鱗は、まあまあ大きな翼は、まあまあかっこいい尻尾は。それらは何の変哲もないドラゴンのようで、コウガイガーたちの憎しみを背負うには、少々頼りないようにも感じられた。

「よっ」

ちようどいい位置にあつた尻尾に手を触れる。それは忍術を発動するための手だ。もう片方の手で印を組む。組むとすらないほど簡単な印だ。ただ、人差し指と中指を立てるだけで成り立つほどのなだから。

篡奪者たる竜のそこそこ大きな体を見上げれば、その向こう側には満月が、さつきまどと同じように輝いていた。いや、同じじゃない。5分や10分ではとてもわからないほど悠長だけど、月は確かにその位置を少し変えている。だつたら私も変わつて見せる。速いか遅いかの違いでしかないのだ。

息を吸い込む。冷たい空気が口内に入ってくる。それを飲み込んで、銃が奪われ切つたのを確認すると。私は、一言呟いた！

「超転身！」

甚大な量のエフェクトが飛び交う。それらは眼前の竜の巨体を包み込んで、忍術特有の文様みたいな奴をはさみながら、輝き、耀いていく。星々にすら届きそうだと思つたけど、実際のところ届くはずはなかった。でも、それでいい。世界を切り裂く五芒星になれなくても、望遠鏡くらいにはきつとなれる。

視界が白に塗りつぶされる。サウンドエフェクトがとめどなく聞こえる。肉体に不思議な感覚が来る。

私は変身した。

銃夜、竜夜！ 其の十二

ブリューナクは竜を屠るけど、使用する人間がいなければ置物でしかない。

竜は人間を簡単に踏みつぶすけど、ブリューナクの前には簡単に刻まれる。

人間はブリューナクを自在に震えるけど、フィジカルの面で竜には負ける。

これらは三すくみの関係にあって、三つの中でどれが最強か、決めることはできそうにない。しかし……どれが最強なのかは決められなくても、なにが最強なのかなら簡単に決められる。単純だ。

竜と人間が合体して、ブリューナクを使う。

ただそうするだけで、全ての道理は吹き飛んでしまうのだから。



ごうごうという虚ろな音と共に、展開した翼に風が吹きつける感触がある。現実の肉体に翼が生えているはずもないから、『翼に風が吹きつける感触』というのは、人生で初めて体験するものだ。それはなんといいか……奇妙で。でも、少なくとも不快ではなかった。

【超転身】。コウガイガーたちに【水滑り】を教えた時に報酬として受け取ったそれは、噛

み砕けば……「仲の良いモンスターと合体する」忍術に他ならない。私とユザパが仲良しかについては諸説あるけど、少なくとも装備のロンダリングにはかなり使った。それが内部的にうまいこと判定されたんだろう。

「……あそこ、か」

心なしか上昇したように感じられる視力で、飛翔の果てにあるものを見る。そこには一層拡大した火と、依然として倒れない夜が、嵐のような攻防を繰り返している。距離が近づけば近づくほど、これまた嵐のような銃声たちはより大きく聞こえるようになる。そこに横槍を入れようとしているのが私だ。

「よっ」

チェストリアから魔魂丸薬イヴイル・フォースを取り出す。丸薬の纏う禍々しいオーラがファイアの炎光によって暴かれる前に、一息に口に含んでしまう。なんだか変な感覚が訪れ、視界の色調が反転する。とはいえこれで二錠目だから、結果としては「戻った」ことになる。

……【超転身】は足し算ではない。モンスターと合体する技ではあるけど、合体相手のモンスターが持つステータスがそのまま術者に加算される、というのにはちよつと強すぎる。あくまでモンスターをベースにした形態を作り出す方向性だ。しかし、イヴイル・フォース魔魂丸薬は服用者にレベル99相当のバフを与える。これを使えば——ベースにした形態なんて建前をかなぐり捨てることができるといえる。つまり、今の私は。

「ユザーパー・ドラゴンのレベル99……！」

「ここで着地！」

ずぎぎ、と。月光を受けて煌めく土埃に包まれ、色々とゴテゴテしたパーツを生やした私は、二体の巨獣の麓に着陸した。舞い踊る火の粉はより一層増加していて、騒音も先ほどの比ではない。とはいえ……ファイアの特徴は集中攻撃、リユカオーンが立つている限り、この幾千の銃口が私の方を向くことはない。そして、リユカオーンはしぶとい。

「【ステイルル】」

だから炎症に侵されながらも、私は魔法を発動する。

シンダー・ヘッド

燃ゆる貌の効果で追加された、意味があるのかよくわからない青白いエフェクトと共に……ファイアの周囲に存在する銃器たちを、一本一本奪つていく。リユカオーンが壊した時点でそうだろうとは思ったけど、やっぱりこのライフルは鹵獲できるんだ！

「【ステイルル】……【ステイルル】……【ステイルル】……！」

叫びをあげるたびに課せられる数秒のリキヤストタイムが、煩わしく感じられて仕方ない。何か短縮方法は……そうだ、たいようにほえる人臓恒星赤晶がある。いやでも一人で始源装備を二つ以上使うと死ぬんだっけ？……いや。今の私は一人じゃない。正確には一人と一匹だけど、二人で二つ使う分には問題ないんじゃないだろうか？私はシステムメニューか

ら装備フィギュアを開いた。少なくとも、アラートは出ていない。

「装備っ」

よし何ともない！

即座に喚起、ただでさえ幾重にも這っていた私を包むエフェクトの波に、さらに真紅のそれが追加される。

「[ステイール]、[ステイール]、[ステイール]……!」

全てのライフルを奪い去ろう、なんてことは考えていない。最大MPがどれだけ水増しされていようがいざれ魔力は枯渇するし、少し時間を与えればすぐ三倍になる。だからこの行為は……相手の火力を下げるためじゃなく、私の火力を上げるためにやっている。

私が一つライフルを奪うたびに、周囲を旋回するゲーミング弾倉のうち一つが、奪ったライフルへと装着されていく。ゲーミング弾倉の数も相当だ、なかなか枯渇しそうにない。……ジュゲツキは、それだけ本気で作戦に臨んでいたのだろう。

だったら、私もそうするまでだ。

七色の光が濃度を微細に変えて、宙を舞いながら豪華さの演出を続ける。その輝きの中央で、完成していくいっつでも撃てる銃を伴いながら——私は、二体の巨獣を見据える。

「グルアアアアッ！」

リユカオーンが——四桁に及ぶ銃を前にして、なおも怯まずに炎へと飛び掛かる。剛健たる牙を剥き出しにして、咆哮と共に攻撃を続ける。

「BABABABABABABANNNN……」

ファイアが——唯一性の塊のような夜を前にして、なおも怯まずに狼へと射撃する。灼熱と鉄軀を剥き出しにして、銃声と共に攻撃を続ける。

そろそろだ。そろそろもう五分経って、銃が六千五百六十一丁に増加する。ここらで頭打ちという可能性もあるけど、とにかくファイアがさらに強くなり、暴風雨のような弾幕がより一層濃くなることは間違いない。リユカオーンも……倒されるかはわからないけど、場合によつては飽きて帰るくらいはするかもしれない。この作戦は長く使えないということだ。だから。

「ここでケリをつける！」

私はセパレーションの能力を発動して自分の下半身を切り落とした。そうした方が【超転身】の燃費が良くなるからだ。それに、私にはすでに翼がある。脚が無ければ道を駆けられない道理なんてない。

ところどころに鋭利なデイトールを持つ翼を上下させる。効果音と共に高度を上昇させ、眼下の眩い光から少しだけ離れる。胴を残したのは翼が生えているからだ。頭

を残したのは叫ぶためだ。手を残したのは、印を組むのに使うためだ！

「すう——」

蒼、紅、金、黒。混ぜこぜになったエフェクトは混沌を生み出し、私の頭部の周囲で蔓延っている。私が息を吸い込むほどに、それらはぐるぐると旋回するのをやめ、束ねられた糸のように整列していく。

見下げる先には紅蓮と闇黒。金属音と共に肉体の周囲を舞い踊る無数の銃たちが動き、その数多の砲口を一点に集中させる。それらのほとんどは鹵獲した奴だけど、一部はジユゲツキが落したり、私がベヒーモスから買った奴だ。何が違うか？ 必殺技の有無、ということになるだろう。

私は肺に溜め込んだ息が漏れないように注意しながら、両手で印を組み、言った。

「刃隠心得、奥義——【竜威吹】」

【竜威吹】は発動者が叫んでいる間持続する。逆に言うとか叫んでさえいれば内容はどうでもいいので、死ぬでも通るし殺すでも通る。でも、そんな罵詈雑言より有意義な使い方もできる。例えば、音声認証の起動に使うとかだ。

「【超過】……！」

私は叫ぶ。息を吐き出す。銃の竜を打破するために、銃と竜の輝きを撃ち放つために！ 銃よ、竜よ！ 私に力を！

「機 構」 イッツ!!」

炎を吐き出す！

そこにはいくらでも色があつた。いつかセパレーションが纏つていた紫のプラズマが再現され、大疫青に由来する青白い瘴気が上乘せされ、魔魂丸薬が齎す漆黒の覇気が憑依し、大赤翅に由来する鮮紅の息吹が入り込み、ユザーパー・ドラゴンがどこから奪つてきた何かが包み込む。それらのすべてが視界反転効果を受け、さらにもう一度反転する。最後に——輝く槍が。夜空を見上げる幾百の弾倉たちが、虹色の光を撒き散らす！

それはもはや銃声かどうかの問題ではなくて、私の鼓膜はどうに敗れていた。無音の中で視界がホワイトアウトする。咆哮を上げるファイアを含め、あらゆるものが光にぼやかされていて……ただ、ゲームのインターフェースだけが普段通りだ。じりじりと最大値ごと減少していたHPバーが、その時ついに底をついて。

そして。

私は、目を閉じた。

『真なる竜種：No. XVIII』

『Fire……打破!』

『参加人数：二十一人』

『ユーザー・ドラゴンさんの人臓たいよう恒星赤晶ほえるたいようが竜滅装備ドラゴンバスターに変化しました：竜臓恒晶赤星』

『真なる字名が明かされる：』

『?????ア』

『ユーザー・ドラゴンさんが職業ドラゴンバスター「真竜討滅者」への就職権を獲得しました』

『Loading………』

『ユーザー・ドラゴンさんが職業ドラゴンバスター「真竜討滅者」への就職権を喪失しました』

『ユーザー・ドラゴンさんが称号「竜殺の実現者」を獲得しました』

『LEVEL UP：ユーザー・ドラゴン』

『80↓104』

……全部持ってかかれてる。

エピローグ われらが懸けるは線上の未知

「おやクグリーン氏、奇遇ですね」

12月19日。ファイティシアを散策していたところ、コウガイガー氏とばったり出会った。その背後には見覚えのあるメンツが並んでいて……多分、それは【威聖開拓】の克蘭メンバーたちだった。

「ども」

私は適当に挨拶を返しつつ。彼女たちの姿を観察する。ぱつと見た限りの相違点は……ちよつと人数が減っているのと、服装が何やら神聖ホーリーな感じになっていることかな。……へえ、なるほど。

「じゃあ……成し遂げたんだけ」

コウガイガー氏の紫の瞳が、凜々しさを保ちつつ輝きを宿したように見える。

「そうです。【威聖開拓】テラホーリーに在籍していた十八人のプレイヤーのうち、私を含む十四人が「大いなる巡礼」を完遂しました。これもクグリーン氏の助力あつての賜物です、ありがとうございます」

彼女は深々と頭を下げる。その様は心の底からの感謝を表しているようで……私と

しても、嬉しくなってしまう。【テラホーリー威聖開拓】の試みは失敗するだろうと思っていたけど、私の予想はどうやら覆されたみたいだ。

きつとこのゲームを遊ぶ誰もが、多かれ少なかれこんな風に予想を覆されているんだろう。「王国騒乱は荒れる」と予想したラルエルカンだつて、タイムトラベルの予想を私に覆された。未来は誰にもわからない。

「犠牲になった四人のことは残念でありませんが……それでも私たちは現に、隠し職業である『ザ・セイント大聖者』への就職に成功しました」

コウガイガー氏の表情はといえば、そこにあるのは紛れもない笑顔だ。

「われらが戦場の道を駆け抜けて、このファイフティシアに立っている……それ自体が、彼らの遺志の結実^に他なりません」

遺志、か。

その言葉はゲーム内の出来事に使うには少し大きすぎて、しかし私はそれにツッコミを入れる気になれなかった。このゲームは落とし穴の多いゲームだから、私の成功の影には無数の失敗者がいるだろうし、そもそも私が本当に成功しているのかすら怪しい。あるいは成功なんて存在せず、誰もが少し違った形の失敗をし続けているだけなのかもしれない。私も少し行動が違えば、また別の失敗に陥っていたんだろう。

「なんていうか……ほんとにおめでどう、コウガイガー氏」

「はい。ありがとうございます」

コウガイガー氏は微笑んだ。

……しかし、大聖者ザ・セイントかあ。wikiに載ってたっけ？「大いなる巡礼」はかなり高難度だから、ひよつとすると載ってないかもしれないなあ。

「ところでクグリン氏」

声色が変わったのが、わかる。

……。

答えたくない、という気持ちがあった。コウガイガー氏はこう見えて鋭いというか、やってることはかなりズルなのに、根つこの部分でパストラットと少し似ている。まあ……答えないわけにもいかないだろう。

「な……何かな？」

コウガイガー氏はいきなり神妙になった面持ちで言う。

「ユザーパー・ドラゴンに何があったのかご存じありませんか？」

……。

そうだ……当然の話ではある。【威聖開拓テラホーリー】はユザパのことを極端に憎んでいた。無関心は憎悪と偏愛の中間に位置する。逆に言えば、憎悪は偏愛と同じだけの関心を生むということだ。

「クグリン氏、ユザーパー・ドラゴンに何をしたのか教えていただけますか？」

より具体化してる!？」

コウガイガー氏が詰め寄ってくる。その顔には作り笑いすら無く、醸し出される雰囲気は恐怖を呼び起こすものだ。紫の視線が私を突き刺す。

「いやいやそんなこと言われても……えつと、ちよつと話ただけで犯人と断定されたら困っちゃうって言うか」

「違うのですよクグリン氏」

なんだと？

「犯人と断定したのではなく、犯人ではないと断定しなかつたのです」

という……。

私の思考が、コウガイガー氏が取り出した一枚の写真によって取り消される。それはスクリーンショットを印刷したもののようで、映っているのは翼と尻尾を生やした少女が下半身を失いながらも宙を舞う姿だった。

私じゃん。

私だった。

「そもそも……この質問は最終確認でした。晒しスレに貼られていたこれはどこをどう見てもクグリン氏でしたが……万一のこともあるかと考え、念のために確認していたの

です。しかし疑いは晴れない、よってあなたが首謀者といえます」

実質的に活動していたのは二人と一機だというのに、あの時流れたアナウンスは『参加人数：二十一人』と言っていた。それはその辺の通行人が参加者として数えられたということであり、私とジユゲツキを除いた十九人の中に、一人くらいダイナマイトが紛れ込んでいてもおかしくないということでもある。

「……その、なんていうか……」

「詳しく説明いただけますか？クグリン氏」

は、激しく離脱したい……！

私は頭を抱えた。コウガイガー氏はさらに近づき、私の顔に一層濃い影を落としていく。まずい、何か助け船は——！

その時だ。

ぶうん、と。ブースターの噴射音が聞こえた。

「来たあ！」

「ちよ」

さりげなく【空蟬】でコウガイガー氏と距離を取りつつ、噴射音が聞こえた方を見やる。そこには確かに戦術機が浮かんでいて、ファイティシアの路上に巨大な影を落としている！

戦術機に備わったスピーカーが、エフェクトをかけられた声を吐き出す。

「おいクグリン、そろそろ行くぞ！」

その側面サイドに右腕で掴まっている征服人形が、合成音声で呼びかける。

「警告：契約者マスター、出航時間が迫ってるよ」

分かってる。ちよんどう行こうと思っていたところだ。

「クグリン氏——」

「ごめんコウガイガー氏、話はまた今度ね！」

【瞬間転移アホート】でさらにもう一段階離れる。切り替わった視界の先には、ホバリングするペンペンの戦術機があつて、ニコロがそこに掴まっている。

「……ん」

空いたニコロの左手が開かれ、私の前に差し出される。

……この手を取った瞬間に、私にとつてのこのゲームは完全に変わってしまったうんだろ。そういう確信がある。いい加減新大陸に行きたいと、そう思い始めてどれだけ経つただろう？ そうして、どれだけ経てば思い終えるのだろうか？ それはきつと、私が予想していたよりはるかに早く訪れる。この手を取るということは、訪れるタイミングを決定するということだ。上等だ、覚悟はできている。

だから。

「行くこうか」

私は左手を伸ばし返して、ファイフテイシアの青空のもと、揺らめくブースターの噴炎に透かされながら、ニコロの手を掴み取った。

加速度を感じる。ペンペンがホバリングモードを解除したんだろう。そうして戦術機は発進し、私たちを船のもとまで連れていくのだ。このゲームには予想外が多すぎるけど、それくらいの期待は裏切らないでくれるだろう。そうした上で——私たちを、未知に。幾度となく憧れた開拓線の上に横たわる無数の未知に、出会わせてくれるに違いない。

潮風が逆方向から戦術機に打ち付けている。それはファスティアに吹く居ても立つても居られなくなるような追い風とはまさしく逆で、しかしどちらも、結局のところ風でしかなかった。その程度で私たちを止められるはずがない。

どんどん加速していく視界の果てに、うっすらと大海原が見えてくる。無数の波が誘う果てには、果ての果てには——息を呑むような水平線が、じつと私たちを待っているのだ。

さあ、未知を拓こう。開拓をしよう！

番外編

1. 人権を得よう!

今日は綺憶喪失狩りだ。
ロストメモリー

「(ち)ら(ど)う(ぞ)で」

奥古来魂の渓谷に侵入した3人——私・ニコロ・ボルクネスの前に最初に現れたのは、なんかそういう係の人だった。

具体的にどういう組織の何をするプレイヤーなのかは分からないんだけど、とりあえず妙に生活感のあるつば付き帽子キャップを頭に装備していて、胴体はコンビニのバイトみたいなシヤングリラな幻想フロンティアつぼくも最先端つぼくもない微妙な緑の服に包まれている。ご丁寧ブに胸元に名札まで装備。安全ピンで接着してますと言われても信じられるくらいチープな出来栄えだ。

なんかそういう係の人のおおむね朗らかな、しかしどこか機械的な……労働への疲れみたいなものを垣間見せる笑顔に、ニコロが私たちを代表して質問をぶつける。

「質ちよつと問ま：これは？」

『これ』というのは、なんかそういう係の人が差し出してきた一枚の紙切れのことを指

す。白色のその表面には少し皺が見えて、黒いインクで「18・3」という数字が殴り書きされている。……この文字もなんかボールペンで書いた感あるんだよなあ。コンビニで貰う領収書のそれだよ。

世界観破壊野郎は言う。

「整理券つすね。ロストメモリー 綺憶喪失は人気のモンスターなんで、こうやって倒す順番を決めて競争が起こるのを防ぐんすよ」

返答の間、なんかそういう係の人の視線が虚空を泳いでいるのを私は見逃さなかった。声色が妙に棒読み気味だったことも考慮すると、たぶん……カンペを見てる。おそらく来た奴の質問に対する応答をどうするかみたいなのマニユアルが事前に策定されているんだろう。

「この『18・3』っていうのはどういう意味？ 『18組目で人数は3人』とか？ だとしたら結構待たないかね」

「いえ、日付つす。人気なんで」

「え、『1月8日に3人で来い』ってこと？」

「いえ、『18月3日に来い』つす」

「は？」 私はなんかそういう係の人を睨みつけたが、

「人気なんで」 するりと躲された。コンビニバイトのくせに意外とやれるのかもしれない

ない。

「18月って何?」

なんかそういう係の人が一瞬フリーズした。多分私の質問がマニュアルになかったんだらう。ないことある?

「……えー、来年の6月っスね」

……。

私はなんかそういう係の人から整理券を乱暴にひつたくと、少し背伸びをした。そしてなんかそういう係の人の肩越しに、奥古来魂の溪谷で何が起こっているのかを確認した。

それは……長蛇の列だった。

溪谷に蔓延する瘴気の只中。暗く見えづらい視界の向こうには、夥しい数のプレイヤーたちが思い思いの恰好で佇み、あるいは座り込み、もしくは湧いてきたモンスターと戦い、それともなんかレジャーシート的なものを敷いて寝ていた。寝るのはリアルでやれよ。

……整理券のシステムがあるのにわざわざ並んでいるというのはどういうことか?

おそらく彼らはある程度若い番号の、それこそ「1月何日」くらいの整理券を手に入れた、もうすぐ自分が討伐する番が回ってくるという所まで来たから、いったん並んで

待つことにした……いくなれば、勝ち組なんだろう。その勝ち組すらもがこんなに長い列を作っている。

それじゃあ……私たちは。年単位の待機を強要されている負け組は、果たしてどれだけ――。

「あつ自分そろそろ定時なんで帰りますねー」

本当にバイトだったんだ。

なんかそういう係の人がそくさと帰り支度を始める。私は彼がいなくなる前に、一つだけ質問をしておくことにした。

「ちなみに時給っていくらなの？」

給料についての質問なんて接客マニュアルに載ってるわけない……はずなんだけど。なんかそういう係の人は、少し胸を張るような態度をしながら、ここまでで一番の即答を見せた。

「80万マーニっス」

悪くないな……。



「どうしよう」

ボルクネスとフィロジオをしている。例によってお手製だ。リヴァイアサンに行け

ば本物を遊ぶこともできるけど、新旧大陸間の移動は単に面倒だ。それに……なんだかんだで、こつちの方が慣れている。

「どうするって、来年の6月まで待てばいいだけじゃないか？」

ボルクネスはソルティアの手を緩めずに言った……どうやらワンターンキルに挑戦中らしい。私より一足先に新大陸に到達した彼は、リヴァイアサンでフィロジオを相当研究し、それまであやふやだったルール解釈にも磨きをかけたようだ。結果、彼のお手製フィロジオのクオリティもより高くなっている。クオリティがより高くなった結果がワンターンキルなのかなの？

……それはともかく。

「来年の6月が来るよりロストメモリー綺憶像失がナーフされる方が先でしょ」

私は冷静かつ論理的な反論を行った。

ボルクネスのトークンを動かす手がびたりと止まる。

「確かに」

確かにだった。

私がツチノコ杯で心理戦を繰り広げたり暗黒森林仮説を証明したりしている間に、旧大陸のほうではいくつもの話題が生まれ、過ぎ去っていった。まあシャンフロでも過去最大レベルの大規模イベントの真っ最中である以上、話題なんて生まれまくって然るべ

きなんだけど……その中でも一つ、なかなか風化せずに残った話題があった。

その話題は配信者絡みのもので、王国騒乱の新王側に属している……なんだった。ガ何とかさんの名前前の人が配信で披露したスキルが強すぎる、という内容だった。風化しなかった理由はいくつか考えられる。配信者の持つネームバリュー。そのスキルが不世^{エグゼクティブ}出のもので、モンスターさえ倒せばだれでも入手できたこと。

だけど何より……『強すぎる』という文字列が、誇張でもなんでもない真性^{マジ}のものだったことが大きいだろう。

ロストメモリ
綺憶像失。

テキストに記されている効果は、「HPがゼロになった時、三度までHPを半分まで回復して蘇生する」「発動時点でHPが回復できなくなる」「蘇生するたびに習得しているスキル・魔法の三分の一が使用不能になる」。あとテキストに記されていない効果として「蘇生時の数秒間は謎の粒子化形態（無敵判定あり）になれる」。

は？

いったん具体的な強さについては省くけど、とにかくこんなクソ強いスキルを運営が弱体化^{ナリフ}しないわけがない。絶対にする。問題はするかしないかじゃなくて、時期だ。私の見立てではあと四日間くらいは確実に持つと予想している。最速で修正すればもつと早いだろうけど、王国騒乱中に発生した問題は他にも大量にある。ぶっ壊れていると

はいえたかが一スキルでしかないロスメモは、優先度的には一段落ちるはずだ。

でも、来年までは持たない。当たり前すぎる。

「私たちは今すぐロスメモリ綺憶像失を手に入れなきやいけないんだよ」

そしてノースク追剥ぎライフを送らなきやいけないんだ。

しかしボルクネスは乗り気じやなさそうだ。彼はしれつと極悪コンボを完成させつつ言った。

「何かありますか? ……いや、確かに君にとっては必要かもしれないが……」

確かにボルクネスは基本的にフォロジオばかりしているヤツだから、ロスメモがあつたところで大した使い道はないだろう。今回の狩りも私から誘つた。

「ないですサレンダーで……ならさ」

テーブルから少し身を乗り出す。

展開したフィロジオプレイマット（やはりお手製）を自分の体の影で覆いながら、ボルクネスの顔に口を近づけ、一つだけ提案する。

「協力だけ、してよ」



げつ、さつきと同じ人だ……。

「（「こちらどうぞぞ〜」）

いくつかの準備をしたのち再び訪れた奥古来魂の渓谷。その入り口で私たちは別のプレイヤーに整理券を渡しているのは、さつき入り口にいたのと同じ、バイトみたいな服装をしたバイトだった。いやこの服が整理券配り係の制服ユニフォームなんだって可能性もあるけど……にしても顔が一緒だ。キャラクリをちよつと頑張ればいくらでも容姿を改善できるVRで、あえてコンビニバイトっぽい顔を選んでからすぐわかる。

何が目的なんだろう？

……まあ、それは置いておいて。

「次の方」

「20月何日」とか書いてある整理券を渡されたプレイヤーがとぼとぼと帰っていくのを気にも留めず、バイトは冷徹にそう呼びかけた。ど、どうする……？ 交代の時間とか言ってたから今日はもうこいつに会うことはないだろうと踏んで来たけど、ダブルシフト二回出勤の可能性を考慮していなかった。顔を覚えられてたらこの計画は使えないんだよな。いちおう一番記憶に残りそうなニコロはチェストリアに仕舞ってあるけど……私の顔が分かったら同じだ。いったん出直した方がいいかな……？

「いちらどうぞ」

いや、立ち止まっていたら整理券を手渡してきた。私がもう整理券を持つてることを覚えていればこうはいかない。まあ考えてみると、マニュアルを機械的にこなすだけの

バイト風情が人の顔を覚えられるわけがないよね！ 私は安心して数歩踏み込んだ。
言う。

「いや、整理券はもう持ってます」

そう断ったあと、インベントリに仕込んでおいた紙切れを取り出す。材質の面でも形状の面でも、その紙切れは先ほど渡された『18・3』と、ほとんど同じ性質をしていて……ただ、内容だけが違っていた。

『1・4』

今日だ。

ボルクネスのメインジョブは印字士プレスマンで、物理的な紙とインクによる印刷物の製作に長けている。この整理券……冷静に考えてどういう団体が配ってるのかわからずじまいだけど、とにかくこいつには日付しか書かれていない。『何月何日』までは書いてあっても『何組目』が書かれていないから、捏造しても既存の整理券と重複してバレるようなことがない。となると、あとは少し筆跡を真似てもらうだけだ。

「通してもらえますよね？」

私はやりすぎないように注意しながら、本心からの微笑を浮かべた。

◆ いや〜それにしても暇だね。

待機列に並びながら雑談をしている。

私は最初、ロストメモリ綺憶喪失の討伐は整理券を受け取った各パーティが個別に行うのだと勘違いしていた。しかし実際は……おそらく討伐効率的な問題で、まずその日の整理券を持つているプレイヤーが渓谷に集まり、その後大規模な野良パを組んで倒すという流れでいくらしい。パーティの人数自体は15人が条件だけど、いくつかのパーティで編隊を組んでから討伐を始めた場合でも、チャンネル的な何かシステムで設定されて個々のパーティが……ええい。要するに、うまいこと全員に「討伐に参加した」判定が行き渡るといふ。まあVRMMOではよくある仕様だね。

ロストメモリ綺憶喪失はざっくり一日に二回ポップして、それぞれ慣習的に「午前の部」「午後の部」と呼ばれる。私はというと、午後の部のDパーティ隊に振り分けられた。討伐開始まではまだ十数分ある。

同じD隊の人が周囲に質問する。

「みんな、ロストメモリ綺憶喪失を手に入れたら何をしたい?」
次々に答えが上がる。

「PK!」

「オルケストラ偽典」

「そりゃPKだよ」

「闘技大会で頂点に立ちたい!」

「PKかな」

「流派スキルがどういふ扱いになるのか検証したい」

「PKツス」

何という殺人集団……。

これだけPKer志願者が多いわりに、彼らの頭上を見てみるとレッドネームの割合は案外少ない。まあ綺憶^{ロストメモリー}像失があれば賞金狩人に狩られるリスクを一切考慮せずに街中PKできるからね……普段はリスクを恐れて立ち回っているチキンたちが、ロストメモリーという絶対の武器を前に気を大きくしつとあるということなんだろう。

質問者が私の方に手を差し出す。

「あなたは?」

「追い剥ぎかな」

私はあえてPKという言葉を選ばないことでお前らとは一味違うぞ感を醸し出した。

「要するにPKですよね?」

無駄だった。

普段はリスクを恐れて立ち回っているがロストメモリーという絶対の武器を前に気を大きくしつとあるチキンこと私は、目を上空の方へと逸らす。そこに広がる虚空に

は、おどろおどろしい瘴気たちだけが、整理券なんて勝手なルールからまるで解き放たれた有様で、ゆらりゆらりと漂っていた。

◆ 十数分後。

「さて……いよいよだぜ」

さつき質問したのと同じプレイヤーはそう呟くと、装備品らしき直剣を握りしめて立ち上がった。どうやらリーダーみたいないな役割を担うつもりらしい。こっちとしても、まとめ役がいた方が都合がいい。

彼の動きに従って、Dパーティに属するほかの面々も立ち上がっていく。金属装備がぶつかりあうかちやかちやという音や、布装備があげる微かな衣擦れが、溪谷の重厚な空気の中を静かに拡散していく。

前方——A、B、C隊の人々が同様に立ち上がる更に向こう側。先ほどまでは無かったひとつの影が、白霧の向こうにゆらりと浮かび上がる。そのシルエットには直線が多く、鎧姿と一目でわかる。

さあ、戦闘開始だ。

『モンスター不世出^{テイ}不世出^{スカ}不世出^{パー}不世出^{エクセクソ}不世出^{ナイナリー}の 発 見！』

ん？

アナウンズにどこか違和感を感じた。頃にはすでに次の言葉が始まっていた。鎧姿の輪郭が、なんだかひとときわ大きくなって……。

『討伐対象：喪失骸将^{ジエネラルデユラハン}”綺憶想失”^{ロストメモリー}”覚醒之貫”^{ブレイクリンク}』

「やりすぎたというのか……!?」どこかからそんな呟きが聞こえて。

『エクゼクゾーデイナーリーモンスターとの戦闘が開始されます』

全滅した。